

奇譚クラブ

1956年 12月号

サド小説 「沈黙の館」 小山 燐 男
 幻想小説 「黄色オラム誕生」 真木不二夫



12
月
号

昭和三十一年十一月二十一日発行 (第十巻第八号) 毎月一回一日発行
 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年十二月号

12

奇譚クラブ

昭和三十一年十一月三十日印刷 十二月号 (第十巻第八号) 毎月一回一日発行
 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料別)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805



新着フオート紹介	
「いでゆ」より	北原純子・画
拘束服とマスク	雲井久子・文
或るポーズ	滝麗子・画
現代マゾヒズム芸術時評	△復刊第十二項△
瀧れい子素描集	
欧米式新スタイル	
文学に現れた責めの描写	藤見 郁 18
新橋で米兵同性心中	矢橋重八 39
私のふんどし	松原三千代 30
異性より同性に興味	堀村一提供 33
沈黙の館	小山健男 34
コルセット・マンボ	林 靖彦 47
随筆スカーへの魅力	東 一郎 48
「少年期（母と子の手紙）」	山口幸一 50
戯曲半獄の花嫁	鳴山能平 54
黄色オラミ誕生	真木不二夫 60
「無医村の診療班」	荻原通隆提供 69
和装女の辨り責め展覧会開催を提唱	岸本青柳 70
女闘美 美女決闘場面のアイデア	小西鉄二 72

奇譚クラブ 復刊第十号 十二月号 目次



光りある中を（完結篇）	近東規矩也 74
股毛の礼讃	南 俊夫 79
女武者自刃	藤山秀緒 80
ザッヘル・マソツホ黒女皇	沼正三訳・解説 86
ある夢想家の手帖から	沼 正三 88
醜悪への幻想	淡美 一郎 93
玉落穂穂集	編集 部 100
魂を病む人	北原純子 100
私のイメージ「F」の独り言	近 藤 一 107
私の告白二題	青葉楓 110
未来幻想マゾ小説	
家畜人ヤブー	沼 正三 114
女性化粧と女性ホルモンの使用実験記	古井真哉 116
糸織の体験	高橋としえ 120
座 龍 日記	久留木 栄 121
女優緊縛映画連環版最近の映画から	白石 聡 122
美とマゾの境界	柳沢吉保提供 123
女闘太夫の花	
緊縛映画速報欄	千葉栄市 125
防雨具使用による窒息死	近藤 一雄 126
マゾヒスト・クラブの結成を望む	山田正男 127
バスガールに挑戦	東 一郎記 128
集めた手拭七百本	七村貞二提供 129
告白「責めとマゾエチの自画像」	越野義夫 130
現代マゾヒズム芸術時評	
読者通信	原 忠正 131
編集後記	

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

實めのアイデア
 シーソー買め
 洋画に於ける緊要場面
 懸賞入選作品佳作第一席
 接客婦
 蜂の胸四十五センチに
 こたえて
 倒錯の英雄織田信長
 Xの尻
 「女」の隨筆
 「女のお腹談義」
 アブノーマル雑談
 「話の國龍」
 玉種各種集
 赤い花は泣いてる
 失恋の告白
 読者通信（並に読者交歓室）
 代理部特選写真集
 ○五月号（復刊第四号）
 （前月と今月の分譲品）
 定価二百円（千8円）

口絵
 素晴らしいジョー……四馬
 モデル嬢の表情（緊要写真集）
 佐賀電哲子
 加賀利江子
 アメリカ雜誌「ピザ」より
 源やかな合體、メイドの拘束服
 スチユアードの晒し、宮崎昭平
 赤い花は泣いてる……松井
 幽十ヶ月……喜田
 魔の味い……高木
 完全なる執願……坂田
 戦後新屋敷……岸本
 体面日記……岸本
 聖王のしき（異體體驗記）……足立
 おそい目覚め……矢崎
 （ある泥馬マニアの日記から）
 灰色のノート……多山
 箱の隣……竜一

永井昇次郎
 野井 陽作
 佐養 跋策
 加治 信一
 繁間 洋子
 笠原 俊郎
 川瀬 一美
 緒台あさみ
 辻村 隆
 編集 堀部
 松井 碩子
 城 秀人

孝・面
 龍一

女サデイストより奴隷に……森山 美歌
 与える手紙……北川 操
 燕子の花散りぬ……森 太一
 奇妙な種……太一
 奇めとフエチズム……野 當一
 魔の白鳥……加宮 徹
 お隣の研究(二)……須藤 健一
 生垣の願望……長崎 俊一
 紅い眼……佐次 浩一
 姉とその弟……青木 俊介
 除花への憧憬……青山 伸天
 去日の美女……吉井 環
 女人散華……
 燃風上原……柳川 泰子
 玉橋橋樑……柳川 泰子
 アブノーマル・モノローグ……竹谷 十三
 (あるアクロバット・ダンサーの記録)……辻村 隆
 拷問に笑う女……
 読者通信、読者愛敬室、
 代理部特選写真集、告白
 今月の新版特写真集、編集後記
 ○六月号(復刊第五号)
 定価二百円(千八百円)
 口絵
 美観の屈辱……四馬 孝・画
 孤島の捕われ人……アメリカ雑誌より
 佐賀美智子ボーズ集……堀川 孝・画
 私室でのプレイ……堀川 孝・画
 深夜のホール……堀川 孝・画
 修道院の神聖……宮崎 昭平・画
 大衆文字に現れた貴の描写……藤見 郁子
 赤い花は泣いている(第三回)……松井 聡子
 明治と昭和の絵くらべ談義……福台 あふみ
 幽囚十ヶ月……菅田 一郎
 世相断片、ローカル・レポート
 奈子の自己愛について……門田 泰子
 流腸問答……青山 三枝子
 鞍馬の孕み女……緑 狂比古
 私のイメージ……
 「代理部便り」の夢……並原 新一

口絵	拘束服の装束……四馬・圓 道化者の集まり（アメリカ雑誌より）
〇七月号（復刊第六号）	定価二百円（千8円）
一切腹面帳一発行中止について	
限定版各種特集有発行予告	
読者通信	
サデイズム小説	菅原 春天
私のマゾ・スクラ	森山 実歌
ツア帳より	泉 義明
甘美なる被虐の幻想	林 靖彦
脱腸に対する私見	山中 同人
現代マゾヒズム芸術時評	伊藤 俊野
お仕置遊戯	竹谷 十三
フェチシストの文学ノート	原 忠正
マゾヒズム体験記	松井 智子
猪蹄り	S・T生
緊縛女体難考	黒井 三郎
「種」先生	厚家 鷹三
最近の婦人時代劇映画から	青葉 棋一
結婚の研究	結城 愛也
結髪の種類と相	須藤 律子
玉環落舞集	伊藤 晴雨
映画に現れたムツキ	編集 赤井 茂郎
はげられる娘	藤木 紀世
ナチスの暴行	藤木 仙治
女の空想天国	
娘島操隨	東坊 丸
或る告白	容と女の満足 由木 仙治
サデイズムイックな漫画	藤木 仙治
十万人囀賞稿募集	
限定版各種特集有発行予告	
読者通信	

女工官 木製の兵士
 新人モデル健紹介 花坂 道子嬢
 バイブの馬 北原 樹子嬢
 馬を飼う令嬢 左賀 美智子嬢
 現代大衆文学に現れた責めの描写 北原 純子嬢
 藤見 郁

私のイメージ 小竹 紀夫
 若衆歌舞伎復興 門田 奈子嬢
 祭子の目己愛について(二) 春田 一郎
 幽囚十ヶ月 岩瀬 祥一
 お灸を据えた女の魅力 松井 鶴子
 赤い花は泣いている(第四回) 松井 鶴子
 ボディビルマシンに依る少年 角谷 俊一
 私のコレクションより 角田 莊吉
 一頁めーの芝居難考 本田 由郎
 堀井君の恋 真木 不二夫
 少年探記 山口 幸一
 奇妙な倒錯の恋 (新聞雑誌通信) 雪俊 慎一
 女 掬 興 青葉 慎一
 活火 山 編 栗 子部
 王福落箱集 高村 民子
 被縛症 鴨井 成太郎
 女性の切腹幻燈 古井 真哉
 或る下着マニアの告白 土路 草治
 酒蔵の前夜 佐藤 半英
 或る征軍婦人の死 天泥 盛英
 マゾヒズム断想 北谷 義明
 耳氏の奇妙な告白 泉 義明
 サデイズム小説 いで湯 多磨 義明
 私はおしめマニア 川野 京太郎
 スーダン 聴竹 成太郎
 乙女の腹切抄 聴竹 成太郎

限定版各種特集号、発行予告経過報告
 最新版女性緊縛ブオト
 奇譚クラブ旧号主要目次
 天星社代理部特選万葉集
 読者通信 告知版 拾万四郎賞原稿募集
 編集後記 編集だより、今月の新成

新着フォト紹介
(一)





北原純子・画

いでゆ

(泉 義 明・作) より
——本誌六月号並に七月号掲載——





拘束服とマスク

或るポーズ

雲井久子嬢





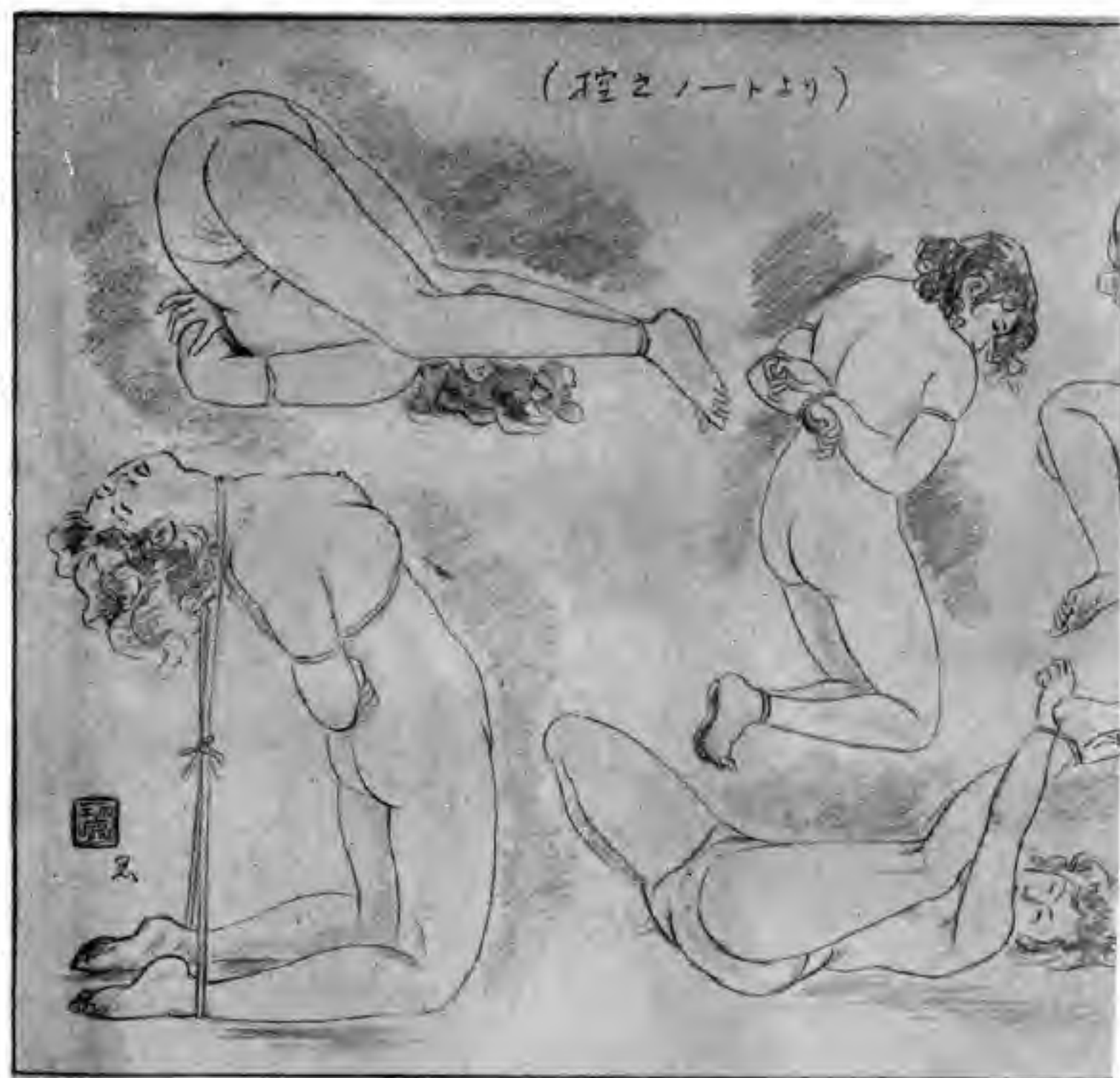
現代マゾヒスム芸術時評

〈復刊第十二項〉

(本文一六一頁参照)



淹れい子素描集



欧米式新スタイル (4)





新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1956年 12月号

(第十卷 第八号 通刊第九十号)

文学に現れた責めの描写

藤 見

郁

今回は先ず、変ったところから紹介してみよう。稿の性質上どうも通俗時代小説が多くなりがちなので、たまにはこのような純文学作品からも取りあげて、本稿に深みとバラエティをもたせたいと思う。

近頃になって剣豪小説ブームもやっと下火になったが、このブームを巻き起した五味康祐氏に「媛ヶ谷物語」という小説がある。雑誌「小説新潮」に発表された作品だが、その後、新潮社の小説文庫「柳生連也齋」の中に収められている。いうまでもなくこの「柳生連也齋」は長い間ベストセラーの上位を保ち、訳者、批評家の間でいろいろ問題になったので、小説好きの訳者ならこの「媛ヶ谷物語」も併せてお読になっていることだろうと思う。

この小説は時代を室町時代にとって、小

国の城主の姫の、悲しい宿命が描かれている。ストーリーを追いながら、サディズムの描写を収録していくことにしよう。

『むかし、常陸国むばらきのこほり（茨城郡）笠間に、宇都宮綱家という大へん吃りの城主があった。

綱家は半年前に、一度、正室を迎へたがこの夫人は何故かひと月余りして、木に縊れて死んだので、今度、近国一の美容と評判の姫を迎へることになってゐる。前の奥方が縊死したのは、何でも、闇のことが過ぎたとかで、それが原因といふ噂である。

あらたに笠間城主の奥に納れられるのは下妻の国主、梁修理大夫信友の息女で名を香織姫と云った。この時十六歳であつた。』

綱家という城主の前の奥方は木に首を縊つて自殺し、その原因は闇（ねや）のことが過ぎたらしい、という好奇心書き出しである。ここにこの物語の異常性の伏線がある。

十六歳の可憐な花嫁、香織姫が笠間城に嫁ぐ日の、その道中に重要なエピソードがあるのだが、それは省略することにする。

『新妻の父、梁修理大夫が綱家の舅として笠間城に來たのは、新婚第三日目であつた。』……父の信友には三日の間に一段とたをやかな美しさを加へたと見え、初夜につづく二夜の闇事の疲労に、姫は存外やつれたとも見えたやうだつた。香織姫は、尚綱の前では終始おもてを俯せ、父信友には殊更美しい齒を見せて頬笑んだ。翳のある

そんな笑顔は一そう彼女を凄艶にした。

婿殿綱家になると、はるかに事は単純である。彼の舅や伯父を遇する態度には、他意ない喜色があふれてゐる。彼は新妻の美貌に満ち足り、柔肌の白さに満ち、己が技巧の効果にも心を充たすことが出来たのである。

こうして香織姫は、少しの翳を除くと表面は幸福そうであつた。どもりで醜男の城主は心も爽快に、武事訓練や政務にも精を出すのである。

『……十七歳のこの新妻は、身の生死や盛衰に関りなく、女の「愛」だけを大切にまもりとほした。』

しかし、姫の苦悩は次第に外にも表れるようになる。綱家の閨房のサディズムを五味康祐氏は次のように表現する。

『それでも、香織姫の面にあきらかな苦痛の翳る時はあつた。』



最初にその苦痛の秘密を知つたのは、五人衆の一人、吉沼佐兵衛である。

佐兵衛は、常陸のくに筑波郡吉沼の出でこれまで諸所の戦ひに槍を合はすこと十数度、高名の首十七級、並の首を加へれば都合四十二級に及んで、下妻城ずあの一の強者と謳はれた。首供養を済ませて猶十級が余つたわけだつた。首供養は三十二級を獲て

する、武士の非常な名誉である。この頃は彼は四十六歳であつた。

さて、その佐兵衛が、姫に随従して来てひと月余りたち、城内の模様にも馴れたので或る夜、寝所の番となつた。今でいふ不寝番のこと、番の者は、寝所とわづかに几帳一基を距てた位置に、聞へ背を向け、腕枕のごろ寝をする。むろん仮眠であつて、睡ることは厳禁され、且つ背後の聞を見返へれば主君に首を刎ねられる。間々、聞のむつごとを聞かねばならぬのも当然で、だからこの役目は佐兵衛のやうな「老人」が仰せつかるなりはしであつた。(十四、五歳に元服して成男子となる当時、三十なかばを過ぎればもう老人と呼ばれたのである。)五人衆で年嵩の

佐兵衛が先ずこの役目を仰せつかつたのに不思議はない。

ところで、その夜。

豪傑の佐兵衛は夫婦に背を向けて、広縁に垂れた御簾越しの夜空に星の数などかぞへてゐるうち、いつかウトウト眠り入つたが、ふと、喘ぎとも悲鳴とも鳴咽ともつかぬ叫びに目を覚めた。



聞耳を立てる年ではない、シワシワ蹠毛をまたゝいて佐兵衛は再び遠い星をかぞへはじめた。

しかし、常のものとも、佐兵衛みづからの体験で知ったものともその女叫びの烈しさは違つてゐた。むろん彼方をうかゞひ見るすべもない。佐兵衛は生唾をのんで、敢て目を閉じた。

いっかう喘ぎは斂まらなかつた。それのみか、攻めに攻める呻き声の太い吃音が加はる。ヒタヒタ掌でやは肌を搏ち、黒髪の乱れ這いまはる様子に、感あまつて、

「おとのさまえ、おとのさまえ」

うったへるやうな、詫びるやうな、泣くやうな虚ろな悲鳴が断続した。あきらかに爪立て何処かを抑へ込む気配がした。十七

歳のうら若い女体の何処にそんな急所があらうか。姫は、うッ……とうめいて、自らの、或いは相手の衣を引裂く音がした。何時からか子供の泣め止むときに似たあのしやくりを女声が發し、猫背になつて全身をくまなく撫で廻す男の気配が何時やむともなくつゞいた。

空がしらじら明けになつたとき、男の軀がきこえ、声をしのんで、悲しさうに女の声は泣いてゐたのである。」

姫に随従してきた忠義一徹の佐兵衛が、非常な心配

をするのも無理ではない。その翌日、奥庭の散策から戻る香織姫に佐兵衛は行き会ふ。

「……佐兵衛はまじまじ香織姫を見守つた。不粹である佐兵衛にも、よろこびに濡れた一夜か否かは分る。

香織姫のそれが、苦痛をかくしてこそを、けつして悦楽の疲れの色でないことを見抜いたやうな気が、佐兵衛はしたのである。

焚き込めた香のたゆたひを四辺に残して香織姫は彼の前を通りすぎた。

(お詞も掛けられぬな……ハテ?)

佐兵衛は濃くザラつく鬚の迹を撫ぜた。『香織姫は、ふた月あまりすると、入奥した頃とは、見違えるほど細い面の女になつた。そのため一そう嬌々として翳深い情緒がその身にたゆたうた。網家はいよいよ姫から精気を吸収する如く潑刺となり、濶達になり、政務に励んで重臣を喜ばせた。』

まことに姫の心情哀れである。この小説はこの時代の権力に嫁いで心も身体も押しひしがれた女の悲しみ、人間味豊かな家来の忠義心などが、余すところなく描かれてゐる。それに、姫が側近の若侍に寄せるひ

そかな想いが、姫のわずかな反抗と、それ故に尚更の哀れを誘うのであるが、それは省略する。これらの人物設定を五味氏は通俗に流さず、堅実な考証のもとに、重厚に描いているのは流石である。

『……佐兵衛はそんな雪の夜に、もう何度目かの番になつて殺された。殺したのは綱家である。』

佐兵衛にすれば、女叫びの理由が分つて以来、できれば不寝番につきたくない重い気持がある。男のなぶりものになつてゐる姫に背を向けてゐなければならぬのだから、無理もない。それに、如何に男が狂暴に振舞はうと、女の側に悦びのある上でなら痴態として見過しも出来るのだが、綱家の終に虐待であり、香織姫には受難である。

綱家は、白昼の人の好きとは別人の如く狂暴になるのが常であつた。然もその狂暴さは日を追うて加はつて来た。窒息一步前まで姫の咽喉を締め上げ、腋の下を噛み、髪を掴んで引き廻す。姫はさういふ夫に虐げられてゐる身を、とのゐる者にさとせまいと息を殺して堪へる。それでも堪へきれず洩らす悲鳴が、佐兵衛の腸に泌みとほるのである。

一夜明ければ、香織姫はきらびやかに着飾つて、冷たいほどの美しさで侍女達と静かに暮した。以前は桜色の擦り傷一つなかった皮膚に全身にわたつて無惨な歯形のあつたことを、誰も知らなかったし、疲れきつた夫の眠つたあとで、涕き泣き、引きちぎられた己が黒髪を掻き集める紛れもない十七歳の乙女であつたことも、不寝番の佐兵衛以外には知らなかった。……』

皮膚の全身にわたつて無惨な歯形、引きちぎられた黒髪を泣き泣き掻き集める姫の姿はまことに痛々しく、城主綱家のすさまじいサディズムに恐怖をおぼえずにはいられない。

『かういう次第だから、佐兵衛が寝所に宿直するのを「胸を掻きむしられるやうぢや。」と洩らしていたのも無理はない。』

佐兵衛が殺された日も、曾てないほど香織姫の悲鳴が繁く且つ震へ声だったので、ふと佐兵衛は身を起しかけた。その時抱いてゐた太刀が転げた。

嗜虐者が、さういふ異常な聴覚を有つてゐてよいものか何うかは知らないが、

「だ、だ……誰ぢや。」

綱家は耳敏く聞きつけて、寝所の外れを

見返つた。悪いことにそれで狼狽した佐兵衛が、

「はっ。」

と云つて、衾を蹴つて向き直つてしまつた。薙の外は雪だといふこの寒夜に、香織姫は全裸であつた。

「よ、よくも見をつたなッ。」

綱家はまるで人が変つてゐる。「見をつたな、み、見をつたな。」几帳を押し倒して喚きさま佐兵衛の方へ走り寄つた、両眼が据つてゐる。香織姫は止めんとして止め得ず慌てて胸に几帳の端を拾つた。

それを見たとき、佐兵衛の肚は決つた。

「如何にも見たわい。」

佐兵衛は開き直つて、大音に云つたのである。「大切の姫の婿殿と思へばこそ、姫のためにと我慢を致した、もう承知せんぞ……綱家どの。この首と引替へに、吉沼佐兵衛が最後のお願ひぢや。姫さまをいためずにおいて下されい。さ、さもなくば佐兵衛、婿殿の首頂戴仕る。——何と、御返答如何でござる？」

「ぶ、ぶ、ぶ……」

綱家は身をふるはして、猿のように歯をむき、

「ぶ、無れい者！」

「無礼は承知ぢや。申されい、この首か、

殿の首か?……」

綱家は答へるかはりに佐兵衛の肩を蹴った、もんどりうったのは併し綱家の方であった。佐兵衛は綱家を膝に敷いた。

「さ、申されい。」

香織姫は肩を波打たせて其の場に泣きくづれてゐて云ふ。「さひやうゑ、もうよしさひやうゑ……」

盤石の如き重みに打据えられて綱家は足掻いた、到底及ぶ相手ではない。狂暴な人物に間々ひそむ狡猾のあらはれるのは、こんな時である。狂暴性自体がもつ狡猾で由来この二つは別物でない。

綱家は、佐兵衛の申し出を肯くと云った。香織姫を弄らぬぞ、かならず大切に致すぞ、と。

佐兵衛はそこで、綱家をゆるし、自らの死を諾ふ。従容と彼は死の座に着き、綱家の眼は見る見る活き／＼と輝き出した。

綱家は佐兵衛を颯り殺したのである、先ず太刀の小柄で佐兵衛の鼻を削いだ。「うっ」と佐兵衛はうめいたが、坐りつゞけた。次に切先を綱家は佐兵衛の眼の前に突きつけ、

「うフフフ……うッふふ……」

上眼に相手を睨んで心からうれしそうに笑ひながら、佐兵衛の眼球を刺し通した。

佐兵衛は坐りつゞ

けた。すると矢庭に、太刀で肩口を一太刀斬り、袴を掴んで身を支へやうとしつゝガックリゆく相手を慌てゝ捉へ、

「じ、じ……じっ」としてをれや。じつと、してをれやな。」

云ひながら頭を抱へてやって、綱

家は短刀で佐兵衛の頬から口中の歯茎を抉りはじめた。ガリガリ刀こぼれの音がして血と涎が胸もとに溢れ伝った。」

まことに怖しいサディズムの様相である綱家の憎むべきサディズムを五味氏は鋭い筆致で印象的に描いている。

この後、綱家は近国の武将に攻められ、殺される。そして香織姫は一人馬に乗り滝壺に身を投げる。

『香織姫が身を投げたのは加波山の滝であった。彼女は驢の馬に乗り、白布の鉢巻を



緊めて三丈余の瀑布の頂きから、馬もろとも滝壺に落下した。崖に咲き紊れる無数の岩梨の花が飛沫の中に點頭していた。

のちに、駭の馬の屍骸は発見されたが、香織姫のそれは遂にうかび上らなかつたといふ。世人呼んで、爾来、加波山の滝を媛ヶ滝と称した。』

これが「媛ヶ滝物語」の終章である。：話が少々しめっぽくなったから、今度はぐっと趣きを変えて、明るいお色気の多い描写を紹介してみよう。

邦枝完二氏の短篇小説で「大名」小説公園（昭和二十六年六月号）所載。邦枝完二氏は人も知る江戸趣味情痴作家で、私など少年時代、親の眼にかくれては氏の「お伝地獄」などに読みふけたものだ。氏の挿画をよく描いて居られた小村せったい画伯の線の美しさと共に、忘れられぬ江戸趣味の最後の人であつた。妖婦お伝のなよなよした腕が背中に縛りあげられ、悶える女の姿態の美しさが、小村画伯独特の線で描き出されていたのを想いだす。

それはさておき、この短篇「大名」にも題名の示すように横暴な城主がでてくるが時代がぐっと下って、徳川の天下泰平時代だから、女を責めるにもどこか愛嬌があつて、さほど陰険さのないのがいい。

『武州岩槻二万石の城主大岡主膳正忠は祖父に名奉行忠相をもち、父に武辺一徹の忠烈を持ちながら、それとは打って代って稀れにみる好色漢であるとの評判が、すでに二十代の時から、家中の誰彼の口の端にのぼっていた。』

もとより泰平の大名の家に生れた者は、それが長子であればある程わがままの振舞が長じる結果、武芸、学問、政治の道等はただ一通りの領主の常識だけにとどめて、余る精力の悉くを女に持つて行くことが、大名生活の一つの型のごとくになってゐるのであるが、それにしても忠正の行為は人並はづれて激しく、他の生活は極端に切りつめさせながら、ひとたび女を養ふ事となれば、二万石の祿高を遙かに超越して、十万石の大名にもまさる日常を繰返してゐるといふ。』

この主膳正はただ単に女好きとか色好みとかいうだけではなく、たとえいかほど目鼻立が美しくとも、胸の美しさ、つまり乳房に美の輝きがなければ、忠正は女人の肢体に一指も触れようとしなはいばかりか、解かせた帯を直ぐに結ばせてしまうことは、恰も慣れた典医が女の患者を診察する場合と、少しの変るところもなかった。主膳正氣に入りの女は最近召抱えた町家の娘で、たそという名の十八才の美女。この腰元を連れて、小笹丸という豪華な屋形船に乗り隅田川を上下する。

「……小笹丸の胴の間には、大岡主膳正忠

正が脇息に片肘をついたまま、じつと眼を据へてゐた。その視線は、あたかも兎を狙ふ鷹のやうに、一つの焦点を見つめたきりであつた。

しかも帆柱を紅白の羽二重で巻いた正面の柱には、つい昨日目見得をしたばかりのたそが、紫矢絁の着物と、黒縹子の帯をその場に脱ぎ捨てて、紅しごきで胴と脚とを縛られてゐるといふ、他人には想像もつかない猥奇の有様。』

このシーンには清水三重三氏の艶麗な挿絵がついている。女は全裸で、しごきで後ろ手に縛られている。しごきは乳房の上を一ト巻。足首もしごきで縛られ、着物と腰巻がそばに脱ぎ捨てられている。まことにいい責絵だが、なにしろオール・ヌードで色っぽい姿態なので、このまま奇クに載せることも、今では一寸考えざるを得ない。いやはや世の中も不自由になったものだ。

『千石船の幾艘が、北の国なる石ノ巻から米を積んで来たにしても、五十余万人の男に、一椀の食を給することさへ容易でないはずの、今年の江戸の饑饉を他所に、いかに町人の考へなどは、遠く及ばない大名ぐらしだとしても、わづかに二万石の藩主

である主膳正が、江戸のまん中を流れる隅田川に、竜宮のごとき船を浮べるばかりか老女と護衛の武士の兩人を船底に去らせて新規召抱への腰元を、しかも裸身のまま柱に縛つての鑑賞は、おそらくそれと知った義侠の者があるとしたら、とどめ難い憤怒から、おのれを棄てて斬り込むであらうと思はれるまでに、他所目には悠長のものであった。

が、当の忠正に取っては、なかなかもって悠長などといふわけのものではなかった。その眼は真剣に輝き、呼吸は浪のごとく速まって、自ら注いでは飲むギヤマンの盃は、次から次へと空になって行った。

「たそ」

「は、はい。……」

「そちは苦しいか」

「今しばらくの辛抱ぢや。そのままにして居ってくれ。……余はそちの肢体に見惚れて居ったばかりに、つい二度までも、手にした盃を取落したが。……いや見事ぢや。そちはまことに、千人に一人の、天下の美女ぢや」

「殿様、お赦し下さいませ」

「何を申す。予はそちを叱って居るのではない。褒めてをるのぢや。赦すも赦さぬもない。今日の褒美には、何物を取らせうか

の」……」

「……主膳正は、蹠蹠としてたその裸身に近づいてゐた。

「そちは、おのれの肢体に、自信を持ったことがあるかな」「……」

「自信と申すのは、世俗にいふ、自惚れの意ぢや」「……」

「は、……。羞かしいことも、遠慮いたすこともないぞ。おのれの美に、自ら恍惚となるぐらゐの自信がなくては、若さの誇りを持つことは出来ぬ。……この胸のあたりの清らかなる。腰のあたりのなよらかなる。脚のあたりの優しげなる。……殊に

そちのこの乳房は、

天下の美女と称する

千人万人の女人を集

めても、決して人後

に落つるものではないのぢや」

忠正の指は、細かくふるへてゐた。眼は灼きつくやうに、

たその乳房に釘着け

にされたまま、毛筋

ほども動かなかつた。

「た、そ……」

あへぐやう

な叫びが、忠

正の唇を洩れ

た。と同時に

その手は、た

その乳房の上

へ水の輪のや

うに吸着いて

行った。」



大体こんな調子である。この小説には、ストーリーの起伏というものがなく、忠正の女の乳房への異常な執着だけが、執拗に描かれているのである。それにしても、屋形船の柱に女を裸にして縛りつけ、酒を飲みながら乳房をもてあそぶ光景は、まことにエロティックなサディズムである。

だいたい文学性の濃い小説ばかり紹介したが、これでは物足らぬというファンのために、最後に、角田喜久雄の小説から、すさまじい大衆的責め場面を取り上げてみよう。

これは、東京タイムズ紙上に連載された小説で「元祿太平記」という長篇である。角田喜久雄氏独特の執拗な描写はファンよく御存知のところ。大衆小説なのでストーリーの紹介をしなくとも、責め場面だけであらましの見当はつくから、くどくど解説するまでもなく早速採録に取りかかろう。

『……息せききつて森の中へ走りこんだ時その暗闇の陰でどそと動いたものがあつた。平六とその子分の二人——とんでもない狼が、牙をむいてまぢかまえていたとは知るよしもない八重路は走ってゆく足先を出しぬけにしたたか払われて、
「あッ！」

と、いったまま、もんどりうって地に転げた。

「な、何者じや。な、何をするのです！」
さすが伊那太郎の妻だけあって、骨を砕いたかと思われるほどの痛みにもめげず、
「何者じや、何者じや。おのれ、わたしを八重路としての狼藉かッ」

と、はげしく叱咤しながら、はねおきようとしたり。しかし、それよりも早く、とっさに上からのしかかってくるきた大の男二人。

「おうさ、伊那太郎の女房の、八重路として待ち伏せしていたんだ。糞ッ、何もしやしねえ、こうしてやるんだッ」

と毒づきながら、一人がぐうッとその細首をしめつけている間に、もう一人が手早く狼轡をかませ、宙にもがいている両腕をへし折りそうにうしろへねじつて、がんにがらめにくくりあげてしまった。

八重路は狼轡の下から絶え入るよううなうめき声をあげ、死力をふりしぼって悶えている。しかし、足は空しく宙を蹴って、月明りの中に紅の裳裾がなまめかしく乱れ散るだけだった。

『八重路は無念の瞳をかッと見開いて平六を睨んでいる。その必死の表情が、かえって男心をそそるように、たぐいもなく美しい。』

さつき争っている間に、袖がもげたのであろう。象牙のようにぬめやかな片腕が、肩のつけ根あたりまで露出して、痛々しく食込んだ縄の跡が、無残な運命をまざまざと暗示しているようであった。

平六の目が、その二の腕のあたりから、苦しげに弾んでいる胸のふくらみのあたり更に、蹴はだけたまま、紅い裳裾の下から白々と月明りの中に露出しているふくらはぎのあたりへと、舐めるように這ってゆきながら、思わずごくぐッと唾をのんだ。

「おい、この女を下へ運んでゆけ」

と、子分の一人をよんで、

「大切な人質だ。逃げられねえように、船底の一番蔵へほうりこんでおけ」

いいつけると、折から、酒樽の鏡をぬいて前祝いの酒盛りをはじめた一座の方へ、のっしのっしと歩いていった。

『平六は唯一人船底の一番蔵に立っていたその足許には、うしろ手にくくられた八重路がきつと唇をかみしめてうつむいている。』

「八重路さん、とんだ目にあつたのう。しかし、俺をうらむこたアねえぜ。うらむんなら御亭主の伊那太郎をうらみな」

と、酒くさい息をふうっとふきかけながらいう。』

「怒りをふくんできつと睨んだ美しい眼元も平六の快感をそそりたてるだけにしかならなかった。」

「そうか、どうでもいわねえつもりか。こりや面白い……」

と酔いに血走った淫らな目が八重路の首筋から胸元を、舐めるようにじろつと見やっただ。

「八重路さん、よくいったなア。俺ア、仰有るとおり下郎だよ、下司だよ、不潔な海賊だよ、その不潔な下司野郎が、こういうことをするか、見せてやろうか」

いいさま、平六はやにわに八重路を蹴倒した。あッ！と声をあげて、仰向けに倒れるのを、

「さまア見やがれ！」

と、毒づきながら、その胸のあたりへ足をふんがけ、

「やさしくいやアつけ上りやがって……さまア、いえッ」

と、力まかせに、ぐいッぐいッと踏みつける、

「どうあっても、いわさずにやアおかねえんだ。さア、菊水の絵図のありかをいえッ」

男の体重を上からかけて、乳房の上を踏みつけられ、思わず、

「ああッ！あア……」

と、切なげにうめきながら八重路は歯を食いしばって身悶えした。

「これでもかッ、さアいえッ。さアいえッ」

平六はいよいよはげしくせめつける。八重路が髪をふり乱し、蒼白な額にべっとり油汗をにじませながら、必死にこらえている姿に、平六はいよいよ憎悪の火を燃えさせたように、どうしてくれようかと、血走った目が蛇のように見おろしている。

足の裏から伝わってくる女の肌の温味とその悶える肉の弾力が、平六の酒に濁った頭にむごたらしい残念さ呼びおこした。

八重路は、じいっと自分を凝視している男の瞳の中に、赤黒く濁った淫らなものを感じとった瞬間、死のう！と思った。

死のう！死ぬ以外、この男の暴力には抵抗し得ないのだと……。

だが、八重路は死ねなかった。むごたらしい瞬間がすぎてゆく間、すでに生ける人とも思われぬ紙のように青ざめた顔を、石のように固くした八重路は、無言のまま、かッと両眼を見ひらいて虚空の一点を見つめていた。平六が悪鬼のような薄笑いをうかべながら出ていったあとも、八重路は血のにじむほど唇をかみしめ、凝然と虚空を見つめていた。」

「……八重路は、弾かれたようにむっくり身をおこすと、ふと目についた大きな木箱の角へ、しやにむに身体をすりつけた。すりつけることによって、腕の自由をうばっている縄をすりきろうというのである。髪をふり乱し、歯をくいしばり、まるで狂人のような形相であつた。……」

女を縛つて転がし、仰向けにしてその乳房の上に足をのせてグイグイ踏みつけるなど、いかにも大衆受けをねらった責めの手である。エロティックな危機感があるので読者は読んでいて胸を躍らせるのだ。お読みになられたように、この八重路という女は結局凌辱されて、一度は逃げだすが後に自殺する。

この小説の後半に入って、もう一場面、すぐれた責めの描写があるので、紹介しておきたい。珍らしいローソク責め、乳房責めがまことに躍如と描かれている。このような場面はまさに角田氏の独壇場であろう

「……夢ではなかった。恐ろしいことが現実はこの身にふりかかったのだと、はっきり記憶が戻ってくるにつれ、お清は夢中ではね起きようとした。しかし、手も足もしびれたように動かない。身体が、がんじが

らめに縛りあげられているのに気がついた。しかも、その縄のはしが、どこかにしつかりつなぎとめてあるらしい。

しいんとして、あたりは暗かった。はだけた二の腕が、苔むした岩の上をぬるッとする。耳をすますと、暗闇の向うから、かすかに水の流れる音がきこえてきた。

——そうだ、ここは、何処か鉾山の廢鉾の中にちがいない。……

お清は、大久保家に幼ない時から養われ鉾山の様子はよく知っていた。無理に首をねじって穴の出口の方を見ると、わずかに暮れのこった夕空と、その空にそびえている三本の杉の梢が見えた。

何のためにこんな所へさらわれてきたのか？ そうだ、逃げるのは今のうちだと、お清はにわかにうろたえて身体をゆすりはじめた。しばってある縄を切らねばならない。切るといっても、背中に感じる岩角へ縄をすりつけてたきるよりほかに手段はなかった。

何時とはなしにとつぷりと夜のとぼりが落ち、洞穴の中は一寸先も見えない暗闇に閉ざされている。衣類が破れ肌が傷つき、それで

も縄は切れそうになかった。空しいとは知りながらお清は死にもの狂いで努力を続けている。更にどの位時がすぎ去ったであろう。

その時、だしぬけに

「くっくくくく……」

と、喉をならすような無気味な笑い声が洞穴の中にこだました。しかも、お清の耳のすぐそばで……

誰かいる。何者かの呼吸する息が、お清の頬をくすぐっている。



そして、お清は闇の中から、じいっと自分を凝視している視線さえ感じたと思つた。恐ろしさに気が狂いそうであつた。喚こうとしたが舌が硬ばって声も出なかった。

と思ううちに、突然、闇の中にぽつと灯がともった。そして、その蠟燭の灯の中に忽然とうかび出てきたのは、あの化物のような男の顔であつた。

氣を失わなかったのは、お清の性根の底に並ならぬ氣丈なものがあつたからである。しかし、恐怖のために髪は逆立ち、全身は石のように硬直してしまつていた。……」

「……いざとなると、さすがにお清は氣丈だった。」

「無法なことをなさんと承知しませんよ。さア、早くこの縄をといて下さいッ」「だからいってらんだ。早く助かりたかつたら、素直にきかれたことを答えるのさ」「そのようなこと、答える必要はありません。早く縄をおとさなさいッ」

「よしッ、素直にいわねえんだな。それならそれで、いえるようにしてやろう」

いいつつ、その男は手にした蠟燭

をお清の顔に近づけた。髪がちりちりと燃え、耳朶にかつと火の熱さを感じた。

「いい匂いだなア。髪が焼けている。肉のこげる匂いはもっと素晴らしいぜ。それ、早くいわねえと、その可愛い耳が木くらげのように炭になってしまふぜ」

おどしではない。焰が、じりつと耳をやいた。

「うふッ、肉がやける。たまらねえ匂いだ」くっくくくッ……と喉をならして笑う男の形相は、もはや正気とは思われなかった。

「いいな、早くいいな。いわねえと耳が炭になるぞ」

「父は……父は……」

と、お清は喘ぎながらいった。恐ろしさと無念さに、顔が真青になってひきつっている。……」

ローソクで耳を焼くというのは新手の責めで、珍らしいと思う。この「文学に現れた責め」では初登場だし、奇クに於ても未だ現れなかったのではないだろうか。女の耳というものは美しく可愛らしいものであるそこに眼をつけた作者も、この道では苦勞している人であろう。なかなか細かいところに気のつく人である。耳が炭になるぞ

などという脅し文句も珍らしい。

『男は物狂しくぎらぎら光る片目で、お清の全身をなめるように見やうてから、いきなりその襟元に手をかけると、ぐいッと力まかせに胸をひきはいた。』

恐怖に激しく喘いでいる乳房が、あらわになる。それへ蠟燭を近づけた男は無言のまま、焰の先をじりじりと乳房の方へ近づけた。

「いわねえか、いわねえか？」

乳房の上へぼとりとおちた蠟燭の熱さにお清はびくんと全身を震わせた。』

『……「俺ア、黄金がほしいんだ。気の遠くなるほど沢山の黄金をこの両の手にせしめたいんだよう。うふふふ……」』

うっふッふ……と笑うその顔はもう黄金にとりつかれた狂人のほかではなかった。

「ひッ！」

と、お清が悲鳴をあげたのは、また乳房の上へ熱い蠟燭がしたたったからであった。』

『……「わ、わたしではありません。それは人違いですッ、人違いですッ」』

「うぬッ、甘く見やアがるなッ。ようし素直になれるようにしてやろう。さア、この桜色の乳首がまッ黒な炭になるのをその目

でようく見ていやがれ。ただそれだけじゃアすまねえんだぜ。素直に泥を吐くまでは肌という肌、肉という肉を焼きつくしてやるんだッ」

逃れようと悶えるお清に、男はぐうッと馬乗りになって、情容赦もなく焰を乳房に近づけてきた。

恐しさもさることながら、こんな野獣のような気違い男に手籠めにされるのが、身震いするほど無念だった。

理屈の通る相手ではない。まして、こうと一途に思いこんでいるらしい男を、もう言葉でも力でもはねのける術はなかった。』

この新聞小説の責め場面はなんと、えんえん五日間にわたって連載されているのである。角田氏もまた特異作家といわねばなるまい。尚、この小説の挿画は伊勢良夫氏が描いている。画としてはあまりよくはないが、場面を忠実に描いているのが取得である。こうして書いていてわかることだが、やはり大衆小説による責めは類型が多く通俗に流れ、奇クに載せたいと思うほどのものは次第に少なくなってくる。

次回からは、もっと範囲を拡げて大衆文学に限らずにとりあげてゆきたいと思う。

〔新聞・雑誌〕通信

新橋で米兵同性心中

矢桐 重八

東京タイムズ昭和三十一年九月六日附

五日午後一時ごろ港区芝新橋四ノ八ロビンス・ホテル（経営者橋本文太郎氏）二階洋室で、八月三十一日から宿泊中の二人連れの米兵が睡眠薬心中を図り、うち黒人兵はすでに死亡しているのを女中が発見、愛宕署に届出した。

残る白人兵は築地のアーミー・ホスピタルに収容されたが重態。調べによると二人は仙台駐留の第五騎兵師団A中隊黒人兵ヒューストン・マーウィン二等兵と白人兵ドナルド・ギユニョット一等兵で、枕元の白人兵のメモに「故郷にいるフィアンセが空軍兵と結婚したので自殺する」とあり、黒人兵はそれに同情したものらしい。

この記事は三面の下段に掲載されていた。

世間の普通人はこの奇異な見出しに興味を抱いても一読すれば読みすててしまふ記事である。しかし、一見、単なる自殺事件と思えるこの短かい文章から、異常な匂いをかぎつける者も、広い読者の中には存在するだろう。

故郷に居るフィアンセが他の男と結婚したのに絶望して自殺を覚悟した白人兵、そしてその白人兵に同情して共に自殺を計った黒人兵……新聞記者はまことに簡単メイリヨウに書いています。

しかし、恋人に裏切られた友人のために自殺するなどということが、感傷期の少年少女ならいざ知らず、一人前の兵士に於て、常識で判断できるだろうか。記者は知つてか知らずか「同性心中」と見出しをつけたが、まことにその通り、ここに同性愛心中の匂いが強い。

い。恋人に裏切られたなどというのは、全くの表面的な弁解的な理由で、実は米兵同志の同性愛の行き詰りが、どんな性質のものかは知る由もないが、仙台勤務の兵士が東京に脱け出してきての心中に、覚悟の程がわかるような気がする。

アメリカでは潜在同性愛者をも含めて、この傾向を愛する者が、一千万から千数百万人も存在するという。しかし衆知のようにアメリカでは法律で男色を禁止しているので、その点自由な日本に駐留している男色兵士たちの愛情交換は、はげしいものと聞く。

死を思いつめるまでの二人の苦悩はどんなものであったのか。人種偏見の強い米兵の間に、白人と黒人のとこういう関係は珍らしいとも思うが、またその辺に死の理由があるのかも知れない。わずかに十数行の三面記事の中にも、複雑な人間関係がしのばれて、つくづく人間の性の怪奇さ、深さが感じられるではないか。

本誌の旧号在庫

復刊号の分 一部定価二百円
(送料八円)

○復刊第一号 (30年10月号)
○復刊第二号 (30年11月号)

○復刊第三号 (31年4月号)
○復刊第四号 (31年5月号)
○復刊第五号 (31年6月号)
○復刊第六号 (31年7月号)
○復刊第七号 (31年8月号)

○復刊第八号 (31年9月号)
○復刊第九号 (31年10月号)
★以上の通り各月号共若干在庫しております。三回以上まとめてお申込みの節は送料は当方にて負担いたします。

たします。休刊前の旧号は29年3月号以前の分は、一冊も在庫しておりません。目下在庫中のものも極めて僅少ですので御入用の方は、お早くお求め願います。



前回まず「褌」でなくて「ふんどし」と平がなで書かれていて私の願いが通り、うれしく思いました。私は今後ともやわらかい感じの平がな「ふんどし」を愛用させていただきます。そして拙ないペンを走らせて、もう十年近いふんどし生活—娘から人妻へ—からの体験と意見を書きつけさせていただきます。

× × ×
もともと、ふんどしは専ら男の下ばきとして使われて来たように思われます。しかし「夕涼みよくぞ男に生れける」と川柳にもある通り、だんぐ下ばきから表面にまで進出し、人の目についたり絵に描いたりするよう

私のふんどし

(二)

松原三千代

になりました。そしてさらに、弁天小僧のようにお尻をまくって、きりりとしたふんどしの男らしさや、お金持の若旦那などがしゅすや羽二重のふんどしを自慢した話のように、「人にみられる」から進んで「人にみせる時代」もあったのです。それが今では男たちは、こんなに気持ちのいいふんどしを忘れて、却って今までは許されなかった女性の方に、ふんどし着用者が増えてゆくという時代になってきました。女性のふんどしというものが今はまだ下ばきの時代ですが、きっと近いうちに、日常生活において、もっと表面化され、それこそ「よくぞ女に」といわれるように堂々としめられる時が来るに違いありません。私たちはもうすでに夏の海では、女性のふんどしの美しさを誇り高く現実化しているのです。ビキニ水着が、女性のふんどし生活への門とでもいえると思います。そして日常

生活では、ズロースからパンティへ、さらにブリーフ型が一般に売出されて人気を呼び、最近ではブリーフ型の股のV字形が、ますます、くりが深く鋭角になってきています。つまり、ふんどし時代へ、一步一步近づきつつあるのです。それは何故でしょう。美しいからです。気持ちがいいからです。便利で合理的だからです。

× × ×
この夏は素晴らしい経験を幾つもいたしました。まず「ふんどしを買ったこと」がその一つです。それは今から思い出すだけでもションとする感覚でした。女がふんどしを買う。そうです。私は、しかも真赤な六尺ふんどしを買ってみたのです。一本ずつ二日続けて同じ店で二本。それは七月の終りの暑い日でした。お友だちの家からの帰り道、小川で子供たちが魚すくいをやっているのを見た

きのことでした。日に焼けたお尻を突き上げて水鏡で水中をのぞいている大きな子のそのお尻に食い込むようにしめられた真赤なふんどしが私の目から体全体に激しい感動の波をまき起したのです。赤いふんどし。あゝ私もあんな風に、赤ふんどし一本で、太陽の下で遊べたら……と胸はずませて歩いていると、一軒の雑貨洋品店の店先に、黒い三角の水泳ふんどしが並べてぶら下げた中、見つけたのです。赤い布がひらめいているのです。私は吸い込まれるように店に入っていました。

「あの赤いの、すみませんが」一寸とまどった老人の主人が、私の指さすものを外してくれましたが「これふんどしですが、ええかな」と、私が感違いしているとも思った様子なので、私はズバリと試してみました。

「六尺ふんどしでしょ？少し短かいようね」

「子供用は、こうして五尺に切っておりますんで」

「大人用だから六尺はないと、……ちよつとね……」

「へえ、こちらにありますで、何尺でも切りますが、白いのもありますで……」

「その赤いのがいいわ、ええ、一本でいいんですけど……すみません」

「赤はエンギがええで……はい、六尺たっぷりありますで……」

私はゆっくりたたんで、白いバッグの中へしまつてハイヒールの音も高く店を出ました。七十円也。乾いた風が上気した顔を快よく吹きぬけて行きました。そしてその翌日再びその客を訪れ今度ははじめから「きのうの赤いふんどし、もう一本切つて下さい」とハッキリふんどしを買いに来たことを名乗ったのです。その上帰りぎわには私はこう言わずには居られなくなったのです。「主人も赤いのがほしいっていうもんですから……」この意味が店の人に果してわかったかしら？しかもその時、私のスカートの下には、前日買ったばかりの真新しい赤いふんどしが強烈な緊迫感をもってキリキリとしめ上げられ、私は肉体と心理と両面からの快美な感覚に真夏の白昼夢の人物となっていたのでした。

× × ×

この夏ほど「ふんどし」に関する写真や記事を新聞雑誌で多く見たことはありませんでした。女のふんどし姿では、「週刊新潮」八月二十七日号のトップ写真集「七頭身のヴィナス」の素晴らしい海女の群像の数枚と『週間東京』八月二十五日号の「ハダカ天国」グラフィックが、しびれるほどの強烈な「ふんどしの感覚」を、鮮明な画面から漂わせています。とくに「ハダカ天国」は、フランス人男女のふんどし一本の写真という大サービスです。これで見ると、ふんどしは、日本人だけのもの

でもありませんし、忘れ去り、捨て去らるべきものではありません。トップモードとしてフランス人が着用しているこの写真では、男も女も白い三角ふんどしです。正面は殆んど腰巾一ぱい、から急角度に股の間へ逆三角に強くしめ込まれ、後ろ写真ではふんどしは、お尻に食い込んで見え、ヒモだけが、一文字に写っています。斜めからみた写真では、外人の女は皆あんな風なのか。だからとても立派に見えるのです。私はここでもハッキリ主張したいのです。ふんどしは、男から女へ移りつつある。もう外国人が、しめて歩くようになった。私たちこそ、今こそ快適で文化的なふんどし生活を始めましょう。

× × ×

私はふんどしこそ下ばきのうちで最も進んだものであると思っています。普段ばきには三角ふんどしで、時たま、六尺ふんどしのガッチリした緊迫感を楽しんでみるのがいいようです。そして越中ふんどしは、大嫌いです。それなのに男の人の平常のふんどし姿をみかけると、大抵の場合が越中ふんどしなのです。緊迫感もなければ美的でもないのになぜでしょう。たゞ作るのに簡単で、便所の時にズボンのボタンを外してから出し入れに便利、というだけのことならいっそのこと、外人の男の人のように（伝えきくところによると）何も下ばきなしの方が一番いいのでは

ないでしようか。八月十四日の読売新聞には、「やめよフンドシ一本」という見出しで、いくら暑くてもふんどし一本では、みっともないし、失礼に当る、と書いてありましたが、果してそうでしょうか。これが越中ふんどしなら、一応もつともだと考えられますし、また事実ふんどしをしめているといっても越中ふんどしが多いので、こういうことにもなるのですが、はだかに、真白い六尺ふんどしをキリリとした男のスタイルの何処にみっともないところがありませんか。やめてほしいのは、ふんどしではなくて、そのしめ方が大切だと思います。ふんどしはふんどしらしく、キリリと強く、しめてこそ美しいのであって、それは丁度女性がブラパットやベチコートで女性のものをより美しく飾るのと同じことだと思います。私は男の人には、ぜひとも六尺ふんどしを愛用していただきたいと思っています。

男の人にはもちろん、女の人にも、私は、『ともかく一度ふんどしをしめてごらんなさい』と申し上げます。はじめは、なるべくやわらかくて肌ざわりのさらりとする布（上等デシンが最適）をしめてごらんください。もう二度と、パンツやサルマタやパンティなどに帰ることが出来なくなってしまうこと受合いです。一番手っ取り早く作るには、巾二十セ

ンチ、長さ三十五―四十センチの布の一方にヒモを縫いつけもう一方はヒモ通しにして自由に移動させるように作ればいいのです。ヒモに縫い付けた方を前にして、お尻の割目にふかく食い込ませて、前も後も、ハッキリ逆三角になるようにピッタリとしめ上げると、ヘソの下から股下、お尻へかけて、何とも言い表わしようのない圧迫感が伝わって来ます。私の夫も、私と結婚してから数日間に、この褌の愛用者になってしまいました。一度試してみても下さい。きっと、私のこのおすめは喜んでいただけるに違いありません。ふんどしこそ、下ばきの女王です。

男の目には（夫の言い分によると）女の下穿きは、ズロースよりパンティ、パンティよりブリーフ、ブリーフよりふんどしが一番美しく、また魅力的に感覚されるそうです。そして、さらに重要なことは、全裸体より、ふんどし一本の方が、遙かに、女的美と色気が出ているものだそうです。ふんどしは、女の場合、もっこふんどし型で、巾も長さも出来る限り、ずり落ちない限りの最少限にし、ピッタリと隙間なく身について、お尻には深く強く食い込み、前も後ろも三角形に張り切っているのが、たまらなく美しいということです。薄物で、色は白か、淡いグリーンなどで黒は、あまり人氣がよくない様子です。

私は、今も例の通り、真赤な三角ふんどしに白ブラウス姿で、書いておきます。ブラウスのうしろをまくり上げると、海で焼いた小麦色のお尻の上には、水泳ふんどしの日焼けの跡が、白くT字型にハッキリと残っています。今年の夏は徹底的にふんどし生活を送ってみました。水泳着のパンツの部分を取り去って、胴体だけにし、下に水泳ふんどしをして、浜で寝て、お尻をまくり上げてこんなに見事に、T字型を焼き込みました。家では殆んどシャツブラウスに赤の、もっこふんどしか、三角ふんどしで通しました。御用聞の小僧さんも、お隣りの若奥さんも、モダンでキリッとしていい眺めだと、私の大胆卒直さに感じ入るところがあったらしい様子。苦奥さんは、「身体が緊って気持ちいいでしょうネ」と満更でもなさそうな様子だったので、「だまされたと思って一度してごらんください」とすすめ私の新調の、もっこ型を一枚進呈しておきました。この話の続きは、次回に詳しく書いてみたいと思います。いま、私たち夫婦は二人がかりで、お風呂屋さんや洗濯ものなどを調べて、下穿きの現状をまとめようとして計画しています。また私たちのふんどし写真も次回には、皆さまにみていただけたらと思います。

近ごろデルタパットというものが話題になり、水着姿のモデルさんや女優さんたちに喜ばれ、大へん人気があるということ。これもやはりブラパットと同じように、女性の肉体の美しさを強調し最も女らしい特徴を、誇らかに示すためのものです。けれども私は、もっと実用的の目的もあって、もう数年も前から、ふんどしと一緒に着用しております。六尺ふんどしをしめるときは、いいのですが、もっこふんどしや、特に普段ばきの三角ふんどし、水泳ふんどし型を着用するときなど、きつくしめ上げておくものですから、長い間には股下で、よじれたり、汗でビショ

リ濡れたりして、股に食い込みすぎるがよくあります。こんなときに、デルタパットを、ふんどしの内側に簡単に縫いとめておけば、大丈夫です。入浴や浜辺など、他人の前でパットとふんどし姿になった時にも、ふつくと円いふくらみが出て、美しいスタイルになることができます。そして、デルタパットがきっちり寸法が合っていれば、もういくら股を広げても膝を立てても、決して不快な姿にはなりません。女性の皆さまに、ふんどしとともに、このデルタパットもお試し下さるようおすすめいたします。洗濯のことも考えて、ワタを使うより柔らかい綿製品の端切

れを重ねた方がよく、一番外側の肌に接触する表面は、やはりデシンなど、サラリとした気持ちのいいものが適当です。そして、大きさはむしろ小さすぎるくらいの方がよく、実用的の面を重視して、私は股下の後ろの方へ細長くして着用しています。丁度、前後は、水泳ふんどしで、股下の所だけが、六尺ふんどしが、ひも状にしぼられた効果が、出るようになるわけです。しかも圧迫感は一層強まるので、是非とも、ふんどし生活のアクセサリとしてお作りになるよう、重ねておすすめいたします。(おわり)

【(新聞・雑誌) 通信】

異性より同性に興味

畑村 一 提供

(雑誌「平凡」十月号、人生案内座談会の中「青春診断室」宮田重雄より)

異性より同性に興味

問 十七才の男子高校生ですが、どういふものか、私は同年輩の友達のように、女性に対して興味を感じません。逆に、男性の裸なにかに妙に興味を感じたり、興奮したりします。このような状態は一生治らないものでしょうか。(青森K生)

環境による倒錯

答 同性に興味を感じて、異性に全然興味を感じない人は、あなただけでなしにたくさんいるものです。これは環境によって性欲の倒錯がおこる現象なのですが、つまり幼い頃から女性の中で生活したりすると、男性でも生活態度が女性的になって、あなたのような症状になったりすることが多いのです。肉体的にこうなることはあまりないから、心配はしなくてもよろしい。だからこのような症状は、毎日ほげしい運動をしたり、つとめて男

性と多く生活を共にするようにすれば自然となくなるでしょう。(宮田重雄)

医者としてよりも、ラジオなんかで、より有名な宮田重雄氏の回答なので、普通のありふれた相談欄の回答者と違って、もっと相談者の身になって答えてくれることを期待していたが、この回答では、何にが何んだかさっぱりわからないどころか、肝腎の質問からはピントをはずして、誰でも云うことを繰り返しているに過ぎない。原因を環境によるものばかりとしている点や、解決法として毎日ほげしい運動をしたり、つとめて男性と多く生活を共にする、というような回答では、まず／＼宮田重雄も、この種の質問に対する回答者としては落第である。

沈ちん黙もく

の

館やかた

小山矮男

(1)

ナタアリヤ夫人は素足のまゝ、顔をそむけて、護送車の柱にくくりつけられていた。白い薄絹をまとった胸に、鉄鎖が幾重にも巻きついて、足首には鉄の枷がはめられている。豊かな亜麻色の髪が罪人の顔をかくしてしまわないように、用心深く後ろに束ねて、黒いリボンで結んであった。車は二頭の猛犬に索かれて行く。群衆はこれを追って、監獄のある地区から、大通へなだれ込んで来た。護送車は大通を経て、鉄柵の廻らされた公園の一角に引き入れられた。こゝは罪人の晒を行う場所になっているので、ナタアリヤ夫人は夕方まで晒されることになるのだ。

こゝで、この事件の概略を述べることにしよう。ナタアリヤ夫人はこの街では、誰にでも知られている美人であり、また有数の財産家である。数年前、夫に死なれて、今は未亡人だが、夫君と云うのが、多年街の要職をいくつも占めた有力者だった。イネスと云う十九になる娘があつて、二人は宏壮な邸宅に多くの召使にかしづかれて住んでいた。このような身分にある夫人が処罰されるに到った理由はこうだ。

二週間ほど前、さる夜会で、監獄官のヴデル氏が些細なことから夫人を嘲笑した。大体このヴデルと云う男は地方の権力者によくある型の、陰險な野心家で、以前の素性はずい分いかゞわしいものであったと云う。このバモール街に流れ込んで来て、二十年にもなるが、その間、ナタアリヤ夫人の夫のおかげで様々な職を得てきたのだから、夫人を侮辱できた義理ではないのだが、ある事情で夫人の亡くなった夫の怒をかって、収税吏の役をとり上げられた。ナタアリヤ夫人の夫が死んで、同氏と長い間、反目していた、ラ・モール氏が市長になると、いつかこれにとり入って、いまでは街の監獄官をつとめる外、教会に附属する牢の監督も兼ねると云う、大した羽振になった。

ところで、夜会でヴデルがどんな風に夫人を嘲笑したか、いまは述べないことにするが、夫人の方は冷くヴデルを見返して、以前の彼の醜行をかなり皮肉な言葉で述べた。こちらは成上りの常で、夜会のはれがましい席で女から手ひどくやつけられたのが、癪にさわり、しつこく夫人にからみ始めた。夫人も負けていずやり返したがその言葉の中でヴデルが教会獄の監督の役目を得たことについて、ヴデルの卑劣なやり口と、こんな男を抱え込んだ教会の墮落を激し

く批難した。この時のナタアリア夫人は何かに憑かれた人のようであらう。全く前後の見境がなくなっていたようだった。こんなわけで、夜会には混乱の裡に流会となり、夫人も何時か姿を消してしまった。一方ヴデルは腹心の部下と最後まで残って、何か囁き合っていた。

二、三日後、ナタアリア夫人は教会に呼びつけられた。勿論、ヴデルの手配によることである。司教は赴任して間もない若い男であるが、背が低く顔は蒼くむくんでいる様で、眼は年中濡れたようにうるんでいた。司教は人気の無い内陣の一室に夫人を呼び入れて、夜会での夫人の暴言をたゞした、夫人が帰ると、追っかけて教会からの使が夫人及び一家の者は当分教会に出入りすることを遠慮する様、尚、ナタアリア夫人は自宅で謹慎する様、申渡していった。そして、それから二日目、朝早くナタアリア夫人は囚人車で教会の獄に送り込まれたのだ。ヴデルが教会の獄監も兼ねていたから、この間の事情については、彼の陰謀であることが明白だ。教会の牢は専ら、異端の訊問に当てられているものである。重大な宗教裁判は中央で行われたが、簡単なのはこゝで裁かれた。教会から祈りを終えて出て来る人は石段の右手に拡がっている広い庭を散歩するのを好む。この庭をずっと奥まで辿ると次第にモミヤブナなどの林を分けて行くことになるのだが、この林を抜け出たところで、突然庭が高い鉄柵で仕切られていて、その向に高い壁を廻らした小さな城のような建物を見る、これが教会の牢獄、と云うよりは、その人口で、牢はこの建物の下の地下に設けられているのだ。ナタアリア夫人の繋がれた獄はこゝである。

二、三日の間、司教と獄監のヴデルとがしげくこゝに足を運ぶのが見られた。夫人の尋問は獄舎の中で秘かに行われていた。突然、夫人に有罪宣告が下されたのは一週間程後のことである。そして、その翌日には、刑宣告が申渡され、教会の前の広場と街の公園に白い文字で刑をしろした銅板が立てられた。夫人は三十日のリネード

送りと決まった。リネードはこの街から十里程離れた場所にある徒刑場で、この辺りの徒刑囚はすべてこゝで服役する。この徒刑場には、政教侮蔑、流言蜚語などの罪に問われた者を箠口監置する獄舎があった。囚人は鉄の狼轡を喰され、ものを云えないところから、この獄舎は「沈黙の館」と呼ばれた。夫人が送られることになったのはこの「沈黙の館」なのである。

夫人は公園の晒場で夕方まで晒し者になって、それから夜道をリネードへ送られることになっていた。夫人は護送車の柱に、後手を解かれ、両手を胸の上で、祈るように合されて皮紐で縛られていた。夕方、晒がすんでも人々は帰ろうともしない。全く滑稽な話であるが、松明を売り出した男がいて、人々はそれが何のためなのか問うても見ず、争って買い求めた。つまり途中までも、護送について行こうと云うわけなのだ。リネードへの途はこの先、登りである。で、護送車では無理なので囚人は馬に乗せられていく。夫人もその様にされた。警吏は夫人の足枷をはずして馬を車に近づけた。おびえて立っている夫人の背に二人の警吏が廻って、縛しめの身体に四本の手がかかる。

——さ、ちよつくら、眼をつぶってなよ、すぐ馬の背だぞ。足をすくわれる時、夫人の口から微かな悲鳴がもれた。

——夜道だ、誰か奥さんの身体、支えて馬に乗らなくちやなんねえ。手を縛られている罪人だしな。それに御婦人は大切にしないちやあ。

群衆の中から、男の笑声がした。

——クジで決める！

クジが引かれた。警吏の中で一番まづい面の小男が当たった。彼は醜く顔を赤らめて馬の背に乗る。夫人の縄尻を自分のバンドに結んで両手で夫人の腰をだいた。馬が動き出した。夫人は不自由な身体をねじる様にして、前に伏せ馬上を徒刑場へ運ばれていった。

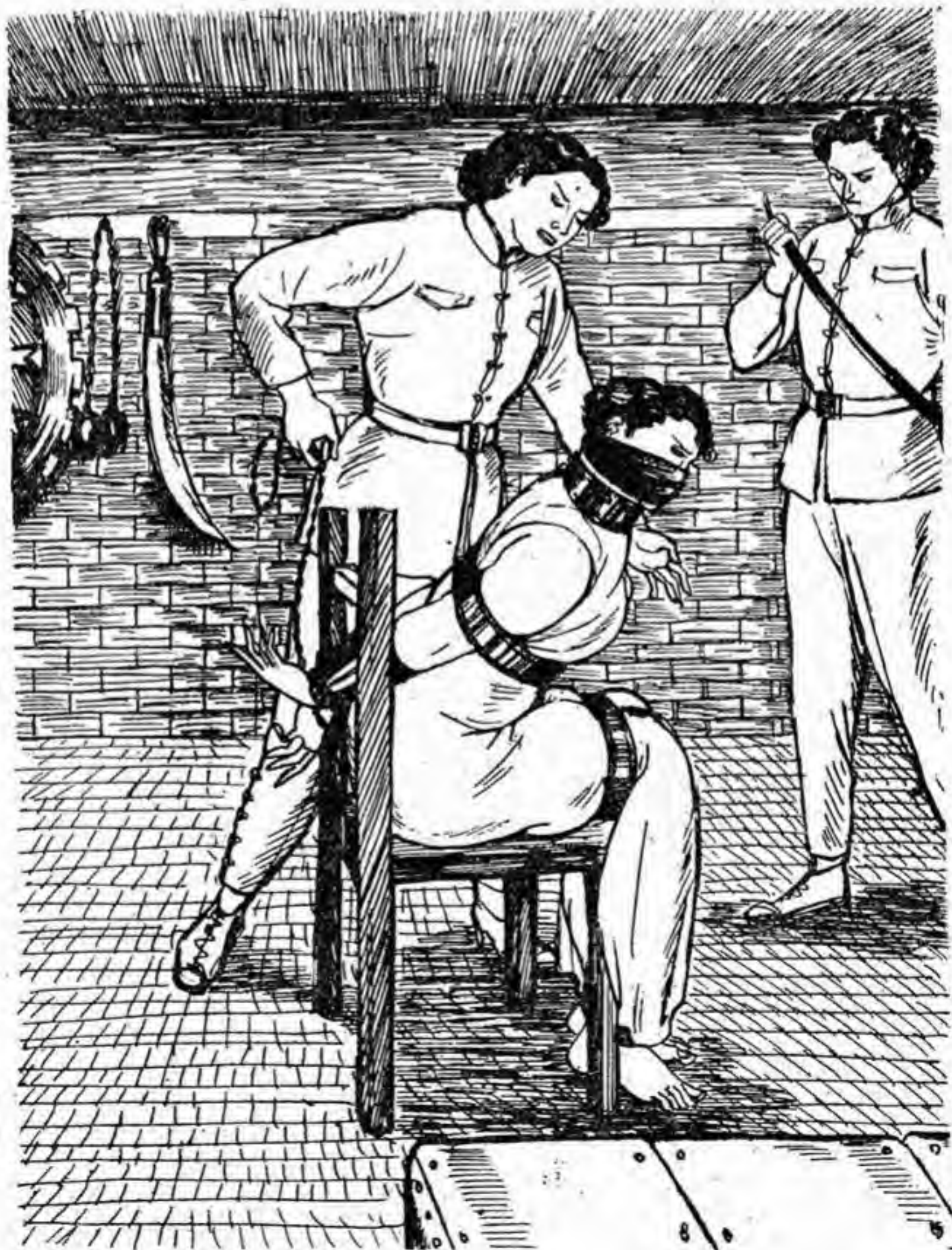
(二)

リネード徒刑場はバモールの街から十里ほど離れたモンジュラーの岩山の間に設けられて、ドウ河の激流をはさんで娑婆に對している。土地の人は、こゝの囚人を坊さん或は尼さんと呼んでいたがこれは、獄舎が古い時代の修道院であつたこと、囚人の長いガウンの様な服装が、容易に僧侶のそれを思わせるからであつた。囚人の作業はきり立った岩山から、ある岩石を掘り出してくることで、これを細く粹いて選り分るのは女囚の仕事であつた。赤い肌を露わにした岩石のそこゝに黒蟻のように蟻集して、何やら蠢めいているのは、発掘に従事している囚人の群なのである。時々、大きな岩が砂煙を上げてころげ落ちた。獄舎と岩山のなか程に、大きな石造の平家があつて、女囚たちは朝からこゝで、運ばれて来た石を砕き、それを選り分ける作業に従事していた。真昼の太陽が白っぽい地面をちり／＼照らしている。作業場の傍の古井戸にとりつけられた鐘が食事の時を告げる。五人づゝが一組に、腰の廻りを鉄鎖でつながれた女囚が二ヶ所の出口から作業場の外へ出てくると、そこで看守からパンと汁を貰つて、木立の影を求めそこゝで、昼食を喰ひ始める。幾組もの囚人が出た後、こんどは、二人づゝ鎖でつながれた女囚が六、七組出て来た。この連中は暑い最中に、囚人についた白い頭巾を目深くかぶっている。彼女たちはパンを受取ると五人組がかたまっている木立を避けて、建物のかげに女看守につき添われて腰を下した。一人一人頭巾をとると、むごたらしい口枷をはめられた顔が現われる。鉄具と皮紐で緊めつけられた女囚たちの顔はいたましい無表情な仮面をつけていた。微かに、眼だけが種々の心の偽きを表わしているが、それも常には哀しみの光を投げかけるだけである。むごたらしく刑具で固定された、この女たちの顔を十秒と直視出来る心とは、どの様なものであらう。人間の狡智が発明したこ

の最もいまいましい刑具の中の眼は普通の人間には地獄の隠火とも映るべきである。だから、この女たちが最も恐れるのは、他人の眼より、猿轡をされたお互の眼なのだ。次々に女看守の前に進み出て、彼女たちは刑具を解いてもらう。互の眼を避けながら、俯むいてパンを口に運ぶこの女たちの中にナタアリヤ夫人は居た。こゝに移されて来てまだ数日にしかならない。バモールの街での生活が遠い昔のことの様に思えた。と云うよりも、こゝに送られて来てからの生活と、それ以前の生活が、時の流れの同じ線の上にあるのだとは、どうしても考えられないのであつた。あの豪華な平穩な生活と、このみじめな苦業との間にもうすでに深いもやが下りて、それを通して過去をかえり見ることは、自分のものではない、例えば死んだ恋人のありし日の姿を求めるような、はかない努力であつた。苦しい生活に慣れた人の心が、記憶に忘却を強いることは、比較的容易であるが、夫人の場合、心のからくりはその様には出来ていなかった。このみじめな刑罰が夫人をいためつけければ、それだけ心は以前の生活の全き復元を求めていたましく疼くのだ。けれど、同じ時の流れにある筈のみじめな今の姿と、過去の平穩との間に、こうして深い深い霧のようなものが下りてしまつては、過去を求める夫人の努力は、それを貫いて彼方へ飛翔するどころか、たゞ夫人の心をいためるだけであつた。仲の好かつたM夫人の顔を思い浮べると、それはいつの間にか、意地の悪い女看守の浅黒い顔に変わった。磨き上げた廊下の向うから、——お母様、ブレイルが仔を生んだのよ！四匹も生んだのよ！と叫んでかけて来るイネスの姿は一瞬に、暗い廊下を縄を掛けられて索かれていく年若い女囚の猿轡をかまされたいましい姿に変わっている。この娘は、——お母様、ブレイルが……などと云わなかった。口にはめられた鉄の猿轡がこゝにつながれている女囚たちから一切、発声を奪つてしまっているのだから。

……夫人がリネード徒刑場に着いた時は、もう真夜中であつ

た。前から連絡があつて、今日パモールから一人「沈黙の館」入りの女囚があると知れていたので、看守部屋はまだ燈がついていた。獄舎の建物は二つに大きく仕切られていて、片方の六棟に男囚が、他の三棟に女囚が入っているが、「沈黙の館」はこの三棟の一つで狭口された女囚が十二、三人それぞれ独房につながれている、こゝの看守は年老いた主任看守を除くと、みんな女ばかりである。その夜は足鎖だけかけられて、看守部屋の隣に入れられて、翌朝、改めて主任看守の部屋に引出された。すでに、所長、主任看守らが犠牲の到来を待ち望んでいる。縛られた腕を左右から抱えられて、所長の前に立ったナタアリア夫人は、すべての眼が縄のかゝった胸のあたりに注がれているのをこゝでも感じるのだ、パモールの教会獄につながれて尋問をうけていた時も、尋問は独房の中で行われるのに、いつも少し前に看守がやって来て、夫人をきびしく縛った。やがて、司教、獄監の書記などが現ると、きまつて、彼らの眼はまぶきびしい縄目にかゝった囚われの女をいぎたなくなめまわすのであつた……。いま、主任看守は、所長にナタアリア夫人の処罰理由を述べ、次に夫人に下された教会の宣告文を読み上げ



る。簡単な尋問。それから、主任看守の差出す書類に、所長が必要事項を書き入れ、署名をすると、ナタアリア夫人は正式にリネード徒刑場の女囚である。看守に付き添われ、当てがわれた十六号の独房に引かれて、夫人は衣裳をはがれた。露わな身体を女看守の前に

晒して、きびしい身体検査をうけた後、汚れが目立ち、異様な臭気の獄衣を着せられた。胸と背に16の番号。後手に革手錠、胸と膝を太い皮枷で縛された椅子の上で、髪を短く断たれる、唇と頬が布で覆われ、幾重にも巻きしめられた。

巻きつけた布の具合を直す女看守の指先の慣らしさが、突然夫人の傲慢な心に激しい痛みを与えた。夫人は狂おしく椅子の上で身をもがき、頭を振って、看守の手から逃れようとした。自由を奪われた囚人の反抗は、むしろ処刑者の歓迎するところなのだ。何故なら牢獄の中で、一切は規律に従って行われるから処刑者は整然たる秩序の埒外に逸楽を求める。囚人の甲斐ない反抗はこれに正当に価いするのである。反抗する夫人の狂おしい怒りと、これを取りひしぐ女看守の冷静な嬉びは、実のところ同質のものなのだ。後から髪を引きむしられ、身体をのぞけらせて、夫人は叫んでいた。

——イネスちゃん、助けて！助けて！

前に立った看守の一人は、続けさま夫人の頬に平手打ちを加えながら、狂暴な喜びに耽った。遂に頬に巻かれた布が解けて首にずり落ちた。首枷がとりに行かれた。内側に鋭利な責め金をもつこの首枷は巧妙に夫人の咽喉をしめつけた。叫び声が止んだ。囚人の反抗は最も適確に処理されたのである。

改めて、布がまきつけられ、猿轡の鉄具が頬に当てがわれた。唇が、頬が、額が次々に鉄具で覆われ、締められ、更に強く締められていく。夫人は自分の顔がそれで次第に覆われ締められていく鉄の猿轡と同様、女看守の手に一つの物体として扱われているのを感じた。この美しい顔を覆うものは、柔かい高雅な絹のヴェールこそ、それに適わしいであろう。鉄の帯と棒できびしく固められた囚われの女の顔は、無知な看守らの眼をもそむけさせた。夫人は猿轡をはめられた当初の三日間、規則によって労役を免ぜられて、独房にあった。この間、夫人の両手はグローブに似た革の手袋におさめられ

短い鎖でつながれていた。夫人はこの皮手錠のとり去られることを願った。それがとり去られ自由になった手で、鉄の猿轡でつまれた顔に触れてみたかった。その時、目くらむばかりの羞恥は、或はそのまゝ夫人の心を石にするかもしれない。けれど、自分の悲惨な様を、極点において感知して、一切の羞恥と屈辱を一挙に逸楽の手にうばい去ることを、夫人の豪奢な心は願ったのではなかったか。世俗の倫理も、或は聖者の祈りもかゝる不敵な、すでに錯乱を帯びた謀反の前であって、その存在の意味を失わねばならぬ。

三日の間、かゝる不可思議な願いを充すため、夫人は不自由な手で囚衣の裾を払い、露わになった膝の上に顔を伏せた。鉄具でよろわれた顔を祈禱する名譽を、手に代って膝に与えようと云うのだ。手ならば悲惨な自分の顔になぐさめ語る何ものかを持ったであろう。しかし膝は語らない。語ったのはむしろ、祈られるはずの顔であった。膝の上に伏せられた夫人の顔はそこに異様な匂を嗅いだのである。この匂は以前の夫人なら、想像するだけでも、顔を赤らめねばならぬ種類のものではあった。

三日が過ぎた。夫人の手から皮手錠がとり去られた時、もとより自由を得た手は冷い感触をもった顔に狂おしく触れていたが、もう一方の手は、顔ではなく身体の他の部分に、自ずと導かれていくのだった。

今、夫人はつらい労役に服さねばならない。朝、食事の時間がくると、囚人たちは廊下に居並んでつき／＼と腰に鎖をかけられる。食堂に導かれ、食事の入った器を与えられ、粗末なテーブルに向う。看守が囚人の顔から猿轡を解いて廻り、食事が始まる。食事が終ると再び猿轡をかけられ、その日の当番にあたる者を除き、他の者は作業場へおもむかねばならない。この獄舎の中では、顔を覆う者はないが、一歩外へ出る時はさすがに皆、頭巾で顔をかくした。併作業に終るのは夕暮である。つらい仕事に手は赤くはれ上った。併

し、その手は独房の闇の中でひそかな役割をになっていた。片方の手がこの快樂に捧げられている時、常に別の手は冷たい鉄具の感触を顔の周りに求めた。

日曜は労役を免ぜられ、囚人は獄にあって一時の神の祈りを行わねばならない。看守はこの時、独房を廻って囚人の四肢を拘束する捕縄ではなく、皮の枷が使用される。石の床に端座した姿で、神に祈る囚人の膝と胸と後手に厚い皮枷がはめられる。枷はわざと、ゆるくはめられるので、自由に手を抜くことが出来た。この時、夫人の白い指は「罪」の型をとって踊ったであろう。

(三)

バレールの街に奇妙な商をひさぐ男があった。今で云う、ジャーナリズムの先駆で、街の一隅に小屋を掛け、センセーショナルな事件を割に巧みな絵筆で描き出し、これに適当な説明を付して、小銭をとって見せてやるのである。この男がナタアリア夫人の事件に目をつけたのは当然で、先ず、先日引廻しと晒しの図が大型の紙に五、六枚描かれて、人目に触れた。これが今までになく成功で一度に相当な金をもうけたこの男は、次々と夫人のいたましい事件を扱っていった。

夫人がリネードに送られてから、四日程して、今度は猿轡をかまされた夫人の姿が市民の目をひいた。この男は手先の器用な少年をリネードへやって、看守に小銭をつかませ、夫人を独房や食堂や作業場でとらえ、これにひどく誇張した筆を加えて、発表したものだった。ところが、またバレールに大事件が起って、この男の七面八びの活動に拍車を加えることになった。

——つまり、監獄官のブデルが自宅の寝室で白昼殺された事件である。門番や召使の証言で、犯人はナタアリア夫人の一人娘、イネスらしいと云うことになった。門番の話ではイネス嬢は母夫人が捕

われの車を教会獄につながれている間から、幾度も監獄官に面会していた。釈放の敷願を行っていたのであろう。夫人がリネードに送られてから、先日一度当日が二度目の面会であったと云う。ブデルが死体となって発見された一時間程前、これは召使の証言で、イネスとブデルは事務室で話し会っていたことが明らかになった。新しい客の取次で召使が事務室に入ると、二人の姿はなく、部屋は取り乱れ、ブデルの寝室に通ずるドアが明け放たれて、ブデルはベッドに仰向けに倒れていた。胸に小刀を立てられていたと云う。イネスは居らず、邸にも戻っていなかった。

イネスが捕われたのは二日後である。山づたいに逃れようとしたものが、嚴重な警戒網を感知して、絶望から自殺を計ったものらしい。発見された時、小さなナイフで咽喉をついて氣を失っていた。逮捕に向った男たちは傷ついて逃れようもないこの少女を野荒の猪かなんその様にきびしく縛り上げてきた。

イネスは獄の病室に入れられた。一週間程して、傷がいえたと、イネスは地下の独房に移された。病後の身体を車に仰向けに縛りつけられて、毎日訊問室に運ばれるのである。訊問の様子は何処から伝えられるのか、例のジャーナリストの手で広く町の人に知れわたっていた。絵は当のイネスとは似ても似つかぬ何となく淫らな感じのする少女が、暗い訊問室の大灯台の下で、多勢の役人に睨みつけられて、縛られた身体を震わせているのや、地下の独房で鎖につながれて、もだえていたりするやつで、それに前日「嗚呼！薄命の美少女の……」となっていたれば、今日は「稀代の毒婦、正義の鉄槌を蒙る」と打って変った大見出を付けて、誇大な文字が書き並べてあったりするのだ。そのうち、とうとうこの「薄命の美少女」が拷問室で無残に責め立てられている絵が張出されるようになる。その説明文は例えばこうである。

「あゝ、無惨、イネス嬢は口に猿轡、豊麗なその肉体にあますと

ころなく鉄鎖をまとい、拷問場の宙に高々と引上げられていくではないか！ やがて拷問吏の手が鎖にふれると見るや、その肉体は十フィートの高さより、唸を生じて、落下するのである。かゝる時、その激痛は如何ばかりぞ！ V

この記事は、勿論、誇張されているが、イネスが拷問にかゝったのは事実である。その理由はイネスが頑として自分を拒んだからだとも、或はとうに自白してしまったものを、みだらな興味から拷問したのだとも伝えられている。

拷問場は地下室にあって、重罪人の独房とは看守の部屋でへだてられている。上の訊問室には囚人の出入口とは別の、いつもは鉄扉で閉ざされている通路があつて、それを出るとゆるやかな傾斜で序々に地下の拷問場に行けるようになっていた。拷問室の真向いは、屍体の収容場になつてゐる小部屋がある。明け放たれた鉄のドアの内部は、切り開かれた人体にそのままの無残な様相を呈している。張りめぐらした鉄棒の上に、干魚の様に折れ伏してぶら下がっている男女の屍体が三つ。鎖で天井から吊された女の屍体は首枷のかけた咽喉のあたりの皮が肉ごとむしれて、白い骨が透いて見えた。壁に立て掛けた鉄板を背にした囚人の屍体は、頭から足の先まで見事に皮膚をはがれ、端然と赤く染った足を組んで、両手を垂れている。その臉も眉もつけていない屍体の眼は殆んど無邪気に大きく見ひらかれ、通路を歩く人を眺めているのだ。足下には、はがれたこの囚人の皮膚が無雑作に脱ぎ捨てられた派手な道化衣裳のようにならずくまっていた。

拷問場では先程からイネスに加えられる拷問が準備されていた。それより前、イネスはある囚人の拷問を目の前に見せつけられた。囚人は中年の男で、イネスが運ばれて来た時、搾木にかけられていた。平な責台の上に半裸で寝られていたその男は、最初、足首に、

次に膝と腹に搾木を当てられ、口から白い泡をふいてもだえていた。男の手は左右に拡げられ鎖でつながれている。最初、その顔が帯びていた苦痛の表情は、次第にこわばつて、それがやがて祈るような、或はむしろ夢見るような表情に変わった時、一時、搾木が身体からはずされた。手首の鎖がとかれ、氣付の酸をひたした布で口と鼻を覆われる。やがて、囚人は薄く眼をひらいて、周囲の顔を見廻した。イネスは囚人の足許に獄吏に肩を押えられ、責苦を直視することを強いられて立っていた。ふと囚人の弱々しい眼差がイネスの方にむいた。それは人間の視線とは思えなかった。動物の悲しい眼である。それはイネスの肩から、縄をかけられた胸のあたりに下りそこで止った。イネスは囚人の眼がすこしのなぐさめの、或は悲しみに耐える力をおびたもののようと思った。囚人は頭をわずか持ち上ると、血のにじんだ両手を組合せ、イネスを拝むような仕草をした。

失笑が拷問吏たちの口から洩れた。

——この野郎、色気を起していやがる。さてと、もうひと責めいくか。

木が再び囚人の身体につけられたところで、イネスは縄をひかれて、歩かねばならなかった。イネスは索かれながら振りかへつた。囚人は足に腹に胸に刑具をかけられながら、未だ、自由な片方の手でイネスに十字を切った。

イネスは高い椅子にだき上げられた。

——おい、嬢ちゃんのおつむをそっておくれよ。

と拷問吏は暗い片隅に声をかけた。積み上げられた拷問具のかけから、太った女が姿を現わす。これは拷問で氣を失った囚人に氣付薬を与えたり介抱したりする役目の女であるが、ちよつとした拷問なら進んで引き受け、囚人の苦しむ姿を眼を細くして眺める様な人間であつた。

——おや、おや、この嬢ちゃんにリボンをまくのはちよつと、むごい気がするがね。

女はこう云って、イネスに近づくと、額に沿って頭のまわりをぐるりと五センチ程の中に手早く髪をそり落した。

イネスは泣いた。イネスが泣くと、女も泣く真似をした。

拷問吏は、イネスの縄目を改めて締め直した。女にイネスの頭を押えさせると、額から後頭部まで髪をそがれた部分に細長いハガネのベルトを巻きつけた。ベルトには両側のコメカミとうなじに当る部分に三つのネジが付いていて、イネスの頭蓋骨をしめつける。女は椅子を運んで来て、イネスの傍に坐って盛んに冗談をとぼす。拷問吏は殆んど相手にしないので、今度はイネスに話しかけて来る。先程の囚人の拷問でおびえ切っていたイネスは彼女の掛けられている拷問が殆んど苦痛を感じないので、私は一体拷問にかけられているのかしらと疑つと見る程だった。女の冗談をきく余裕さえ出来てきた。それをききながら、イネスはこの人はいい人なのだと思う。病監に居た時、看ってくれた尼さんのようないい人なのだと思う。彼女は無邪気に女に微笑さえた。

しかし、その中すこしづつ頭がづき／＼してきた。

——拷問なのだもの、矢張り、この位に苦しいものではないだろうか。我慢出来る、我慢しなくちやあいけないわ。

とイネスは思う。が、痛みは次第に増してくる。俯向くと余計頭が／＼するのでじつと真直ぐ前を見ていなくてはならない。女は相変らず冗談を云っているが、もうイネスは笑うことが出来なかった。女は時々リボンのネジを締めた。

冷い汗が背筋を流れ始めた。イネスは頭蓋骨がすこしふくれてきたのではないかと思った。三つのネジの個所が特に激しく痛み始めた。イネスには、それがもうネジではなく、頭に打ち込まれた、三本の鉄棒のように思えてきた。ネジがまた締められる。顔が血を吹

き出すばかりに紅潮して来た。女は細い鉄棒で軽くリボンを打った。イネスの口から悲鳴がもれた。棒の先が髪に触れるだけで、頭の中を激痛が走った。女は調子をつけて棒でリボンを打ち始める。

——白状しないか、お嬢さん！

白状せ！ お嬢さん——

眼の先が次第にかすんでくる。暗くなり、さらに暗くなって眼がみえなくなってくる。頭がだんだん大きくなってくる。倍にも三倍にも大きくなって、いまに頭蓋骨にヒビが入るのだ。とイネスは思った。

——重い、重い、頭が重くなる。

頭だけが重くなって、身体が急に軽くなって来た。

イネスは二、三度頭をぐらぐら左右にゆすると、意識を失って、椅子からころげ落ちた。

………

気が付いた時、イネスは独房のベッドに寝られていた。リボンははずされ、額を濡れた布で冷されている。多勢の人がいる。訊問官がイネスの顔をのぞき込んだ。

——どうだね、正直に云うかね。それとも、もう一度、リボンを巻くか。

イネスは黙っている。この男の顔に見覚がある。暗い法廷でじろじろイネスの縛られた身体をいやらしい眼でなめ廻した男。そしてイネスの亡くなった父が未だ元気だった頃、（——十年近くも前のこと——）監獄の書記補の椅子を狙って、イネスの父の許に日参したのもこの顔だ。

イネスは口と鼻に酸をひたした布をおし当てられた。頭の痛みが激しくなる。イネスは夢中で布をとって投げすてた。両手がベッドの柱につながれ、布は今度は猿轡のようにしっかり巻きつけられた。酸を嗅され、意識が判然とすると、それだけ痛みも勝るのだ。

イネスの眼は血走った。落ちつきなく、彼女の拷問者たちの顔を一つ一つ見廻す。老練の訊問者たちは少女の心の動揺を適確に感知した。もう一押しすればこの硬い心はくだけるだろう。

新しい拷問が直ぐ準備された。胸をおしひかれ、乳枷がかけられる。拷問者の操作に従って乳房は様々の型に締め上げられ、ねじ伏せられる。咽喉輪がかけられ、リボンが再びつけられる。三四人の拷問者が手に手に得物をひっさげて一度に少女を襲ったのだ。少女は執拗に耐えている。焦燥と狂暴な怒りを感じた訊問官は自らイネスの口と鼻を覆っている布に手をあて、呼吸を圧迫した。

苦痛の最中に、イネスはパッチリ眼をあけた。狂ったような訊問官の顔が間近にあった。それをイネスは醜いと思った。大きく見開かれた訊問官の眸にイネス自身の苦しみ、もたえる顔が小さく映っている。彼女はそれおも、つまり自己の顔をも醜いと思った。責める者の醜悪さは、責められる者に無縁ではない筈だ。このまま責められ、例えそれに耐えたとしても、私の顔からこの醜さは消えることにはあるまい。悲しみが突然イネスの小さな心に溢れた。私が醜悪であることは決して許されてはならない。私は美しくなければならぬのだから。苦しみを受けるなら、美しい人の手で、苦しみを与えられてこそ、耐える力は湧きはしないか。この苦しみは耐えるに値しない。

この苦しみは耐えるに値しない。

イネスは遂に屈した。或は敗北することにより全き勝利者となつたと云うべきか。何故なら、イネスが膝づいたのは拷問者の前ではなく、己れの美神の前にであるから。

(四)

イネスがこの様な運命にあったことを「沈黙の館」の夫人は知らなかった。苦しい労役に服し時に狂わんばかり、現在の生活を呪い

ながら。

或る日曜、午後の一時間は、例の通り祈りと反省の時間に当てられた。看守はナタアリヤ夫人の猿轡を検し、皮枷を膝、胸、後手の手首に施して独房を出た。ややしばらく夫人は敬虔な姿を持っていた。つまり、頭を垂れ沈思黙想の風情である。静かなる時が流れた。どこの独房でも、祈りの或は、ひそかな快樂の一時である。ナタアリヤ夫人は後手の手首を枷から抜いた。胸と腕をしめつけている広い皮枷を少し上にずらして、自由になった手で囚衣の裾をひらいた。その時、夫人は背後に荒々しく鉄扉を排する音を聴いた。夫人は仰向けに引倒された。膝を縛られているので、その恰好は哀れと云うより滑稽に見えたであろう。次に夫人は頭に胸に脚に女看守の木靴の乱舞を感じた。始め激しい痛みを覚えたが、直きに感覚が鈍くなった。失神の直前で木靴の乱舞は止んだ。三本の皮枷を骨に喰い入る程締め直され、その上を、更にきびしく捕縄を打たれた。看守は一度引返すと、今度は三人で現われ、夫人はそのまま地下の懲戒室へ運ばれた。捕縄は夕方解かれたが、代りに猿轡の上を頭からすっぽり皮の頭巾をかぶされ、咽喉できつく締め上げられた。鼻の辺りに小さい穴が二つあいているきりで、呼吸もかなり困難であった。その日は、一、二度、枷がゆるめられ頭巾をとられたが、それもほんの五、六分の間だけで直ぐまた、緊縛され、頭巾をかけられるのだった。

翌朝、夫人は皮頭巾をかぶされたまま主任看守の前に引出された。

——囚人十六号の罰をお決め下さい。

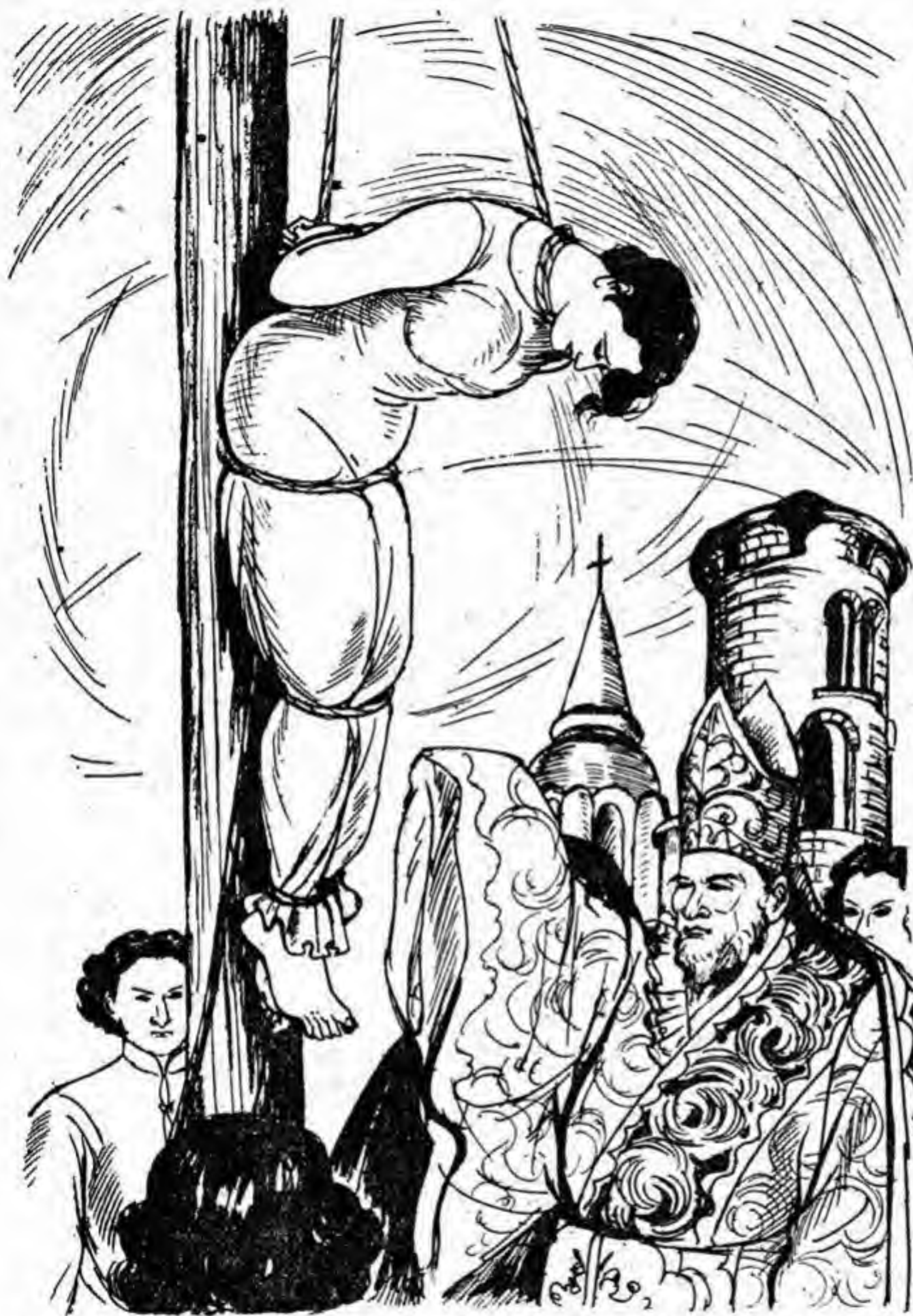
看守の勢込んだ言葉、それを受けて、主任の声が、

——理由を述べなさい。

看守は昨日の大体の事情を誇張して述べ立てた。ナタアリヤ夫人の平常の傲慢な態度についても言及した。

——よろしい、戒衣を着せて、緊縛台にかけなさい。時間は三時間。その後は、所長と相談して、処罰する。

夫人に申し開きが出来るはずはなかった。処罰は迅速に行われた。懲戒室に戻されると、夫人は皮枷をとかれ、囚衣をはがれた。両手を思い切り背にねじ上げ捕縄でなく、布縄を用いて、指先から



肩のつけ根までぐる／＼巻き立てられていく。次に床に広げた搾衣の上に引き倒され、それを付着した責紐をかけられる。肩から脇へ交錯して二本、胸は乳房の上下を二本、腹部に一本、次に肩から縦に股にかけ、背に引上げて咽喉で結ぶ責紐が二本。太もも、膝、足首へそれぞれ一本づつ、計十本の責紐をかけられる。その上を、帆布のようなごわごわした布を全

身に巻きつけられて、首筋から足先までが布がゆるまない様にと紐がかけられる。最後に皮帯で要所々々しめ上げられ、夫人は荷物の様にころがされた。緊縛台が運び込まれ、ナタアリヤ夫人はその上に俯伏に寝かされる。皮袋をかぶされた顔は横にねじること許されず、緊縛台のくり抜いた穴の中に、顔半分程はめ込まれる。夫人の身体を台上に固定するため、半円にきり抜かれた圧迫板が頭、頸、背、細腰、膝の各部に当てがわれ固定される。搾衣でつまれた足首にロープが巻きつけられ頭の方へ力一パイ引きしめられると、足は膝のところまで折れ曲る。これで受刑者は寸分の身動きも出来ないのだ。仰向けならまだ苦痛をしのぐことも出来るかも知れぬが、俯伏せにされた

のでは、乳房も胸も腹も絶え間なく圧迫され、たえ難い苦痛であった。

——聞えるかい？え、気は確かだろうね。責めはいま始まったばかりじゃないか、苦しいのは一、二時間後の話だよ。

女看守らは大仕事を終えた後の興奮で、乱暴に振舞った。頭や、脇腹を木靴で蹴とばしている中ではよかったが、その中、一人が責苦にかけられている夫人の腰の上にのっかった。乱暴に脚を組合わせたり、腰の位置を変えたり、絶え間なく身体の上で運動している看守の重みを夫人は必死に耐えている。

(五)

イネスに対しては極刑が宣告された。刑の執行日は秘められていたが、宣告を下された翌日、教会の獄に送られたことから、案外早く刑を執行されるのではないかと考えられた。死刑囚は普通、刑の執行が近づく、教会獄に送られ、苦業の日々を過すことになっていったからである。この少し前、義父母を殺害した孤児の姉弟がやはり兩名とも死刑を宣告されていたが、二人はイネスと同時に教会獄へ送られた。

教会獄では現に取調べをうけている未決の囚人は獄につながれたままだが、有罪と決った者には、朝夕の祈禱が課されていた。祈禱の鐘が鳴ると一般の囚人は獄から出されて、祈りの場へ集まる。中で重罪の者は足枷をされたままである。一般の囚人が集まった後、死刑囚が独房から引出される。死刑囚は鎖を後手につけられ、足枷の上、顔を黒布でつままれて一般の囚人から区別される。席も祭壇のすぐ前に、柵で囲まれて他の囚人とへだてられる。祈りがすむと囚人たちは作業場へ向うが死刑囚は特別定められた苦業に服さなければならぬ。苦業の場合は祈禱室の隣に設けられている。準備室でイネスは鎖をとかれた。刑衣がはがれ苦業衣が着せられる。これは

白い長衣で、首から一枚の布を足先まで垂らして背中と同じ紐をかけるだけの簡単なもので両手は細長い袖に入れられ、背中で、袖の先についている紐で結ばれる。実際、苦業に服する時はこの上に再び黒皮の拘束具をかけられる。これは、黒い皮でできており、次のラテン文字が赤で描かれている。

「地獄に堕ちんとせし者、苦業に依りて神の御手に救れんことを」
死刑囚には一人づつの苦業僧が選ばれ、その監督の下に苦業を受けるのである。イネスには三十過ぎの小柄な尼僧が監督僧に選ばれた。イネスは看守に導かれて、苦業室に入った。看守は扉のところまでで、それ以上先に入れないことになっているので、イネス独りが両手を後にくぐられ、苦業衣の長い裾に足をとられながら、辛うじて、祭壇の前に進み出た。祭壇の両側に監督の尼僧と助手が立って待って居る。助手の尼僧が黒い拘束具を手にして、イネスに近づいた。拘束具は全体が皮製である。首に当る部分は丸くくり抜かれてあるが、その周囲は立ち襟のようになっていて、首枷の代りになった。拘束具は上半身と下半身に分れていて、下半身は膝までである。胸の皮具は両腕をも包んで、上半身全体がすっぽり一箇の筒に入れられることになる。

肩からの皮紐が背中中で交錯して締められる。下半身は腰から先がずっと細くつぼまって、膝の上で太い皮枷が締められる。上半身下半身共に皮具の合せ目は細い紐でとちられる。イネスは貝殻虫のように甲羅の中にとじ込められた。

しばしの間、イネスを仲に挟んで三人は祭壇にぬかづいた。「地獄に堕ちんとせし者、苦業に依りて神の御手に救われんことを」

その日は苦業室の内部を三十回程、イネスは歩かされた。拘束具は膝まで達しているの、赤ん坊の歩巾ほどこしか歩けない。二人の尼僧はたえずイネスの左右に付き添って、はげました。よろけて床

に倒れると手をかして起してくれるが、疲労してよろめいても、はげますだけで、身体を支えてくれるとか、歩調をゆるめてくれるとかすることは決して無かった。

苦業が終って、拘束具をはずされた時、イネスは立つことが出来なかった。

二日目は拘束具のまま祭壇の前に三時間、直立させられた。三日目は緊縛台にかけられ四日目は拘束具をつけられた身体を一時間、不自然な姿勢に鎖で維持される苦業をうけた。肉体の疲労は目立つたが、イネスの心の光はなかった。

この様な苦業を経て、イネスはいよいよ最終看視の身になった。これは処刑が一週間以内に迫った死刑囚に適用されるもので、監獄留置の最終段階である。朝夕の祈禱は禁止され、苦業は独房の内部で行われる。朝から搾衣を着せられて、イネスは終日身動も出来ずベッドに寝たきりである。食事から一切の雑用は監督の尼僧がひきうけた。若い死刑囚の美しい顔に憂いの影がさすと、尼僧はやさしくベッドに抱き起してやるのだ。そうされるだけでイネスの顔は光をとり戻した。如何に美しく生を終えるか、この問題がイネスの胸にうずいていた。尼僧がこれに精神的な支えを提供した。

この様な或る日、看守が尼僧に大きな十字架を手渡していった。イネスはいよいよ明日処刑と覚った。前日、十字架によって明日に迫った処刑を覚悟させるのだと云うことをイネスは知っていた。十字架はイネスのベッドの枕もとに置かれた。

(六)

イネスの死刑執行当日、リネードのナタアリア夫人はどうであつたろうか。娘の不幸をナタアリア夫人が知らなかったと、前に書いた。事実、知らなかったのだが、この一週間ほど、夫人は奇妙な焦燥にかられていた。何か不幸がまた起りそうな気がして充分安眠も

出来ないでいた。釈放が近づくことのような囚人でもこれに似た焦燥を覚えるであろうと夫人は自らなぐさめていた。イネスの処刑の当日は夫人の釈放の前日に当たっていた。夫人をとらえていた不安と焦燥は意味のないことではなかったのだ。

刑場は高さ一米程の石垣で四囲をかこまれたシエル河畔であつた。観衆の数は幾千を数えられた。受刑者は共に若い三人、イネスと義父母殺しの孤児姉弟である。受刑者を獄舎から運んで来た護送車はいま刑場に引入れられた。刑吏らがバラバラと車にかけよって受刑者を車から下す。純白の処刑衣を着せられた三人はこの残酷な祭典の犠牲に選ばれた羊であつた。刑場の中央に大きな絞首台が立っている。その石段の下に、死刑執行官、僧侶、絞首吏が居並んでいる。

先ず弟のジュリアン青年が処刑される。姉のマリアーナとイネスは処刑の様が見えない様、絞首台を背にして、柱に縛されている。絞首台の柱に黒旗がする／＼登っていく。やがて、僧侶の鳴らす鐘が三つ打ち終えた時、ジュリアン青年の肉体は、絞首台の柱の間を大きな振り子のようにゆれていた。次にマリアーナが索かれて、処刑された。三つの鐘が打ち終るのを柱に縛られて、イネスは祈るような気持できいていた。

四人の刑吏がイネスの傍に立った。イネスはほほえんだ。左右から腕をとられて、絞首台の下に引かれていく。処刑執行官の前にひざまづかせられ、最後の判決を読み上げられる。判決が終ると、いよいよ絞首台へ導かれるのである。イネスが前を通ると、僧侶が声高らかに祝福を与えた。石段の下で絞殺吏の助手が近づいて白布でイネスの両眼に目かくしを施す。イネスの身柄はこゝで絞殺吏の手引に引渡され、一段／＼死へ歩み寄るのである。定め的位置にイネスは悪びれず立った。足首と膝頭を一本の縄で縛られる、その縄尻は

小手縄に結ばれる。二本の太綱が一本はイネスの腰に、他の一方は輪にしてイネスの首にそれぞれ結ばれる。執行官の手が高々とかがげられ、絞殺吏の手にある二本の太綱が徐々にイネスの身体を中空に吊り上げて行く。イネスは滑車のすぐそばまで吊り上げられた。

イネスの身体を吊り上げているのは腰縄としてかけられた太綱である。首縄はすこしゆる目に柱の腕木にゆわえつけられた。吊縄はイネスの身重でぎしぎしきしんだ。目かくしで大きく覆われたイネスの顔は静かな諦めに似たものをたゞえている。すでに黒旗は殆んどボールの先端に達した。執行官の右手が拳げられ、静かに力なく下された。絞殺吏の小刀がイネスを吊り上げていた太綱を断った。イネスの身体が二米程落下すると、今までたんでいた首縄が恐ろしい勢ではりつめて、イネスの首筋に喰い込んだ。イネスの身体はコマのように廻っている。

処刑は終わった。若い死刑囚たちの刑死体はそのまゝ二日晒された後、河原で焼却されることになった。

○
ナタアリヤ夫人が釈放されたのは翌日である。夫人の馬車は夕刻この刑場の傍を通った。赫々と焼けた空の下に三箇の刑死体が風にゆれている。二体は女であることが判った。夫人の心はいったんだ、自分が六十日の処刑を終えた身であって見れば、監禁とか、手錠とか、拷問とか、死刑とかが何を意味するものか、あまりにも判然と

六月号に「コルセットの魔力」と題した告白文を載せて頂いた林です。

あの告白文を投稿しましたのは昨年でしたが、あれからもう一年近くなりました。その後新しいコルセットを使った色々なことをしてきました。その中から少し発表してみたいと

わかったのだ。夫人は処刑された人にせめても野花でも供えたいと思った。馬車を止めさせ、途々草花を採んで絞首台へ近づいた婦人はふと傍の高札に眼をとめた。

——イネス・ペルラン(十九才)

殺人罪を犯せし女

此処に絞首さる

○
ナタアリヤ夫人の姿は遂に馬車に戻らなかった。そして、その翌日——

二日前、絞罪に処せられた三個の死体が河原に積んだ薪の上で焼かれていた。

刑吏の一人が残り火を消すために水を汲みに行つて、河原の小石の間に白いものを見つけた。それは一枚のハンカチーフであつたがその縁にナタアリヤ夫人の家紋である百合と蜜蜂の縫取りが認められた。手分けして探すと二十米ほど河上の芦の密生したところに、女の服の裾が流れに浮んでいた。死体が引上げられた。濡れた髪をかきわけて、死体の顔をのぞいた時、居並んだ者は慄然とした。まぎれもない美しいナタアリヤ夫人の顔であつたが、その額から頬、そして唇の廻りには、六十日の狼狽の跡が鉄錆の色にくっきりと浮んでいたのである。

(完)

○
思いますので、又告白文をお送り致しますた。

を参考にして作ったもので、殆ど前と同じ構造になっています。

あれ以来、叔母と私は益々コルセットに凝り、このところ夢中でございます。今、私が叔母にはめられておりますコルセットは、洋画に出てくる十九世紀頃のコルセットや文献

丈の長さは、バストからヒップまであります。前はジッパーになっており、後は紐がかけられてあつて、その紐をひくと締る様になっています。特長はなんといっても縦に前後左

右約二十本も入っているボーンでしょう。紐を締めて結んだらもう絶対に伸びません。二十本のボーンといいますが、殆どすぎ間がない位入っているのです。それに、これは皮製なので、これできっちり締めると食後など必ず全部もどしてしまいます。又、空腹の時でも胃が強く圧迫されている為に唾液が飲みこんでも胃の中におさまらず、又口にもどりどんなに固く口を閉じていても唇の間から洩れ、コルセットをゆるめるまで飲みこめずに口からもれつづけるので、何時もコルセットをびっしりと濡らしています。そして叔母はコルセットを絶対に洗濯させませんから、半年も使用しますと、どのコルセットも唾液やその他の分泌物で色がつき、とても魅力的な香がついて、その香りの濃くなってゆくのが又とても楽しみなのです。さて、少し前置が長くなりましたが、これから叔母と二人で行っている「コルセット・マンボ」(叔母はこう名付けています)について述べます。叔母はこれが大そう気に入って今では毎晩の様にこれを私に踊らせませす。それはこうなので

コルセット・マンボ

林 靖 彦

今書きましたコルセットをまず私につけさせますと、室の天井近くに柱から柱にカーテン用の金属製の棒が渡してありますが、その棒の上を通して丈夫な細紐を一本渡し、紐の端を私のコルセットの背中の紐にしつかりと結びつけ、もう一方の端を叔母が握っています。そうして、その紐を私の足がやっと床につく程度に引っ張ります。私は殆どハイヒールで爪先立ちとなり、そのままではどうしてもひっくりかえってしまうのでいやでも両足をバタバタさせ、足を床に着けさせようとしなければなりません。けれどもその紐のひっぱる程度が少しの場合の時はいいのですが、叔母はだんだんにそのひっぱり方を強くしてゆくの、いい加減なことではコルセットに紐を吊られたまま宙ブラリンになってしまうので、そうなると思うと苦しくなりません。両足ばかりか腰や体全体をマンボでも踊る様に夢中

で動かさなければなりません。足をあげ腰を振って踊るのがちやうどマンボみたいだというので叔母はこれにコルセット・マンボという名をつけたのでしよう。

そして、そう体を振っているうちに、胴にハメられたコルセットはグングン締まってゆき大体三十分もたつ頃にはウエストが思いきり締まって体を動かすと肉がキツチリ締めつけられているので、ギユウギユウという音がする程です。その時はもう先に書いた様に口からは唾液が洩れ、糸を引いて垂れてゆきます。でもその位ではまだ叔母はマンボを止めさせてはくれません。細くよく攪うムチで私のヒップを叩きます。その度に痛さの為に私は足をかわるがわる高くはね上げてしまうのです。そして又、その上げ方が足りないといふ尚一層叩かれます。

ネット・ストッキングをつけた足は、さながらボニーの如くハネ上げ、叔母の気のすむまでマンボを踊らされるのです。最初のうちは、それがとても苦痛でしたが、現在ではもう何ともいぬ快感に唯もう恍惚となってしまう程です。それを写真にとったらどんなに楽しみかと思えますが、残念乍ら二人だけですからそれは出来ません。今も昨夜使用した皮のコルセットを膝の上に置いていますが、つくづくと幸福に思っています。それでは又発表することに致しましょう。

(随 筆)

スカートへの魅力

東 一 郎



私は女性の服装では、取分けスカートに魅力を感じます。それもタイトよりフレヤースカートに。最近では流行の故でしょうが、タイトが多くフレヤースカートを着用されている方が少いので残念に思います。女性美は、裸体よりも、服装に、それもスカートの着こなし方一つで表われて来るのではないのでしょうか。

× × ×
 中学三年の頃、私も御多分に洩れず性への目覚めと共に、スカートにも興味を持ち初め

る様になりました。特にひだの多い女学生のセーラ服に魅力を感じる様になったのも当然でしょう。

此の頃、私はとあるバスの車掌さんにほのかな純な愛情を持ち初め、そのバスに乗るためには、わざ／＼遠廻りして帰ったものでした。目がパツチリと大きく、可愛らしい車掌さんでした。その頃の車掌さんのスカートは今日とは全然異なり、一種のロングスカートでした。

或る日の事、ステップに立っていたその車掌さんのスカートが風でパァーッとひるがえり、スリッパまで拡がって思わずハッとしたことがあります。が、私にとってはそれは何と美しい光景だったことでしょう。未だに深く脳裡に刻まれておる位に印象に残ったものでした。

又、私が電車内で雑誌を読み乍ら座っていたことがあります。もちろんその頃は今日とは違ってガラ／＼に空いておりました。或る駅で二人連れの女学生が私の隣りに座りました。その時隣りに座った女学生のスカートの裾が、私の右膝のズボンにふわりとかかったのです。その女学生は気付かずお友達と話しかけていましたが、私の方は胸がドキドキと高鳴り初め、気付かれはしないかとヒヤヒヤしたことがありました。

が、此れもフレヤースカートなればこそでありましょう。

よく道で、びったりとしたタイトスカートで歩いている女性を見受けると、むしろ気の毒だなあとの感じの方が強く出て来ます。何ともゴコチなく歩きにくそうな姿に笑い出しなくなる時さえあります。

女学生のスカートにも、ひだの多いのと、少いものとの二種類がありますが、少い方は少い方でやはり魅力的です。戦前もしばしば見受けられました。

よくホームで、スカートを座席一杯と迄に行かなくても拡げて待っている女の方を見受けますが、その容姿も美しいものです。

大体フレヤースカートは可愛らしくてあいきょうのある顔立ちの方が似合います。そしてツンとすましたタイプの方は大体タイトスカートの様です。

昔と異って今は女の方でもしとやかに歩く方は少く、男並みに、ザクッザクッと足音も高く堂々と歩いていますし。逆に男の人は何ともしとやかに女性的に歩いているのを見掛けます。

もちろん此れもフレヤースカートなればこそ歩けるのであってタイトスカートだったらひっくり返えるのがおちであります。

座り方もタイトよりフレヤースカートの方が上品です。ピッタリと膝をくっつけて座るのは当り前ですけれども、股を開いてもフレヤードですと、あぶなげ無いし、又その方が多い様です。スカートをずらして下げてその両膝の上に荷物をおいている方もおります。

大体女の人は露出的ですが、此れは本能的にそうであるにしても、だからと云って極端過ぎては困りものです。

私はタイトスカートからは何等の美しさを見出せません。やはりフレヤースカートに美しき、女らしさを感じますし、女の方も男の人を魅力化せんとするには先ずフレヤースカートを着用することが第一です。

スカートの色合いについては夫々好みはありましようが、此ればかりは着用した本人の好みが変わればそれで好いのですし、年令に応じた感じを出すのが一番です。

私は、紺、黄色、又は水色等が夫々好きです。真赤はどうもいただけません。

女学生は女学生特有のセーラ服がやはり一番びったりしている様です。学校から帰って着るには、小ざっぱりしたものの方が好いでしよう。似合わないのを流行だからといって無理して着るのはどうでしょう。全く落下傘スタ

イル等のもつての他です。

スカートの長さも、一応考えるべき問題です。余りにも短か過ぎるのはどうかと思われまます。フレヤードなら未だしも、タイトスカートは止めるのが当然でしょう。

案外に女の人は無神経だと感ずるのは、バス等で降りる時です。此ればかりはタイトは好いですが、フレヤードですと、スカートの裾がステップにかかり、汚れる率が多いので、此の様な時には、やはり心持ちスカートを持上げて降りるべきでしょう。

スポーツ選手、殊にピンポン、テニス等の選手は短いスカートを着用して効果的ですが一般的にはどうでしょう。やはりある程度の規準は守るべきです。長過ぎても、短過ぎてもいけませんね。

ストッキングも此れは是非共穿いて欲しいもの。可愛らしい女学生だな——と思つて下を見ると、何と毛深い脚なのでギョッとすることがあります。

何と云つても私は女学生のスカートに一番魅力を感じます。それは処女としての清涼な美しさがあるからです。女の方自身も女学生時代が一番なつかしいそうだし、結婚した方の、何となく色っぽいものを感じさせる着方とは異った好きがあります。

よく街頭のスナップ写真を見ますと、その瞬間のスカーットの動きで美しさが異って来る様です。それが健康的な美しさとしての表れ方なのです。

大体、女の方は真直ぐに向いて堂々と歩くよりは、少しくつむき加減にしとやかに歩いた方がスカーットの動きと相まって好ましい様です。写真と比較されるのが絵ですが、スカーットの描き方は簡単な様でいて相当むづかしいと見えて、実感が出ているのは余り多くはありません。

女学生物を扱って上手いのは、戦前では伊藤幾久造氏、伊勢良夫氏、戦後では、伊勢田邦彦氏、「奇譚クラブ」の畔亭数久氏でしょう。

伊藤幾久造氏の描き方は子供の頃私は好きで好きでたまりませんでした。特にスカーットの描き方はきめ細かい方でもありました。

少女雑誌で何かのスパイ小説に挿絵で描かれておりましたが、女学生が友人の家で話している絵が印象的で、椅子に座って、股を拡げているのですが、フレヤースカーットのため、両膝にかかって何か物うげな可憐な少女の顔と共に好ましい挿絵でした。

「奇譚クラブ」の畔亭氏の女学生物は氏独自の書き方ですが、特にスカーットの描き方は実に詳細で、数多いひだも一つ／＼丁寧に描かれたのがあり、感服したことがあります。

スカーットの魅力は結局、着こなし方にもよりますが、大体男性側から云えば、魅力を引きくのは本能的なものかも知れません。

スカーットの定義を応用する迄も無く、ズボンとは根本的に異った女性独得のもので、此れが我が国に輸入された時は、大分論議された様でもあります。結局はそれを用いる様になったのですから、やはり女性にとって便

利なものであったのでしよう。

女性のズボンからは何等の魅力を感じないのと同じに、男のスカーットは全く妙なものです。

此の頃では此れが逆になって来つつありますが、女性はやはり女性本来のスカーットへかえるべきでしょう。

例のマンボスタイルも些かどうかと思えます。常識を疑い度くもなります。

私はスカーットそのものには余りくわしくは知りませんが、私自身としてのスカーットに対する印象を述べて来たに過ぎませんが、流行に追われて、フレヤースカーットがタイトに比して少くなつて来た現状が非常に残念でありますのでペンをとった次第なのです。

(三一、九、二十三)

母より幸一への手紙

「幸一さん

あなたが私の傍を離れてから一日も貴方の事を思わない日とてありません。

心ばかりあせつても身体が思う様にならず唯早く三年の月日が経って、貴方が又帰って来る迄、お母さんはどんなに病気が重くなつても死なないで待つて居ます。

「少年期(母と子の手紙)」

山口 幸一

私の病気を救う為、僅か十五の年端も行かない子を他人の中へ離す事は死んでも出来なかったのですが、とうとう貴方の親孝行に負けてしまいました。あのサーカスの親方さんから戴いたお金で借金も全部払いましたし、お母さんは只静かに貴方の帰って来る日が一日も早い事を祈って居ります。

他人から聞きますと、サーカスとは恐い所だそうで、そんな恐い所へ幸一のような優しい子供を出してしまった事を今では後悔して居ますが、お金は皆使ってしまった、貴方を助ける事は出来ません。

どうか命さえあればあとは何でも取り返しが付くのですから、親方さんの云う通りにどんな嫌な事でも素直にきいて、朋輩から虐待されない様にして、三年の間だけ毎日毎日の仕事で貴方の天命だと考えて何事も仕事一途に進んで下さい。

これが母の幸一さんに対する願です。それでは病気をしない様に気を付けて、さよなら。

幸一様

母より

幸一より母への手紙

『お母様』

幸一は此処へきてもう一月になります。一日だってお母様の事を思わない日はありませんでした。どんなに辛い事があっても幸一は

お母様の為だと思って耐えますから、少しも心配なさらずに、三年後には元気に幸一を迎えて下さる様充分養生して下さい。

それでも時には本当に「お母さん」と叫びたい様な時もありましたが、じっと耐えました。

今後もどんな事をされても耐えます。泣き出す様な事もあるかもしれませんが、泣けば却って帰る日が遅れますから、何事も親方さんにお委せして、その命令通りに素直に思い切ってやって見るつもりです。

初め此処に連れて来られる時、曲馬団だと思っていました。此処は曲馬団ではなく、サーカスと云っても少年相撲団でした。

女相撲というのがありますが、女の代りに少年達ばかりの相撲団です。

此処に居る子は年の頃は十三四才から十六七迄が止りで、何れも女の子の様に美貌の身体付きもしなやかな少年ばかりが十五六人は居ります。

美少年相撲は強いのが目的でなく、少年の輝美をお客様に見せる事が眼目ですから、容姿の端麗が一番大事です。あどけない容貌と少年らしいほっそりした身体付きでなければなりません。

あまり肥ったり、又筋肉質になって少年らしくない体格になりますと、相撲団から除外されます。少年美の盛りはせいぜい十六七迄

ですから、食事や平素の挙動などにも気をつけて美しい肢体を出来るだけ永く保つ様に各自も心掛けねばなりません。

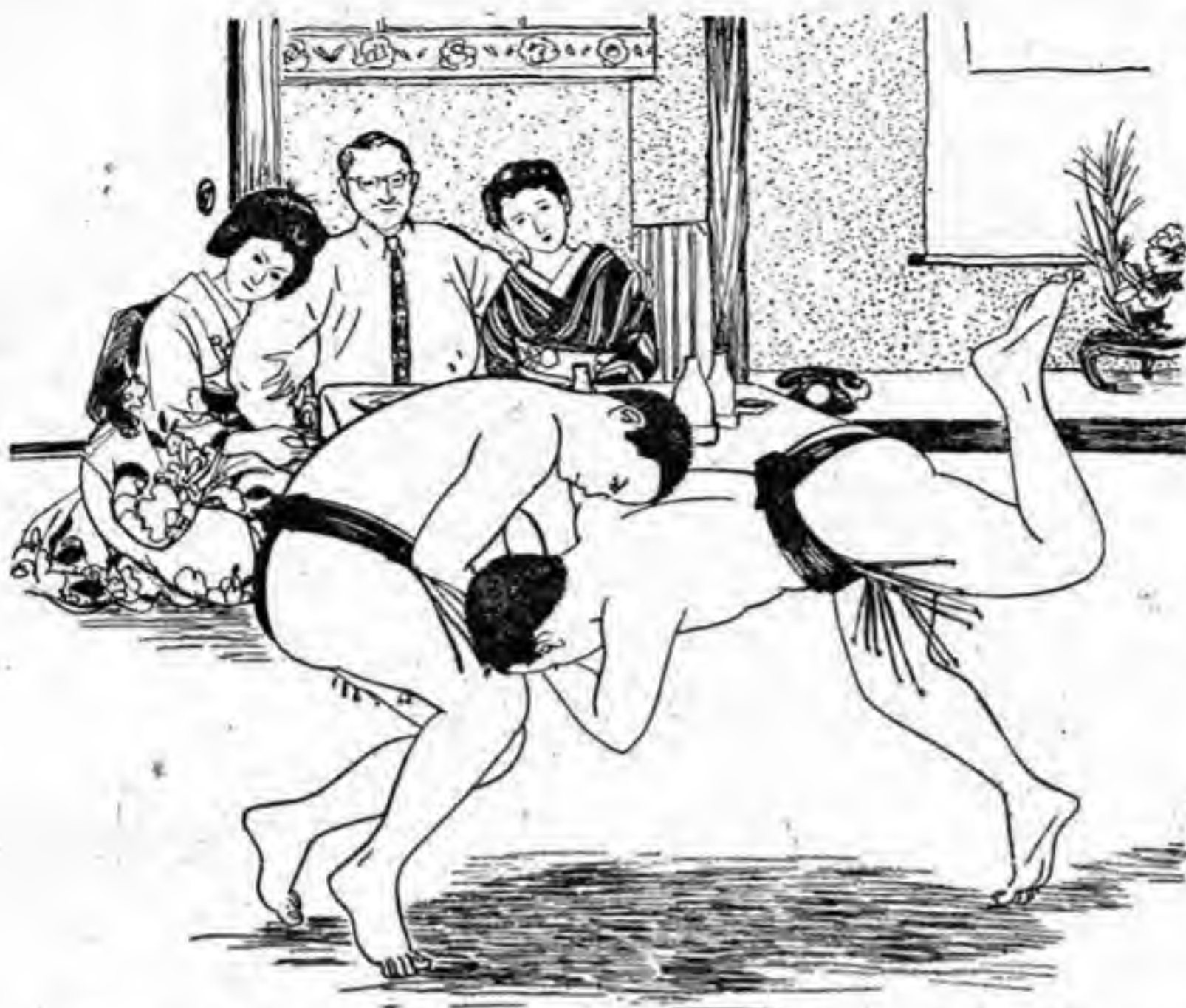
美少年相撲のルールは礼儀作法は普通の相撲と同じですが、極り手は寄倒しと吊出しと、外掛けの三つだけに限られて居ります。つまり勝負は必ず相手の褌を取って倒さないと極まらないのでして、押出しとか踏越しとか倒れないで敗ける事は許されません。

土俵はズックのマットを重ねて約五、六尺の高さに造り、周囲には一段低く軟い布団を敷いて転倒する少年が怪我をしない様にしてあります。

ですから少年相撲では勝負が決ると同時に二人の競技者の肉体はもつれ合ったままもんどり打って一段下の布団の上に転転するのであります。

大てい足は足を前後に大きく広げ相手に褌を取られたまま仰向に転落する場合があります。如何に少年の身体が弾力性があっても相当の肉体的苦痛を受ける事はまぬがれないので、此の時、腹に力を入れて受身の姿勢で落ち、怪我をしない様に平常から、毎日数十回投げられて要領を覚えなければなりません。

又褌は巾広くしてしっかり締込み、競技中に少しでもゆるむ事のない様に廻しの締め方は特に日頃からやかましく云われます。私達が使用する褌は、お相撲さんの使う黒



のピカピカ光った縋子の褌を少年の身体に合せて幅を狭く仕立てたものですから、お腹に五回巻きますと丁度お相撲さんが締め上げた時と同じ位の硬さにきつく締ります。

少年相撲と云っても幸一達はもう職業力士ですから、褌の締め方は本当のお相撲さんと同じやり方で、特に後の結び目など美しく結ばなければなりません。練習の時は使いませんが、御座敷で演技をする時には暖簾の様な下りも使用致します。

褌を締める時には、充ず半紙を小さく四角に畳んだものを肛門に当ててそれから褌をかけられました。

化粧褌の時は下に晒の六尺褌をかけ、其の上からするのでそれから良いですが、普通の締込の場合は六尺も取ってしまつて真裸になつて直かに締込むのですから、試合中に力を入れ過ぎてそそろをして褌を汚したりしない為に必ず肛門に紙を当てなければなりません。

少年達は夫々「梅の花」とか「藤の川」とかいう四股名をつけます。幸一は直ぐ入った日から「花吹雪」と云う四股名を付けられました。着物にも普段使っている晒のふんどしにも全部「花吹雪幸一」と名前が記入されました。此処では寝る時でも何時も下穿は晒の六尺ふんどしをかけさせられます。パンツや猿股は使用できません。

幸一も初めて白のふんどしを

かかれた時は、股がすれる様で氣持悪く、それにお尻の割目に喰い込みますし、寝る時に後の結び目が邪魔になる様な氣がして嫌で仕様がなかつたのですが、十三、四の子も皆かけていますから仕方無く今でも二六時中、六尺をかけて居ります。

美少年相撲団の興行は公開でなく特定のお客様に呼ばれて、大概大きなお邸などの広間で行われます。

お母様

幸一も一週間程前、初めてお座敷相撲に出されました。

幸一も皆と同じ様に黒光りに光る縋子の締込をきりつと結んで整列致しました。

呼び出された少年は正式にチリを切り正面一段高いマットの上に上ります。

行司の「見合つて見合つて」と云う声に応じ、少年達はヤツと掛声して下りをさばいて両手を下します。仕切直しは五回迄であとは時間一杯立上り各々秘術を尽して闘います。

勝負は必ず土俵際できまり、二少年の肉体はもつれ合つたまま土俵の下に転落して勝負が終ります。

幸一も四回目に呼び出されました。

土俵の中央へ進み、下りをさばいてチリを切りますと、お客様から「花吹雪」と声がかかります時は何とも云えず嬉しく感じました。やがて立上りました。相手は「藤の川」と

云う、やはり十五才の少年ですが、仲々手取りで、私の両腕をぐいと引きつけて土俵際に寄り進んできました。幸一がやっと寄り返えし、一息ついたと思うといきなり右足を外掛にかけて一気に寄り戻してきまして、土俵際で耐える暇もなくシマッタと思うともう私の身体は空中に浮いて、二人共真逆様に土俵下の布団の下に落ちてしまいました。

「藤の川」は優しく私の手をとって起して呉れて、又二人揃って土俵に上り、名乗りを受けてから控えに引下りました。

こうして次々と十数番の取組を終り最後に三人抜、五人抜を行い、その日の演技を終りました。

いかに激しく転倒したかは、後で写真を見ました所、丁度幸一の頭を真下にし、両足を大きく広げて、黒の締込が丁度ソラ豆の筋の様に尻の真中に喰い込んでいる姿を正面にむき出したままのかっこうで落ちる所でした。

相手の少年も空中に浮いてやはり両足を大きく開き後の立禪を尻に喰い込ませた姿を正面に向けて幸一の上にのしかかる様にして倒れる瞬間の姿を見て居りました。

土俵下に控えている四五人の少年達も思わず、あぐらをくずしてさけ様として居ります。

此の写真は後でプロマイドとして発表することになりました、幸一は初めての出場としては大変良い成績だと親方から賞められました。

た。

しかし幸一としては初めての正式の試合です。ので無我夢中で、あたりのお客様の顔も全然分らず只一生懸命角力しただけでした。

試合が済みましてから、幸一は親方に呼ばれまして、今晚の席で幸一の角力を見た所、早速最負になって幕に入る迄面倒を見ても良いと云うお客さんが居るが会ってお願いしたらどうか、と話がありました。

「幕に入ると云うのはどうする事ですか、幕に入ればお母さんにもお金送れますか」と親方に聞きますと、

「そら、例えば芸者さんでも一人前になる事を一本と云うだろう。充分お母さんにお金も送る事が出来る。少年力士も最負のお客がついて下さって一人前になるのを入幕するのだ。だが、それにはちゃんとした式があるから、其迄によく色んな事を覚えて心準備して置かなければならない。昔のお稚児さんにも稚児灌頂と云う式があった。それは私が此から教えて上げるが、お客様には良くお前の氣持を伝えて置くから」と云われるので、「それでは何分よろしくお願い致します」と答えました。

灌頂の式は最負が極ってから一月後に行う事になって居ります。

幸一は二十日後にせまっている式の日を待つて居ります。

今日親方は行李の中から大きな天狗の面を一つ出して、しきりとほこりをはたいて居りました。

硬い木彫の天狗の面にいかめしく殊に長さ八寸位もある鼻はピカピカと黒光りがして握り太で反りを打って居ります。湯上りに私は六尺一本のままで不思議そうに一体何にするのかと眺めて居りましたら、丁度一番年長の「桜川」と云う十七の少年が、やはり下帯一本に浴衣がけで湯殿から出て参りましたがいきなり私の後禪をひっぱって、

「今晚は君の番だよ。」

と意味あり気な事を云って行きました。天狗の面と私と結び付け様としてもどうしても出来ず、何が何だか分らずに、そのまま室に帰りましたが、何か不安な氣持がします。なのでお母様を思い出した処、急に懐しくなり手紙が書きたくなりました。何か頼りになる事を求めて、次々と筆を走らせ、この長い手紙を書いて居ります。

果して親方から二階の部屋へ来る様に呼びに参りました。幸一は今から行かなければなりません。で、この手紙も急いで書き終えます。

又次の御手紙を差上げます迄、呉々もお身体を氣をつけて御養生下さい。

母上様

幸一より

戯曲

牢獄の花嫁

鳴山 能平 作並に画

三幕

登場人物

旗本 高木三左

その母 要歌

仲間 要助

芸者 お運

(後に清川八郎の愛妾)

清川八郎

籠かき 二人

同心

下役人

△註▽

幕末の志士清川八郎の名は有名である。彼は奥羽^{しゅうなん}内藩の者である。

彼には一人の恋人があった。清川と同国の生れで、名をお運^{おん}と言う。八郎の詩に次のものがある。

第一場

江戸神田橋本町旗本高木三左屋敷の場

二重家体にて、床の間に時代には不似合な鎧櫃をかざり、続いて違い棚、襖、庭には飛

「我に巾櫛^{きんしつ}の妾あり。常にわが不平を慰む、

十八我が得るところとなり、七年使命に供

す。姿態、心ともに艶やかに、廉直至誠を見

る。未だ他を諦議せず、只婦人の貞を期す。

我性急にして且つ暴なり、ややもすれば忿怒

の声を作す。彼必ず我意を計り、顔を和げ

て、其情を解く。我曾て酒氣を使へば彼必ず

酔程を節す、施与^{しよ}吝^{じん}さかなる所なく賓客日に

来り盈つ……云々」と

野人快傑八郎をしてかく嘆ぜしめたのであ

るから、如何に可憐なる女性であつたか想像

に難くない。

石、石燈籠、立木、下手のかたに枝折戸あり。

(徳川末期の或年。夏の日盛り)

三左の母親歌四十余才如雨露^{じょうろ}を持って、四

目垣にからんだ朝顔に水をやっている。

歌 つるも伸び切つて、此の花も徳川様と同

じ様に枯れるだろうか、勤王だの佐幕だ

の、尊王攘夷だの、落ちついて花に水を

やる心にもなれぬ。

(仲間要助、下手より文箱を持って出てく

る)

歌 これ要助、そちは一昨日より些とも姿を

見せなんだが、今まで何処にいつていた

のじゃ。

要 はい、実は三左様のお使いで遠くまで行

って来ましたので……。

(と汗をふく)

歌 此の妾に沙汰なしで参るとは……

(要助の顔を屹と見て)

歌 さあ使いの先を確と申せ、又大宮かえ、
要 は、はい、実は……。

歌 そちの手に持っているものは文箱ではないか

要 え、これは

(要助あわてて隠そうとするが、歌の目付を見て、しおくと差出すのを、歌文箱を開いて中の文を取出す)

歌 上書は女文字で、様まゐる。

これ要助、妾が度々申聞かして置いたを忘れましたか。たとえ三左の申付けでも武州大宮あたりの遊び女などの処へ、使いに参ること相成らぬと、堅く申渡してあるに、きりとは不屈な、そちの様な者が当屋敷に居つては、三左の身持も直るはずもない。今日かぎり長の暇をつかわすぞえ

要 そそそれや……あんまりひどう御座います。以後は屹と慎みますから、今度の所は何卒御勘弁を……

歌 二度とせぬと言うなら許してもやろうが、その代り妾が今たづねる事を包み隠さず申すか

要 へい、へい。もう斯うなれば一から十まで、何でも根こそぎ申します。

歌 三左が先頃より馴染でいる武州大宮の遊び女お蓮というのはどの様な女子かえ。

要

わたしも一、二度お供した切りで良くは存じませんが、何でももと鶴岡の遊女だったとの事です。が、一年程前より、どんな訳か大宮へ参りまして、仲々売れて居ります。年のころは十七、八容貌は良し姿は好し、気前はよし、何しろ江戸は浅草の吉原の遊女でさえあれ程の女はいねえだろうと……

歌

余り詰らぬことはよいぞ、たずねた事だけ手短かに申せばよい、して三左はその女の所へ通つて寝屋の契をなした事があるのか。

要

へい。三左様はその女一点張りで御座んですが、女の方では何でも今一人男がいるとかいらないとかで、未だ三左様もその女の所へお泊りになった事はねえと存じますが、併し何といつても三左様は大変なのぼせ方で……

歌

もう判つた。妾には妾の分別がある。ではもうよいから行け。

要

へいへい。もう御用はございませんか、部屋へ下つて休息したが良い。

歌

(要助、ほっとして立去る。歌、文を引裂いて捨て、縁に腰をかける)

歌

ほんに困つたもの。三左がそれ程執心なら何とか取計つてやり度いが、何を言うにも相手が相手、身分賤しき女では……

……第一にお家の汚れ、御先祖様に相済みませぬ。

(歌 思案にくれている。奥より気まずそうに高木三左 二十七才、出てくる)

右頬にみにくき火傷のひきつれ、顔一面のそばかす。猫背にて小男なり。

三左 母上、母上。要助の使いの文は如何いたされました。

歌 その文は渡されませぬ。

三左 これは……何故で御座る。

歌 その様なものを渡しては、そなたの為にならぬと思ひ引裂いて捨てました。

(三吉は赫つとした様子、併し、直ぐ母の威圧に押されて冷笑する)

三左 母上。文の通い路に関を据えても、心と、心の通い路は如何なさるお積り。母上は蔵の中より不用の鎧兜など出して床の間にすえ、先祖伝来の血なまぐさい講釈を三左に聞かそうお積りだが、元和慶長の世を去る大平の三百年、世も違ひ人の心も違つております。

歌 いかにも此頃の旗本御家人が、武芸を捨てて遊芸に耽り、次第に懦弱に流れてはいます。併し他は他、我は我、さような徒におかまいなく、そなたは飽く迄、武士ちや、天下の直参、お旗本じや、物情騒然たるこの御時勢を何とみます。今こそ徳川三百年の普代の御恩に報ゆる時で

は御座りませぬか、三河武士の涸れた血を御先祖様の名を持して、今こそ泉と吹き返えらす時。神妙に御奉公致し、大宮の女子の事など、ふっと思い切って下ださりませ。

(三左答えず)

歌 嫁女が欲しいなら、親類方にも、筋目正しき家がらでも、明日にでも貰って進ぜましょう。そなたの身体はそなたの身体であつて、そなたの者でない。高木家の為、將軍様の為、旗本八万騎の為に捨てこそ所を得たる命では御座いませぬか。

判りましたか、三左。武士の性根があるならば、良く分別せねばなりませんぞ

(三左答えず、歌言ひ捨てゝ奥へ。)

見送って三左(独言)

三左 己の命は己のもの……。三左の命も恋

の為なら捨てゝ見ように、

(ふと、庭に捨てある破れた文に気付き、

庭にとび居りそれをつなぎ合せる)

三左 お情は……。女冥利につきます……。よくよく好い月日の下に生れたると唯、

うれしく存じまいらせ候、なれど妾には

清川八郎様と言う二世を誓った……。何、

清川八郎とな。

(三左。がく然とする)

(仲間要助、此の様子を此の前より登場し、てうかがっているが、何やら胸に一物あ

る体)

第二場

武州大宮囃の場

正面に深く暗い松林の遠見。此の前低く土手の上に、大小の松の立ち並びたる切出し、木立の間に、縁側を附けた九尺程の馬頭観世音の古びなお堂。上下は樹木の見切り、木の間には三日の宵月淡く、四辺薄暗く、総て武州大宮囃の夜の様子。遠く田舎らしい三味線など聞えて、幕明く

(一場より五日経た日の成刻近き頃)

(下手より高木三左、仲間要助、旅仕度に出てくる)

(月の光がだん／＼うすく)

要 おうお月様もそろそろ寝につくか、段々

おあつらい向になつて来やがった。三左

様はその中にゆつくり女と、其処のお堂

の中で……。ヘッヘッヘッ。南無馬頭観世

音様御利益を与え給え、

おや、三左様どうしたんです？

三左 うむ。

(何となく浮かぬ様子)

要 今更、くよく／＼したって始まらねえじや

ありませんか。三百石の歴としたお旗本

が、武士を売り、家を捨てたのも女故、

家財道具を売り払い、その恋に生涯をか

け様と決心したのはまさか酔狂刷毛序じ

や御座いますまい。まあ／＼万事はこの要助におまかせ下さい。ほれもう駕籠が見えましたぜ、さっさつ婿様はそれそのお堂の中へ……

(とせき立てる様に三左をお堂の中に入れて、棒端に提灯を掛けたる駕籠一挺要助の前でとんと卸す)

要 おう御苦労だった。一寸お前達は此のまゝ向うへいつていってくれ。

運 (駕籠かき共二人杖を持って上手に退場) もし駕籠屋さん、どうしたんです。

(と駕籠の垂をボンと上げて小紋の羽織、藤を散らした裾模様のお芸者姿、お運が出る)

要 これは／＼お運さん、いつ見ても艶かで御座んすね。

運 お前は誰です？

要 誰ですもねえでしょう、お馴染江戸のお旗本高木三左様の仲間の要助ですぞ。

運 その仲間が何だつて妾をこんな所へ、

用があるから連れてきたんですさあ、何ね

別に手間は取らせねえ。

運 どんな用か知りませんが、今夜は心の急

く事がありますので、

要 そう拍子木で涙をかんだ様に素っ気なく

云わねえものだ。お前も芸者。何もそう

愛嬌なく行って仕舞う事もあるめえ。心

の急ぐ事とは清川八郎て、色男の事か、

尤も清川様のお便りでとの口上一つも大事な座敷を抜けた所だが、だまされたと知ったところで、こっちの用の済まねえ内はおいそれと見逃がせねえよ。まあ、もう一寸こっちへ来な、

蓮 (と袖を取って引寄せる手を)
何をします。

蓮 (と払い)
女一人とあなどって無体をすると、許しませんぞ、
(素早く髪のかんざしを逆手に持つ)

要
おう、往生際の悪い女だ。痛え目を見ねえ中、うんと云うのが当世だぜ

蓮
(とお蓮の振り下すかんざしをくぐり帯際をとって抱きすくめる。お蓮必死で、彼方此方逃廻るをやっと引つ捕える)
あれー。

要
(と一声大きく叫ぶのを片手でふたをして無理矢理堂の中へ引ずって行こうとするが)
三左様。手を貸しておくんなせえ。
この阿魔、指をかみやがった。
いててて……



Nohei N

顔を上向けてやっ猿轡をする、要助は用意の細引を出して、後手に縛る)

要
畜生、ああ痛え、ほう血が出やがった。

(いましそくに道にもがいているお蓮をにらんでいたが、胸の扱帯を解いて手拭を噛んでいる口を二巻き巻き、つけて後で縛る)

要
こうして置けばうんもすんもねえ。やいお蓮、江戸を夜逃げしてまで遙々と今度こそ思いを遂げんと三左様が、暇に御座った観音様の御利益で引導を渡してやるんだ。迷わず極楽往生しやがれ。お堂の中の板の間じゃ、不祥だろうが今迄さんさん通わした女の罪ほろぼしと、寝覚めを好くしなよ。さあ三左様、後の料理は貴方の番、

(とお蓮を抱き上げてお堂の中へ入れる。
三左、物につかれた様な足取りで中へ)
要
やれ。之で仲間要助の御奉公も済んだというものだ。

(駕籠の中に腰を掛けて、一服煙草をつける時)

へ君と寝ようか、五千石とろか、何の五千石君と寝よ

(と云う唄と共に段々人の近よる気配)

(要助びくつと煙管を仕舞うと、じつとすかして見る。清川八郎、浪士姿、二十三背高く、緊肉質、やゝ苦味走る。やゝ千鳥足で出てくるが、ふと足にふんだものに気付いて拾い上げる)

清 かんざしか、女のかんざし、

はて、

(何か思入れの体、そして駕籠の先に掛けたる提灯を見て)

清 荻の家、荻の家と言うとお蓮の店。こら

奴、この駕籠に乗っていた女はどこへいった。

要 じよじよう談でしょう。やぶから棒に女だなんて。

清 ふーむ、白を切るな。このかんざしは、

荻の家という店のお蓮という芸者の持物だ。その駕籠の中にある女の履物をはいていた女は何処にいる。

(あたりを見廻すと、屹とお堂をにらむ。はじかれた様に駕籠から抜け出た要助、脇差を抜くと清川に斬りかかるが)

脇差を抜くと清川に斬りかかるが)

清 下郎……

(と清川に足蹴にされ縁に脾腹を打付けて、どうと悶絶する。この時堂の内より髪と裾を乱した、帯をとかれた姿のお蓮

猿轡のまゝ飛出してよろ／＼とよろめいて足許に倒れる)

清 お蓮か

(お蓮、うなずく時、三左蒼白な顔、刀を抜いて突きかかろうとする堂の上)

清 おのれ、女を縛って手籠めにするとは、

武士の川上におけぬ卑劣者。

こうかー

(居合抜きに三左の高もゝを斬り、縁より転げ落ちるを、更に一太刀二太刀、肩先へ振り下す)

清 ひどい目にあったな、お蓮、

(膝まづいてお蓮を抱き上げると)

清 どうだ俺と京へ一緒にくるか。

(お蓮大きく、うなずく、そして早く解いてくれと、清川の腕の中で身をまがく。さい前の駕籠かき二人、恐る／＼出て来て此の有様を見て、顔を見合わせる。

清川それと気づき、素早くお蓮の縛しめと猿轡をとりはずす)

蓮 八郎様

(と泣きすがるのを柔く、はなして駕籠に坐らせると)

清 おい、かつげ、もときた路だ。きさまら

も片割れた、ぐず／＼すると叩き斬るぞ

(二人、慌てて駕籠をかつぎ上げて清川と退場)

暫くしてお蓮、お蓮という三左の呻きに要

助、起上ると、きよろ／＼あたりを見廻す。

要 三左様／＼しっかりして下さい

(と、びくつき三左を抱き起す。)

要 あ、こいつはいけねえ、医者だ／＼畜生、清川八郎の野郎、どうしやがるか覚えておれ、三左様、しっかりして置くなせえよ。今直ぐ医者を呼んで来ますからね。あゝこうなったのも馬頭観世音の罰じやねえ、此の仲間の要助が、いらざる下世話の智恵から、勘弁して置くんなせえよ。

(と三左をはなして立上る。)

(月全く落ちて、暗が訪れる。虫の音。)

三 幕

江戸小伝馬町牢獄の拷問部屋

(第二場より七年経たる夏)

部屋の建物。右後方に牢獄の格子見え。開けはなれた部屋の障子、中に様々の責道具。後手長繻襷一枚の女と調べ帳を持った同心、青竹を持った下役人、それに目明しらしき男の四人。総べて薄暗く提灯の光も中ろうそくが燃えつきそうな感じである。

同心 しぶとい女だの。今日で丸三日、何としても白状せぬ。流石清川八郎の妾だけ

あるわ、

下役人 もう此の上は、こんな割れ竹より、

いっそ海老責、石責では――。

同心 うむ、明朝は与力筆頭にうかがって見よう。野に虎をはなした様な清川、一日も早く捕えん事には……

明日こそ、きつと行方を吐かして見せるぞ、おい要助、此の女に水をやつて牢の中に入れて置いてくれ。

要 かしこまりました。

(同心、下役人、部屋を出るのを見送ってから、お蓮の前にかみ込んで)

要 七年前の大宮の芸者時代から、色香が少しもこぼれてねえな、な！お蓮

蓮 (だしぬけの言葉に、つと、身体を起したお蓮、不審そうに要助を見る)

要 久し振りだなお蓮、俺様だよ。旗本高木三左様の仲間要助よ。変れば変わる身の上

だな。あの晩、清川に斬られた三左様はやつと命はとりとめたが、生れもつかぬ不具になり、俺はこうやつてお上から十

手捕縄を頂いて目明しとなったのも、お前と清川を探そう為さ、その清川が幕府

の御用商人を斬ってから、お上に付け狙らわれ、お前だけがこうやつて捕えられ

たのも、俺にとつちや、もつつけの幸。責め殺されぬその前に一言、お前に恨みが

言い度かったよ。

蓮 何という恐ろしい事。無理無体の恋の逆恨を七年もの間。

要 おう。随分長え間辛棒したぞ。京の木屋

町の二階で、しっぽり濡れたる仕末の水を、清川が道の乞食に浴せたが、その乞食こそ高木三左様の成れの果。その三左様が、おっつけ此処に見える筈、

蓮 えっ、何の為、

要 何の為とは知れた事、七年越しの恋の為又してもその様な無体の事、不浄の十手捕縄を笠にして、あまりと言えは理不尽

な、

要 やかましいやい、此処を何処だと思いやがる。三途の川の関渡し、行くも行かぬ

も捕方の胸三寸でどうにでもなる小伝馬町だ、静かにしろい。

(と懷中より古びたる手拭を出す)

此の手拭は、七年前に大宮囃のある晩に、お前の口に噛ませたもの、さっ今一度噛みや

がれ。

(お蓮は身を跳くが、弱った身体、何の造作なく、口に手拭を押しこまれると、更にその上から、胸の細帯で猿轡をされる。すべて二幕と同じ様)

(所へ乞食姿の高木三左、不具の身体を引きずりつつ登場、要助、それに気づいて、

三左に軽く一礼すると三左をかゝえる様に部屋の中に入れ、障子を閉め左右の様

子をうかがう時、さっきの同心登場)

下役人 要助。貴様、今この拷問部屋に、誰を入れた。牢獄とは云え、奉行所の中、

めったに不審の者は通さぬ所。まして秘密の此の部屋に挙動賤しき乞食の如き者を入れるとは、奇怪千万。

要 その部屋の中には清川の妾がまだおります。騒がぬ様に縛つてあります。

下役 な、なに。囚人とは云え、お上の大事なあずかり者。貴様狂ったか。

要 中の乞食は、要助の元の主人、旗本高木三左様で御座います。

同心 高木三左だと、女の為に七年前、夜逃げをした。

要 左様で御座います。今更何も申しませんが、高木三左様が、武士を捨て、命を捨てた七年の恋が。然しこの要助も総べて

を覚悟して居ります。

同心 錠を破った捕方の、打首、逆さはりつけでも。

要 勿論の事で御座います。

同心 むむ。

(屹つとにらんだ同心は、やがて障子にかけた手をしずかにはなす)

(早どりの鳴声かすかに)

史実によると、お蓮は一週間あまりで獄中で毒殺される事になっている。その後一日して一人の目明しが、百叩き、江戸追放になつが、その時一人の乞食を連れていたとの事である。二人の行方は誰も知らぬ。

清川八郎が暗殺されたのは、その翌春、上山藩の勤王の志士金子与三郎をたずねての帰途である。

黄色オラミ誕生

真木不二夫

(1)

灼けつくような咽喉の乾きに、ふと意識がもどった。身体が揺れている。ゴトゴト、ゴトゴト鈍い音が聞え、ぼくは車の上に載せられて、いるらしい。起きようとして身動きすると全身に痛みがはしった。両腕が背中に縛られている。足まで縛ってある。

「おい、石山、石山……」

耳もとで声がした。首をまわして振りむくと同僚の坂井特派員だ。これも縛られているが、ぼくよりも元気で不自由な身体を起して四辺を見廻している。

「気がついたか、石山」

「一体ここはどこなんだ。おれ達はなんでこんな車の上に居るんだ」

「おれにもわからん。車にホロが掛っていて外の様子がさっぱりわからないんだ」

バラ仙人掌の強烈な香がする。すると、ロピア砂漠の附近を車は動いているのだ。

「他の者たちはどうしたんだ？」

と、ぼくは坂井に訊く。

「生きて居たのはおれとお前だけだよ。あとは皆お陀仏らしい。もっとも助かったおれ達だってこんな有様じゃ、とても生き延びられそうもないがね。墜落したトルテリヤ号の下敷になっただけのお前を、やっとおれが引きずり出したんだ。お前の足片方、骨までつぶれているぞ」

云われてぼくは左脚が急激に痛み出すのを感じた。多量の血が流れでて、ズボンがベツトリ濡れている。これでは気を失うのも当然だ。車はお構いなしにゴトゴト動き続ける。時々ビシリ！とムチの音が聞えるところを察すると馬車か牛車らしい。注意して耳を澄ますと、この車の他に、前後して数台の車が走

っている。が、その車音はぼくのこの車より軽い。

長い間走って、やっとな車が停った。ホロが取り除かれた。夕暮だった。遠く砂丘のかけに太陽は沈み、闇がせまってあたりの景色がよくわからない。ぼくと坂井は車から乱暴に引きずり降ろされた。ぼくらの周囲に立ち並んだ人間たちを、やっこの思いで見廻したとき、ぼくは思わず「アッ！」と咽喉の奥で叫んだ。ひげだらけの怖ろしい形想をした砂漠の群盗だとばかり思っていたのに、ぼくの目の前には、色とりどりの薄衣をまとった女たちが十二、三人、冷ややかな眼つきで突っ立って居たのだ。夕闇にぬけるような顔の白さ四肢の白さが妖しい美しさだった。足に大怪我のあるぼくは地面に倒れたままだったが、元気の残っている坂井は相手を女とみてかよるよると立ち上って、

「なんだ、きさまらは。おれ達を縛ってどうしようというんだ」

と怒鳴った。そのとたん、女の一人の手にしたムチが素早く坂井の肩に鳴って、坂井は耐えきれずに倒れた。その動作の非情な鋭どさ。……女たちが美しいだけにぼくは冷たい恐怖が背筋に走った。

が、それよりも激しい恐怖は、ぼくを乗せた車をひいていた動物の姿を、チラと一瞬見た時だった。その動物は二本の足で立っていた。ゴリラ！と、一瞬ぼくは思った。が、

そうではなかった。胸にも脚にも豊かな毛が生え、皮膚の色は赤銅色に陽に灼けて獣的なまわくしさをもっているが、それは確かに人間だったのだ。それだけなら珍しいことではない。日本でも地方に行けばまだ人力車というものがある。人間が人間を載せて車をひく姿にさほどの恐しさを感じる筈はない。ぼくが驚いたのは、その男たちは腕のひじのところから胸、背中にかけて金属製の帯をはめられ、背中についた環から鎖がのびて後の車につながれているのだ。男たちは車の一部になっっているのだ。腕はひじの関節から先だけがわずかに動かせられる。ぼくが乗ってきた車は鎖につながれた四人の男が引いていたのだ。いまその男たちは地面にべったり坐り、水の入った器に口をつけて、犬のようにペチヤペチヤ舌を鳴らしながら咽喉をうるおして

いる。その残酷な光景。そして、気がついて周囲を見廻せば、女たちが乗ってきたそれらの車には、それぞれ数人の男たちが鎖につながれていた。坂井もやっとそれに気がつき、ギョツとした顔でぼくの顔をみた。

歩けないぼくは担架に乗せられ、坂井は女たちに縄尻をとられて、砂漠の中にそびえ立つ石造りの門をくぐった。ぼくをかつぐ担架にも、前後二人の男が手首に鎖をつけられ、その鎖は担架に直結していた。

夜眼にも白く巨大なその門をくぐると、ぼくの眼の前には不思議な都が現れた。広い中央の道路の両側には近代的な建物が立ち並んで、それらを真昼のように照らしているのは電燈ではなく、ガス燈のような光りを放つ街灯であった。やがて、ぼくらの行手に一際立派な、コンクリート建て五、六階もあるという宮殿造りの建物が現われた。そしてぼくと坂井を囲んだ女の一隊は、無言のままその宮殿の中へ這入っていった。

(2)

広い清潔な廊下を幾度か曲り、豪華な装飾の階段を幾度か登って、ぼくらは奥の広間に行きついた。ひととき華美な衣装を着た女官が多勢並び、中央の一段高い席には、主とも見える気品の高い一人の女が厳然と坐っていた。肌が透いてみえる程の薄絹をまとい、宝

石をちりばめた冠をつけている。ぼくが眼をみはったのはその肌の白さである。ぼくを捕えた女たちの皮膚も美しかったが、女王ともみえるその女の白さは一層ぬけ出ていた。女王はぼくらを見ても殊更に表情も変えずに、むしろ冷たい眼で眺めおろしていた。

そして、静かに口をきいた。

「あなた方は、何処の国の人間ですか？」

驚いたことには、英語であった。

「おれ達は日本人だ。此処は何という国の何という町なのだ？」

と坂井が英語で返事した。

「日本？」

と、女王は不審そうな表情で訊き返した。

「日本を知らないのか。アジアの東端の国だよ。世界を相手に戦争して負けた国だ」

焦立たしげに坂井が答えた。わかったのか

わからないのか、女王は黙ってうなずいた。

女王の左右に居る若い女官が、何事かを女王

にささやいた。女王が答え、彼女らの間にか

なり長い問答が交された。が、ぼくにはその

内容が少しも判らない。仏語でも独語でもな

い。勿論英語でもない。その言葉は、亜細亜

通信の記者として、世界を歩いたぼくに聞き馴

れない、独自のイントネーションをもってい

た。

元気を保ち続けた坂井にもようやく疲労の色が濃く、ぼくは左脚の怪我の出血のために

何時か意識がうすれていった。

(3)

気がつくとも縄は解かれていた。のみならず足の怪我にはホータイが巻かれ、治療が施されてあった。身体はベッドの上に横たわっていた。宮殿の一室にぼくと坂井は監禁されたのだ。窓もない薄暗い部屋。ドアを押しても勿論鍵が掛っている。向い側のベッドには、坂井が不貞腐れた格好で仰向けに寝そべっている。

「全く妙な国だ」

と坂井がつぶやいた。

「国なのか。この町は」

と、ぼくもやつと口をきく元気が出た。

「どうも国らしいよ。つまりあの威張った女が王様ってわけだ。ただし、この国は世界地図にも載っていない不思議な国だ」

「地図にない国？」あまりに現実離れしている。ぼくは夢をみているのだろうか。

「おれの考えでは……」と、坂井が続けた。

「ムスカット、モカ、リヤドを結ぶ三角形の丁度真中辺にこの小さな国が位置しているんじゃないか。チラナからレバノンのベイルートへ向っておれ達のトルテリヤ号が飛び立った。約一時間後にエンジ

ンに故障がおきて突っ込んだのがロピア砂漠附近だ。そこから計算して……」

「しかし、ぼく達は随分長い間、あの奇妙な車で運ばれたからな。方角がわからなくなっているんじゃないか」

「そうなんだ。だから結局、おれ達の位置はわからない。とんだ二十世紀のアラビアン・ナイトだよ」

「ぼく達は殺されるんだろうか。どうも空気がおだやかではないね」

ぼくはそれが一番心配だった。

「そいつもさっぱり判らない。くそッ！」

と、坂井はとび起きるとドアを靴で思いきり蹴った。その時、ドアが向うからあいて、二人の女をしたがえた白衣の女が現れた。無言のままぼくに近寄り、足のホータイを替へはじめた。女医らしい。ぼくは何か好意を感じて静かに傷の手当を受けた。ついてきた二人の女は看護婦なのであろう。

「此処は何という名前の国なのですか？」

と、坂井が馬鹿ていねいな口調で英語で訊

いた。女医は答えなかった。表情から察すると英語が通じないらしい。

「おれ達を一体どうしようっていうんだい」と、今度は伊太利の下町語で坂井は訊く。これも通じない。女医は黙々とぼくの足に薬を塗っている。

「どうしてこの国では男が居なくて女が威張るんだい？」

と、今度はエスペラントで訊いた。これにも無言である。女医と看護婦は彼女らだけの言葉で短かい会話をしている。

「チエツ、勝手にしやがれ」

しまいには日本語で毒ずいて坂井は質問をあきらめた。ホータイを巻き終えた女医は又二人の女を連れて部屋を出て行った。

薄暗い部屋には昼夜の別なく燭台の灯がともり、幾日過ぎたのかはつきりしない。一日に運ばれる三度の食事で大体の日数をかぞえて居た。部屋に這入ってくるのは女医と二人の看護婦と、食事を運ぶ女の四人だけであつた。足の傷は日毎によくなって女医のすぐれた技術は幾力所も折れていた骨まで元通りにつながった。

食事はかなりの御馳走だったもちろん肉が主で、野菜サラダやスープまで盛沢山である。桃色の鮮やかな色をした肉で、適度にやわらかく、実に珍味であ



る。食道楽の坂井が世界一の珍味と激賞する。肉の名を訊くにも何しろ言葉が通じないので、ぼくらはただむさぼり喰うだけである。

閉じこめられてから十日程も経った或る日女医と入れ替りに、ズボンをきちんと穿いた美しい女官が一人部屋に入ってきた。

「御機嫌如何ですか？」

と、流れるような英語である。坂井はとび上って返事した。

「ありがとう、ありがとう。たいへん住み心地がいいです。」などと、久し振りに女性と口をきける嬉しさにお世辞を云っている。通訳だな？とぼくは直感した。女はぼくに、「傷はよいのですか？」と、訊く。

「ありがとう。おかげですっかりよくなりました」

と、ぼくは礼儀として頭をさげた。

「私、通訳のウーナ。フェルネ女王の命令であなた方の面



倒をみることになりました」
「ウーナ。いい名前ですね。ウーナ。ぼく坂井。こいつは石山。どうぞよろしく」

坂井は図々しくそう云うと、ウーナに握手を求めるのである。その握手には応じなかったが、通訳のウーナの頬にかすかな笑みが浮かんだ時、ぼくはホッと安心した。この様子では今のところぼくらに危害を加える気配もなさそうだからだ。

(4)

ウーナに引率されて、久しぶりに陽の目を見ることが出来たのは嬉しかったが、宮殿の建物から一步町の中へ踏み込んだぼくは、次々に展開する異常な光景に、肝をつぶした。それは単にびっくりしたというような心理でなく、薄気味の悪さ、白昼夢をみているような恐怖の入り混った驚異であったのだ。

その第一は、例の、人間の引く車である。それがこの不思議な国の唯一の交通機関だった。首と胸と胴に鋼鉄製のタガをは

められた(実際ぼくにはそれらの男たちに鉄のタガのはまった樽を想いだした)男たちが汗を流し、鼻からは馬のような息を吐きながら、車をひいて走っているのだ。一人でひいているものもある。二人のも三人のも、荷物用の大型になると十人びきというのもあるがムチを鳴らしながら車上にふんぞりかえっているのは、すべて女性なのだ。

ぼくのそばを一台の大きな車が通り過ぎて行った。みると色模様のついた美しい車の上では、派手やかに着飾った七、八人もの貴婦人たちが、さかんに飲み食いしながら何事か笑いさざめいていた。そしてその車をひいているのは、なんと十五人もの、ぼくの同性たちだったのだ。それがまるで十五頭立ての馬車の馬たちのように無表情に、無感覚に、鎖を首と胴につけられ、長いムチを背中に受けながら走っているのだ。可哀想なドレイ達。ぼくは見ているうちに息苦しくなった。なんというフラチナな人権じゆうりん!

「ねえ、ウーナ。この国ではどうして男に車をひかせるの? どうして女性のほうが威張っているの? そして、あの宮殿の女王は一体何物なの?」

「ホホホ……」と、ウーナはわらった。

「そんなに一度にお訊きになられては困りますわ。こうして私と歩いているうちに、少しずつ判ってきます。イシヤマ、あなたは今、

あの車をひいているものを「男」と云いましたが、違うのです。このメリール国では、あの動物を「オラミ」と呼ぶのです。この国には馬や牛は居ません。馬や牛という動物を知っているのは私だけなのです。私はこのメリールの生れではありませんから。顔が長くよく走り力の強い動物を馬と呼び、角が生えて頑丈な身体つきをしている獣を牛と呼ぶのと同じように、私達に身体つきは似ているが、私たちとは違うあの二本足の動物を、このメリール国では「オラミ」と呼ぶのです」

メリール国。オラミ。……ぼくの頭は混乱して発狂しそうになった。或いは、ぼくはもう発狂しているのかも知れない。しかし、図太い神経の坂井は、好奇に溢れた眼で、じつとウーナの話を聴いている。

「すると、ぼくたち二人も、このメリール国では「オラミ」なのですか?」

と、坂井はウーナに訊いた。

「さあ……」

と、ウーナは言葉を濁した。ウーナの瞳に一瞬妖しい光が燃えたのをぼくは見逃さなかった。

「女どもを載せた車をひっぱるなんてのは、まっぴらごめんだぜ」

と、坂井は日本語で、ぼくにつぶやいた。ウーナは広い中央道路の向う側を走っている五人立ての車と呼んだ。

「ポリーム……」

車上の女性はウーナを見て微笑し、一鞭あてると、ぼくらに近づいてきた。ポリームというのはその女性の名前だった。ウーナはポリームに何か話しかけた。メリール語である。ぼくには全然わからない。ポリームは話の合間にしきりとぼくと坂井を見ながら、「オラミ、オラミ」という。ぼくらが「オラミ」と呼ばれているのだ。さげすむような眼つきでぼくを見おろす。ぼくは不愉快になった。

「イシヤマ……」と、ウーナが振りむいた。

「ポリームの車にのせてもらいましょう。食肉製造工場までは一寸遠いから」

「とんでもない!」

と、ぼくは断った。鎖につながれた人間がひく車に、どうしてぼくがいい気になって乗れよう。冒険好きの坂井は乗れかねない。ぼくは坂井の腕をつかんだ。ウーナはぼくの顔をみて笑った。そしてポリームに向かって二言三言話したかと思うと、

「セ・チーシャ」

と云って手を振った。

「セ・チーシャ」

と、ポリームも手を振り、車は離れていった。

「成程、さようなら、はメリール語で、セ・チーシャ、か。一つ覚えたぞ」

と、坂井がうなずいた。語学の天才である坂井のことだ。一カ月もこの国に居れば、メーリール語の日常会話ぐらいはマスターするかも知れない。

目的地まで十五分程歩いたが、街を行く女たちが、ぼくと坂井をジロジロ眺めるには一寸弱った。考えてみれば、この国では鎖で束縛されていない男は非常に珍しいのだ。彼女

らのその好奇の眼の色のなかに、やはりさげすむような気配の感じられるのが、ぼくにはやはりいい気持ではなかった。そばに居るウーナがこの国では高い地位にあるらしく、直接の侮蔑を受けなかったのは幸いだった。ウーナでも居なかったら痰か唾でも顔に吐きかけられるところだ。



こうしてぼくらは「食肉製造工場」に着いたのだ。勿論何故にウーナが真先に此処へぼくらを案内したのかは分らない。然し、ぼくにも記者魂がある。ホワイトとブルースカイに塗りわけられたスマートな工場の入口に立った時、不思議な期待がぼくの心をふるいたたせた。坂井はしきりにカメラを欲しがっている。そうだ、カメラとフィルムさえあれば、まさにこれこそ世界一の特ダネなのだ。ペンダケのルポでは、常識を尊ぶ世人の、誰が信じてくれよう。然し、そんなぼくらの職業意識を、あますところなく叩きのめし、あまりに異常なこの国の実態を、次の瞬間に於

てみせつけられるとは、ぼくも坂井も、神ならぬ身の知る由もなかったのである。

(5)

「食肉製造工場」の内部は、整然としたメカニズムに支配され、清潔そのものだった。ぼくと坂井はウーナの後からこの建物の深部に進んだ。純白の制服で忙しく立ち佇む女性たちが、ウーナをみると尊敬の会釈をする。幾つかのドアの前を通り過ぎて、ぼく達は一つの部屋の大きなドアの前に立った。ウーナがにこやかな笑顔で云った。

「イシヤマ、サカイ。どうか驚かないで下さい」

妖しいわらい。ぼくは緊張した。謎に包まれたこの国の秘密の一部がのぞかれるのだ。坂井もこぶしをぐっと握った。この大きな白いドアの向うに存在するもの。

ドアがあけられ、ウーナを先にぼくらは少し進んだ。そして眼の前にひらかれた光景に、ぼくらは思わず「あッ！」と叫んだ。

鉄製の檻があった。その檻の中にうごめく生物。それは豚でも牛でも兎でもない、まさしく人間だったのだ。男だったのだ。つまりこの国の言葉でいえば、オラミ、だったのである。しかもこの「オラミ」は街で車をひく、あの力強い馬のような筋肉質の身体をもつ、オラミ、とは違って、腕も胸も脚も尻も、青

白くぶくぶくとふくれ上り、一人一人が三十貫も四十貫もあるうと思われる程、巨大な肉体をしていたのだ。その、ぶくぶく肥満した白い巨大な肉体が一つの鉄檻の中に二十人三十人と詰めこまれているのだ。折り重なり積み重なって、豚のように鼻を鳴らしうめきながら、檻の外に置いてある鉄製の皿から食物をあさっている。

「これは、いったい、これは……」

流石の坂井も身体を小刻みにふるわせて云った。ウーナは冷たい薄笑いを洩らしながら説明する。赤く美しいその唇も今は悪魔のように無気味だった。

「これが食料用オラミなのよ。化学的に調製された完全配合飼料が、生後七年のオラミをあのように肥満巨大にするのです」

「あの大きな人間が七才……」

ぼくはうめいた。

「そうです。ビタミンA、B、D、カルシウム、成長促進剤、抗生物質、その他あらゆる栄養素を混合し、満点の栄養価のもとに飼育するのです。そして、そのような貴重なエサを与える代りに、そのエネルギーを全部食肉として回収する方法をとります。だからこのせまい檻にぎゅう詰に押し込んで、余分な運動をさせません。運動のエネルギーに、こいつらの肉が消費されては困りますからね。二本足で立たせると、それだけ余分の精力が減

るので、いつも四つん這いにさせて置くのです。だからこいつらの指は退化して、ものをつかむことが出来ません。ごらんない、みんな飼料皿に顔を突っこんでエサをたべています。それから、こいつらは太陽というものを知りません。つまり昼夜の別さえ知らなければ、何時でもエサを喰う習慣になり、それだけ早く肥るわけです。

しかし、私たち人間と違って、なにしろ畜生のオラミのことですから、いくらふとらせてもまだまだ肉はかたくまじいのです。そこで私たちのホルモンをこいつらの首の根に注射します。するとこのオラミは去勢されて、肉はやわらかく、おいしくなるのです。この檻のオラミは昨日注射を終え、あと半月後には完全成長して加工工場のほうへまわされるのです……」

ぼくと坂井は啞然としてこの話を聞いていた。悪魔の美しい唇は、なおも語り続ける。「……私たちの悩みは、このオラミの発育の遅さにあるのです。七年でやっと食用に供されるのでは、あまりに時間がかかり過ぎ、需用と供給のバランスが時に崩れる危険があります。せめて二、三年で食肉としての価値をつくり出さなければならぬのです。しかし、今この国のすぐれた学者たちが研究を続けて居りますから、その点についても改良される日が近いでしょう。……」

その時、何を思ったか、いきなり坂井が「あッ！」ととび上り、咽喉をかきむしった。「す、すると、ぼくらが食べているあの、あの肉は……」

「そうです。オラミの肉です」

「げえッ！」ともしたのは坂井もぼくも一緒だった。眼がくらみ、悪感が全身をはした。しばらくの間、ぼくと坂井は床にうずくまっていた。

檻の中のオラミ達は、眼も見えないのか、ぼくらの方を向いても、なんの注意も感動もなく、ただ息をついてうごめいているだけであつた。オラミの口のまわりにはエサの屑がこびりつき、絶えずよだれを流していた。

ウーナは先に立って歩き出した。次の部屋を案内しようというのである。が、ぼくらはもうこの先彼女の後について他を見学する勇氣をなくしていた。ウーナは青ざめたぼくの顔をみて冷笑し、

「この位のことで驚いては先が思いやられますね。この隣の工場には、素晴らしい施設の屠殺場があります。その隣には処理工場、それからオラミ肉のハム、ソーセイジ製造工場などがあります」

オラミのハム、ソーセイジと聞いただけで、ぼくは又、胸がムカムカしてきた。ぼくも坂井も、舌つづみをうって食べていたのだ。「夜になって、建物の内外に輝く燈の油は、

オラミの肉や骨からしぼりだしたものです。オラミの油は精製すると上質の燈油になります。……」

もうぼくらには何の返事もできなかった。

この国では、男性は完全に人間ではないのだ。骨までもが、女性に捧げられてしまっているのだ。女尊男卑という言葉があるが、このメリアル国では徹底的に女尊であり、男はその人間性の一片すらもみとめられていないのだ。ぼくは、喘ぐようにウーナに向って云った。

「こんなにひどい扱いを受けて、この国の男たちは、何故奮起しないのですか？ 抵抗して、たたかわないのですか？」

ウーナはカラカラとわらった。

「奮起だとか、抵抗だとかいう意識が、既にあるのですよ。食肉用オラミは勿論そうですが、その他のオラミにも、社会的な教育というものを一切ほどこさないのです。あなた方の国では、馬や牛を学校に行かせますか？」

「ひ、ひどい……」

と、坂井がうなった。

「あなた方の国でも牛や豚を食べるではありませんか。馬に荷をひかせるではありませんか。オラミを食べることが何故ひどいのですか？ 馬や牛はひどく扱うとたまには怒りますが、オラミは決して怒りません。そういうふうに育てているからです。つまり馬や牛以

下に調教してあるのです。

さあ、見学に疲れたのなら外へ出て休みましょう。私にはなんでもないが、あなた方にはどうも刺激が強かったかも知れない……」

ウーナは先に立って歩き出した。これがこの地球上の出来事だろうか。ぼくは長い悪夢をみているのではないか。

(6)

眼のさめるような鮮やかな緑に囲まれた公園のベンチに、ウーナとぼくと坂井の三人が腰をおろした。大きな葉をつけた樹が、勢いよく茂っていた。噴水が小さな虹をつくっていた。(自然は美しい)と、ぼくはしみじみ思った。が、ウーナの声はまだ続いていた。「この公園をつくった労力は、労働用オラミです。労働用のオラミは食肉用に較べて、やや高い調教がなされています。多少の人語を解しますからね。土木工用のオラミは、メリアル国のすべての建物をつくっておりま

す。勿論、設計や監督は全部私たち人間がやります。そうそう、私たちのことを、あなた方の世界では、女性」と呼ぶのでしたね。私もこの国へ来るまでは、女性」と呼ばれていたのです」

ウーナはその時ふと、遠い空をみつめ、女性らしい表情をした。ぼくはこの時とばかり意気込んで訊いた。

「ウーナ。あなたの生れはどこですか？ ぼくの考えでは英国ではないかと思うのですけど……。そして、どのような経路で、この不思議な国に住むようになったのですか？」

ウーナは眼をつぶって首を横にふった。

「イシヤマ。それを訊いてはいけません。私もそれは話せないことになっているのです。……イシヤマ、サカイ。あなた方の生命を助けたのは私だと思って下さい。私が女王に進言しなければ、あなた方はあの夜すぐに殺されていたのです……」

ぼくはゾツとして背筋が寒くなった。

「ではウーナ。ぼくら二人は何故助けられて、こうして居られるのですか？」

「それも云えません。が、やがてわかるでしょう」

ウーナの答は依然として謎であった。

こうして、ぼくらのメリール国での生活は一ヶ月を数えた。一日毎に新しい驚きを発見し、命の縮む思いであった。ぼくら二人がこの女尊国になんのために飼われているのか（ああ、ぼくも何時の間にかこんな言葉を使うようになってしまった）それが判らない不安はあったが、生命だけは先ず無事であった。工場見学以来、あの桃色の肉だけはどうもぼくらの口に入らなかった。ぼくらは野菜だけで食事を済ませた。

坂井は懸命になって脱出の方法を考えていたが、それは非常に難しかった。監視のメリール人は、女とはいえずべてぼくらより身長に於て二、三寸すぐれ、腕力も強いらしかった。それはオラミを扱うムチの鋭さでも容易に知れた。暴力をもってしては情ないことに、ぼくらは彼女らメリール人に勝つ自信はなかった。

三里四方のこの国には、ぐるりと石造りの高い塀がめぐっていて、出口は南と北の二ヶ所。しかも厳重な警戒である。塀の外には、昼夜の別なく四六時猛烈な砂嵐の砂嵐が吹いているらしかった。つまり、このメリール国は激しい砂嵐に囲まれた台風の中の存在する都なのである。脱出するには、その砂嵐の吹きやむ時期をねらって塀の外へ飛び出さなければならぬ。ぼくと坂井がこの国へ連れて来られた時には、砂嵐は吹いていなかった。

坂井は脱出が容易でないのを覚ると、どこからか酒を見つけてきては始終酔って、半ば自暴気味になっていた。メリール語の会話をいつの間にか覚えて、街へとび出し、貴婦人方の御相手をしては、酒を飲んできた。お相手といつても、何しろ向うはメリール人である。男の坂井は犬か猫同様の愛玩物になっているらしかった。そしてぼくもこの国の事情に大分くわしく

なっていた。

メリール人たちが美女ばかりなのは徹底的な優生保護政策をとっているからなのである。つまり、「優美種保存工場」なるものがある。ここではオラミの中で色の白い立派な容貌をしたもののみを檻の中で飼育し、性慾のさかなメリール人のために、接種と性慾の処理とを一時に解決する精巧な施設が設置されている。坂井の見聞によると、それからの方法は、メリール人の一方的な能動に終始して、オラミの方には、ただ「種付馬」だけの役目しか認められない残酷なものであるらしい。だから、メリール人にとっては必要であるその交渉が、オラミには苦痛のみの感覚しかないという。

こうして生れた子供は、女の子ならメリール人として高等教育を受け、男子の場合はその需要によって、或いは食肉工場に、労働用に、或いは車力用に、そして最も美男子に生れついたもののみ「優美種保存用」として育成されるのである。その結果、遺伝的にメリール人は益々美しくなっていくのである。そのメカニズムに計算された性慾の処理と繁殖の方法に、ぼくは感嘆せずにはいらなかった。

喰って飲んで寝て、また喰って飲んで寝るだけの生活が一ヶ月も続けば、健康な男子なら必ず或る種の不満を覚える筈である。

まして、美人揃いのメリール女性が薄衣で眼の前を往来するのである。そして、ここに一つの事件が発生した。坂井の軽挙がその事件をまねいたのである。いや、それは軽挙と呼ぶべきものではないかも知れない。明らかにそれは、メリール人たちの計画に違いなかったのだから。

或る日、身体を持て余した坂井が何時ものように廊下とんびをしていた。ぼくらは例の宮殿の一室に起居して、奥のフェルネ女王の近辺を除けば、割に自由に宮殿内を往来する

ことができた。坂井が廊下を歩いていると、ふいに一室のドアがあいて、一人のメリール人の姿が見えた。しかも裸体であった。豊かな女性の肉体の線が、無言で坂井を誘ったのである。坂井は固く禁じられているのを忘れて、思わずフラフラと室内に這入っていった。そして白くなめらかな裸かの肩に手をかけたのだ。女は「キャッ」と、一声叫ぶと、坂井の頬に激しい平手打ちをくらわせた。その時、武装したメリール人の一隊が現われ、坂井を取り押えようとした。坂井は、二、三人

【(新聞・雑誌)通信】

『無医村の診療班』

萩原 通隆 提供

(「アサヒグラフ」八朝日新聞社発行)九月 十六日号

要旨

日大医学部では夏休みに、秋田県へ「巡回無料診療班」を派遣した。その折の記録写真数葉に説明を加えたのが、この記事です。

その中の一枚に、外科班が美容整形脱毛手術をしている場面、「娘がおしかけテンテコ舞い、一本一本抜くので一人三時間かゝる」とあり、新聞紙を敷いた急造の手術

台の上に腹から上は完全に脱衣した娘が、目かくしをされて上向きに寝かされ、豊かな乳房もあらわに、腕を頭上におき両腋を開ききって手術を受けている写真がありました。

すでに左腋はすんだらしく、ハガキ大のガーゼを腋の下に絆創膏でとめてあり、今右腋の毛を一本一本医療班が抜いているところでした。一寸珍しい写真だと思いました。

は投げとばしたが、かなう筈もなく捕えられて、地下牢に押しこめられてしまったのだ。

ぼくの部屋に現われたウーナは、れいの冷やかな口調でことのあらましを説明した。

「……だから私があれ程注意したのです。畜生のオラミが、私たちの肩に手を触れるなんて、もっての他です。メリール産のオラミなら、最も残酷な方法で死刑になるところです。しかし、サカイは死刑にはしません」

「では、いったい坂井はどうなるんです」

「鎖で縛って、特殊オラミ種繁殖工場へ連れていきます」

「特殊オラミ種繁殖工場？」

「そこで仕くのです。畜生が犯した大罪としては、極く軽い刑です。それはサカイが黄色オラミだからです」

「黄色オラミ？」

「そうです。サカイは当分の間、黄色オラミ繁殖のために仕くのです。勤勉で頑強な東洋の黄色オラミが繁殖すれば、わがメリール国はもっと栄えます」

ぼくは、余りの意外さにうめいた。冷たく美しいウーナの顔を、必死になつてにらみつけた。そうだったのか！ ぼくたちに今まで充分な食事を与え、客扱いにしていたのは、『黄色オラミ』を生みだすためだったのか！

(第一部終)

和装女の縛り責め展覧会

開催を提唱

—実演懇親座談研究も併せて—

岸 本 青 柳

私の日常生活の第二番目に大切な、奇ク、を、寸時も座右から離したことがない。復刊五月号に「戦慄怪談屋敷」の拙文の掲載を見て、一層奇クへの親近感を深めた。不幸病魔に襲われ、今夏一杯は病床に呻吟していたが、お月見の前後から、漸く快方に向ったので、燈下親しむシーズンに、飯よりも好きな縛りの研究やら実験を復活したいと思っている。先ず十月号に就いて簡単に私の感じたことを述べて見る。

巻頭北原純子さんの「壊れ易き獲物」と「和蘭陀屋敷の謎」の二つの画は何とも云えぬ好感を与えられた。巨匠伊藤晴雨先生の「責め絵の今昔」は大いに敬愛せられた。また逸名居士の「同好和服マニア会遂に設立する」のお説には同感の意を表したい。元来私は日本女の和服姿での縛り責めに興味を持

ち、常に之れを実演、研究しているので特に関心を以って迎えるのである。更にサディズムシーン詳察の挿画に興味を惹いたのである。晴雨老師には先年、お宅でお目にかゝり親しく教えられたものだが、明治維新当時の画伯は、紙燃りの人形で責め絵を研究されたという苦心談を拝見したが、私は日本女の責め絵を画いたり、写真を撮影する前には、特別に着盤縞の袴、長襦袢、帯、緋縮緬の蹴出し、紅い絹の紐類、白足袋等々、かづらを置いて敷蒲団を丸めて胴体を造り、人形の首を使って、縛られた女の等身の人形を造る。色々研究してその姿態を画いたり、撮影したりする。その度毎に、私自身が丸裸になって顔に白粉を塗り、口紅を付け、新蝶々雷のかづらを冠り、特別仕立の黒縹子襟のかゝった長袖の着盤縞の袴、派手な広幅帯、紅扱帯、紅い長

縹縹、紅の腰巻などを着るほか、知人の芸妓、お花の師匠、美容師匠などから臨時に着物を借用して女装する。然して糸燃りの長い細縄を大黒柱に縛って、両手を後ろに廻わして色々の型の自縄自縛の実験をする。

室内は勿論、裏庭の樹や、附近の山に登っては自分の身体を後ろ手に縛ったり或いは、太い松や杉の樹から吊り下げたり、逆さ吊りなどの実験を試みることは屢々行っている。そして責めの快感を味っているのであるが、同好者でなければ、責めの快味は理解出来ないだろうと思われる。之れが他人ならば、私は完全に気狂い扱いにされ、悪い評判を立てられるのは必然だろうが、何時も秘密に実行しているのも未だ誰れにも知られて居ないのは幸福である。と言って人様に別段危害を加えるのでもないのに、誰に遠慮気兼ねをする訳でもないが、此度変態性的行動は余り人様の眼前に大ビラに見せ度くはないので、其処に実験、研究には人知れぬ苦心を要する訳ではある。

其処で「同好和服マニア会」であるが、お趣旨の通り、無礼講主義、和服交換、帯、長襦袢、蹴出し、腰巻等々凡そ女の持物一切の展観、懇親には双手を拳げて賛意を表したい。夫れと私は、茲に「和装女の縛り責め展覧会」の開催を提唱する。会員はお示しのようにならば、一回の会費千円位、会員

は男女同好者に限り秘密会とする。女の衣類附属品を持ち寄り会場に展示する。更に各自の力作たる、和装女の縛り責めの絵画、写真、縛り責めに用いた縄類、責め棒など一切の責道具をも持ち寄って展示するほか、会員有志者の自縄自縛、女装又は女の人を後手に高手小手に強く縛り上げ、責めの実験を演ずる。また吊下げ、逆さ吊りなど種々の責め折檻の実演を試みる。この場合なるべく女子会員を試験台に、モデルになつて貰う方が実感がある。然して之等の実験を絵画に収めたり



著しく進展して、責めが益々痛烈さを増している。実際今春初回の会合には、新年宴会を兼ねての催であつた為めか、会員中のある医師の未亡人は頗る美形であり、背も高く色白くその上頗る愛嬌者であるので、会員多数の希望やら要望やらで、始めて責めのモデルになつて貰つた。その艶子未亡人(仮称)三十七歳は、大柄縞の袴の着物に丸帯を締めて居たが始めは多少躊躇していたが、遂に決心の臍を固め、モデルを快諾した。私と薬剤師の二人が、りりで、艶子さんの真つ白な両手を後

写真撮影したり研究する。終つて懇親会、座談会を催したいと提唱する。

実際私は茲数十年来、同好の士十余名とて「奇談会」を組織して、毎月一回以上会員の宅または寺院などで会合を催して、女の責めの実演、研究、撮影等を既に

実行しているのであるが、回を重ねる毎に実験、研究

る手に燃ち上げ、麻縄で高手小手に縛り上げた。そして撓を前胸の縄の間に差し込み、少し後ろへ強く引いたはずみで仰向けに両足を割つてドウと倒れた。この写真は門外不出を確約している。次いで縛られた両手の間に撓を差し込み前伏せに燃ち上げると、頭を地面に摺り附けた。この時艶子さんは「痛ッ!」と悲鳴を挙げた。この写真も亦会員外には見せられない堅い契約である。この実験で艶子さんの洋髪は少し乱れて居り、冷汗をかいていたが、その実験の感想は?と聴くと、「今後何回でもモデルになります。」と小さい声で言つた。けだつたが、余程興味を覚えたことだろうとは会員の批評であつた。

此展具合で余程変つた方法を用いての、責め折檻でなければ、真の醍醐味は極めて薄くなつてゐるほど漫性的になつてゐるが、何と言つても責めは婦女子に限る。それも中年性の婦人ならばなお結構だと言ひ度い。殊に最初の二、三回目位は一番良いと思う。両手を強く後ろ手に縛り上げ、棒で叩くとその度毎に顔色がだん／＼蒼白となり、両眼が釣り上り、髪や裾前が乱れて来る。紅い腰巻の間から白い脛や脚が露出する。冷汗が滲み出る。その髪が匂い、体臭は何とも言えぬ快感が湧き出て来る。容貌も實際陰悪、惨味を帯びて来る。それを撮影して絵画を画く、更に之れを自分が実験するのであるが、女の和服を着

て広幅の帯をキュッと強く巻き、長繻絆やお腰を巻き、紅い扱帯や帯締めで締め付けられるので、身体が不活発となる。その上細い縄で強く後ろ手に両手を縛るので、色々の責めの恰好をしている裡に、自然呼吸が苦しくなり、冷汗が湧いて来るので、半時間も

すれば、身体中に疲労を覚える。殊に吊り下げ、逆さ吊りになると精々五分間か十分間位で、実験を止めねば到底呼吸が苦しく永く実験を続けられないのは、常に私の体験が証拠立てゝいるのである。

だが場所や人物が変れば、また気分も自然

変わるものであるから、和装女の縛り責め実験同好者を求める為め、将亦研究懇親のため表題の展覧会開催を茲に強調して、同好者の協賛とその実施を要望して歇まないものである。
(おわり)

女 闘 美

美女決闘場面のアイデア

小 西 鉄 二

一、男をかけた二人の美女の角力

土俵は野外で見物はなく、行司一人と立合女二、三人とする。両力士は、島田丸まげの年増とパーマの若い娘とする。(娘は頭にリボンか花などつけること)或はやせ型の若い女と肥り肉の娘などもよい。対照的な髪形なら島田とパーマに限らない。うしろで編んでいる髪と前へ切下げている髪や、パーマとボツプもいいが、ボツプは長くないと男じみて美を失する。行司は腰巻でエボシはいらぬ。立合女たちはふんどしでなく、パンツ、腰巻などの裸が好い。

角力をとる順序は次の様にする。

(イ) 二人が立合女よりふんどしをしめても

らう。ふんどしは、ちりめんよりも黒く固いのがよい。いずれか正面、一方は横向とする、ほかの立合女はそれぞれ二人の前で角力の型を示し、激励し教えている形。

(ロ) 四肢をふむ。片方いずれかを正面から一方は背のみ、立合女は土俵の四方にしやがみ、又は坐する。

(ハ) 仕切。両女の表情に増悪と斗志がはつきりうかばなくてはならず、目は激しくにらみ合い口は固く結んで手をふるえるばかり、行司女も緊張して呼吸をはかる。

(ニ) 立ち上り突っぱり合ったところ。表情は横顔で唇をかみ、又は口を半ば開け、写真手前の方の手は互にまわしをねらい、或は腰

の辺でつかみ合い、向う側の手で肩をつかみ合った形とすれば乳房は見える。

(ホ) その姿勢から年増が娘の乳房を突いた形。娘はよろめき唇をかむ表情。(立合の女行司に物云い)

(ヘ) 娘が怒りの表情で年増の首を乳の間にかゝえこみ、腰をねじって投げんとする。年増苦しげに片手を娘のこしに廻し、片手を娘の手にかけて足をふんばってふせぐ。(立合の女の娘側は手を叩く)

(ト) 髪のかくれた年増と娘が四つに組んだところ。乳房は見えずともかまわない。乱れ髪の下での二人の必死の形相が大事である。互に肩口へあごをのせた形であるから、一方の背からとると、相当表情がよくわかるが、横からとって両女の横顔(片方は半ば)が見えればなおよい。立合女は坐ったまゝこぶしを振って応援。

(チ) 年増が頭を下げて片手で年増のまわしをひき、片手で相手のみつをひく腕をつかみ怒った表情。立合女、腰を浮かす。

(ウ) ザンバラ髪となった年増、まわしのゆるんだ娘を土俵際に追いつめ、のしかゝり寄り切らんとする。娘の髪からリボンが落ちる娘は年増のまわしをひくが、これもゆるんでたぐり上げる形。年増に勝ちほこった表情。娘は歯を喰いしばり必死の形相。娘も額に乱れ髪。行司も必死、立合女半ば立ち上り、手を握り顔を曲げて声援する。

(エ) 娘のうつちやりで、取り組んだまゝ一回転して土俵外へ落ちる瞬間。両女は夢中からみ合った表情。立合女は皆ハツとした形。

(オ) 笑を含んで勝名乗りを受ける娘をにらみつける年増。なぐさめる立合女。娘は勝名乗りを受けつゝ、まわしをしめ直す形。年増はまわしをゆるんだまゝにらみつけること。

この他、やはりタイプの違う二人の女が野外で決闘する場面。立合女はいる方がよいだろう。二人の女は腰巻とパンツで、やはり立合いから髪をつかみ股をしめ寝わざの組打まて入れ、こちらの方は、ののしり合い挑み合う表情を入れたい。これは屋内でもよい。

(カ) 外国の金髪女と日本の娘とのバタフライ一つのリング上の決闘。同じアイデアで、金髪女はパンツ、日本娘はふんどしか湯文字での野外の組打もよいと思う。詳しくは次回にしたいが、他のフアンがこれらのアイデアを生かしてほしい。

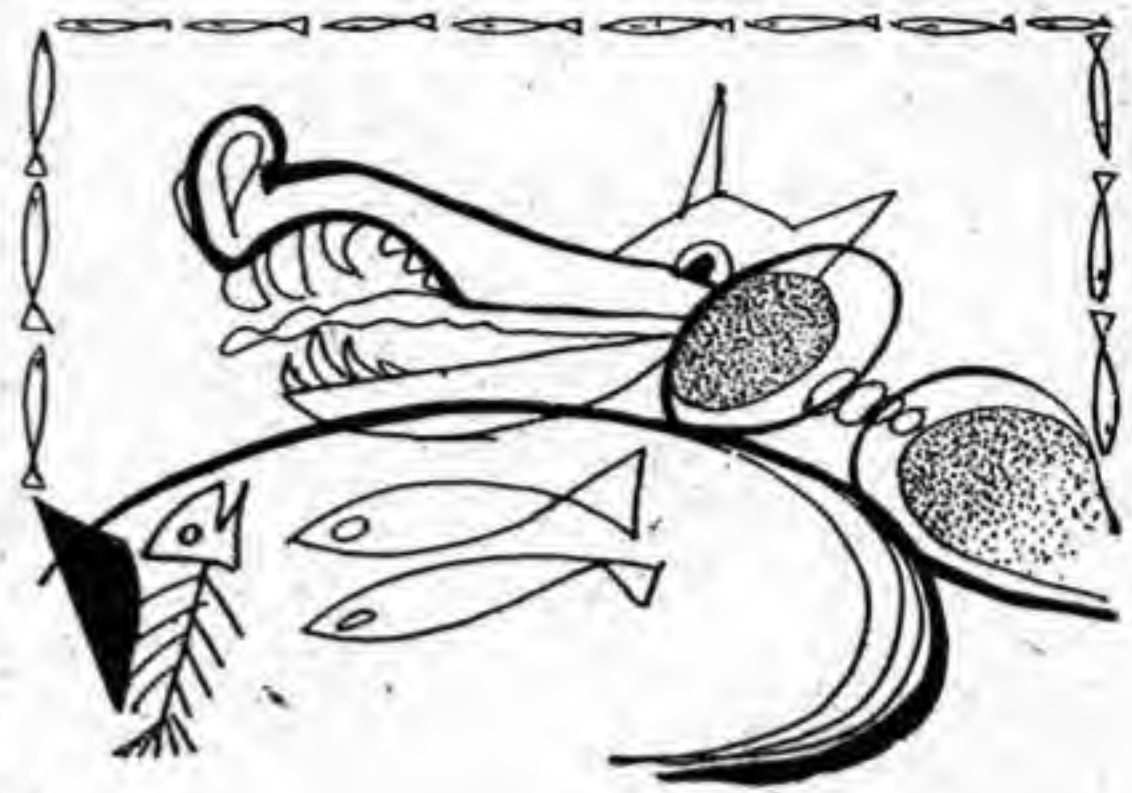
女斗美小説アイデア

今までの女斗ものは、ただ競争、嫉妬にあおられた二人の女の争いが多いが、もっと複雑で一種の女豪物を兼ねさせる。

一例、痩せ型美人のS子、肥り肉美女のK子は、女子大出で、会社切つての運動家である。S子は柔道、剣道、水泳をやり女プロレスに興味あり。K子は体操、円盤、登山で角力が好きである。かねて競争していた二人は、独身の若い社員を恋してはげしく対立し決闘する。友達のとりのしも、互に一歩も譲らずののしり合う。髪を毛をつかみ蹴るなぐるの大乱闘の末、結局どちらも疲れて引分けとなる。そこで二人は三年後、再会して改めて勝負をすることとする。K子は自分の家の美人の女中に打ち明けて、角力の稽古の相手とするが、女角力がある事を知り女中と共におもむく。S子は町のズベ公Y子の姉が女プロレスと知り、弟子入りして上京する。……という発端で、女プロレスになったS子はチャンピオンとなり、K子は女相撲の大関となる。そして故郷の山の中で、双方部下を引き連れて決闘する。これを連続絵物語にしてもよいと思う。



又、正妻（近代的洋装美女）妾（日本趣味芸者）をたずねて、別れると迫り、衣類は裂けて敗れ復しゆう戦を誓う。その妾が芸者の頃、大喧嘩した芸者のいるのを知り、これをたずねて戦いを研究し、女中を相手に稽古をし、友達数名を頼んでなぐり込む。乱戦の末、最後に二人だけで他の女を控えさせ決闘する。そして正妻が勝つ、これも時代物に出来る。このアイデアは、キャバレーの女と芸者の、客争いの決闘にしてもよいと思う。又女プロレスと女角力が巡業先でぶつかり、命をかけて決闘する物語も考えられる。



〔異常体験記〕

光りある中を

(完結篇)

『生保患者の記』

近 東 規 矩 也

よく、「生きとし生ける者は、なべて死刑囚である」という説を聞く。私達はこれに加えて、もうひとつ特別な体刑を課せられている。それは結核という終身刑であった。こうした宿命を背負った私達は、それ／＼に社会の潮騒にもまれ、生活怒濤の真っ只中に佇ちつくして、生きる為のたゞかいに敗れ去った者ばかりであった。とまれ、そこには一片の感傷も哀歎も差し挟む余地のない、まったくの赤裸々な人間像の頽廃と凋落の現実だけがあった。だから、云うなれば、これはノン、フイクシヨンの「転落の詩集」でもあったろうか。

——患者の死亡率は夏を迎えて急角度に上昇を示した。「地獄部屋」行きの重症者が続出する。炊けつくような炎天下に浮浪者や労務者がばた／＼斃れては病院に送られて来た。云い合わせたように、こ

の人達は高度の肺結核症におかされていた。入院して二日と経たぬ間にあつてなく逝ってしまうもの、移送車で病院に運ばれているうちに、もう絶命してしまっている者も尠くない。続出する入院患者に狭い病室は、たちまち充滿してしまい、二人部屋に三人、ひどい部屋では、味もそつけない白塗りの鉄ベッドの外に小型の木製ベッドやキャンパス・ベッドの布製品が無理に搬び込まれ、四台も置かれた。もと／＼この旧病棟は戦時中、日立製作所の工員寮であった。従って建物の構造も療養設備の整った一般病室のそれとは違つて、明り窓も少なく押入れが六畳に左右一つづゝ残っている。キャンパス・ベッドと木製のベッドは半分がこの押入れに入っていた。勿論、枕頭台などはなくもがなの状態で、リンゴ箱の上に痰つぽ、尿器が一緒に置かれてある始末であった。呼鈴の備えもないし、日

課時限と云った規則も定められてはいない。勝手な時間に着を打ち、将棋に興じ、麻雀を娛しむのである。安静度の指示もないから、二度患者と思われる者が、血痰を吐きながら、洗濯しているし、その反面では五度に近い退院患者が廊下を駆け廻って女患者と戯れている始末で、病院という雰囲気からは凡そ遠い存在でしかない。

看護婦の巡視は、朝と夕べの検温時と九時の消灯時に限られてあった。だから巡夜から深夜交替の看護婦の二時半の見廻りは殆んど守られていなかったし、どちらかというと、「深夜」勤務の看護婦などは、看護婦勤務室を留守にして、小使室での茶呑み話や、予防着のアイロン掛けに費やす時間の方が多いようであった。

患者の「トンヅラ」(逃亡)も、この頃になると屢々だった。賭博で負けた患者が借金の苦面に策がなくなるなると、夜中を待って、こっそりと病院を逃げ出してしまふのである。おまけに病衣を持ち逃げする。その上、眠っている患者のズボンやジャンパを病室から持ち出し、便所の中で身に着けて飛び出すのであるから始末が悪い。更に悪智恵の働く者になると、堂々と医師から外出許可を取り、都内に出たついでだからデパートで買物をしてきてやると言葉巧みに、療友たちから、五百、六百と金を集めて、その儘、どろんをきめ込んでしまふ。この手には皆よく、ひっかゝったものであった。

賭博は、患者たちにとって四六時中、切っても切れない因果の種でもあった。元気のいい患者は娯楽室で、天下御免の御開帳であったか、安静二度の熱発患者やシユウプをおこして寝たきりの患者まで、雑誌を使ってペイジめくりの乞食博打をやる。一三五頁ならば、一と三と五で、かぶ(九)になる。二四四頁なら拾、つまり零で、ぶたである。一回の勝負に拾円をかけるのである。こんな他合もないことが患者にとっては、退屈しのぎの遊戯のひとつでもあった。警察からは、よく賭博の抜き討ち的な捜査が行われた。こうした「やばい」ことには峻敏な患者達は、いつも巧みに機会や情報

を掴んでいて、絶対に現場を見せるようなことはしなかった。

風紀の問題は素乱を極めていた、こゝでは社会の道徳や倫理は不必要ですらあった。こゝには、こゝだけの「社会」があった。つまり「租界地」なのである。

患者は書籍は余り読まない。第一、読書すること、それ自体が既に面倒臭いことであつたし、それに文字の読める者というのが、きわめて少ない。稀に見受けると、それは悪い原色で彩られた「夫婦読本」や「愛情生活」であり、講談本は「忍術三勇士」や「国定忠治」に限られていた。彼等は好んで春画や春本に耽溺し、悪戯の温床を培う。

男の患者の中でも、元気のいい者はそれぞれ「女」をつくって夫婦取りである。そして「男」のある女には、他人は絶対に手を出さないという確乎とした不文律が守られていた。享楽主義者の倫理である。

女は男の為に洗濯から身の廻りの面を見るのである。男の好む、おかずは、手もつけず残しておいて、食膳に供したり、御飯なども握り飯にして男の口に合うようにして食べさせたりする。世間の世話女房と少しも違わなかった。従って彼等の愛情の表現方法も実に原始的であり、且つ大胆であつた。接吻などは堂々と人前で、やっのけたし、一つベッドでの抱き寝などは普通であつた。甚だしいのは、これ見よがしに見せつけるのさえある。が、概して、一夫一婦のおきてはよく遵られてあつた。他の男が女を寝取った場合には「おとしまえ」が付けれられ村八分のような取扱いを受けた。それ故、男も女も安心して夫婦生活が営まれるのである。ベッド一つが小さな家庭の全部であつた、このベッドの上で食事も裁縫も生理の充足も行われた。しかし総体的には矢張り徹底した野獣派が多いので「女」の問題ではよく喧嘩が行われた。彼等の恋愛は露骨な性愛一辺倒であつたので、たゞ本能の赴くまゝに慾情すれば、そこが病院

であることも、彼等自身患者であることさえも忘れてしまい、果てはみだらな雰囲気、恍惚と陶酔するだけであつた。

ストリンドベルとは、

(よき性欲は人を生かし、悪しき性欲は人を殺す)

といつてゐる。しかし不逞無頼なこの患者たちは、たゞ悪の愉しさを発酵させるだけで、他に何もプラスするものはなかつた。だから風の死んだ、むし暑い夏の宵など、女患者達は煽情的な肢態で白衣の裾をたくし上げ、太ももも露わに、あぐらをかいて涼をとる始末で、院庭の芝生では妖しい『真夏の夜の夢』が展開されるのであつた。

こんな状態であつたから、看護婦の患者に対する蔑視も徹底してゐた。患者に対する扱いもひどく冷たい態度であつたし、愛情を以つて接する等と云ふこともなかつた。治療も検温も注射も、すべてが事務的であり、親身になつての看護などは、とうてい望むべくもなかつた。ナイチンゲルなど云われ、白衣の天使と称される看護婦も、この病院では姿や形を変えた刑務所の看守同然であつた。医師までが患者を罪人扱いだつた。

だから、ストマイの注射などは、むしろ滑稽を越えて悲惨な見世物ですらあつた。

毎月曜と木曜日に注射が行われる、患者たちは一齊にベッドに尻を露出して受注を待つのである。十二人から雑魚寝している大部屋の女室などは奇異な眺めであつた。

看護婦は何故か女患者に対しては意地が悪かつた。同性のそうした浅ましい恰好に対しては意識的に嗜虐的な態度をとつた。

太い注射針の長さは五センチを越える。その針が、つまんだ贅の筋肉にすっぽりかくれてしまふまで深く射し込んで注射をするのである。これが廊下をへだてた男の部屋から丸見えである、女患者にカテエテルを使つての導尿など平氣であつた。又、看護婦はそうし

た同性の恥らいを、わざと男たちに見せつけるような態度をとつた。明らかな加虐性であつた。尤も四六時中、手術や解剖に付き添つてゐる看護婦の生體が何時か、そんなサジスチックな官能を露出してしまふせいとも知れない。

入院して来る女患者は、きまつて頭の髪をバリカンで刈り取られてしまふ、毛じらみが居るといふ理由からであつた。

看護婦の程度も悪かつた、氣の強い三十女が多かつた。尤もこれ位でない、とてもこの病院の患者を相手にしては勤務が続かない。「馬鹿野郎、しっかりしろい」

と頭からどやしつけられるからだ。

女を持たない患者は雑役のおばさんをその対象にした。年増の雑役婦は未だ失せきれぬ色氣を紅唇にかき立て、男の歡心をかつた。消灯後のベランダや院庭の外れに置かれてある工事の駐留軍の排水用の大土管の中が逢曳に使われた。

患者同志、患者と雑役婦——恋愛は全く自由があり奔放であり、時に野放図に過ぎることもある。その為め刃傷沙汰も再三ではない。飲む、打つ、買う——と云うが、飲酒は殆んど毎晩、病棟の誰かゝたしなんでもいた。嗜むと云うより、あおるといふ恰好だつた。酒は安い焼酎に限られ、女を侍らせて患者たちは四合瓶を平均して空けた。咯血してもやめなかつた。そして騒ぎ廻るのである。夜の夜中に酔つた勢いで院長を呼びつけてマイシンを何故打たぬのかと、とぐろを巻く。彼等はこうした無法極まる行為を敢えて省みようともしなかつた。日頃の「食いつめ者」「墮落者」のインフエリオリティ・コンプレックスが酒の力で愚かなレジスタンスを試みるのである。白衣の患者が酔いしれて、女を抱き病廊を大声でわめき乍ら歩く——それは、東京パレス(都内小岩の遊廓)と何等異なるどころがなかつた。たゞ白衣という異様な服装さえなかつたならばである。こんな挿話がある。

Aは有楽町のガード下で靴磨きを生業としていた。Aは田舎の中学ではあったが、県立を卒業していた。米兵の軍靴を専門に磨くので、みいりも多いのである。彼はその金をヒロボンの注射にことごとく費していた。横浜の自動車運転手がブrouクンな会話を巧みにしやべると同じ理屈で彼も、カンパセイシヨンは確かに流暢であった。G・Iからのうる覚えの南米あたりの俗歌を原語で唄っていた。Aの存在は若い女患者たちの気を引いたものようである。

最初の女は消灯後に娯楽室で、二百円を貰って身体を許した。二度目には女の方から思わせ振りの肢態を見せたりした。夏中、そんな生活が続けていた女は、秋の始めには、ストマイやパスの科学療法によって快方に向っていた身体がたちまち衰弱し出し、咯血までするようになってしまった。尤もこんな出鱈目の療養生活をしていたのでは、何本マイシンを注射した処で、いつかな薬効など現われるものではない。秋風がひととき吹き立つ或る夕べ、激しく咯血して死んでしまった。その次の女は七つになる女の子を連れていた。子供は肺門淋巴腺炎を患っていた。もう一人、四つになる下の妹は常盤台にある保育園に預けてあった。女は身持ちの悪い亭主と別居して生活していたのであるが、結核に斃れ、やむなく民生委員に頼み込んで生活保護の手續を得た経緯を持っていた。未だ二十七歳のこの若い女は男の肌が恋しくて孤獨を啣っていた。Aの女が死んでから一ヶ月目にはもう、Aを咬え込んでしまっていた。嫉妬の強い意地っ張りな女で、Aが一寸他の女とでも話をしようものなら、たちまち柳眉を逆立て、男に武者振りついて不実を詰った。果ては髪の毛を掻きむしって号泣するのである。だから騒ぎがおさまってから、この夫婦？は、それは隣の患者は安静どころではあり得ないといった有様だった。もう病院は療養する場処ではなく、酒と煙草と女と博打に明け暮れる歓楽境ですらあった。

x

x

x

一步、足を踏み込むと、ぶうんと強く鼻を衝くホルマリンやクレゾールの匂い。——それが通常の病院の建物であった。しかしこの病棟には、ついぞ消毒液の匂いなど嗅ぎたくもなかった。便所にすら防臭剤の備えはなかった。申訳のように置かれた手洗台の白い洗面器には、何日替えたのかと思われるような赤い昇永水の溶液が砂はこりを沈澱させていたし、夏場の断水の折などは、さらぬだに汗の匂いにむれ切った病室は水洗の止った便所の悪臭がミックスして、胸つき上げるような夥しい臭いが充満してしまう。非衛生的なこと甚だしいものである。

土曜日の朝早く外出した患者が意気揚々として帰院してきた。彼等はフウ売である。土曜日の遠出を見越し、上野駅に商売に出掛けた訳なのである。コデイン酸(咳止め剤)を貰って病院を出立するといった用意周到ぶりである。土曜と日曜で四千元を稼いで懐ろにしていた。上野駅は彼の縄張りであり、顔が利いたので商売は面白いようにもうかったものである。彼等は土産にトリスの小瓶を二つ提げてきた。

同じ日にボン売である麻薬売りの女がヒロボンとアンブルを大量にかゝえ込んで帰って来た。ボン中毒にかゝっている大半の患者はそれを一本五円で買い漁った。ボンを打って活気づいた患者は、おいちよかぶをはじめ。彼等はボンと称する二〇CCの注射器をひそかに枕の中や、布団の下にかくし持っていた。注射はお手のものである。大型というチクロパンを打って、ひっくり返る患者もあった。ボンがきれると、プロバリンを看護婦から貰って貯めておいて、大量に飲む。陶酔して、肉体の苦痛から逃れようとするのだ。結核という宿業的な病気に加えて、ボン中毒で肉体は疲弊しきっていた。衰弱と中毒症でますます患者は重症に陥っていった。

「おひでさん」がその中毒症の一人だった。

彼は仲間からは「ひで子さん」とも呼ばれていた。ひで子さんは、

いつも顔ばかり当っていた。症状がよい時には紅を塗り込んで、しやなり／＼と廊下を歩く。

「おひで——いゝ男だなア」

など云おうものなら彼——いや彼女は、とたんに柳眉をつり上げて蓮っぱに撥ねつけるのである。

「何さ、失礼ネ、レディに向つて。おゝいやらしい、いゝ男だなんてサ」

と云つた具合である。

男娼——つまりおかま屋さんなのである。「女」を持たない患者は、このひで子さんの袖を引いた。そして、このひで子さんを相手にするのは逞ましい硬派に限られていた。

若い見習いの看護婦たちは、この病院に勤務しても長続きが出来ず、殆んど辞めて去ってしまった。消燈後、見廻りに来た十七になる子は、男たちに掴まって、とう／＼裸にされてしまった事件があった。スカートを捲くり上げたり、お尻にさわったりなどという話は珍らしくもない。新たに転院して来る看護婦なぞ大変である。

「看護婦さん、名前何て云うの、年は、旦那さんは、子供は何人あつて、××××××何度ぐらい？」

よつて、たかつて吊し上げを食わされる始末であつた。

× × ×
類魔と淫猥、まさに赤裸々な官能とスリルの世界であつた。これはその儘、上野であり山谷の縮図であつた。

こうして患者たちは病院に居ながら、症状は悪化する一方であつた。病院側の在り方も旧態依然として、ほしい儘の搾取を続けていたし、施設長としての院長の態度は、傲岸不遜、いさゝかの良心も顧みられなかった。私達患者は、無法者、墮落者として蔑視され、人間的な扱いは凡そ受けられなかった。

「われ／＼は荷物ではない、人間らしく扱ってくれ。」

これが私の最初に書いたスロウガンであつた。こゝから総べてのたゞかいは始まつた。これではいけない、何とかしなければ。——と云うので、心ある五、六名の患者が鳩首して自治会の組織運動を始めた。こうして発足したのが私達の患者会なのである。

三日間に亘る坐り込み斗争で、病院長は声明書と約定書を發表して施設、療養面の改革を誓約した。患者会では一齊の自肅をうたつた。

昭和二十九年十一月十三日、病院は初めて病院らしい姿に戻つた。私達は貧しかった。貧しかったが故に社会人として常にひくい生活之余儀なくされてはいた。しかし私達も患者である前に先ず人間であることを自覚しよう。生活保護法は国の法律であり、日本人である以上、逆境に斃れたわれ／＼は、この法の適要を受けるに少しも卑屈であつてはいけない。当然の権利なのである。私達は、もつと／＼人格的には孤高であり、精神的には貴族を誇つていゝ。ピュリタンであり、ヒュウマニストであり、デモクラットでありたい。教養は学問ではない。自らの修身によつて得られるのだ。おゝらかな心でだれもが、しっかりと光りの道を歩いてゆこう。

人間が生活の灯を失つた時、つまり人間らしい生活が出来なくなつた時、そこに何等かの光りを求める運動が展開される。それがヒュウマニズムであり、人間愛の運動であつた。その光りを掲げるのは、この人間であり、この手なのである。今こそ私達はたゞ、ひたすらに光りある中を歩むべきである。光りある中を。——

われ等は愛す 限りなく

胸をひらいて 仰ぎ見よ

大空高く 青空広し

その心 われ等患者会。——

△三〇、二、一三△

(完)

△編集部註▽ 本稿の送付を受けました当時は、「結核療養患者」闘争の最中で、新聞、雑誌でも大々的に書き立てられ、ニュース・ヴァリユーもありましたが、又、それだけに掲載を躊躇させられていたものです。今回本誌八月号より四回に亘り発表いたしました。

腋 毛 礼 讃

南 俊 夫

今年の夏ほど、町に若い女性の

大胆にワキ毛を風になびかせた年

はないであろう。電車の中などで、

これ見よがしに見せびらかす娘も

少くはなかった。(尤も、これをな

げかわしい風潮だと憤慨していた

新聞の投書を読んだこともある。)

本誌十月号のローカル・レポートで柳沢吉保氏が、「ワキ毛の魅力

力」という通信を提供していられたが、十月号の「平凡」誌上にも

「自然のままのワキ毛の魅力」と題して注目すべき一文があったから、余り長いものでないの、その全文を紹介してみよう。

自然のままのワキ毛の魅力

はやるか？ ヴラデイ・スタイル

十八才の肉体女優マリナ・ヴラ

デイが「悪者は地獄へ行け」でみ

せた水着姿、乱れた金髪のロング・

ヘアに左腕をあげて、ものうげ

に海岸に立つ彼女には、二人の悪

漢ならずとも、フラフラ参ってし

まうほど、セックス・アップール

に溢れたシーンでした。

ところで彼女のこの魅力は、ボ

リュームにあふれた見事な肉体美

はもちろんですが、つづいて公開

された「恋愛時代」といい、脱毛

されずにいるワキ毛が男心をゆす

る大きな武器なのです。「河の女」

内容についての時期的なズレは右の事情によるものですから御承知下さい。

尚、文中、発表に支障ありと思われる箇所は、編集部にて削除いたしました。

のソフィア・ローレン「苦い米」のシルバーナ・マンガノと彼女らも野性的な役柄のときは、ワキ毛をおしきもなくスクリーンにさらしています。

でも、先日フランスから帰国して、いま東京映画の「女囚と共に」に出演している谷洋子さんもワキ毛組。これにならってか、この映画で共演している淡路恵子さんもその一人で、

「別に野性的に見せよう」と意識しているわけじゃないんです。いま出ている『女囚と共に』ではちやんと袖のある服をきてるし、家にも袖のある洋服が多いので、脱毛するのがメンドウでところが本音なの。ステージ(SKDの舞台)に出てた時は規則があつて、

脱毛しなきゃいけないかつたんですよ。ショート・カットがすたれロング・ヘア時代になったから、ヴラデイ・スタイルなんてワキ毛

を取らないのがはやるかもしれないわね。でも、ついこの間までは、夏はとくに、脱毛するのがエチケツトだなんてシカツメラしくいつていたのが、こんどは野性的で魅力があるなんて事になるんだからチョットおかしいワ。とにかく自分に合ったようにするのが一番でしょう。」

というご意見です。

なにとはともあれ、野性美を持ち味にする人が取入れてこそ似合う自然な姿のおしやれといえそうです。今後、ワキ毛を取らないヴラデイ・スタイルがはやるとなると、男性側はますます悩まされるというわけです。

といった具合だが、先日、二回ばかり、ストリップ劇場をのぞいてみたところ、踊り子の半分以上が、房々とワキ毛を生やしているのには、驚くというより愉快に

女武者自刃

藤山秀緒

夏の陣の華

大阪夏の陣によって大阪方の敗北が決定的となった時、女乍らも軍装をまとって敵陣に斬込んだ二人の女性がありました。一人は真田幸村の娘雪路、一人は木村重成の妹志津で共に、華やかな鎧下を着け、緋緋の鎧に白鉢巻、美しい小手脛当をつけ、今日を晴と化粧をつくして乱軍の中に身を投じたのでした。

ともに武芸のたしなみはありましたが所詮は女のこと、何の叶おう筈ありません。ただ、主君のために、今日落城の運命を、共に担おうとする健気な志なのであります。

大手の門をひらかせた二人は、馬に跨り、

「雪路様おさらば！」

「志津様あの世で！」

互に武運長久をとほ云わず、死を潔く全うせんものと、長刀を抱いて、りゅしく左右に立ちわかれるのでした。

雪路の奮戦

雪路は、手勢僅か十数騎を従えて、関東勢の真只中へ切り込みました。突出す槍を左右にひらいて、長刀を払えば、雑兵の首は何なく打ち落されて行きます。

「エイッ」

澄んだ美しい気合につれて、斬り伏せられて倒れる小者たち。

「真田幸村の娘雪路、御相手仕る。」

凛とした名乗り。もはや誰ひとり立向う者もありません。雪路は、ニッコリ笑います。

何人かの敵を斬り、返り血をあびた彼女の男装は勇ましいかぎりです。そうです。

勝ちほこった今こそ、最後の時！ 覚悟の

雪路はキツとなり、遠巻きにしている敵軍をにらみ乍ら、しずかに鎧を脱ぎ捨て、華やかな鎧下姿になり、太刀を外して馬の鞍に結び小手脛当はつけたまゝ、馬乗袴から九寸五分を抜き取り、あぶみを踏止めて馬上に突立ち上ります。

馬の背を股の間に抑え込んで立上った彼女は、落付いた声で

「お相手はなきか。此の上は女乍ら馬上に腹かき切り、武士の面目、死後の誉、潔う相果てます。方々、お見届け下さりませ！」

ワトツと敵陣がざわめき、やがて人々は固をのんで雪路の馬上姿を見守ります。

均整のとれた肉感的な姿体を、乗馬ズボンのように脛当でしぼった鎧下、馬乗袴をはき上半身は、白無垢の繻紵、顔は緊張してキリリ下唇を噛み、白鉢巻が一きわ美しさを添えて、雪路は輝くばかりの晴れ姿です。

女の身で腹を切るというのは、よくよくの事でなければいけません。敵兵たちも成行き如何にとり出して見物しています。

「武士の自害の手法を見せる。方々おさらば

!

雪路はキッパリ云って、九寸五分を袖で巻き、繻絹の前を寛げます。雪の肌に乳房が見え隠れして息をのむ敵陣。

彼女は馬上にあぶみを踏止めるや、九寸五分に両手をかけ、左の脇腹へ突込んだのです。

「むうッ……」

低く呻いて、九寸五分に力をこめます。グッと腹の肉が刃をのみこんで行きます。

「ウウッ……」

かなり深く突立てたとみえて、彼女は引廻そうとあせり乍ら刃は遅々としてすすまらず、鞍に股間をしめつけ、腰をしごいて悩ましく悶えつづけるのです。

雪路の最期

やがて、彼女は決心したように、前かきみになり乍ら、体をひねり、刀を一気に右脇までキリキリと引廻します。

「ううむッ……ア、ア」

グッと力をこめるにつれて、かき切った傷口が柘榴のように真紅の肉をあらわにして、血汐がどくどくとほとばしります。



雪路は、のめりかける上体を起し、あぶみをふんばって大きく息をつきます。血は馬乗袴から鞍へと滴り落ち、やがて馬腹を伝って草を染めて行きます。充分右脇まで引きつけておいて、雪路は、再び腰をうかし、九寸五分に諸手をかけて

「ウウムッ！」

ぎりッ！ と一抉り、気丈にも斜左へ切り上げようと肩をふるわせるのでした。

折しも大阪城は紅蓮の炎につつまれて行き

ます。血走る眼に彼女は懐しい大阪の城が、くづれ去るのを見るや、引廻す手をとめて静かに頭を下げます。

「上様、私もお供仕りまする。」
彼女は口のうちにそう云って、再び刃に力をこめます。下腹から鳩尾を通って左の乳房へ。想像を絶する苦痛が彼女を待ちかまえているのです。彼女は二三度大きく喘いだとみるや

「うう、ううむ、うう、うう、うう、ううむ、ううッ、ううッ……あゝむ、ううッ、ううッ、むうッ！」

押泳えた呻きに身悶えしつゝ、殆ど鞍を股間に抱えこむような姿勢で、彼女は、女乍らも馬上に割腹を仕とげたのでした。

乳房の下までかき切って、ほんと苦しげに息をついた彼女は、最後の力をふりしぼって「ううッ」

とばかり心の臓へ切り込みます。流石の彼女も、はげしく痙れんすると、力つきてどうとばかりに馬から落ち、四肢をふるわせて苦しき悶えます。そして、背まで突き抜けた短刀を抜き取ろうと、ウーム、と呻きつゝ体を

しごきますが、深傷の苦痛に弱り果てた彼女の両の手は、すでにこわばって、虚空をまさぐるのみです。名もなき者の介錯はうけたくない。彼女は、激痛に顔を引きつらせ、脂汗をうかべ乍らも武士の誇を捨てまいと、心をしづめ、刃を引きぬこうと健気な努力をつまめ。刃を抜けば、すぐに断末魔が来るのです。驚くべき意志の力です。

「ウ、ウ、ウ、ッ」

あゝ遂に成功した。刃は唐紅にまみれ、無気味な光を放って引き出されました。血みどろの手に握りしめられた白刃の凄惨さ。

彼女は烈しく肩で喘ぐとみるや、がばと俯伏せに倒れます。具足を帯びた両足が、ぐつと屈み、そしてはねかえすように揉み合うのです。

人々はかけ寄ります。体をよじって、彼女は苦しく悶えます。しかし、「苦しい」とは一度も云わず、蒼白の美貌に、流れる脂汗、血しぶきを染めなして、気丈にも何度か起き直ろうとします。そして遂にすべての力もつき果て、彼女は悲壮な呻きをのこして血の海へ顔をうづめて行くのでした。人々は、この美しい女武者の血塗れの屍体を前に呆然と立ちつくしています。こうして雪路は華々しく散って行ったのです。

志津の覚悟

志津はその頃、関東勢のために捕えられてしまったのです。志津は、本多佐渡守の軍勢の中に斬込んだのですが、不運にも馬を撃たれ、落馬したまゝ取り抑えられてしまったのでした。

彼女は身を悶えて縄目の恥をいといましが、軍兵たちは巴御前を思わせるような美しい彼女の男姿に卑しい目を光らせ、勢のおもむくまゝに、皮肉にくい入るほどの縄目を加えたのです。

「はや、首打たれよ！」

彼女は、屹としてこう云いきります。肉に食入る縄目も、厚地の鎧下、小手脛当の姿なので、むしろ女の情感をそゝり、程よくふくらんだ彼女の乳房は妖しく燃えるのでした。

しかし、彼女は本多佐渡守の陣所へ連れられて来ると、縄目を解かれ、床几を与えられて、武装こそ取りのけた姿ながら、侍としての名誉を全うした待遇をうけたのです。こうなると、徳川家から預りの捕われ人として、志津は勝手に自害することはできません。それでは、侍として鄭重に扱ってくれた本多佐渡守へ義理が立たないのです。

でも、志津は死より外の事は考えません。大阪城も陥ち、自分も生捕りの恥辱をうけ、なんでおめ／＼生きていられましょう。どうしたら深い最期をとげられるか。志津は、陣所の一角に座をしめてジッと物思いに沈むの

でした。

やゝあつて、家康からの使者が来ました。

使者は、家康が、いたくその義烈に感じ、女乍ら健気の者、且は志津の父、木村常陸介との旧交に免じ、一命を助け、家康が仲立ちにしかるべき処へ嫁入りさせん。命永らえてしかるべし、と述べたことを告げます。じつと聞いて居た志津は、やがて静かに面をあげます。

「大御所様の仰、忝う存じます。さり乍らいまは生きて甲斐なき身、蕾のうちに散りとうござりまする。きけば雪路どのも御生害あそばした由、志津もこのまゝ自害致しとうござりまする。何卒、恥しながらこの姿のまゝ士分の最期、おゆるしのほど、よしなに言上願ひ上げまする。」

使者は家康のもとへ飛んで、この旨を伝えた。家康は、折角の厚意を拒んだ志津を不快に思ったのでしよう。しからば勝手次第、たゞし自害は本陣の庭前、衆人環視の中で行うよう。亦いかなる方法による自害にもせよ介錯は行わぬ事と、申渡したのです。

志津は、自害をゆるされた事をきくや、美しい眼もとを赫らめてニッコと笑み、「士分の最期、おゆるし下され、忝う存じます。此の上は、女乍らもいさぎよき切腹仕り、皆々様に女の腹切るさまを御覧に入れまする。」

切腹！ 本多佐渡守も使者も顔を見合わせた。いまして、真田の娘が馬上に凄惨な切腹をとげたというしらせをうけ、その最期の模様もきいたばかりです。腹を抉り、のたうち廻るその死の苦悶は、介錯なしで腹を切る者が、いかに悲惨なものかを実証していたからです。

「折角なれど、女の身で切腹の儀は思いとまられよ。いままも真田殿の息女、腹かき切り乍ら、死にきれず、あられもなき姿にて苦しみ悶えたりと聞き及ぶ、まして御身は戦場と違い、御本陣の御庭先にての自害なれば、介錯を頼まずに御最期とげらるゝ最上の方法が他にある筈。咽喉を突くもよし、心の臓を突くもあらんかと心得る。」

「はい、恐乍ら、志津は戦場に討死の覚悟でござりました。武運拙く、かく捕われの身となります上は、女乍らも武士、ほかに仕様はござりませぬ。我儘をおゆるし下さりませ。」

志津の決心は変わりませんでした。雪路どのも腹を切つてか。志津も。と彼女は雪路におくれじと腹を切る決意をかためるのでした。

佐渡守も使者も、いまはやむなく、しからば、いまより半刻の後、と申渡して去った。

志津は、紅、白粉を取寄せ、美しく化粧をつくり、鎧下、馬乗袴、小手脛当など、一つ一つ丁寧にあらためてゆるんだものは締め直し、みだれたものはととのえて、髪も梳き、

いまは清々しく自刃の準備に忙しいのです。時刻が移ると、志津は前後を侍に守られて凛々しい男装に身を固め、静かに庭前へと歩んで行きます。

幔幕をめぐらした庭には、正面に大御所家康、左右に家臣が居流れて、夕やみせまる空の下、かぎり火がたきはじめられて、はるか大阪城の方には余燼が天に沖して居ます。

並居る一同は、きりゝとした彼女のズボン姿——軍装——に感嘆の声をあげます。

この美しい女武者が、これから介錯も頼まず、腹を切つて死んで行く。——倒錯美の極致が、こゝに展開されるのです。志津にとつてはサディズムもマゾヒズムもない。只、主君に殉じて、武士の誇の中で死ぬことの喜びが、この苦しみをたえしのぼせるのです。

志津は定め席に着いて、家康を見上げ、手をつき、

「木村常陸介の娘志津、士分の自刃をおゆるし下され、忝う存じます。お見届け下さりませ。」

と一礼した。家康は美しい志津を見ると、この乙女が、介錯もなしに腹切るのかと、不安にもなり、あわれでもあったが、一旦上意として申渡した上は、変更はゆるされないのです。志津は、

「御上意にまかせ、介錯人をたのまず、自害仕ります。なれど女の身、見苦しき態と相

成り、時刻うつりて苦痛の様を永々と御目にかけるやもはかられませぬ。何卒しばしの御情察り、息絶え果てますまで、お見届けのほど願ひ上げます。」

彼女は腹を横に二条、縦に一条切り、最後に乳の下、心の臓を突けば死にきれると考えた。しかしこれは容易ならぬことである。腸がはみ出すことも考えられる。さればとて浅く切ったのでは彼女の名譽心が満足しないのです。

彼女は唇を固くむすんで自刃の支度をつづけて行きます。

死 に行 く 烈 女

用意がすむと、彼女は短刀をぬいて紙を巻きしめ、一同に目礼しました。

彼女は両膝で立上り、短刀を腹にあて、決心したように刃先を二三寸腹からはなし、右手で左の脇腹へグツと突立てます。

ハツと一同も息をのんでいます。

「ううっ」

と低く呻いたが、取乱す様子もなく、志津は、いま突込んだ刃の苦痛をかみしめるようにジツと右手で刃を抑えています。一呼吸。

志津はやがて左手を添え持ち、「むうっ」

と低く声を発し乍ら、シリシリと刃を引廻しはじめました。女ざかりの腹の肉は、キリ

キリと無残に引裂かれて、美しい眉宇からも血の気が次第に引いて行きます。

「介錯なしで死ね！」

これほど無残な命令が、名譽として強制された武家時代には、女といえども、この日のあることを予期しなければならなかったのです。

彼女は上腹部を真一文字に切った。一同はホッと息をついて彼女の次の行動を注目しています。彼女はキッと歯をくいしばって

「う、う、う」

わずかに体をふるわせ、刃を引きぬくと、今度は血まみれの下腹へ、ぐさとばかりに突立てるのでした。

「むう……ッ」

呻きを休めて、小さきみにふるえる手をシツカと刃に持ち添え、ずぶずぶと下腹を裂いて行きます。二筋切られて何でたまりましよう！ 白哲の美貌は苦しみのために異様な美しさを保ち、白鉢巻のきわからはつぶつぶと脂汗がふいています。

「うゝむッ……」

やゝ前のめりの姿で血まみれの短刀を引き



抜く。

肩で喘ぎ乍ら、今度は、抜取った短刀を両手に握りしめ、女ざかりの両の乳房の谷間へ押しあて、苦痛をしのんで上体を起します。

二筋切った腹の傷さえ、女の身では、たえがたい苦痛です。しかし自ら腹を割いて死なねば武士の恥辱です。いまは、男装の彼女は若武者の心でありました。乳房は興奮に凝って熱い。

彼女が短刀を鳩尾に押しあてると、見物の

人々は一様にざわめいた。女だてらに切腹などと大それたと悪口した人々も、取乱す様子もなく見事に腹を二条切ったのを見た時は、あまりの健気さにアッと驚き、流石は木村重成の妹よと血みどろの刃を挟って苦しむ志津に三嘆の声を放ったのでした。

彼女は、ジッと刃を鳩尾に擬して動きません。これから恐るべき絶大な苦痛を想ったのです。肝の臓が切り開かれる。失神———そうです。氣を失えば切り損じて恥しい姿をさらさねばならないのです。氣を取直した志津は、声をあげまし、一同に向って訣別の死名乗りを力のかぎり叫ぶのでした。

「き、木村常陸介の三女志津、イ、イ、いまより、十、十文字腹……仕る。オ、女乍ら武士、い、い、いさぎよく散ります。方々、お、おみとどけ下さいませッ」

云うやいなや、発止とばかり刃は鳩尾へ突立った。

「ううむッ」

腹から絞り出す悲壮な呻き。

「ウウウッ！」

壮烈な自刃です。彼女は血汐にすべる両手を、シリシリと切先にもたせかけつつ腹を縦に切り開いて行くのです。

「うっ……」

臍の右をかき切って袴に達した志津は、左手で袴を押下げ気味に一気に五分ばかり深く突込み、下腹を抉り立てます。

「あ、あ、ああ、うう、ううう……」

「うううっ、うっ、うっ、うっ……」

男も及ばぬ見事さです。

家康は感じ入り、使をして彼女に褒美の言葉を送る、この上苦しむは無益なり、介錯せんと申渡した。

割腹を中止して彼女は両手をつき、喘ぎ乍らこの思命をきいた。彼女は苦しい息の下から、

「カ、忝う存じます。カ、カ、覚悟せしこの自害……いま、いましばしの御猶予たまわり、ひ、ひとりで死にとうござりまする。」

家康は、これを聞いて再び不快になります。志津が自分に意地を張っているように思えたのでしよう。

「さほど勇ましく死にたくば、腹わたを引出し、女だてらに、のたうってみせよ。」

と云い切った。

彼女は役人からこれをきいた。もう彼女にはその力は覚束なかった。しかで彼女は、固い意志の力で、臍を引出し、最期を飾ろう

と決心するのでした。

「何、こ、こ、これしきに！」

刃を抉り取ってバツタリ白布の上に捨て、右手を腹へ、グッ！とさし入れます。

小手あてのいかめしい金具が傷口へあたり彼女は身悶えして苦しむ。

「あ、ああッ、アア、アアウウッ……」

「ウウム……」

泳えかねた呻きと共に、血みどろの小腸をつかんで体をしごきます。腸が、かがり火をうけてぬめぬめと輝く。齒をくいしばってズルズルと内臓を引出す凄惨さ。

「う、うう、ううっ、うっ、うっ、うっ、アア、アア、アア、うっ、うっ、うっ、ううっ」

志洋は横坐りになり、白布の上へ、腰をしごいては腸を吐き出しています。

家康は、負けた、と思いました。そして自ら立って彼女の前へ来ます。

「見事だ、家康の負けじや。秀頼殿は良き家来を持たれ、羨しう思う。此の上は片時も早う苦痛をのがれよ。」

彼女は嬉しげに家康を仰いだ。蒼白な顔は美しくもりりしかった。しかしもう舌がこわばって物云い得ないのです。

志津はきりりとはいた馬乗り袴、小具足の両肢を割って、女乍らも健気に死にいどみつづけます。志津は取乱すまいと必死でした。

彼女は気丈にも、短刀をさぐり取って、心

の臓とおぼしきあたりをさぐります。

「ウウッ」

五分ほど突込んだ短刀は、惜しや急所をそれます。

「ううっ……」

齒をくいしばって引抜く志津。

やがて、大きく喘いだ彼女は、再び

「ウウウッ」

五分ほど突込みます。たしかに手応え。こそぞ心の臓のありかです。彼女は腰をうかして刃に力をこめ、ぐっと深く刺し込みます。グッ！と体が硬直したかと思うと

「ウウーッ」

泳えかねてが惱ましい絶叫。はげしいけいれんが彼女を襲い、彼女は

「う、う、う、う、う……」

と、烈しく呻き声をあげます。そして最後に胸をうらしたかと思うと、キッと眼を見開き、棒のように白布の上に打伏して、男のような姿勢で散って行くのでした。

なまなましく血を吹く屍体は、白蒲団に包み込まれ、侍に担われて庭先を去って行きます。ふとんからはみ出した血まみれの馬乗袴具足の左足が、心なしか、まだけいれんをうづけているかのようであります。

かくして、大阪夏の陣に散った二人の女性は烈女の鑑として永く語り伝えられたのです。

(完)

ザツヘル・マゾツホ

黒

女

皇

沼

正

三 訳・解説

(編集部より) 本稿は十月号にて全部掲載の予定でしたが、手違いにより、解説の一部が脱落いたしましたので、こゝに補充いたします。

六

第四章の怖ろしい晩餐は、本作品の眼目であり、見事な漸層法でもあるので、比較的詳しく抄したつもりである。

ナルダの腹は決っている。帝を最後には殺してしまうつもりなのだ、その前に散々玩具にしてやろうというのだ。しかも一応は処刑の理由を必要とするから、兼ねてその方にも役立たせようという計略である。貴族達を暴発させるにはゲデミュンの四ツ裂を要したこの男を怒らせ「女皇に対する反抗」罪に陥らしめるには、鞭で打ってやるに限る。奴隷だ——と口でいうばかりで、実際には一度だつて人から鞭たれたことのない男を、本当に奴隷見たいに鞭つてやれば、きつと跳びかゝってくるだろう。鞭つ理由を作るためには、奴隷としての仕事を命じて失敗させれば良い。食事の給仕をさせてこき使つてやろう——前晩の中にナルダとしてはそこまで計算してあるのである。あとは巧妙な演出だけだ。

一方、帝の方は最後まで意外の連続である。奴隷として女主人の食卓に給仕する、という楽しい恋愛遊戯の予想で登場すると、思いの外厳しい態度に出られ、酷使される。しかし彼はそれをナルダが

上手に芝居しているだけだと信じている。いや虫の知らせか、次第に何だか恐くなつて来ても、そう信じないではいられない。鞭たれても、縛られても、死を宣告されても、なお、お芝居であつて欲しい、という望みを捨て切れないのだが、しかし、事態の進展に従つて段々とナルダの真意が分つて行つた時、自分の足許の大地が崩れ落ちて行くような不安な恐怖を感じたであろうことは容易に想像できる。

しかも帝は、こうやって自分を裏切り、自分を陥れて殺そうとするナルダに、——そういう残酷さの故に——いよいよ恋いこがれるのである。ナルダの方もそれをよく知っている。そこで、最後の足接吻の場面になるわけだ。殺そうとする男に対して「もう一度足にキスさせてやろう」というナルダ、しかもその意図は彼の「愛情がどの位深いかを試す」に在るのだ。美女の驕慢さをこれ位残酷に描出した人が他にあるうか。そして自分を殺そうとする女の足に情熱的にキスするウラジミール、彼こそマゾツホの理想とする「愛の殉教者」の名に値する人物だ。二人ともに文学史上、マゾツホをまもつて始めて登場したといつてよい。とまれ、この足接吻の場面は私を甚だ興奮させる。

七

然し、実をいうと、殺してしまつてはかたなしで、私の好みからいうと、最後でウラジミールを殺さず、生かしておいてナルダの治世を見させたかった。彼女の篡奪の経験に徴して帝を生けておいては危険だ、というのは疑問で、少くともナルダに対しては、帝は心底から奴隷となるに違いないのだから、この男がナルダの治世をもう一度窺うということは到底考えられないのではなからうか。もし心配なら、再度擁立される可能性をなくすために、彼の肉体に手を加えておけば良い。「公妃の復讐」のマクは、復讐のために畸形化して生存させられた。帝はナルダにとって憎い人ではないのだからそれとは違ふが、自分の帝位に危険のないようにして生かしておく方法をもし考えたとしたら、同じような処置に出ることもあり得たと思う。殺されるのが良いか、犬にされるのが良いかと聞けば、ウラジミールは後者を選んだに違いない。(命が惜いからでなく、ナルダの傍にいたいから)。そこで、チルギスに首を刎ねさせる代りに両手両足を切断させ、四ツ這の犬にしてしまつたらどうだったろう。ついでに去勢してしまえ。そして寝台の柱に繋いでその下で飼うのだ。運動不足にせぬためには例のバルコンに出してやる。寝室を通らずには外に出られないのだから他と通謀する虞はない。もし、彼自身通謀せずとも、前帝が生存してるだけで擁立の危険があるというなら、誰も二度と彼を上に乗こらせないと思われないほど下賤な存在にまで貶しめてしまえば良い。例えば彼女の便器の掃除をさせる。手がないので他処に持って捨てるということができないから、内容物を自分の腹中に収めるしか掃除の方法はない訳だ。これを繰り返す中彼自身が便器そのものになるまでに仕込まれてしまう。ナルダの夜を慰める愛人達の第一号には美青年イエゴールが選ばれる

だろうが、寝台の上の二人は寝台の下に置いてある生きた便器にはもとより何の遠慮も感じない。いやそんな物の存在自体そもそも念頭にない。二人がそれを思い出すのは、愛戯のあとや生理要求からそれを使用しようとする、その直前に過ぎず、使用し終ればまた忘れてしまう。普通の便器が置いてある時と変りはないのだ。寝台の下に置かれた便器——あまり酷いというのか？　だがナルダは彼を「好き勝手に」処分する権利を持つていた筈だ。彼はどんなにされても不平をいわぬと誓った筈だ。ナルダが彼を便器にしたとてウラジミールには不平はいえないのだ。……が、便器(になっている男)を皇帝にするためにその便器の使用者(である女皇)を打倒しようなどとは誰も考えるまい。とすればナルダが、彼を危険としそ殺したのは、少々早まり過ぎたのではないか。

それに、この運命を甘受するかどうかで彼の「愛情がどの位深いかを試す」ためにも彼は生かしておくべきだった。けだし、自分を単なる便器としか思わなくなった女主人になお片恋を捧げて、使用されるのを喜び、進んで本来恋敵たる彼女の愛人にすら——それが彼女の意志なるが故に——奉仕するを辞さないという奴隷的情熱は自分を殺そうとする愛人の足にキスするよりも遙かに献身的な愛情の表現といえようから。

勿論これはひとりよがりの脱線だ。小説の構成からいえばウラジミールの首は刎ねられねばならぬのかも知れない。然しマゾッホの他の作品の傾向から見ても、恋する女が、自分を捨てて他の男を抱くというテーマは彼の好んだ所だ。ウラジミールを生き永らえさせてイエゴールに奉仕させたいという私の気持も、マゾッホは理解してくれたに違いないと思うのだが。

(なおマゾッホの汚物趣味については手帖第九十六項参照。)

ある夢想家の手帖から

第百返事 (その三)

明日午后正三時に私の所において。私から貰う鞭打ちを楽しみにして良いよ。とても良く撓う籐鞭を用意してある。アンナも新しい白樺の笞を束ねた。私と一緒にやりたいそうさ。この前の時、後に奉仕させる味を覚えて以来、彼女は夢中なんだよ。今度やらせて見て、この前見たいに巧くできなかったら、本式に引っぱたいてやるんだ、と今から云ってるよ。たっぷり打擲してやる。お前が長いこと妾の所にこなかった罰として、鞭で二五、いいかい、籐鞭で二五、お前の尻を剥いてゆっくり撲ってやる。お尻が赤や青の色とりどりになって膨れ上がるのが分るだろうよ。もしお前の奉仕の具合がこの前より巧くなかったら、一層ひどく尻を撲ってやる。二五倍じゃ問題にならない、そんなのは妾は撲ったといえるとは思ってない。鞭に飽いたら目先を変えて、今度は笞を持って裸の尻を可愛がってやる。これも随分面白いだろう。撲った痕がみみず腫れに腫れ上って、お前が痛さでヒューヒュー泣くまで撲ちのめしてやる。そうやって前からも後からも上手に奉仕するんだよ。そしたら御褒美には

沼

正

三

美味しいお酒をあげるよ。だけど受け損って横に引掛けさせたりしたら、さあ今度こそ本格的に、腿だの足の裏だのを棒で撲る、したたかな打擲を覚悟するが良い。その後でお前の口の中えお酒を注いでやる。分ったか、奴隷犬め。アンナはそれをしたくてウズウズしている。お前にあれのお酒をじかに飲ませてやるんだよ。

(以下略) (鞭と笞については第三十項及び次号の補遺参照)

準三者関係や女友達と同棲するドミナのことを述べた機会に、この手紙を紹介することにした。前項冒頭のものとは別である。モルは右の相手の男からこのドミナへの長文の手紙も合せて紹介しているので、いずれ訳出するつもりである。

このドミナはアンナという女友達を持っている(恐らく同棲している)。そして自分の所に来たマゾヒストをアンナの奴隷に譲ったり便器にまで仕込んだのを彼女にも貸してやったりするのである。この前の訪問の時アンナは彼を借りて特殊奉仕をさせたことが分る。正に準三者関係である。

鞭撻の約束は少しくどすぎる。勿論男の方からの注文もあるのだ

が、それにしてもくどいという感じを受ける。これは筆者自身のためであろう。モルも、この文章が、単に客を喜ばせるためのみでなく、彼女自身のサディズムをも刺戟しつつ書かれたものである可能性を認めている。即ちこのドミナはサディステインである（前項参照）。

然し、女二人には同性愛関係があると見て良い。同性愛女性は特殊性感が発達している。彼は彼女等の「生きた性具」にされる。本文で明らかのように、彼に対する鞭撻は、舌による作業の最中に行われているのである。女一人では奉仕させながら、尻を打撻することとはできない。二人いると、一人は奉仕を受け、一人は鞭撻を握って男の尻を鞭つ、という具合にやれる。これは男にとっては奉仕と鞭撻との両快感の結合として大変喜ばしいことであるし、女達にとっても一方がサディズムを満足させつつ、他方が女子同性愛的性感にもひたれることになる。つまり男を完全に性具しうれば、それは女同志の相互奉仕に外ならないのである。これは、前項の両碩学のように、職業的女主人が女と同棲してゐるからというだけでサディステインであることを否定してしまうのが、少々危険なことを示すものと云える。

ネクターのことが二度出て来るが、繰返しではない。モルが一緒に紹介している男のドミナ宛の手紙と合せて読むとはつきりすることだが、ここでは先ず便器を大盃になぞらえて、それにネクターを満してやる。ところがその盃の保持が下手で、折角の美酒をこぼしたりするから、盃を使わずに直接口中にネクターを注ぐことになるわけである。つまり最後に人間便器にされるのだ。アンナは自分にもこの人間便器を使わして貰えたと聞いてワクワクして喜んでいるのである。

末尾の省略は残念だが、モルが一番汚らしい所を省いたと云っているのを見当がつくだろう。

準三者関係は、人間便器思想を最も深く味わせるものである。そもそも排泄物という汚らしいものに対する嫌悪感が克服できるのは、本来ドミナに対する強い愛情を前提にし、彼女のものなるが故に、という心理構造をとるからである。つまり人間便器は女主人専用であることを内心は願っている。然し便器一般は無生物で受動的に使用されるものであり、自ら使用主の選択はなし得ない。そこで人間便器は、右のような内心の願望にもかかわらず、女主人から便器らしく扱われない。彼女としては自分の同格の者に便器の共同使用を許すこと或いは便器の使用権を譲渡することは少しも差支えない筈である。即ち準三者関係において女主人の交替が行われることは、専用関係を否定する点で最も便器らしく取扱われたことになる。人間便器たるの幸福感は準三者関係におかれることによつて極まるのである。（三関係係における女主人の情夫に便器として使用される場合は、情夫は女主人の専用権を女主人との特殊関係故に行使することを許されているに過ぎないから、心理的には準三者関係と同じでないのである。）

第百一 米国兵の日本女性狩獵

土路氏「潰滅の前夜」の家畜化小説としての意義については、既に別に（九月号）論じたが、実はあの時わざと論じ遺した点がある。三者関係の概念を導入した現在なら理解し易くなったと思うので、以下に説明を試みてみる。

この作品は女性虐待を主題とする。Y国軍の日本占領を控え、その将兵の進駐に備えて、彼等に奉仕する性的奴隷の大軍を作り出すため、日本女性を組織的に誘拐し馴致する。そういう内容である。家畜化ということを離れて、この内容は私のマゾヒズムを昂奮させる。何故だろう。私は「蜘蛛と蝶々」に対しては、余りの女性虐待に反感さえ覚えるのだが、同じような苦しみ方をする「潰滅の前夜」

からは、かきむしられるような快感を覚えるのは、何故だろう。

私はこれを三者関係の心理を以て説明したい。妻を奪われたコキユの気持——自己省察の結果、私の見出すものはこれである。しかも、更に分析してゆくと、この三者関係はM第二形式（第九十七項参照）に属することが分つて来る。優位結合が隷属関係であり、劣位結合が、対等関係であるような三者関係——これはマゾ小説ではあまり見かけないものだが、ここは正にこれなのである。日本女性一般は日本男性一般と正に対等の関係で男女結合が予想せられる。その日本女性一般が異国人男性一般から畜生同然に扱われることによつて、日本男性一般が劣位に貶されたことになる。異国人とは異質な日本人という扱え方がこういう三者関係の心理を可能する。「蜘蛛と蝶々」ではこの異質の対立がないので、虐待せられる女と自分との特別の結び付きを観念し得ず、従つて三者関係の心理が成立しないのである。

さて右のような形でマゾヒズムが感ぜられるのなら、もっと手近な所に好適な材料がある。Y国軍進駐を空想するまでもなく、私達は終戦以来特権階級として白人の軍隊を戴いているのだ。彼等の性欲は日本女性によつて満されて来たのだった。Y国人は白人でないこの点からも私のような白人崇拜者には、この現実こそ土路氏の空想以上に尊重したいものである。そして、水野浩「日本の貞操」五島勉「続日本の貞操」同氏「アメリカ兵の性生活」神崎清「夜の基地」戸伏太平「洋娼史談」等のルポ物や実話を典拠とした藤原審爾「みんなの見てる前で」及び「裏切られた女達第二部」（小説公園連載中）等の創作、これらの資料は、果して私のマゾ的な期待を裏切らない。

この際、いうまでもないことながら、既に洋娼たる女性の生活よりも、良家の女性が洋娼に墮落して行く過程の方が、先ず関心を惹く。けだし、良家の女性となら対等の結合を観念し得るのだが、娼

婦では私以下の存在と考えられるため、三者関係の定式に外れてしまふように思われるからである。（但し次項後半参照）

RAA（国際親善慰安協会）という大規模な慰安施設の話は私を昂奮させる。降伏直後、聯合軍進駐の直前、政府融資五千万、民間出資五千万、計一億円という当時としては大会社が設立され、政府から物資その他諸般の便宜を受け、警察の協力を得て、五万人の洋娼の作出と確保に狂奔した。既存の娼婦は一万三千人で、不足分は民間女性から求める方針であり、これが強行された（洋娼史談）。この時の女性徴発は強引だった。戦災でよるべを失い收容されていた少女達の多くは、何をする所かも知らずに、或いは「祖国のため」と説かれて、慰安所に送り込まれた。無垢の乙女にこうして「自分の肉親や恋人を殺し、家を焼き、国土を潰滅させたY国人の愛玩品となる身の上」（潰滅の前夜）がふりかかったのだった。

然しもっと私を昂奮させるのは、米兵の強姦である。欺されてジープに乗せられた娘、米兵の屯している所に下されて輪姦された話。二人散歩していた所を、恋人をなぐり倒され、強姦された娘の話。平和な家庭に闖入して来た「大男三人組」に、縛り上げられた夫の面前で犯された人妻の話。街頭で推し倒され、ピストルで脅かされた群衆の面前で——「みんなの見てる前で」——裸にされて犯された少女の話。……こんな話は巷に満ちていた。

数字をあげよう。近年の調査であるから占領時代にはもっと上廻ったこと確実だが、とにかく、北大と東北大の有志が千歳と仙台の両基地で、米兵、洋娼、住民等九百六十六人に面接した実態調査によると、米兵の全員が——その二〇％は週平均二十回以上——日本女性に接し、その中四〇％は娼婦を、三〇％は情婦を相手にするが残り三〇％は全員が強姦の経験者であり、全体の九％にあたる者は娼婦にも情婦にも接せぬ強姦常習者と出ている。中には一ヶ月に十回という強姦記録保持者もいる。

Texas Brothers という戦慄的な強姦団が、朝鮮戦争勃発当時、キヤンプ大津を中心として関西一円を荒し廻ったことは有名だ。女性狩猟団、刺戟的な表現だが、事実彼等は強姦をスポーツとしての狩猟と同視し、獲物を仕止めることに（良心の呵責どころか）娯楽を感じたのだ。首領P中尉の下に一味四十数名。彼等によって仕止められた獲物の数は、P中尉自身の言明によれば、一九五〇年六月から五一年五月までに二千九百十三人、凌辱に失敗した場合の数も加えると五千二百余人。実に一日平均十四人強を狙って八人強を犯したのである。基地周辺に娘がいないと、手わけして京都奈良大阪神戸の街頭までジープを走らせて獲物をあさり、歩いてくる奥さんやお嬢さんを公然誘拐した。処女や美貌の女は兵隊に押させておいて先ずP中尉が味を見、次いで下士官、兵隊と、獲物が気絶しようが死のうがお構いなしに輪姦し、終ると素裸のままジープで他処に捨てゝ来るのだった。（続日本の貞操）

こういう強姦の話は私のマゾヒズムをうずかせる。ここでは正真正銘の私達の妻たるべき女性が白人の手によって娼婦並の地位に引下されているのだ。この連中の獲物にされた女は額にボールペンでTexas Brothers の署名を残されていたという。娼婦以下の殆んど畜生並の取扱だ。私は三番関係を感じずにいられない。私達の妻が娼婦にされ、それを私達はどうすることもできなかったのだ。事実こうして汚された女性達の中には、もとの生活に戻るのを恥じて、本当の洋娼に顛落したものが稀でなかったのである。

強姦によって妻を奪われる話は私を喜ばせる。然し、考え様によつては、そういう不可抗力に見舞われたからとて夫婦の心のつながりは切れるものでない。肉体は犯されても妻の心を犯されていない以上、妻を奪われたとはいえない、マゾヒストとしては不満な点である。この不満を解消し、真に私に三者関係（M第二形式で「女の裏切」型）の醍醐味を味わしてくれるのが、「精神的強姦」（続日本

の貞操）である。

その基盤には日本人の白人崇拜があったろう。既に維新当時、米人ヴェンリードは「羅紗綿としての日本娘」において、中国では娼婦でさえ絶対に白人に身を許そうとしないのに、日本では本職の娼妓を押し除けて数百人のムスメ、ラシヤメンが続出したことから、日本娘の開放性を論結した（洋娼史談）。戦前、国際競技に来日した外人選手への女学生の狂態は当時の話題に上った。戦時中、白人捕虜を「お可哀そうに」といった貴婦人があった。基盤はできていたのだ。占領後にしても、もし黒人兵のみが進駐したのであったなら日本女性の態度はもう少し毅然としていただろう。

現実には、日本女性の心の底に潜む白人崇拜が彼女等をすべて潜在的洋娼として見ることを彼等に許した。彼等は、娼婦でない女をその心裏の白人崇拜を目覚めさせて容易に愛情に変化させることによって——誘惑し、強姦と難ぜられる危険なしに、その肉体も精神も享樂する、それこそ本当の女性狩猟を競い始めたのだ。キヤンプ仙台での話だが、基地に勤務する日本女性（素人女）二百余人が写真一覧表になっている下に赤い×印の附けられていないのは、勤務後間もない十人だけであったという（続日本の貞操）。その十人の下に、誰が、何時×印を附けるか、その競争が基地の男達の楽しいスポーツだったのである。強姦によるのではない。仮装恋愛を仕掛けて、女を夢中にならせるのだ。女に本気で惚れさせるのだ。文字通り身も心も捧げさせる。男の方は×印が目的なのだから、目的を達した以上、どうせ捨てるつもりなのだが、一週間位は愛されていると信じさせる。「愛情の狩猟」なのだ。強姦が獲物を射殺する猟とすればこれは生捕りの猟とでも云おうか、手間のかかるだけ楽しいTexas Brothers のより高級なスポーツなのだ。V少佐という十六軍団の報道将校は、本国に妻子もありながら、一年間に人妻三十人を誘惑し、その中少くとも八人を墮胎させた。彼に貞操を捧げた末

たった三日で捨てられたある医学博士夫人によれば、「V少佐は大きなハンカチーフを何十枚もとじ合せたスタンプ・ブックと称するものを持っていますが、このハンカチーフの一枚一枚には肉体を奪った女達をおどかして無理やりに押させた口紅のスタンプ——それも唇でなく性器に塗った口紅のスタンプがあつめられているのです。彼はこのスタンプの数を増すのに血眼になっており、千枚あつまったら日本を切上げて、ヨーロッパにいくと云っています。」(アメリカ兵の性生活) 何というもろさだ。

雑報一〇三で紹介した「白人の天国」は、色と欲と二筋掛けた白人新企業の話である。若い妾と正式に結婚したいが現夫人は貞淑で何の落度もない。離婚できない、できるとしても財産を沢山分与せねばならない。こんな男がこの新企業者に請負わせる。夫人を誘惑して貰ったら、その謝礼として財産の何分の一かを出す約束するのだ。ウソ見たいだが実話である。請負った方は必ず成功する。僅々二、三ヶ月で貞淑無比の夫人は身も心も蕩かされ、遂に「日本を去らねばならなくなった」男との「全裸の記念写真」を撮すことにも躊躇しなくなる。男が本当に日本を去ったと信じた彼女が甘い回想に耽っていると、夫はこの写真を不貞の証拠として突きつけ、からくりを知らぬ彼女は、自分の過失に一言の弁解もできず着のみのまゝで追い出されてしまう。……理論上は色男なら誰でもやれる商売のようだが、実際には白人男性以外のどんな魅力もこの貞淑の夫人を動かすことはできなかったろう。未見だが五島勉「アメリカへの離縁状」には、東京中のどんな女でもお望み次第にコールガール(高級洋娼)にして見せるといふ外人拉致団の実績が述べられていると云う。これも恐らく白人男性の性的魅力を使用するのである。白人に対して日本娘は開放的である。ヴェンリードの言は人を欺かない。

こういう話に私はたまらなく昂奮する。白人男性は私達より優秀だ、という認識が私の白人崇拝感を快よくすぐるのだ。そして彼等に接した日本女性の何人もがそれを認識する結果として、日本男性か白人男性かの択一の場合で彼女等が前者を捨てて、危険を冒しつつ後者に身を委ねるといふ事実が、「女の裏切」型の三者関係として私のマゾヒズムを喜ばすのである。単なる強姦に対しては、まだ妻の心を保持し得た私は、精神的強姦が妻に加えられたことによつて、妻の心までも奪われたのだ。或いは妻はまた戻ってくるかも知れないが、それはもう精神的にも彼等の「お古」であり不要品であり、しかも私は今後の妻の心に常に白人男性と私との比較がなされることを意識して、男性として劣等感に悩まねばならないだろう。

(以下次号)

沼 正三だより

一、(前号分の訂正) 十年号手帖第九十八項は末尾の附記までで、それ以下の部分は、第九十六項末尾の註のあとに続くのです。そう訂正して読んで下さい。

尚雑報欄の冒頭の項で、終りの方の一一三は一一四の誤りです。

二、(麻生和夫氏に) 私宛公開状ありがたく拝見しました、悉く同感です。今度から連載する「家畜人ヤブー」を以て私からのお答えとさせていただきます。又御感想をお聞かせ下さい。

三、手帖雑報欄は今月は休ませて戴きます。

醜惡への幻想

淡 美 一 郎

(一)

「外科病院と云えば、東京でも有名な方であり、建物も堂々としている。」

場所が都心に近い関係からか、交通事故で担ぎ込まれる患者が多い様だった。

例年より早い梅雨で、五月だというのにじめ／＼した気候が続く、入院中の患者や、附添の者達は鬱陶しい空模様ながらに、滅入ってしまふような表情をしていた。

自動車工場の工員で、太腿から脛にかけて火傷をしたのが、廻診の度に、大声をあげて叫ぶのも、今日は余計、陰惨に聞えた。

爛れた皮膚から繃帯を剥いで塗薬するらしいのだが、体格の良い若者ですら、この様に耐えがたい激烈な苦痛を感じるのだから余程ひどい火傷だったのだろう。

「もう、止めてくれ。痛い」

自由にならぬ体をよじって苦悶する若者の姿が、隣室の者には、生々しく想像され、まるで自分が、痛い目に会っている様な幻覚に怯えさせるのであった。

此の工員の病室は、どちらかと云えば、余り良くない方であったが、そこから、奥へ四つ五つの部屋を隔てると、可成り上等の病室が続いている。

川上スミ江は、右脚を太腿から切断されていた。

通学の途中、電車に飛び乗ろうとしてレールに転落したのが原因だった。

女子大の一年。

いたましいぐらい痩せて、青白い顔をしていた。

彼女は、この辺りまで聞こえてくる工員のうめき声に、じっと耳を澄ましていた。

あの異にかかった獣の様な、荒々しい、そのくせ絶望的な叫びを聞くと、不思議に、勝ち誇った様な気持になってくるのだった。

ずきん／＼と絶えず疼く脚の痛みも、若者の悲鳴が響く間は、むしろ、心良く感じるのである。

丸顔の団子鼻で、ニキビだらけの工員が大きな図体をしながら、ウーム／＼うなっている姿は非常に滑稽だと思う。

凍っている様な彼女の大きな瞳に、醜い愚かな工員に対する加虐の妄想が、ぞつとする様な妖しい光を与えていた。

手術台に長々と寝かされて、麻酔をかけられた時、彼女は、マスクで顔の半分を隠された医者の眼に、サディスティックなものを感じた。

サディズムとマゾヒズムとは紙一枚を隔てた裏表であると云う。

彼女は、その時、医者の眼に自分自身の姿を

見ると共に、一方では、片脚を切られる側として、マゾの喜びを感じていたのである。

中年の医者であったが、此の頑丈な腕で、自分の細い脚が一ヶの物体となつて握られるかと思うと、放れて行く肉体の一部に、耐え難い愛着を覚えるのだった。

「切り取つたら後で見せて下さい。」

麻酔が効いて朦朧として来た知覚の中で彼女は、うわ言の様にこう呟いた。

望み通り、手術が終つた後で医者は彼女に電車で轢かれて、ぐしや／＼になつた片脚を見せてくれた。

じーんとする様な愛着の思いが胸にこみ上げて、もしも他に誰も居なかつたら、彼女は自分自身の切られた脚を抱いて頬ずりした事だろう。

小さく縮つた足の指を美しいと思った。その時から彼女は、手術した医者に心引かれ、特に彼がマスクをし、手袋をはめて、メスを持っている姿を想像すると、妖しい胸のときめきすらするのだった。

毎日の廻診で、彼が、自分の下肢に触れると、妙に喉が干からび、唾を飲みこむ音が不自然に高く鳴つたりした。

だから、彼が、あの工員から無理に緋帯を取るのだと思うと、自分が、彼から、そうされたいと思うのか、或は、自分でそうしたいのか、どちらだか彼女自身にも分か

らなかつたが、一人でに胸がときめいてくるのを押えきれなかつた。

(二)

川上ミス江の隣りの室には、松田忠夫がいた。

B 大学理科の三年。

長身で、スポーツマンらしいタイプだったが、顔一面を白い緋帯で覆われていた。

化学の実験中、誤って劇薬を浴びたと云う事で、ここに入院以来、既に数回、整形の手術を受けていた。

金持の息子らしく、病室に持ち込まれた用具は総べて贅沢なものばかりであつたが、ど



うした訳か、附添の者は来ず、専ら看護婦が身の廻りを世話していた。

何か複雑な家庭の事情があるのかも知れなかった。

忠夫は、若い看護婦を相手に、カードをしたり、無駄話をしたりしながら日を過した。

白一色の布から両の眼と口だけを覗かせたいたましい恰好だったが、彼は意外にも、こんな境遇を楽しんでいる風だった。

「この繃帯を取ると、どんな顔が現われるか。ぐしやぐしに爛れた肉。鼻は落ちて大きな穴が二つ。お恐い。」

こんな事を平気で口にして、看護婦がいやがるのを面白がったりした。

「とにかく、元が元だから、どんな醜い顔になつたって平気。どうしても嫁に来手がなかったら、君に頼む。もしも、君が、すげなく断りでもしたら、それこそ大変だよ。夜、君が眼を覚して見ると、鼻のない、無気味な僕の顔が宙に浮いて……。」

看護婦が耳を押えて、イヤ／＼をすると、忠夫は両の眼に淫らな光を見せて、女の顔をわざと覗きこんだりした。

(三)

松田忠夫の隣には、藤原京子という中年の女がいた。

小柄だが、身のしまった可愛らしい体付き

をしており、目から下半分の顔には、ぐるぐる繃帯が廻かかれていた。

何が原因なのか、語るのを好まなかったが医者は、硫酸様の液体をかけられたものと判断した。

いかがわしい男女関係の所謂、情痴の果てと云った感じがした。

入院当初、彼女は極度のヒステリー症状を現わした。

「先生、顔は元通りになるでしょうか。」

医者の顔を見さえすると、必死になって尋ねるのだった。

「大丈夫です、奥さん。きっと元通りにして上げますから、くよくよせずに、のんびりして下さい。気に病むと、仲々、思う様に治らないですよ。」

医者は、京子の真白な肌を見、均勢の取れた股体を感じる度に火傷する前は、さぞ美人だったろうと思う。

川上ミス江と違って第一、此の女には、男をとるかすような媚びがあった。

だが京子は、医者の言葉を単なる気慰めだとしか取らなかった。

繃帯を取って退院する時、鏡を見るのが、こわいだろうと思う。

お岩様の様な醜い顔になっていたら、どうでしょう。

今まで、甘い言葉で云い寄って来た男達も

そんな自分を見たら忽ち逃げてしまうことだろう。

「貴女の容貌に惚れたのじやない。美しい心に引かれたのだ。」などと、巧い事を云って、欺そうとした奴など、きっと真先に姿を消してしまうだろう。

隣室の青年も顔中に繃帯しているが、男なら、未だ何とか救われる道がある。

それなのに、顔と身体だけが元手でやって来た自分にとって顔をめちや／＼にされる事は、殺されるより、もっとひどい仕打ちなのだ。

京子は、こんな悶々たる気持から、次第に隣の松田青年と親しくなっていた。

同病相憐れむの例え通りだと他の人々は噂した。

(四)

忠夫は、しげ／＼と京子の病室にやって来た。

彼は、京子の涙ながらの怨み言を聞いている内に、何んとなく、打ち解けた気分になって来た。

元々、自分の傷には大して悲観もしていなかった彼は、此のあわれな婦人の、はっきりと開いた心の隙に飛び込んで見てやろうかと思つた。

美貌を誇っていた頃には、びたりと固い殻

を閉じていた女心が、今は、全くの無防備の状態にあった。

ベッドに腰かけた京子が、パジャマの前をはだけ、白い太腿をちらつかせながら、夢中で泣き言を繰り返す様を、彼は好ましいと思った。

美しい肉体に、醜い容貌。

この滑稽な組合せが、彼の異端の官能を快よく、くすぐった。

どうした訳か、忠夫には、女の醜い容貌とか、不具な肢体に、変態的な魅力を感じる性癖があった。

京子が退院に際して、一変した己の顔に悲観する姿を想像しただけで、神経が高ぶるのだった。

今迄に、彼は、幾人かの醜い女を相手にしたが、恐らく、京子の様に劇薬で爛れた酷い顔の女はそうざらにはあるまいと思えた。

どこが鼻か口かも分らない醜い女の顔を愛撫し、それに接吻出来ると云うのは何んて素晴らしい夢だろう。

彼は、そうした光景を思い浮かべながら、京子の縋帯の白さを見つめるのだった。

一方、忠夫のあさましい心情を知らぬ京子は、此の青年の好意を、純粹に自分に対する同情からだと思つた。

可愛想に、奇麗な女友達もいるだろうに、化物の様な顔になって、さぞかし氣を落して

いるだろうと考えた。

その結果、同じ様に顔を焼かれた自分を、何にかと慰めてくれる——彼女は、優しいこの青年をどうやって力づけてやろうかと思つた。

いつもの彼女なら、こんな、ひよこを扱うなど朝飯前の筈だったが、忠夫に対しては心からの誠意を示したかった。

自分では気付いていなかったが、京子は、忠夫を恋し始めていたのだった。

醜い容貌になるのを承知の上で親切にくれる忠夫を真の愛情の持主だと思い、同じ様に顔の変貌するであろう彼に対して、こんな真面目な氣持を捧げ得る自分自身に、彼女は、いとおしい氣がするのだったが、これが則ち、彼女の恋をした証拠だった。

(五)

川上スミ江は、ある日、花を持って工員の室に行った。

彼女は根ほり葉ほり、医者が彼の縋帯を代える有様を聞きたがった。

工員は、一寸恥かしそうに云い洩したが、やがて喋り出した。

間もなく話に実が入って毎日の廻診が如何に苦痛であり、且つ医者がどんなに無情で思ひやりがなく、自分の傷を邪慳に扱うかを身振り手振りで語った。

スミ江は、無邪氣そうな男の顔をじつと見ていた。

こんな男を、思い切り、いじめてやると、どんなにか、心が晴れ晴れとするだろう。

そう思うと、堪らなくなって彼女は立上る拍子に、わざと男の腿に手をついてやった。

「ぎやっ。」

と男は、奇妙な叫び声をあげて顔をしかめたが、片脚の彼女が、不自由そうに杖を取ろうとしている姿を見て、悲鳴を途中でのみ込んで眼をパチクリさせた。

スミ江は、薄い唇に笑いを浮かべて、満足そうにうなづくと、ビッコを引きながら帰って行つた。

工員は、不思議な女だなと思ひながら、キョトンとして彼女の後姿を見送った。

「蛇の様な女だな。」

たまたま居合せた仲間の一人が、耳許で囁いた。

スミ江は部屋に戻ると、軽い貧血を起してベッドに横になった。

工員の丸い顔が苦痛で歪んでいる。彼の肉付きの良い体を裸にして縛り、スミ江は長靴をはき、長い鞭を持っていた。

靴のまま、男の脇腹の上に乗ってぐいぐいと踵で肉をえぐる度に男はだらしなく叫び、びし／＼と走る筋肉の痙攣が脚をつたって彼女の全身に興奮を伝える。



途端に、工員は口をあけて、彼女の片脚をかじった。

「畜生ッ。」

彼女は夢中になって鞭を振ったが、遂に片脚は太腿から放れて床に転った。

工員は、むしや／＼と切られた脚に食付いていた。

「痛い。」

そう思った瞬間、眼が覚めた。

見ると、いつの間に入って来たのか、医者

が、彼女の腿の繃帯を解きかけていた。

「大分いいですね。だが未だ無理をしてはいけませんよ。無理をすると貧血を起してはいけませんからね。」

(六)

梅雨も上ったある日。

藤原京子と、松田忠夫は相前後して、繃帯を取る事になった。

「ね、どんなに酷い顔になっていたって私達の愛は変らないわね。」

哀願する様に京子は云った。

彼等の仲は、あれ以来、極めて親密なものとなり、今では、お互に将来を誓う間柄になっていた。

もっとも、これが純粋な愛情からばかりだとは云えないかも知れない。

美貌と共に、女の誇りも捨てた彼女は、仮令、相手が醜い男であれ、いや醜い男であればこそ、何より彼女に親切にしてくれた忠夫を放すまいと思っていた。

醜い男が相手なら自分が醜くなっているでもいいだろうとそんな考えから、何か責任が軽くなる様な気がしたせいもあった。

一方、忠夫は、世にも稀れなお化け女を手に入れたのであるから、愛情などは、そっちのけで、猟奇的なプランをしきりと考えていた。

輝くばかりに美しい肢体が醜惡な顔のせいで一層魅力的になると思うと、思いきり虐待してやりたいという気になり、目を閉じるとその情景が大きく臉にクロースアップされるのだった。

その時、女の顔が醜くければ醜い程、彼の歪められた欲念は亢進するのだった。

「では、今日の午後、玄関の待合室で待ちますわ。変な顔でもお互いに分かるわね。」

京子は、そう云って一先ず先に診察室に入ってしまった。

その間、一人、部屋で煙草などくゆらせながら、本邦切支丹殉教史を読んでいると、川上スミ江が黙って入って来た。

既に退院しても良い筈なのに、彼女は未だブラ／＼としていた。

こゝの院長がお目当てだろうと看護婦達は岡焼き半分で噂していたが、実は、あの工員が原因だった。

日頃から、彼女は、自分の意のままになる奴隷を欲していたが、あの工員なら、事と次第によっては、彼女の意に沿う様になるかも知れなかった。

裕富な彼女の家に引き取って学校に行かせてやろうと言う餌もまいておいた。

これには、眼を輝かせて、飛びつきそうになったが、何故、彼女が見知らぬ男に、そんな親切な申出をするのかを、いぶかっている

様だった。

ともあれ、彼女は、毎日、男の部屋に行つて熱心に説きつけていた。

「あつ貴女ですか。僕は愈々今日は、退院ですよ。」

忠夫は、うきうきした調子で言った。

「それはおめでとうございます。あの方と御一緒ですのね。」ミス江は、京子の事を言つた。

「ほんとに、偉いと思うわ。これこそ真の愛情ですのね。醜い——あら失礼——男女が、愛情でお互が美しく見える、アメリカ映画にありましたわ。」

スミ江は、感にたえないと言つた表情だったが、その眼は、反対に、物好きな二人を心の底から軽蔑している様だった。

「何か御用ですか。」

忠夫は、一本しかない、それ故、尚更細く見える彼女の脚を見ながら尋ねた。

「いゝえ、別にこれと言つた用じやないんですが、お二人の退院を、あの人と一緒にお見送りしようかと思つて……。」

あの人とは、つい先頃から、少し歩ける様になった工員の事に違いなかった。

(七)

藤原京子は緋帯を取つた顔で、身仕度をととのえ、嬉しい様な、そのくせ、不安気な様子で控室にいた。

緋帯が取られ、始めて鏡を見るのを許されるや、彼女は、喰い入る様に鏡の中の自分の顔を見た。

「先生！」

彼女は感極つて、医者にとびつき、オイ／＼と泣き出してしまった。

そして、部屋に飛んで帰ると、身の廻りを片付けて、こゝに來たのである。

間もなく、奥から一人の青年が出來た。一寸の隙もないリュウとした服装に長身を包んで、美しい顔は、ニコ／＼とおだやかに微笑んでいた。

僅かに皮膚の色が變つていたが生來の端正な面影はそのまゝに數回に渉る手術の跡も、それとは分らぬくらいだった。

青年は、待合室の中を覗いた。

一瞬、驚きの表情が現われたが、それは徐々に歪んで明らかに失望の色を示していた。

中では、抜けるように白い顔が一つ、さつと頬を赤潮させて軽く会釈していたからである。

緋帯を取つたばかりで、化粧こそまだしていなかったが、かえつてそれが清艶な色氣を見せていた。

「あつ、これは失礼……。」

青年は、冷たくそう言つと、後をも見ずにすた／＼と出て行つた。

「忠夫さん。松田さん、待ってー。」

京子は、慌てゝ後を追って、くどくどと泣言を言ったが、忠夫は、黙っていた。

「あれはみんな嘘さ。」

やがて、ボソリと言うとうと、忠夫は病院を出て行ってしまった。

醜悪なる容貌の女に描いた、幻想が無残に崩れ果てた今では、京子に何の興味もなかった。

美しい女なら、何も京子でなくたって外にザラにいろのだ。

硫酸で爛れて女の顔に強烈な期待を持っていたのに、繃帯を取った京子は、以前と変らぬ美しい顔をしていた。

「まゝならぬものだ。」

彼は、一人で呟いていた。

京子は、病院の入口で泣いていた。

後でスミ江と工員の男がじっと見ていた。

工員は、美しい京子の素顔に、激しいショックを受けた。

京子に較べて、側にいるスミ江はどうだろう。

じめじめと陰気で、薄気味の悪い——どんな条件だろうと、こんな女と一緒にいるのは真平だと、彼は、思った。

これに反して、京子は、こうして身も心もあらず泣いているくせに、どことなく男を引きつけるなまめかしい柔かさがあった。

「泣くのは、おやめなさい。」

彼は柄にもなく、上品な言葉で言うとうと優しく、京子の背に手をやった。

「ふん」。

スミ江は、杖でコツ／＼と床をたゝきながら、一人で部屋に帰って行った。

「どうして亦、松田と云う青年は、京子がいやになったのだろう。お互に以前と変らぬ容貌だったのに。あんな美男子なら京子ならず

とも、残念だろう。もともと、此の私と来た

ら、あんな男は大嫌いなさ。インテリぶって、自惚れの強い奴なんか。」

彼女は、ぶつ／＼と呟きながら、ベッドの上にひっくりかえった。

一本だけの脚が、しよんぼりと小さな腰の下について、ベッドから、ぶら下っていた。

(完)

ローカル・レポート

ククク映画にむくれる

毎日新聞山形版 十月二十六日付

花村 貞 治提供

○：彼岸に入ったばかりの二十日夜、山形市平清水曹洞宗万松寺住職平清水千秋（四八）方本堂で県農会恒例のイモ煮会が行われたが、この席上ともあろうにエロ映画を密上映し世間をアツといわせた。曹洞宗といえど日本三代理宗の一派に数えられ、その壇徒一万五千といわれる宗教団体だけに信者もあいた口がふさがらない。齊戒沐浴、色即是空、などボンノウとはおおよそ縁遠い仏殿で、しかもこれら観覧に参加

した人の中には多くの名士がいたとは仏様も驚いたことだろう。これを伝え聞いた壇家の人たちは大むくれで翌日万松寺をおとずれたところ、住職はおもむろに山門に「不許輩（クン）酒入山門」とはあるが「不許色氣入山門」とはありまさんと平然と答えたとか。さすがは坊主、なかなか味をやるわいとはもっぱらの評判。

「山門に立てられた看板」の見出しで、不許輩酒入山門と彫られた石碑の写真がはいれいしく掲げられてあるのも皮肉なところですが、こともあろうにエロ映画の密上映に、お寺の本堂をつかったとは本当に驚いています。それに、住職の答弁もふるっています。変ったニュースとしてお送りします。



玉稿落穂集

誌上にのらなかった

原稿のことども

編集・部

今回は、文章や構成の巧拙よりも素材として興味のあるものの中から、とりとめもなく選択してみました。先ず最初の文は、『異性性格者の告白』とサブタイトルしたもので題名は『巡礼』という約四百字詰原稿用紙で二十枚、作者は泉信一郎という人です。

『これから私がお話しようとする事はサドとマゾ、然もその上に強烈な同性愛者としての半生のアブノーマルな私の性欲の巡礼としての記録です。普通の人には信じられない様な数々の私の経験も同好の方達には充分理解していたゞける筈です。そして私のこの拙い告白の綴りを讀まれて哀れな人生の巡礼に同行二人の一人になってやろうと云って下さる方が若しあったら……とそんなはかない希望を私は抱いているのです。』

まあ聞いて下さい、そして生きているであろう限り続くであろう、私の性欲巡礼の同行となつて下さい。お願いします。

その頃、私の一家は兵庫県の一都市、そうです、皆様よく御存じの、あの有名なお城のある街、姫路に住んで居りました。私の父は鉄道省に勤めていた関係上、私は物心のつく頃から父の転勤に従つて方々の都会に移り住みました。が、中学へ入学した年から姫路へ移つて来ました。父と母の外に、姉一人と妹二人、それに私を加えて六人家族でしたが、私が中学三年になった年の五月の末、かねて余り丈夫でなかった父が、かりそめの病で急死してしまつたのです。

母が派手好みの人だった上に、その前の年に姉が嫁に行きましたので、相当の借金があ

つたのです。今日と違つて十分の遺族扶助料も貰えない時代でしたので、仿き手を突然に失つた私達一家は、その日の生活にも困る状態になりました。

その結果、私も暑中休暇の終つた九月の二学期から学校を中退して仕くことになりました。然し仕くといつても、十六才になったばかりの少年に何が出来るでしょう。せめて一人の口でも少くなれば、その上、学費がいらなくなれば、という母の希望と、かねて薬剤師になりたいと思つていた私の希望とから、親戚の人の世話で、Kという薬屋へ住込みの奉公に行くことになりました。

何分親の元を離れて他人の飯を喰うのは初めての事ではあり、学生から小僧へと急転した自分の運命を考えて、その時の淋しい切ない気持は、四十才に手の届こうとしている今でも、私の胸をしめつける様によみがえつて来ます。若し、父の死、中学の中退、薬屋の奉公、というこの大きな運命の転換がなかったとしますと、私の半生も又、大きく變つていたことでしょう。

それは兎に角、そのKという薬屋は、土地の旧家で何代にも涉つて商売を続けている店でしたから、家も古く昔ながらの薄暗い頑丈な造りの建物でした。然し、奉公人は割合に少く、通いの番頭さんが二人、女中が二人、小僧が私を合せて三人、尤も小僧といつても

一人は二十一才で既に徴兵検査も終った青年で、今一人は私より二つ上の十八才の青年でした。こうした旧家には有り勝ちな、家の人と奉公人との間は、昔の殿様と家来その儘で今の若い人には全く考えも及ばぬ位のきびしいものでした。然し、私は今こゝで、そんな小僧としての苦痛だった毎日の生活を語ろうとは思いません。それは私が聞いて戴きたいと思う事とは関係のない話なんですから。

がちりとした本家の建物の裏に二階建ての物置があり、この物置の二階の一室で私は二人の先輩と共に寝泊りすることになりました。本家の建物とこの物置の間には、三十坪余りの庭があり、庭石や植木が処せましと配置されており、泉水も造ってありました。

美しく手入れのよく行き届いた本家とは反対に、私達の寝るところは、六畳の一間に押入れがついていて、僅かに東に面して、小さな明り取り用の窓が一つあるつきりで、元々物置として作ったものですから、天井も低く従って釣天井は張ってありませんので、太い棟木や梁が黒ずんだ色を見せて居り、窓のある東隣りは、裏通りに面したお寺の墓地でした。

私達三人は、九時前に店の大戸を降すと、入浴を済ませて、やっとこの自分達の寝所へ引き上げて来ました。「やっと天国へ帰って来たぞ」

笑いながら、そう云って先輩の二人は、ゴ

ロリと畳の上に転りました。御承知かも知れませんが、こうした旧い家では奉公人は、○

○どん、と名の下には必ずどんという言葉をつけて呼ぶ習慣になっています。私もその日

から、信どんと呼ばれましたが、先輩の二人も、二十一才の方が勇どんで、十八才の方が

仙どんという呼名でした。勇どんの方は五尺六寸位の立派な体格で鼻筋の通った色の浅黒

い全くキビ／＼した男性的な青年でしたが、一方仙どんの方は、中肉の丸顔で眼元の涼し

い色白の美少年型でした。自分で云うのも、どうかと思いますが、私も小学生時代から、

可愛らしい、とよく云われ、又、中学では、「お嬢さん」というニックネームを付けられ

上級生に騒がれた位、容貌に自信はありましたが、勇どんも仙どんも、決して私に負けぬ

位、それぞれの個性を持った好ましい青年でした。私は一眼で彼等が好きになりました。

さて、私は寝転んでいる二人の頭のところへ座って、母に教えられた通り両手をつく

「どうぞ宜敷しく願います。」と挨拶をしました。二人は顔を見合せて

「いやに改って何だい、花嫁さんの様だぜ、そんな他人行儀はよせ」

と勇どんが云うと「可愛い、事云うぜ、こいつ、これから僕がうんと可愛がってやるぞ」

仙どんは云うなり——(中略)——私は驚きと恥しきで顔を赤くしてしまいました。でも悪い気持はしませんでした。

仙どんは甲斐甲斐しく押入れから夜具を取り出すと、私の寝床迄も敷いてくれました。

勇どんを中にして、左に仙どん、右に私と三人は寝床に入りました。然し、初めての奉公

のこととて私は仲々寝付られません。奉公に行かれた事のない方には判りませんが、何と表現して良いのか、家の事、母や妹の事、友

達の事、と次から次へと、色々な事が切なく思い出されて頭は益々冴えるばかりです。勇

どんは腹這いになった儘、小説本を熱心に読んでいます。仙どんは、もう眠ったのか安らかな寝息が聞えます。私は又、何度目かの寝

返りを打ちました。「寝られないのか、家が恋しいんだなあ、無理はないよ、まだ子供だからなあ」

勇どんはそう云うと、小説本を下に置いて「さあ来い、坊主、僕が抱いて寝てやろう」

というなり私の寝床の中へ手を入れて両手を強く握ると引き寄せました。

読みづらくないように、文章に少々手を加えました。この告白の冒頭は大体、こゝに挙げたものです。この作者の書きたいという主旨は、愈々、この文のあとに続きます。これでお膳立は大体揃ったというものです。読者の方々にも、これからの推移は、凡そ想像

がつくというものですが、原文そのものは、極めて露骨な描写ですので、差支ないところだけを、部分的にピックアップして、御判断にまかせたいと思います。

場所は、物置の二階六帖の寝室、人物は、二十一才の勇どん、十八才の仙どん、それに十六才の信どん（筆者）の三人ということになります。

『……………その時、』

「おい、余り見せつけるなよ」

突然起った仙どんの声に二人は驚いて離れました。そこには、仙どんが自分の寝床から伸上って私達を見つめていました。

「仙公、お前起きていたんか、お前、俺に文句を云うつもりか」

勇どんは怒気をふくんだ声で云うと、仙どんの方を向いて立ち上りました。

「だって余りだよ、兄貴、俺だって若いんだぜ、余り——（中略）——殺生だぜ」

「そうか判った。（下略）」

「何も、俺、そんなつもりで——」

「やかましい、ぐずぐず云わずに裸になれ」

「でも、信公の前で、何も」

「お前、俺の云うことが聞けんのか、おい」

「聞くよ、聞くよ」

こんな二人の言葉を聞きながら、私は自分の寝床の上に正座していました。やがて仙どんは寝間着をぬぎすて、裸になりました。顔

と同じに身体迄色白で、女のように美しい肌です。その裸身に、その頃でも珍しい六尺褌を固く締めています。美少年が玉の様な美肌に白い晒の六尺褌をしめた美しさは、又格別のものです。私は思わず目を見張って見つめました。

「褌をとるんだッ」

『勇どんは押入れの中から、細い綱を取り出すと、仙どんの両手を頭の上に伸して縛ってしまいました。仙どんが幾ら力の限り暴れてみても、体力の数段勝った勇どんには、とても及ぶ筈もなかったのです。やがて天井裏の梁から仙どんの身体は、やっと畳の上に爪立ちして吊り上げられてしまいました。私は只眼を見張るのみでした。』

三人の若い男のみの六帖の部屋、そこに繰りひろげられた光景は、また一風変わった異様なものだったのですが、筆者はそのことについて、現在進行形で微細に亘って描いています。そのことは、読者の皆さまの御想像にまかすとして、次へ移りましょう。

『これが私の愛欲の遍歴への第一歩となったのです。その事があって一週間程の後、勇どんは伯父さんの葬式で三日間の暇を貰って家へ帰ってゆきました。その留守の間に仙どんは私への情熱を爆発してしまっただけです。』

その晩は二百十日に当たっていて昼頃から強風が吹いていましたが、夕方から暴風雨とな

ったので、早くから大戸を降して珍らしく私達は二階の寝間に引き揚げてきました。

意味ありげに云う仙どんの言葉に、私はハッとして息を呑みました。』

『勇どんの居ない今夜は、私は仙どんの言葉に従わぬわけにはゆきません。命ぜられるまゝに猿又一つになりました。』

『仙どんは云い終ると、この間の晩、自分が勇どんにされたと同じ様に、私の両手を頭の上で縛って天井から吊りました。そして足首も寝間着の上にしめる細紐で縛られました。両手が千切れるのではないかと思う程の痛さでした。やがて仙どんは三寸と五寸程の角のボール箱を一個持ち出して、中から変なガラスの器具を取り出しました。これで一体何をしようとするのでしょうか。』

『私は母の事も妹の事も、毎日の店の仕事も一切を忘れて只二階の一室に於ける楽しい遊戯に大きな生き甲斐を感じるのです。』

三日間を終って店に帰って来た勇どんは、その晩二階へ上ると直ちに仙どんに

「俺の留守の間に、お前、信公と十分遊んだだろうなあ」

と云いました。仙どんは無言で意味あり気に笑い返しました。

「信どん一寸来い」

勇どんに呼ばれて私は仕方なく彼の前に立ちました。』

一人の男に二人の男、三人というものと、うまく対が出来ないものです。当然、こゝに嫉妬による葛藤が生じてきます。そのことはこゝにピックアップしただけの文章の中からでも、十分読みとって頂けると思います。

『……二人のこの姿を見ていた仙どんは、自制を失ってしまったのでしよう。勇どんに飛びついてゆくと、その頭を頬を力まかせに撲りました。勇どんは驚いて私を離すと仙どんに組みつきました。二人の争いは暫く続きましたが、仙どんは勇どんの敵ではありません。力尽きた仙どんは間もなく勇どんに組敷かれてしまいました。』

「押入れの綱を持って来い」

と勇どんに命ぜられて私は仕方なく綱を渡しました。衣類を剥ぎとられて例のように禪一本にされた仙どんは、両手をうしろへ廻して高手小戸に縛られました。そして

「声を立てるとうるさいから」

と云って猿轡をかまして隣の薬置場との部屋の間の大黒柱に縛りつけました。』

これから後に続くリンチの模様は、何枚にも亘って詳述されていますし、この文の筆者としては力をこめた肝腎のところでしょうが例によって不本意ながら省略いたします。

『私が初めて、この二階の寝所へつれられて来た時、勇どんと仙どんの二人は口を揃えて「やっとなんて天国へ帰って来たぞ」

と云いましたが、正にその通り私達三人にとっては、この汚い物置の二階こそ、この世ながらの天国であったのです。』

と、こうした一文で、この巡礼と題する泉信一郎氏の告白は終わっています。

次に御紹介するのは、伊藤早苗という女性から投ぜられたもので、『むしとりすみれ』と題した二十七枚の創作です。この原稿の附記には、

『全くの想像によって書きましたので、モデルは全然ありません。唯、これを書いた私も或る程度、心の中だけの変態性だと思っています。是非、本名は秘して下さって発表の節は匿名でお願いします。』

とありますように、内容は告白ではありませんが、この女性の体験が多分に取り取られているのではないかと思われまします。この筆者は、この他にも数篇の小説を寄せられています。その原稿の内容から判断してみても、サシスチックな素質を持っています。方のように判断されます。これから紹介します、むしとりすみれという題名からして、そういう匂いを感じられるのは私だけでしょうか。では、先ず冒頭から

『鉄野君、もっと強く突いて、そう、和夫君何ほや／＼しているの？ 押されたら倒れるのよ、違う、こうよろめいてから、バタリと……』

かん高い声で、ゼスチュアをつけながら担任のS先生は、その悲愴感に酔った様に昂っていた。その表情には、平素のとりすました老嬢特有の冷静さは微塵も見られなかった。いや、或は、この姿こそS先生の本質かも知れなかった。所はみちのくの一寒村のある小学校の教室——。と云えば、当然、この場合想像出来よう。学芸会を一週間後に控えての猛練習の時だった。

ぐるりと級友に囲れた円内で、主役の和夫は、その痛烈な視線を身一杯に受けて立ちすくんでいた。余りにも劇「兄妹星」は難解な上に、加えて生れつき楽天家の和夫にとって最も苦手とする悲劇だったのである。懸命に努力しても、和夫には、主題の狙っている心すら体得出来なかった。

「和夫君には此の役、駄目だったのね、でもこゝまできては、もう遅いし頑張るより他はないでしょう。とにかくもっと悲劇的に演出するよう気をつけることね」

S先生は冷淡にこう云い放った。和夫達は六年生である。和夫は元来、女教師が大嫌いだったが、皮肉にも今年も又女教師に当たってしまったのである。何故と云えば、どうもまぶしくてならないのである。特にS先生は濃艶で、モダンであるので自然に寄りつき難いのであった。

S先生の視線は、いつもお話をしかけてく

れるように思われる。よくお使をたのむ。甘い言葉をさゝやく。その度に和夫は、心の中が騒然となるのを覚えるのであった。

「S先生は、何故僕をばかり見つめるのだろう？」

和夫は農家の子だが、田園の子には珍しい程色白なのである。整った目鼻立ち、中肉で動作がはき／＼している。弱気であるが快活な、誰にでも愛されるといった美少年の型であった。

遂にS先生は剛をにやしてか、突然、手にした鞭をとると、つか／＼と近づいてきておど／＼としている少年の胸をぐんと突いた。「あッ」と低いが鋭い悲鳴と共に、不意をつかれて倒れた和夫は、恥と怒りで蒼白になっていた。泣けそうになって臉が熱くなるのが自分でもわかった。

「ほら鉄朗君、早く和夫君の上に。両手で首筋をつかむのよ。」

「だってエ、先生、僕和夫君に悪いや」

「そういう考えは止めにしましょう。劇ですよ。早くしなさい。」

強く叱られて鉄朗は、しぶしぶ「御免よ」と小声に云いながら、伏している和夫の上に乗った。両手が白く細い頸にまつわったが、既に気分的に疲労している和夫は、唯じっとなすがまゝだった。

「あら、和夫君、抵抗しないの？ 横着ね、

怒ったのでしょ」

それでも和夫は黙っているの、S先生はヒステリックに叫んだ。

「憎らしいこと、鉄朗君、その縄で縛っておしまいなさい。」

冗談とも思えぬS先生の強い言葉である。

児童劇「星の兄妹」は、母を尋ねる兄妹がさんざん苦勞して星の世界にいる母を知り、尋ねてゆくが悪い星達にいじめられ、最後には母と同じ星になれるという筋の物語で、和夫はその兄になっているのである。

級友達はシンとしている。誰も口出しをしない。日頃からの和夫に対する嫉妬の心の現われであろうか。いや、むしろ男児達は、自分達のリーダー格である義彦が除外され、和夫が主役をつとめた事に対する反感から、和夫が両手を後へねじられて縛られ、痛そうにしているのを見ると、反って小気味よく思っているに違いない。

和夫は心の中で全く悲観していた。「僕には、こんな役は出来ない。止めたい」という秘かなさゝやきが起っていた。と同時に、S先生の愛を失いたくないという矛盾した声も起っていた。結局「学芸会の日は、一生懸命にやろう、そして喜んで下さる先生の顔を見たい」という純情な心が勝ったようだった。『逝く秋の白雲の流れもあわたたしい晩秋の一日。加古川に面した先生の家のまわりには

穂すすきが銀色に光っていた。四辺には家数もまばらで、至極閑静な環境である。S先生も今日は日曜なので、在宅しているのか、先刻から唄声が聞えていた。

「和夫君、とう／＼覚悟してきたわね、そうでしょ。あれだけ学芸会で劇をこわしてしまつたのですもの、皆、あなたの責任よ、先生もすっかり立場をなくしてしまつたわ」

何んと毒舌を叩かれても、少年は伏目がちに黙って座っていた。

「和夫君、今日は先生、待っていたのよ。一日まかせてくれるって約束しましょう」

それにしても、あの消極的な和夫が、こうして一人で決意して謝罪にくるのは、よくよくのことに違いないが、かりにも、人間の情があれば、早速許すのが当たり前なのだ。今日のS先生は、古代紫の和服でしつとりと落ち着いた姿をしていた。まだ三十には一、二つ間があるのであろう。先生の妖しい瞳は、たえず和夫の上に注がれている。

「和夫君、おうちには黙って？ そう、それはいい、先生があとで知らせといてあげますから……」

何と云われても黙然としていた和夫が、ぽつと口を開いた。涙声である。

「先生、ごめんなさい。僕一生懸命やるつもりだったんですけど、上っちゃったんです。お客さんが皆笑うものだから、つい僕も笑っ

ちやったんです。』

こゝのところ、大変たど／＼しく、同じところをめぐって筋が進展しませんので、大幅に省略しますが、一人いる婆やを外出させてしまったこと、戦争中に作った防空壕用の地下室があつて、それを利用してゆきまします。地など、が二人の会話で運ばれてゆきまします。地下室へ導かれた少年は、恐怖におの／＼。それはローソクの火に照らし出された壁一面に血みどろの無残絵が壁画として描かれてあつたからです。(こゝのあたりは空想としても少々突飛すぎるようです。)全裸の若衆が磔台の上で苦悶している姿、その美しい口許からは血泡が吹き出し、縄目のかゝった胸には二本のサビ槍が突き刺っている。次には、海老責の若衆が五体の骨がすべて折れ砕けてしまふかと思われるほどの苦痛に、正気を失ひかけていた。というわけで、次には、吊り責め、と、若衆に対する責め、磔、海老責、吊り、という代表的なものが出てきます。

引き続き、本題のS先生の少年に対する責めが描かれてゆきます。例によって、会話が多いので省略しますが、無理矢理にいろいろな型の縛り、鞭、擦り、捻り、等が美貌の年増女によって可憐な少年の上に、振りおろされてゆくのです。筋の運びや描写はたどたどしいとさえ云えます。

『鈍い灯影の中に、むき玉子の様な少年の全

裸が、異様な姿態の責苦の儘、白く照り映えていた。云うに云われない様な恐怖の時間のひととき。』

と、少年に対する彼女の責めは一応これで終りました。

『和夫は開放されて、ほっとした気分を味っていた。あれ程の拷問の果とも思われない位身体の痛みは軽微だった。嘘の様だが本当だった。さすがにぐったりと疲れてS先生に支えられながら戻った。

「和夫君、おうちには内緒よ、そして又ね」甘美な悪魔のさゝやきにも似たS先生の声である。

人間の心ほど微妙なものはない。あれ程、苦悶し、責めぬかれた少年和夫が、その後、遂に自らS先生を訪れ、自らの希望によって責められる程になってしまったのだ。勿論S先生は喜び迎え歓待した。和夫の注文により身体に傷のつく事を恐れた結果、責めは吊し責めより菊座責に及んでいったのは仕様のない事だった。』

菊座責め、についての詳述が、この次にあるのですが、これは内容の点から省略しなければならぬ点が多いので、残念ですが、割愛して次に移ります。

『S先生は相変らず美しい。どうした風の吹きまわしか、此の頃は和夫の方を見向きもしない。けれどもS先生の妖艶な眼は、ある一

点に集中しはじめられている。その子の名は豊という神経質な美しい顔立ちをした少年である。凡らく、今後も和夫のそれと同じ様な行為が繰り返えされてゆく事であろうと想像される。

恐ろしい美貌の女サジストS先生。吸血鬼のようなS先生の態度こそ、教育者としての偽善の仮面をかぶった悪魔の再来の姿ではあるまいか。』

一度S先生の洗礼を受けた和夫は、彼女の虜となってしまうのですが、その頃から和夫は見離されて、豊という少年にその触手が移ってゆきます。気儘なS先生の移り気なふるまいと、和夫少年の煩悶が必然的に起き上ってくるのです。

肝腎のところを削除しましたので、物足りないと思いますが、マゾ関係の小説として紹介しました。

次号は、デザイズム関係の小説なり告白なりから、素材として面白いものをごらんにしたいと思います。

尚、度々お断りしているにも拘らず玉稿落穂集についての御照会があとを絶ちませんが、原稿を見せてほしい、とか、借してほしいとかいったお求めには、一切応じかねますから、御問合せ下さらないように願います。

(おわり)

魂を病む人

北 原 純 子

五年も前の話である。

その日私は神田へ買物に出たついでに、個展でも見ようと思ひ付いて、紅屋という画廊に立寄った。新装直後のその画廊は明るくて入り易かった。一階が絵の具店になっていて会場は二階にあった。

「伊伏香保子個展」と彼方此方に貼り付けてあるポスターは、聞いた事のない名であったが、絵は美しかった。青を主調にした少女の絵が多く、それらはどれも深い海のようなバックを背負って描かれていた。

清謐な部屋で、余りにも青い絵を見たせいか、私は妙にその作者に惹かれた。此の画家は若い人なのだろうか……と。

私は思ひ切つて画廊気付でその人に手紙を書いた。絵の師を求めたい気持ちも勿論あったのだが、当時まだ夢の多い年頃だった私には

未知の人に手紙を書く事がやたらと楽しく、一寸したスリルでもあった。返事は五日待っても十日待っても受取れなかった。気の多い私は間もなくその画家を忘れてしまった。

東京の秋はその年、早くやって来た。

当時、或る少女雑誌の挿絵を描いていた私は、或る日偶然記者同志の話から、伊伏香保子の居所を知った。私は早速訪問ときめた。文京区雑司ヶ谷九〇番地で、聖ルカ教会、と訊けば直ぐ判った。意外にも小日向の私の下宿から三十分とかからない処に伊伏香保子の住いがあった。

木立に囲まれたその教会はエキゾチックなスタイルで秋のかげりの中にひっそりと佇んでいた。

敬虔なクリスチャンとしての香保子のイメージが浮び上った。

内部は外で見るよりも広くて、勝手不案内な私が歩き廻っているうちに礼拝堂の裏手に出た。折から通りかかった黒いスカブラリオの修道女に訊ねると、彼女は聖母マリアの様な微笑を漂わせて、彼方の古いレンガ塀の中間にある小さいくぐり門を示した。

「イブセさんはその扉の向うのお住いに居ます。其処からお入り下さい。押してね、押すとリンが鳴ります」

くぐり門は板戸が閉まっただけで、押すとリンを鈴が鳴った。私の胸はひどく動悸がしていた。

その建物は東向に建てられているために、折からの午後の日射しを背後から受けて、玄関先は仄暗かった。扉の脇にガラスコップの様な恰好の吊灯が下っている。呼び鈴か何かが無いかと思つて探して見たが見当たらないま

まに、そつと扉を押して、声をかけようとした時、恰度玄関から奥へ通じる廊下の突当りのドアが開いて、白いアトリエ着を着た人が姿を現した。ドアは直ぐ閉ざされた。その人は腕を上げて廊下の壁灯を灯した。急に明るくなった螢光灯の光が、マシマローのように白い肌の、美しい人を照し出した。此の人が伊伏香保子なのか、と直感すると、訳もない溜息が出た。

「どうして、玄関に鍵をかけて置かないのかね。何度言っても此うなんだから」

その人は罵って呟くと、スリッパの音を乱暴に立てながら近づいて来た。私は自分が悪い事でもした様にドギマギして言った。

「あの……。ドアは開いていたのですから」
「何時も、鈴が鳴ったら開ける事にしています」

くぐり戸に取付けられたあの鈴が呼びリンの代用と見える。

「私が伊伏ですが、御用件は？」

妙に低い声で訊いた。私は正直のところ、瞬くひまに幻滅した。此れは並大抵の気難しさではなさそうだったのだ。初手から訪問者を侮辱した態度なのだ。

併し彼女の風ていは、キバツ趣味の私の気に入った。男か女か一寸には見分けのつかない恰好で、髪型はイタリアンボーイ。白いアトリエ着の下には真紅のセーターと銀ネズの

フラノのズボン。それでいて細い手の指にはマニキュアを施している。而もその、アンバランスは少しも不自然でなくよく似合っていた。

「お忘れでしょうか？ もう一カ月も前にお手紙を差上げました北原純子。多分御記憶にないと思いますが、先生のお作品を拝見して、どうしてもお手紙を書きたくなったものですから、失礼とは思いましたけれど……」

「お手紙頂いていますよ」

ニコリともせず頷いた。どうもいやな奴だ。

不意に、先刻開かれた突当りの扉が開いて若い女が飛び出して来た。娘は胸も露わに吊紐の取れたシユミーズを引っぱり上げるようにしながら、私達の傍をすり抜けて、玄関脇の調理場とおぼしき部屋へ駆け込んでしまった。私が不審の目を向けるのを、伊伏香保子は舌打ちのように、

「モデルですよ。あわてものでね」

と、仕方なさそうに笑った。

それにしても、娘の肩や背には夥しいみみず眼の跡があった。

香保子はそんな事は気にもとめない風で、アトリエに招じ入れた。アトリエは天井が高くて明るかった。カンバスと筆立と、散らばった美術雑誌、絵の具、花瓶。其の他あらゆる小道具の混乱の中に不思議な花園の色彩が

感じられた。窓寄りに洋服ダンスとベッドが並んでいた。香保子は上ツ張りを脱いで無造作に傍の椅子に掛けると、スリッパのままでベッドの端に横になって、肘で上半身を支えだるそうな表情で私を見た。

「ごめんなさい。非常に疲れているものだから」

と、始めて親しめる微笑を見せて無作法を詫びた。

「どうぞ、どうぞ。私こそ突然お邪魔に上つたりして……」

私は急に恐縮した。

ベルシヤ猫のように柔軟な姿態の人だと思つてみると、徐々に、しほつてあつた窓かけが揺れ出して、その影からトラ猫がのっそりと立現れ、私をジツと見据えた。私はわけもなく驚いた。ネコの背は艶やかに輝いていた。

香保子は初対面の誰でもがする型通りの質問、例えば

「貴女も絵がお好きなのですか？ 何をお描きです」

と言つた様な問いを二、三すると、後は途切れた様に黙つて、遠慮のない目で私を眺めた。その目はとても深い色をしていて、時々ふつと影つた様に感情が動いた。私は妙に胸の辺りが重苦しくなった。普通女同志で向合っている時は、例え初対面の間柄でももつ

と気楽なものである筈なのに、何が此んなに私を息苦しくさせるのか私は考えた。此れはきつと香保子の美に圧倒されるのに違いないと、黙っている事は耐えられなかったから、追いかける様に話題を見付けて言った。

「先生はクリスチャンですか？」

「いえ、私が此処に居る事は、以前此の教会の敷地も、此方の屋敷だったからです」

話題はまた途切れた。不意に私の頭上で、バカに大きな音の柱時計が三時を打った。

「先生はお弟子さんは？」

「人を教えたりはしないのです。絵は教えられて出来るものではありません。自分で描いて、自分で見付け出して行く以外にはね」

「は、でもそれはとても難しい」

香保子はブツと笑った。

「絵を描いて一体何をしようとお考えなのです。画家志望ですか？」

「成れるものなら成りたいと思います。洋画家に」

「画家という名は魅力がありますか？」

「いいえ。私そんなうわべだけの気持ではありません。芸術で生きたいのです。他のお仕事なんてつまりません。決して軽蔑はいたしませんけれど。私は自分で創り出す事をしたのです」

「そんな事を誰でも言います。つまらない事なのに……」

香保子は苦笑して、

「絵描きになりたいためにお手紙をくれましたか？」

「本当はそれもありましたけれど、それよりも私、先生の絵がすっかり好きになりましたから、そして先生がどんな方かと思つて……」

「困りますね、興味を持たれては」

困る程ではないにしても、多少の迷惑は感じてゐるらしい口吻である。

「唯、私の絵を見て頂けるだけで結構ですから、此れを機会にどうぞお願いいたします」

私は熱心に頼んだ。師は此の人を除いて他にはない様な氣になっていた。

「さあ、ねえ。私は人を教える事は好みませんが……でも、まあやってごらんさい」

「ありがとうございます」

私は夢中で頭を下げた。

香保子の宙に浮いた爪先から青いスリッパが滑り落ちた。恰好の良い指にベテキュアの薄紅が花びらの様に並んでいた。

帰る時、玄関脇の部屋を何気なく見ると、先刻の娘がエプロン掛けで夕飼の仕度に立働いていた。娘が何者なのか後になるまで判らなかつた。

香保子は娘の事に就いて私に語った事はなかつたし、私も訊かなかつた。娘はマチコと呼ばれてゐた。

香保子に逢う回数が重なるにつれて私は香保子に惹かれた。香保子の美しさには、街角で多く見かけるハイヒールにハンドバッグの同性達の美とは違つた何かがあった。私は香保子を見る度に、身丈に余るマントをひるがえし、馬上ゆたかにうちまたがつて、颯爽と疾駆する古代西欧の女帝達や、男装の麗人、ジャンダークを連想した。詰り香保子の美には此の様なイメージを湧かせる峻烈な色彩が織り込まれてゐた。

何度目かに香保子を探ねた時、初めて裸婦を描いて持参した。私は香保子の批評を期待してゐた。八十パーセントの自信は持っていたのだ。まさか私が此れ程描けるとは思ふまいと……

香保子は相変わらずベッドに寝転がつて、先刻からの続きらしく、氣懶いような仕草で爪の手入れを始めた。私の差出すキャンパスを見ると、微笑んで壁に立てかけて見て、

「よく描けてるじやないの」

と、目を細めて透かすように見た。内心満足を感ぜていると、無造作に絵から離れて、ベッドに掛けて、私を刺すように見ながら、

「いくら良く描けている絵でも、モデルを使つてない絵は直ぐ解りますね。正直な絵を描いて下さい。あなたは器用すぎて……どうもどうも、だな」

と、意味深長な笑い方をした。此んな笑顔

の香保子はステキだと思った。忽ち耳朶が熱くなった。私は後悔した。絵を持って来るのではなかった。此んな絵を見せた事から蔑まれ、疎んぜられるのではないのだろうかと思安になった。師を失う事の損得よりも、香保

子その人を失う事の淋しさが予測されるのだ。香保子は寡黙な人だったから、その日も話す事は何もなかった。夕風の中で香保子のさわやかな息づきが時を刻んでいた。



やがて調理場からコトコトとマチコが物を刻む音が聞えて来た。私は何時も此の音に救われたような気持になるのだった。きっかり五時になると此の音が始まるのだ。

「では、私、今日は此れで……」

私は何時も香保子の沈黙に圧倒されて、逃れるような気持で暇を告げるのだ。そのくせ私の心は別れともない様な切ない声をあげていた。此んな気持が異性間の恋以外にあるとは思議であつた。此ういふの同性愛つていふのと違ふのかなアとふと思つた。此ういふ美しい人となら、ちよつぱり、そうなつて見ても悪くない。

香保子はもの憂そうに起き上つて、スリッパを引かけ、
「此原さんは、何時も急いで帰つてしまうけど、どなたかお待ちになつてゐるの？」

と冗談を云つた。

「とんでもない。私、何時も一人ぼっちで、……下宿生活なんて味気なくて、もう懲々して居ますのに」

「恋をなさい。そうすれば楽しくなります」

香保子はサイドテーブルの上の書棚から大きな絵の具箱を取り出して来た。

「此れをあげましょう」

その絵の具の箱は、普通のものとは違っていた。留金のところに精巧な彫刻がほどこされていて、蓋の閉まる周囲はびったりと吻合する金縁になっていた。香保子は留金を外して見せた。中は絵の具を拭いたぼろ布が詰っているだけであった。古い油の匂いがした。

「随分変わった絵の具箱ですのね」

「もう十年前も前に人から頂いたものの。その人は長くヨーロッパにいらして、その当時やはりある人から頂いたって仰言っていました」

「そんな訳のある賜わりものを私なんか頂けませんわ」

「いや、いいんです。是非受取って欲しいのです。それとも御迷惑かしら？」

「とんでもございません。光栄の至りですけれども」

絵の具箱はもともと褐色がかったものらしかったが、古くなったせいか黒味を帯びて油光りがしていた。

「随分艶がいいんですね。まるでラックを塗ったように」

「手の垢と油ですよ。それとも執念かも知れません」

「まあ！ 気味悪い」

香保子はクククと含む様に笑って

「そう云うだろうと思った」

香保子はそれ以上強いて勧めはしなかった。ベッドの手摺に掛けてある一束の鍵を取り上げて掌の上で転がしながら浸みる様な微笑で

「北原さんは美しい」

「ワア！ とんでもございません」

私は嬉しさを隠すのに苦労した。

「似ています」

「どなたに？」

「それをくれた人に」

香保子は絵の具箱に目をやって云った。

「その方はどうなさいましたの？」

「亡くなったのです」

「先生のお友達ですか？」

香保子は頭を振った。

「もっと大切な人でした」

「師でいらっじやるの？」

「愛人です」

「まあ！ 男の方ね。私がおの方に似ているですって？」

私はいささか憤然となった。

香保子は可笑しそうに笑いながら立って行って、細目に開いていたドアをずっと引寄せ

て閉めた。香保子の手の中で鍵束がジャラジャラと鳴った。香保子はドアの鍵穴に鍵を差込んだ。さすがに私もドキッとした。怖いというのではないが、香保子の行為を冗談と取

る以外に解釈の仕様がなかった。強いて笑顔を作って云った。

「私、ほんとにもうおいとましなければ」

香保子は私の両手を取ってベッドに引寄せた。熱い手である。香保子の熱がそっくり、掌から腕を駆け上って、胸に浸み込んで来るような……。

「可愛い手だこと」

私は照れ臭いので俯向いてモジモジした。

「私の手は、ホラ、此んなに細い。病人の手だからよ」

窓外の落陽が香保子の華奢な手に照り映えた。その白い指先から真珠がこぼれるような人なのだ。私は香保子に手を取られている事がひどく幸せな気がした。一層此の匂やかな胸に抱きしめられたら、どんなに感興が湧く事だろうと、ふと思った。私の体内の正常な血は気紛れな叛逆をもよおしたらしい。

「先生が御病人ですって？ 何処がお悪いのです」

「心臓が弱い」

香保子は声を立てて笑った。

「なあんだ」

「ほんとうよ。随分前からね。ソウルの病気なの」

「ソウルって云うと？」

「そうねえ。一生涯直らない病気」

私には何の事だか判らなかったが、道理で

香保子は何時も臥っているのだと頷けた。

「北原さんのような健康な人が羨しい」

「私だって胸が悪いのです」

「そう、良かったのね。胸で。あなたと交りたい」

私はムツとした。此れでも胸の病気では人一倍苦しんで来た積りだった。私はわざと意地悪く

「どうやって代るんですの？」

と呆けた。

「あなたの心臓をそっくり私に下さればいいの」

「だから、どうやって」

「そんな事を訊いて、後悔しないの？」

「だって、伺わなければ解りませんもの」

「仲々云うんだなア」

香保子は男の子のように乱暴な云い方をした。矢庭に私を胸に抱き込んで、耳朶に囁いた。

「此うやって……」

その衿もとからナフタリンの清涼な匂いがした。夢中で逃れようとすると、

「逃げると、ひっぱたいちやう」

「逃げないから離して下さい」

香保子に抱かれたまま、ベッドに転がった。はずみを喰って肌と肌がぶつかり合った生々しい触覚が心を焦がした。

香保子はやっと私を離してくれた。嫌悪と

も羞恥ともつかぬものが身内を駆け廻って意

気地なくも震えた。香保子は笑って、

「ごめんなさい。驚かして……あ、そうだ」

思い付いた様に、床頭の洋服ダンスへ手を延ばした。

「あつと。届かない。スミマセン一寸開けて。イーゼル取って頂きたいわ」

私は云われるままに、ダンスを開けた。前々から何が入っているのかと気にしていたのだ。その中には三脚だの画布の新しいのが一杯入っていた。

「此れでしようか？」

と振返って訊ねるのと同時であった。

私の手は思いつ切り扉に挟まれた。手首が腕れたかと思った。香保子は戯笑を浮べながら、びったりと扉にもたれて、引手をひもでゆわえた。

「大丈夫。何もしやしない。唯一寸……」

あなたの唇は絵になると思っ。大きな目は邪魔だから目隠しをさせてね。ホンの一分間」

私は観念した。拒むのも大人気ない様であった。香保子はネックカチーフを取って私の目を掩った。目が潰れるかと思う程きつい締め方をした。手首と目の痛みで、気が変になりそうであった。口惜し涙が痛む目に浸みた。二度と来るまい、と決心した。

「此んな事はキライ？」

香保子の熱い息が耳朶にかかった。

「取ってあげましょう。可哀想だから……ね」

香保子の声は低かった。香保子の中に男性を見たような気がした。それは、しなやかで雅やかな、女に眉目ほしいような……

香保子は私の目隠しを取った。挟った手も取ってくれた。視界は海の底に居るように暗く、手首は痛みを通り越して、焼けるように熱かった。くつきりと赤い痣が出来ていた。香保子はよるける私を支えるようにして、手を取って云った。

「痛かった？ もうしない。此んな事。一寸試して見たかったのよ。あなたって仲々ガンバリ屋みたいな顔をしているのですもの。ホントにあなたは立派です」

「ホメて頂いても嬉しくありません」

「ハハハハ。ま、そう怒らないで」

羞恥とも屈辱とも判らないものがまだ胸にわだかまっていた。

「私、もう本当においとましなければ」

照れ隠しの様に云った。

「また、いらっしやい」

香保子は憎らしい程、あっけない云い方でドアを開けてくれた。

怖い様な魅力のある人だと思った。もっともっと、深く香保子を知りたかった。

私は其の夜、香保子に愛される夢を見た。それは残酷な愛情であった。香保子は冷たい

目をして私の肩や背に鞭を振り降した。痛みは少しもなかった。それなのにしきりと涙が湧いた。それはあの娘への嫉妬だったかも知れない。夢が覚めると、寝汗で身体が重苦しかった。此んな夢を見るのはきつと疲れていたからに違いないと思った。

○
香保子は何時訪ねても親切で優しく常にお金の乏しい私に、昼食を御馳走してくれたり、使い果した絵の具や画布の補充に事欠いている私のために、ストックをくれる事も度々あった。そんな時香保子は、「私の友情に意味はない事よ。決してね」と笑いながら云った。

あの日の事などケロリと忘れた様な顔をしていた。私は妙に淋しかった。

冬に入ると、アトリエには早々とストーブが焚かれた。南が大きく開いた此のアトリエから、木立を通してチャペルの十字架が望まれた。

不思議な事に娘には其の後暫らく逢わなかった。私は注意して娘の事は口にしない様にしていた。何となく口にするのは厭だったのだが、或る日といううかりと、帰りに、

「五時になると、何時もあの方がお食事の仕度を始めるので、時間が判ってとても便利でしたのに」



と云ってしまつて、ハツとした。香保子は一瞬眉をひそめて、「あの娘は今居ないのです。修道院に入りた

いなんて、子供の様な事を云い出してしまつて……。懂れですね」「それで、もういらしたのですか？ 修道院

へ」

「いえ。でも今に行くでしよう。祈る事の好きな子です」

さいはてのトラビスト修道院というのへ、娘の身で、何のために行きたがるのか私には判らなかつたが、何だか憧れただけで思いついた事ではない様な気がした。

○

冬も深まった或る風の日の午後。香保子を訪れると、何時になく玄関には鍵が降りていなくて、押すときしみながら開いた。くぐり戸の鈴はリンリンと鳴りつづけているが、風が強いために消されてしまった。物凄い風で部屋毎のガラス、戸障子は、絶え間なく揺れ騒いで、人の気配も人声すらも耳には入らなかった。

私は親しさに慣れて、つい諾否も待たず上り込んでしまった。戸外の寒さが耐えられなかつたのと、呼んでも聞える筈がなかつたからだ。私は此処を訪れる度に、建物の暗さが気になっていた。何か不幸が畳み込まれている様な気がしてならないのだ。玄関からアトリエに至る廊下の左側は、調理場への入口を除くと壁になっていて、北側は玄関の脇に直ぐ二階への階段がある。階段と並んだ応接室の重いドアは何時も閉じられたままである。それに続く二つの和室は空部屋であつた。此の日殊に間取りの事が気にかかつたのは、

余りにも激しい風のせいであつたかも知れないのだが――。

アトリエの廊下に面した窓は大抵何時も開いていて、紗のカーテンが無造作に引かれてあつた。ストーブの熱が極度に部屋に廻り始めると、香保子はそうするのである。ストーブの焚口が開けてあるものと見えて、赤い照り返しがゆらゆらと窓のカーテンを染めていた。

そして――。

私はついノックをするのをためらつたばかりに、見てはならない香保子の秘事を目にしてしまつたのである。紗のカーテンを透してまるで霧の中の出来事のような――。

香保子はベッドの手摺に身をもたせかけ、顔を俯向けて何か一心に手を動かしているのだった。ベッドには久しぶりに姿を見せたマチコが首の下に両手を組んで仰臥していた。よく見ると、両手首は首と共に、足は少し開いて、まるで自堕落な女が眠っている様なあけひろげな姿勢でベッドに縛りつけられていた。香保子はその娘の胸の上の腹の辺りで鈴の付いた紐を、盛んにじやらつかせていたのだ。すると香保子の傍にうずくまっていた猫が飛び出して来て、娘の胸に爪をかけて鈴に飛びつき、掴まえ損ねては自棄を起して、娘の腹に鋭い爪を立てた。見る間に蜘蛛が糸を引いた様に血がにじんだ。

香保子は微笑んで、時に深い息をつきながら紐をゆすつた。娘はジッと目を閉じて酔つた様に頬を染めていた。

やがて香保子はふと気が変つた様に立ち上つた。

マチコを縛つたロープを解くと「もういい、お帰り」

と、その髪の毛を握つて、ベッドから引ずり下した。マチコは香保子の足にすがり付いて、まだ夢を見ている様なうつろな声で云つた。

「いやです。離してはいや、いや」と。

香保子は足で邪慳にマチコの肩を除かせると、ストーブの上で湯氣を立てているヤカンを取つて、湯のみに湯をついだ。

「疲れちゃつた」と呟いた。

マチコは何時までも床にうずくまっている風はやまなかつた。冷たい風の気配がマチコの肩に触れて乱れた黒髪をゆすりつづけた。「風邪を引くよ。冷たそうな風だもの……」温めてあげようか――

香保子はふざけた様な仕草で、ストーブのヤカンを取り上げるとマチコの温かそうな背に、熱湯をしたたらせた。

マチコはウツと呻いて身をぐねらせた。

くねる度に変化する肉ずきの良い背面の陰影は微妙であつた。したたりの跡は忽ち無惨

な水脹となった。マチコはすすり泣き始めた。香保子は愚かれた様に、マチコの背に肩に沸きたぎる湯をそそぎかけた。

マチコの柔肌が犯されて行く情景は、白い画布に乱暴な悪戯描きの筆が塗られて行く時のように感覚的な美があった。

「其処を開けてくれ。その戸を開けてくれ」と、その声は云ったのである。私はすんでのところで息が止りそうであった。

幽鬼のように瘠せ果てた男が私の直ぐ後にうずくまっていたのである。覗き見に氣を取られていた私は其の男が何処から降って湧いたのか判らなかつた。男はやつとの思いで、と見られる様子で、ドアの際まで這い進んで

「此の戸を開けてくれ」

息を切らせながら繰り返した。男は私など眼中になかつた様である。ドアは中から開けられた。私は咄嗟にドアの陰に身を隠した。拙い事をしたと思つた。併しドアは直ぐ閉つた。其のまま帰る事は氣が咎めて出来なかつた。と云うのは口実でその実、私は知りたかつたのだ。

○

「悪魔。恥を知れ、恥を。キサマは俺ばかりか妹までも化物にしようとするのか」

男はベッドの傍に這い蹲つて、せいぜい息を切らせながら、香保子を睨み付けていた。此んな身体になつてもまだ生きていられる事

が驚異としか考えられない、唯無氣味という一語につきる男。

「マチコは毎日泣いてるんだ。キサマのような、悪魔に弄れる事は死よりも厭らしい事だからな。キサマの毒牙から逃れるためには信仰する事が一番良い方法だろう。修道院へ行く氣持だつてムリもない。それをキサマは何故行かせてやらんのだ。キ、キサマは……。」男は息切れのために絶えず身もだえながら、暗い瞳から涙を流した。

香保子は男に背を向けたまま、
「またミキオの嫉妬が始まつた。捨てられた事がそんなに口惜しいの？」

娘はたまりかねた様に男にすり寄つて、
「兄さん、云わないで、黙つて、興奮しないで。休まなきや駄目。お部屋に帰りましょう。ササ早く」

娘は男を助け起そうとして、その両脇に腕を差し入れた。

「やめろ！俺は寝ない。今日は云つてやる。俺は我慢をしていたんだ。嫉妬なんかであつてはたまるか。出て行け。此処はキサマの家じゃない。俺の家だ。俺の父親の建てた家だ。キサマは雇われの家庭教師に過ぎない奴じゃないか。雇われのな。それを親父を亡くなつてしまふと図々しくも入り込んでしまひやがつて……。」
「よしましよう、お兄さん。今になつてそんな事を云つたつて仕方がないわ。先生を呼んだのは兄さんだったんじやないの。兄さんが云いさえしなければ……。」
「何をッ。お前までが此奴を庇うのか。情ない。俺は騙されていたんだ。こ、この悪魔の殺し文句に乗せられたんだ。此奴は俺の心をすっかり擱んでしまふと、毎日開けても暮れても俺を虐待した。とうとう此んな身体にされたんだ。此奴は男を……いや男に限らず女に限らず、人を愛するようになまつとうな人間ではなかつた。キサマに愛だの恋だの囁かれる奴はみんな餌食に過ぎんだ。俺は知らなかつた。だが併し、今は知つてるぞ。オ、オレは。どんな事でも知つてるさ。キサマは子供の頃から残忍な事が好きな女だった。」
「お兄さん。そんなこと、いくら何でも」
「うるさいッ。お前は何か知りやしない。」
香保子はベッドに腰を掛けて、足を組み膝の上に両手を軽く乗せて、目を細めるようにして、描きかけのカンパスを眺めていた。
カンパスにはマチコによく似た清潔な少女の半身像が出来かかつていた。
男は怒りのこもつた手で香保子のズボンの裾を掴もうとして手をのぼしたが、掌は空しく空を掴んで震えながら崩れ落ちた。
「たつた今、出て行つてくれ。ああ、俺はもう我慢がならない」
香保子は顔を向けて男を見た。さすがに顔

色はなかったが、声は柔かく低かった。

「ミキオ。もう幾ばくもない命を大切にさない。眠りがあなたを慰めてくれるでしようからね」

マチコは顔を上げて怨みの籠った目で睨みつけた。

「お兄さんを侮辱するのはやめて……お兄さんは此の家の主です」

「私が居なくなれば、あなた達は忽ち生活に困るじやないの」

「死んだ方がましです。私は自由になりたいのです。自由になりたい。奴隷ではないわ」

マチコは心死になって言った。

男は何度も頷いた。薄い寝巻の肩が寒さに震えている。

「マチコは夢が覚めると直ぐそれを言うけどマチコが私を離れて行く事なんて、恐らく出来ないんじゃないの？」

「神様がお救い下さいます」

香保子はクスッと吹き出した。

「バカあ。自分でも信じていない事を言うものじやないよ。カトリックの坊さんはそれを言う時一番照れちゃうんだってよ。マチコ」

「アアアクマ！」

男は呻いた。

「そうかしら？私は悪魔だと呼ばれる程偉大ではない。悪魔ってものは神通力を持っていて宇宙を自在にかけ廻れる。そんなものでは

ないのかしら？……。悪魔には涙なんてない私は血も涙も持っている事よ」

「ほざくな。鬼だ、キサマは」

男は疲労の余り床に崩折れた。

「お兄さん。しっかりして。休みましょう、お兄さん」

「お兄さん」

マチコが抱き起そうとするのを、香保子は穢いものを除かせるように足で小突いて、

「早く連れて行きな。臭くってたまらないよ水ぶっかけて洗っておやり」

「お願いだ。僕が死んだら、妹を自由にしておくれ。望み通り修道院へ行かせてやってくれ。お願いだ。妹を、妹を……」

男は亡執のように陰気な声で喚きつづけた風はいよいよ強く吹き荒んだ。

私は追いかけられるような気持ちで戸外へ出てしまった。

○

私は其の後暫らくの間、香保子を訪れる事はやめていた。でも香保子を訪れないで居る事は物忘れをした様に気がかりで何時までもは耐えられなかった。第一何の断りもなしにあのままで尻切れトンボになってしまう事は私の見栄坊が承知しなかったし、何しろ理窟ではない。私は香保子に逢いたかったのだ。

三月初旬の午後、一月半ぶりに香保子を訪れた。雨が降っていた。

カーテンをしぼったガラス窓越しに、一叢

の水仙が濡れそぼっていた。ラジオが小さい音でダンス音楽を奏でていた。ベッドの傍の画架に真白なカンバスが掛けてあって、先日の少女の絵は出来上ってサイドテーブルの上にあった。相変らず青い絵であった。絵筆が散乱していた。トラ猫はストーブの傍にうずくまって眠っていた。

香保子は微笑みながら椅子を示した。昨日まで逢っていた人のような落書きした微笑だった。来てよかった、とホッとした。

タンゴ曲の沈んだ音色が部屋に満ちて、口を効く事が惜しまれるような充足が漂っていた香保子は時偶腕を上げて鬨をいじった。その度にセーターの胸の鮮かな柄が延び縮みした。あの日窓越しに見た残忍な香保子とは別人のように孤独な暗い顔を俯向けていた。

私は、此の目で何を見たにしても、此の耳で何を聞いたにしても、香保子を信じようと思つた。

香保子は例の書棚から美しい装幀の小型本を取り出して来て、ベッドに腰を下すと、

「今、好い詩を詠んであげましょう」と言つて、本を開いた。

『レスボスよ。』

お前は大海に漂う一ひらの漂流物。孤独でひねくれ者で、

怠惰な漂流物。

望かな沖合に、
灯をかがげる救いの舟を、
お前は追をおうとはしない。」

私は内心苦笑した。此の香保子が甘っちょろい詩などを口ずさむセンチメンタルを持ち合っているとは滑稽であった。併し香保子は何かを言おうとしているのだ。それだけは判った。

「純子さん」

何時も私の姓を呼ぶ香保子が、初めて名を呼んだ。

「純子さん、さようなら」と。

「まあ。何の事でしよう」

先日の覗き見を知られたのではないかと、冷っとした。そんな筈はなかった。あの病人が私の事など香保子に告げるとは思われない私は落着こうと努めた。

「純子さんは学生時代にSをしかけられた事があつて？」

「そうですね。高校の頃に——。私達の高校は女子ばかりだったからでしょうか。学年の上のかたから可愛がって頂いた事があります」
「それどういう意味？可愛いがるって」
「いいえ別に。唯、物を買って頂いたり。パースデイ、カードを頂いたり。映画に連れて行って頂いたり」

「なあんだ、その事ね……。そういう思い出

が、誰にでも一つか二つあるものだわ。

あの頃ってほんとに美しかったと思うな。感傷だけで結びつく事が出来たのだから……」

香保子は、追憶に酔ったような遠い目をした。妙に胸騒ぎがした。何だか此れでもう香保子を失うような気がした。

香保子は向き直って、

「純子さんね。あなたとはもうお目にかかる事はやめようと思うの。あなたもほんとうに絵を勉強したいと思召すなら、もっと良い先生について、本格的に勉強する事です。良い先生という事は、真実後進のために力を尽して下さる奇特な先生って言う事ね」

此れは覗き見を知られたのに違いないと思つたので、用心深く言つた。

「私。きつと、お気に障るような事をしたに違いありませんけれど、どうぞ悪気とお取りにならないで……」

香保子は本当に困つた様に、

「そうではないのよ。私の処へいらしてはいけないの。あなたの為なの。此れは私の善意が言わせるあなたへの忠告です。何故だか言いましようか。それはあなたが美しい人だからよ。私って美しい人を見ると踏み躪つてしまいたくなる悪い病気があるの。タマシイが病んでいるのです。キザな言い方ですが？」

フフフ
香保子は冗談のように言つた。

確かに、香保子は私に秘密を見られた事を知っている。

最後に、香保子は、深い目の色をしてしみりと云つた。

「純子さんはまだ若いわ。まだまだ此れからですもの。御自分を大切にしなさいません」

香保子に逢つた日から、すでに半年が過ぎていた。香保子の厭な面も見て知つてしまつたのに、不思議と美しい印象だけが、私の胸に残つていた。

「色々とありがとうございました」

私の別れの挨拶は、とても心残りの声になつていた。

「お元気でね」

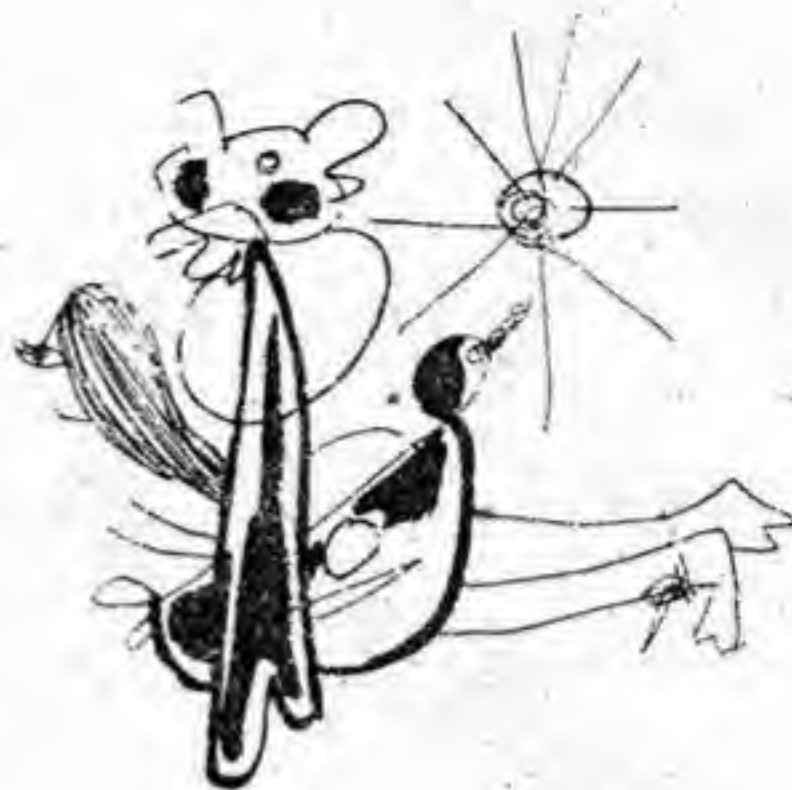
香保子は微笑んで言つた。

x x x

あの病み呆けた男の言つた事は、果して事実かどうか……。何しろ、此の日以来、私は香保子の消息を知らない。
(おわり)

代理部便り ▲特報V

天星社代理部特選写真集、並にアプフオト集、最新版女体緊縛フォト、等の目録は本号に掲載しておりますが、従来通り分譲しております。最近の新版発表の目録は、切手八円同封の上、お申込下されば急送いたします。



私のイメージ

「F4」の独り言

近藤

(「F4」とは、女体緊縛フォト、古川裕子好み縛り／萩千恵子嬢モデル／第一集I、第二集IIの略号なり。)

(F4のI) 仰臥

ごめんなさいね、貴方。これ程まで優しくして頂くのに、私には喜んで頂けるようなものが何一つないんですもの。何の取柄もない女。それは、私のために作られた言葉なのよ。顔立ちにも肢体にもチャームなんてかけらも無いし、本当に唯女であるというだけの私なのに、それなのに、貴方はどうしてこんなにも私を可愛がって下さるの？

昨日も貴方のお母様に私のありもしない美德をお話しになって御一緒に賞めて下さった貴方。この前の土曜日に銀座のレストランで私の大好きなもののばかり御馳走して下さいました貴方。私の秘かな我儘をいつお読み取りになったのか、私の左手首をやさしく取って南京

虫をはめて下さった貴方。

でも私にはその万分の一にもお応えできるものがないの。私がどれほど努めてみても何一つ貴方のお気に入るようにはできていないことを私自身が一番よく知っています。

それが――

貴方が、あの秘密のお写真を御覧になっていらっしやった時の輝くような瞳、私は胸の動悸をどうにも抑えることができませんでした。そうなの。私にできることと云えば、この温かく柔らかな肉の塊を貴方の前に引据えてお気に入るようにお料理して頂くことだけなの。無能で愚鈍な私ですもの、貴方に喜んで頂けたり、満足して頂けるとは決して思っ

仕置をお受けします。

貴方にお仕えできる私の喜びは、そして私の生き甲斐はこれより他にないんですもの。

(F4のI) 直立

お帰りなさい。もう何時頃かしら。貴方がお疲れになってお帰りになったのに、いけない私はお食事の仕度さえしていないのよ。ごめんなさいね。いつも貴方に私の分まで美味しく作って頂いて、私、嬉しいわ。ほんとに有難くて、でも申し訳ないわ。私のお食事なんか御飯のお残りにおつけでもかけておいて下されば、お台所の隅からお手洗いの中でそつと頂いてしまいますのに。

今朝貴方がお出がけにお云い付けになったとおりはずうっと立ち続けていたのよ。背

中に捻じ上げられたままの手首は、もう感覚がバカになってしまったようで、指だけがびくびく震えているでしよ？ 腰の辺りから下の方も、もうじいんとしびれて、気持の上では動かないでいる心算でもどうなっているのやら、少しでもよろめいたりした時は遠慮なさらずにぶって下さいね。丸い肩でも重なた手首でも一杯に膨らんだお尻でも。皮鞭がいいわ。棒もいいわ。鋼の鞭でぶたれたら囚衣ぐるみ私の肉は裂けてしまうでしょうね。何んでもいいわ、力いっぱい打って下さいね。そしてどうにでもお気の済むようにして頂きたの。ね、お願い。

(F4のI) 反身

く、くるしい、苦しいわ、ああ。

貴方は「もっと反れッ」てお叱りになるけれど背中括られている手首が抜けでもしない限り私独りではもうこれ以上反れないの。貴方が、私の肩の下へ足を入れて蹴り上げて下されば、呼吸は詰まるでしょうけれど、ブリッジのポーズに反りかえることができるのに。でも、この縄目の厳しさでは、とても長い間の辛抱などできないと思うの。きつとすぐお言葉に叛いて背中やお尻をつけてしまうわ。そんなふうに強く怠けている私の肉体には、思い切った酷い折檻が一番いいのよ。貴方がその逞しい十九貫の重みをかけて、私の

むらむら弾力のある胸からお腹から大腿の辺り迄を、ぐいぐいと踏み蹂躪して下ったら、私の身体はこの激しいお仕置にぎしぎし音を立てて鳴ることでしょう。背中で逆についた手首の骨が、私自身でも驚くくらいぐきと大きな音をたてて折れ砕けてしまうかも知れせん。真蒼になった私の額にたらたら冷たい汗が流れるかしら。とめどない涙が耳の附根に流れてフードにたまるかしら。そんな時、私は、押し殺され呻き声を出しているかも知れません。でなければ氣遣いのようになって猿轡の下から喚き立てているかも知れません。でも、貴方はそんなこと少しもお氣になさらないでいいの。肉体のそんな反応なんて、決して私の本当の心じやない筈ですもの。貴方はお好きなようになさっていただければ、それでいいのよ。

(F4のII) 伏臥

どうなさったの、急におやめになったりして。なぜお捷ちにならないの？

お言葉に叛いて、反るのを勝手にやめてしまった私ですもの、許したりなどなさらないで。そんなことをなされると、くせになっちゃうわ。折角、鞭を握りしめて「俯伏せになるんだっ」て足蹴にして下さったのに。

囚衣に覆われている私の肌には鞭が充分にこたえないかも知れません。でも脚だけはむ

き出しなのよ。昔のヨーロッパで姦婦のお仕置にしたというように、私の足の裏を、骨が砕けて歩けなくなってしまうまで叩きのめして下さらないの？ 次にもっと面白いプランがおありになるにしても、時間は充分にあるんですもの、その前に、この怠け者を思いきり鞭でぶって下ってもいいじゃありません？ いいえ、決してお恨みに思って申し上げるんじゃないんです。ただ次のプランにかかる私の疲れをお氣遣いになるのでしたら、それだけはおやめになって頂戴。反りかえる力はありませんけれど、でも、貴方の鞭を音を立ててお受けする力は、まだまだ残っているんですもの。

(F4のII) 跪居

云えないわ。云えないのよ。貴方のお云い付けになった言葉が、どうしても云えないのよ。私、どんな表情をしていて？ 少しでも真面目でない様子が見えたら、容赦なく次のお仕置にかけて下さいね。でも、今私は一生懸命なの。ほんとよ。

私は女囚です。そして貴方の奴隷です。どうぞ、どんなことでも、お云い付け下さいませ。

って、さっきから何十遍、繰り返したかしら。でも貴方は、ふざけている。っておっしゃるのね。笑っている。って、おっしゃる

のね。口の中に詰められた布で押しまげられて舌が動かないのよ。それに、これだけしっかり口を覆われていては唸り声にかならないわ。私の耳にだって「ああううあ、ああううう」としか聞こえないんですもの。いいの、もう覚悟はできています。貴方がお仕度して下さった台の上へ私の肉体はどんなふうにかれるの？ 俎の上のお魚のように置かれるの？ 足首を持って思いきり左右に捻げて括られるの？ 俯伏せにお尻を高く突き出して結わかれるの？ それとももっと酷い想像もつかないポーズで繋がれるの？ でもどれだって苦しいでしょうね。そして私はその何倍もの苦しみを加えて頂かなければいけないんだわ。

喉が裂けそうに痛い。でも、私は貴方が御命令さる限り何十遍でも、この誓いを精一杯の声で繰返しますわ。

(F.4のII) 屈臥

私の頬に涙が走っているようね。私の心とは別に、体だけが泣いているのですもの、放つといていいのよ。

睡いわ、深い深い水の底に引きこまれるように眠いの。頭の芯がぼうつとしていて、首縄が喉を締めつけている上に足首を括った紐の余りが首を前へ引っばっているんですもの、そりや苦しいわ。それにあとからあとか

らふき出して来るこの汗。指一本でも動かそうとすると、私の体が囚衣の中できゅっきゅと鳴いているわ。

でも、そんなことより今の私には無上の喜びがあるのよ。私の思い上りを許して頂ければ私の心は、初めて貴方をお慕いすることを許されたんですもの。

私の上にのしかかって、背中を足で踏みつけて、私の膝と首を結びつけようとなさった貴方。後半の首縄の苦しさだけで、もう貴方のお云い付けをきこうともしない白い肉塊を力で抑えつけて下さった貴方。その貴方の眼にあの秘密のお写真を見ていらっしやった時と同じ輝きを発見した時の私の嬉しさ。何と申し上げてよいものやら。

女囚の私ですもの、貴方が満足して下さったなどとは決して思いません。私の肉体に喜んで下さったなどとも思いません。ただ私の肉体の反応の或る瞬間が、貴方のお気持ちに幾らかの刺戟を、もたらしたのかも知れない淡い、でも私にとっては何ものよりも大きい希望が湧いているのです。

貴方は、私の苦しみ様が余りにも酷かったので加減なさったのじゃなあい？ ごめんなさいね。私にとっては、膝が胸につくまで引絞って強く結ばれても、今のようにして置かれても、肉体に加えられる苦しみは全く同じなんですもの、同じことなら貴方のお望み通り

のポーズにして頂きたかったわ。

ね、貴方。もし貴方が私の肉体の苦しみを御覧になって可哀想だから許してやろうとか加減してやろうとかお思いになることがあっても、そんなお気持はさっぱりとお棄てになつて下さいね。プランに満足なさるまで徹底しておやりになつて頂きたいの。

今の私の姿だって、もし私が、どんな泣き叫んで、解いて、とお願ひしても、決してお氣にかけないで頂戴ね。そして、もっともっと素晴らしい惨酷なお仕置をお考えになつて実験なさろうとお思いになつたら、その時初めて新しいポーズに変えて下さればいいの。それまでは知らん顔で放りっぱなしになさつてね。

女中さんを置いて頂いても同じでしょうけれど、私には貴方のお世話を何一つさせて頂けませんのね。でも、もしこんな女臭い姿で許して頂けるなら、何とか起き上つて尺取虫のように一向に前進しない屈伸、いいえ伸びることのない尺取運動を続けながら、後手の指と両足先と、を酷使して、お掃除にお洗濯にお炊事に、貴方の腰かけや踏み台を勤めるくらいのお手伝いはさせて頂けないかしら。何から何まで御不満以外にはないでしょうけれど、こんなことが、優しい優しい貴方にお応えできる私の、屑みたいな私の全部なのよごめんなさいね。

私の告白二題

青葉楨一

毛脛

吉川英治の小説、「親鸞」の終りに近い部分に、次のような一節があります。

「——親鸞は、草庵の裏へ出て、少し歩むと井戸そばに草履をぬいで、跣足になった。そして、法衣のすそを高くからげると、毛のふかい脛が剥ぎ出されたので、——」(傍点筆者)

ここを読むにいたって、私は、親鸞という人間の(實在のそれというより、小説の上での)肉体上の魅力を発見した思いでした。男の脛を、一口に毛脛と称し、不粋なもの

とされているようですが、毛脛の狂崇者である私には、全で逆なものとして映るのです。

昔なら、浪人の、黒絞付の着ながしの、裾から現れる毛脛。又は、いなせな盗ッ人被りに藍みじんの、裾から覗く毛脛。

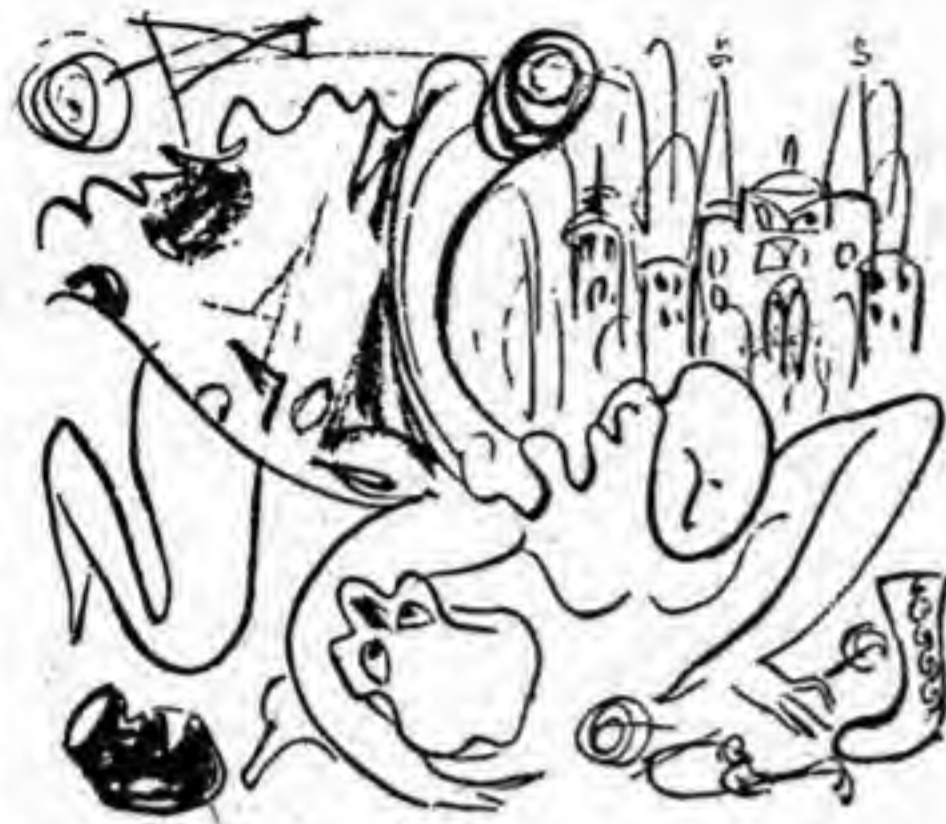
それらは、あたかも、浮世絵などに見る、紅いけだしから、チラチラする、雪のはぎにも匹敵した、嬌しさを覚えさせます。

現代なら、さしずめ浴衣ですが、どうも近頃は、浴衣の下にも、シャツを着たり、ステテコを穿いたりする人が多いようです。浴衣はやはり素肌に着るのが本場で、下には、六尺褌を締めるのが一番ですが、そうでなくても、せめて申又一枚にしてほしいものです。

美しい毛脛の条件は、毛が、黒く、長く、密生していることです。脛の皮膚が白ければ凄艶さを、浅黒ければ精悍さを与える、毛深い毛脛は、男性特有の魅力であると云えましょう。

しかし、日本人には、体毛の濃い男性が案外に少く、美しい毛脛も、めったに見かけることがありません。こころみに、風呂屋へ行って探してみると判りますが、私の経験では百人ぐらいの中で、たった一人見つけたただけでした。

容貌や体格が、いかに立派であっても、脛の毛が貧弱だったら、私のその男に対する評価は半分になってしまいます。そのかわり、



素晴らしい毛脛さえ持っていたら、他は何うでもかまいません。ただそれだけで、夢中になつてしまうのです。

終戦までもない頃です。東京の旅館で、相宿になつた男がいました。女中がその男を連れて来たとき、私は、もう寝床に入っていましたし、二人は簡単な挨拶を交したただけで、彼もすぐ布団にもぐり込みました。

夜中に眼を覚すと、天井には、白々と電燈がともっていました。何気なく寝返りをうつと、男の片足が、掛布団からニュツとはみ出しています。見事な毛脛です！私は、思わずドキンとしました。そうして、男の寝息をうかがつてから、ソロソロと起上り、這うようにして、彼の毛脛ににじり寄りしました。

陽灼けた顔にくらべて、意外に生白い、コリコリと肉の締つた、長い脛には、真黒な剛毛がふさふさと生えています。ソツと手をのぼして、サラサラとした肌触りを悦んでいるうちに、次第に大胆になつてきた私は、遂には頬をすりよせ、唇を押しあてて、狂おしい愛撫を続けるのでした。

妹達に付合わされて、潮干狩りにいったときのことです。丁度、小学生の二人と一緒になつて干潟の上はたいへんな賑わいでした。

私の近くで、五年位の女の子が三、四人で何やら声高に喋り合っていました。聞くとともになしに、聞いていると、次のような会話が耳

にはいりました。「ネエ、高井先生の足、見た？」「イエエ何よ？」「凄いのよ！」「何が？」「毛がモジャモジャ——」「イヤダ……」「でも、男の人の足って、みんなそうなんでしょう？」「だって、高井先生のは特別よ。他の先生は、あんなじやないもの——」

私は、何食わぬ顔で、彼女等のそばを離れると、砂の上を駆けて来る男の子をつかまえて、

「——君ネエ、高井先生どこにいられるか、知ってる？」と、訊きました。

「向うだヨ——」と、指された方へ行つてみると、ズボンで膝の上までまくり上げた、男の先生が二人いましたが、若い上背のあるのが高井先生であることは、すぐ判りました。しなやかな、健康そうな脛には、小麦色の皮膚がうす黒く見える程、長い毛が、海風にそよいでいるのでした。私は一眼で彼の毛脛に強くひきつけられてしまったのです。

帰りの汽車も、小学生と一緒にたのを利用して、私はうまく、高井規明に近づくことが出来ました。同じ市の学校同志（もっとも私の方は高等学校ですが）なので、彼もすぐにうちとけてくれました。

彼の毛脛こそは、その日の私にとって、最も大きな収穫だったのです。（私のとった貝は、全部で、五つか六つあったでしょう。）

妹達に、さんざん笑われました）

出先から高井の学校へ回ってみると、放課後の運動場で、彼はバレーのコーチをしています。短いパンツの下からのびた脛が、午後の陽射に映えて、かもしかのように躍動するのを眺めていると、私の口からは、何度も溜息が出てきました。

やがて、練習が終ると、高井は、白い清潔な歯並びを見せて、ニコニコしながら近寄ってきました。

「いらっしやい。今日は？」

「イヤ、ついであつたもんでね。一寸寄つてみたんだ」

「そうですか。僕、失礼して、身体を拭いてきます。すぐですから……」

「じゃア、僕もそっちへいこう——」

高井は、汗になつたシャツとパンツを、手早く脱ぎ捨てると、サポーターも脱して、シヤワー室へ飛込みました。カーテンは開いたままです。逞しい彼の裸身は、たちまち水に濡れて輝きだし、脛の毛は、ベツトリと皮膚に貼付いて、一際黒々と鮮やかに、嬌いて見えます。

「君、いい身体をしているねえ。実に見事だ。男でも惚々する——！」

タオルをとってやりながら、私が云うと、彼は、無邪気に微笑んで、誇らしげに胸をさらし、よく発達した、腕から肩へと、サツサ

ツと拭いていきます。一条纏わぬ、若々しい肉体には、傲岸な程、羞恥の翳さえ見えません。

夏休みになると、一夜を、私は、B海岸に高井を誇いました。

何本かのビールをあけて、高井は、いつこに平気なのに、飲めない私は、コップ一杯で、もう息苦しくなっていました。

「君。高井君。脚を出してごらん——」

「脚——？」

「そう胫だ。君の、美しい胫サ」

私は、酔ったふりをしていたのです。

「サア、出したまえ」

「こうですか——？」

高井は、怪訝そうにしながらも、胡坐をくんでいた脚を、浴衣の下から、私の前につき出しました。

「オウ、この脚、この脚……！」

私は眼を越めるように、彼の毛胫を眺めながら、

「ねエ、君。僕が、君を、何故好きになったか、解るかい？」

「さア……？」

「この胫サ。この美しい毛胫に、僕は一眼で惚れてしまったんだ」

それを聞くと、彼はゲラゲラ笑い出しました。冗談としか思わないのです。そのとき、私は、フツと、はぐらかされたような淋しさを

を感じ、いつとき然りこんでしまいました。

その夜。

私は、どうしても眠れません。

隣の高井は、スウスウと、規則正しい寝息をたてて、深い睡りにはいつています。

私は、とうとう、自分を抑制することが出来ませんでした。顫える手で、彼の布団を剥ぐと、彼の毛胫を、かき抱いて、雨のような接吻を、降らせたのでした。

高井規明の毛胫は、今も健在です。

そうして、彼の毛胫がある限り、私は彼を愛し続けるでしょう。

白昼夢

始業のベルが鳴り、出席簿を抱えた教師達が、めいめいの教室へ散っていくと、職員室の中は急にガラシとした。正午迄空時間の私は、新刊の文庫本をポケットにつっこんで外へ出た。学校の裏手に、私が好んでよく行く松の多い丘がある。何時ものように、ダラダラ坂を登っていくと、途中で一人の男に出会った。ジャンパーを着た、労働者風のその男は、私の前迄来ると、一寸鳥打のひさしに手をやった。しかし、私には一向に見覚えのない男である。

「——青葉先生ですね？」

「ええ、そうですが——君は？」

「あたしは鈴木ってモンで、朝から、先生の来られるのを待ちました」

「しかし、僕が此処へ来ることを何うして——？」

私は、少々気味が悪くなった。

自転車が坂を下りて来て、乗っている若い男が、二人をチラと見て通った。

「——それは、後でお話しますが、とにかく、この上の松林迄御一緒願えませんか？」

「此処じやア、いけないんですか——？」

さすがに私も不安になった。しかし、人通りもあるし、丘の上にも下にも人家がある。

まさか昼日中から、追剥でもあるまい。それに、多少は好奇心もあった。云うままに歩いていくと、やがて男は立止った。道から十五、六米ばかり枯れた笹を分けて入ったところだが、地形の具合で、道からは一寸見通せない。人目につかぬように何かするに、絶対の場所である。松の根もとに、三、四日前私の使ったチリ紙が、まだそのままあった。

私は内心ドキリとしながら、

「——で、用というのは？」

「先生。あたしア、もう我慢ができなくなっ

たんで——」

「……？」

「あたしの悪い病氣なんです。先生みたいなインテリを見ると、ムラムラと裸にしたくなるんです。無理矢理にきものを剥いで、身体

の隅々迄見てやりたくになります。先生、お願いだ。あたしに、先生を裸にさせておくンなさい！」

普通の人なら、これを聞いてゲラゲラ笑いだすだろう。私でさえも、一瞬啞然とした。彼の言葉が唐突なうえに、全く予期しない事柄だったから。私は俄に、此の男に興味を持ち出していった。そうして、眼の細い赧顔をマシマジと瞷めると、

「君の云うことはよく解るよ。というのは、僕も同じ裸体マニヤだからだ。しかし、残念ながら、二人ともサドじやアね——。平行線で何うにもならないナ——」

私は嘘を云っている。サディストである私だが、裸体とそれに繋がる被虐に関しては、マゾをも併せ持つているのである。しかし、未だそのときは、眼の前にいる男に対して、欲望らしいものも起ってはいなかった。それよりも、初対面の彼を、もっと観察しなければならぬ。

「——仮に一步を譲ってだよ。僕がマゾの立場を演ずるとしてもだめね、今は二月だ。それに今日は薄陽で風もある。野外プレイは一寸無茶じやないかね」

そのとき、私の脳裡をフト、全裸にされた私の瘦せた身体が、男の足もとに、寒気に曝されて転がっている姿がかすめた。微かな戦慄にも似た、シワリと胸を脅やかす被虐の幻

想だった。

「——君には君々と話も聞きたいし、一度ゆつくりと会ってくれませんか？そのうえで、又、場合によったら、君の要求を入れようじやアないですか」

その冷静に云ったつもりの私の声が、妙に顫えを帯びて聞えた。

男は、先刻から一言も口をきかないでいたが、突然、狂暴な動作で襲いかかって来た。周章てた私は、反射的に防禦の姿勢をとったが、腕力の相異は如何ともしようがない。屈強な男の前には、私は恰で小兒同然である。

(もう駄目だ……！裸にされる真ッ裸にされてしまう！——)

弱々しい抵抗を続ける私の胸は、トツ、トツと、激しく打出している。上衣を、ズボン、一枚剥ぎとられることに、それは一層高くなった。

急に感じだした激しい寒気に、私は身顫いをして起上り、そそくさと、あちこちに散らばった衣類を、急いで拾いあつめた。やつと身なりを整えて、気がついてみると、男の姿はもう無くなっていた。何か物足りない気もしたが、ホツとしたのも事実である。

思返すと、うまくしてやられてしまった口惜しさが、かえって甘酸っぱい被虐感をそそった。私はヘンにふらつく足を気にしながら、夢にでもうかされているような気持で、

坂道を下っていった。

翌日。私は、やや躊躇した末に、昨日のところへ行ってみた。だが、期待は外れた。そして次の日も、その又次の日も、男はやはり現れなかった。

○

あれから五日たった朝、私はH県のTという友人からの手紙を受取った。Tは、某誌の読者通信で知合うようになったサディストである。まだ一度も会ってはいないが、文通は始終交している。いわば、ペン・フレンドといった間柄だった。

『先日、の事、正確に云うならば、二月十六日の、松林での事件。お気に召しましたか？と、こう書けば、もうお判りでしょう。貴兄を襲った暴漢は、私の派遣したものです。彼は私の工場の従業員で、アブではありませんが、主人の私の命令なら何でもきく男です。貴兄が常々手紙に書いている、(暴力で裸にされたうえ、暴行されたい)という言葉から思いついて、仕組んだ芝居ですが、少し悪戯が過ぎたでしょうか。何の予告もしなかったのは、勿論効果を上げるためですが、貴兄がどんなに驚いただろうと想像すると、痛快でなりません。早く感想がききたい。御返事をお待ちします。』

(おわり)

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤブー

沼

正

三

作者から

人に勧めるより先ず自分で、とうとう家畜化小説を書くことになりました。二千年後、白人だけが文明を享樂し、黒人は奴隸として人權を奪われ、日本人は更に低くヤブーと呼ばれる家畜の一種として使役愛玩されている、そんな世界に白人女性の恋人と共に連れて行かれた現代の日本人男性がひどい目に合わされる話です。長いものになります、手帖同様御愛読下さい。マゾヒストの自虐的空想を愛さぬ方は、不快を感じるだけでしょうから、読まない様に願います。

第一章 空飛ぶ円盤の墜落

八つの太陽を統べる宇宙帝国イース(EES)の大貴族、今ときめくジャンセン侯爵家の若夫人ポーリーンは、三八〇号台諸球面

の空間を遊弋しつつ、ゲルマン族という彼女の遠い先祖達が南へ西へと大移動してゆく有様を中欧の空から観察し、目立つ人物を立体写真に撮影していた。

本国星にいる夫ロボットのことをふと思ひ出したのは、その人物中にロボットそっくりの顔を見た時である。急に帰りたくなった。でも本国星に帰るのはまだ一週間先のこと……まあ、とにかく今日の遊歩はもうお終いにしよう。原球面の別荘で妹や兄(兄より妹を先に云うのはイース帝国の女権制からである。後章参照)が待ちくたびれていることだろう……

高度を一万米に上げた。今迄箱庭のような風景と人馬を示していた立体レーターは見る見る遠景になり広大な地域を包み始め、やがて彩色立体地理模型のようになって、中欧の雄大な山脈を示した。時間軸に固定して作動する次元推進器の槓桿を零から未来に切換え機関を全速力にする。速度計の目盛は時速六〇〇年を指している。六秒毎に一号宛球面を乗り越えてゆく。六秒が一年に当るのだ。昼

夜交替は余り短いので昼の明るい映像が持続しているが、山頂に積る雪の線が冬と夏の両限界を六秒毎に目まぐるしく波打つ有様は、見馴れぬものには珍らしい景観であろう。

然し航時快速艇に乗ればいつものことで、そんな途中の景観など別に見たいとも思わぬポーリーンは、自動操縦装置にあとをゆだねると、操縦席を離れて、長椅子に腰を下し、足台に足を載せた。

先刻見た顔はロボットに似ていた、ロボット……いっか彼女の……の思いが燃え上ってきた。

足台が身動きして、彼女の……込んで来る。……その素晴らしい……彼女はいつか恍惚状態に陥り、……つけしながら、半醒半睡の境に彷徨している。……

壁の下部に設けた仕切扉の向うの犬小屋から、愛犬タロの時ならぬ吠声を聞いて、ポーリーンはふと目を覚めた。墜落感がある。ハッとして立体レーダーを見ると、箱庭よりも近景になり、刻々に山肌が大きく近寄ってくる。

「いけない、自動装置の故障だわ」

リンガは彼女の気持を読んで退こうとする、それを更に突き飛ばすようにして立ち上り、操縦席に駆け寄ろうとした途端、激突の衝撃と共に、彼女は頭を中央の卓にぶっつけて、失神した。

二

一九五六年夏、西独ヴィスバーデンに近いタウヌスの山中、山の中腹を緩やかに流れる溪流をパンツ一つ纏わぬ素裸の男が流に沿って泳ぎ下っていたが、俄かに泳ぐのを止め、中流に突っ立って

「やっ、何だ、今のは」

と目を見張りつつ、川下を眺めて首を伸した。空気を劈く音響と共に、川下の岸近い小屋の近くに、何か輝く物体が墜落したのだ。

女の悲鳴がその方角から聞えて来た。

「クララだ」

男は岸に飛び上った。ズングリした身体、黄色い皮膚、日本人だ。素裸である。服を脱いだ所は百米も川上の岩蔭で小屋とは逆の方向だ。危急の際にその方に戻るのには迂遠過ぎる。男は裸のまま小屋の方に向って駆け出した。

瀬部麟一郎は二十三才。昨年東京大学法学部卒業後、最年少の欧州留学生として渡独し、西独某市の大学に入学した秀才である。背は一六〇㎝程しかないが、柔道で鍛えた筋骨は隆々と盛り上って男性美に溢れている。ちんまりした鼻、高い頬骨、一重瞼の下、真黒な瞳、典型的な蒙古人の容貌だが、広い額が知性を物語り、醜いという印象には遠い。

オレンヂ色に輝く大きな物体が先刻まで小屋の立っていた空間を占領している前に、軽快な乗馬服装をした白人女性が放神したように佇立している。駆け寄って、

「クララ」

「あゝ、麟、恐かったわ」

思わず抱き合った。右手に乗馬鞭を持った乗馬服の女と一糸も纏わぬ男、この一対は横から見ると変に不調和だった。女は彼より一〇㎝程も背が高かろう。若い牝鹿のような伸びのした四肢。栗色髪だが肌はクリームのように白い。茶色の眼と肉の薄い鼻と引緊った唇とが稍々面長な顔に配置されて、鋭敏と情熱と冷酷とを同時に感じさせるような美貌を形成している。背の低い浅黒いと云っているような肌の素裸の男を抱く彼女は、まるで牧野神を愛でるオリンパスの女神のようだった。

「良かったね、無事で、……」

「妾も泳ごうと思って、小屋を出た途端、ビューンと墜ちて来て、ピシヤリなの、馬は二匹とも下敷になったわ」

女はまだその驚愕から醒め切れぬ面持だ。

クララ・フォン・コトヴィツ嬢は、麟一郎の級友であり、婚約者でもある。東独の名家に生れた彼女は独乙敗戦の時ソ連軍に両親と兄弟を殺され、天涯孤独となった。偶々西独に来ていたお蔭で助かった当時十歳だった彼女は、遺産と父の友人に頼って、それから十年の学生生活を送って来たが、半年程前、フトした機会に瀬部麟一郎の柔道が命知らずの与太者を懲しめるのを見、彼に親しみ、その学問にも惚れ込んで、遂に婚約するに至ったのである。麟一郎の三年の留学期間が終わったら、一緒に日本に行つて、式をあげる事になつてゐるのだ。上流に育つたクララは乗馬の趣味があつたので麟一郎は彼女を指南役にしてこの道に入つたが、この三ヶ月ほどですっかり上達し、今日は二人で遠乗をした。山中に入って無人の山小屋を見付け、一休みした後、水泳の好きな麟一郎がひとりで川に入つて泳いでいたところに、この椿事というわけなのである。

「だが、一体、何だろう」

無事と分ると、それが問題だった。

「麟、それがね、妾、空飛ぶ円盤じやないかと思うの」
「エッ」

抱擁を解いて物体の方に向き直つた麟一郎の目に写つたのは——成程、そう云われて見れば、評判の空飛ぶ円盤に相違なかつた。平たく潰したドーナツにピンポン玉を嵌め込んだとても譬えようか、直径二十米、厚さ二米ほどの完全な円盤体の中央部が半径五米ほどの球体に脹れ上つてゐるのだ。オレンヂ色の金属で外側を張つてあり、円盤の一部分が衝撃で折損し、内部から柔い光が射してゐるのが見える。機械が動いてゐるのも見える。

麟一郎は段々素裸が氣になつて来た。先刻は危急の際だった。彼女が無事だったと分つた以上、服を着て来なければ淑女に対して失礼であろう。思わず赤面しつつ、彼はこの場を外して、川上の脱衣

した場所まで一走りして来ようとした。

その時、今迄隋力で廻つていたかに見えた機械の動きが止んで、突然軸が折れ機械の一部が横倒しになつて、人一人通れるほどの空隙ができた。

クララは躊躇なく、その中に歩み入ろうとする……

「クララ、待て」麟一郎が叫んだ。「僕が先に入るよ。中に何があるか分らん。危険だ。待て。服を着て来るから」

「妾、待てないわ」クララはわざと彼の方を見ずに答えた。「すぐ中を調べて見たいの」

もう脱つ退きならず、麟一郎も空隙の方に近づいた。服を着に行つてゐる間に、彼女は一人で中に入つてしまふだろう。自分というものがいて、そんな危険なことはさせられない。

「裸で失敬だけど、僕が先に立つよ」

「妾、裸なんか氣にしない、内部が氣になるの」

クララは少々心にもないことを云つたが、内部に対する好奇心を湧していることは勿論嘘ではなかつた。

こうして、二人は円盤の中に潜り込んだが、瀬部麟一郎が全裸でいたことが、今後の二人の運命を根底から変えてしまふことになるうとは、二人とも知る由もなかつたのである。

第二章 肉足台「舌人形」

壊れた機械室の扉口から廻廊に出て間もなく、中央部に導く廊下を発見した。照明装置は見当らぬのに一面に明るい昼光が満ちてゐる。絨氈は敷いてないが、床の表面はゴムのように弾力に富んで、絨氈の上を歩くようだし、瀬部の裸の足跡にも金属のような冷い感触がないのは、一体どんな材料なのであろう。

中央室との仕切扉は、自動装置らしく、二人が近づくとひとりで開いた。

畳が八つは入る円形の丸天井の一室が目に入った。室の中央部に箱庭のような工作物を載せた円卓があり、その一隅に計器類を夥しく置いたのは操縦席であろう。然し人影はない。

扉口から一步踏み込んだ。隣室からか獣の唸り声のようなものが聞える。見廻すと右手の壁面に沿って丸く豪華な長椅子がしつらえてあり、その前の床に女が倒れている。殆んど露出した下半身の豊かな太腿に始まり、恰好のよい踝に終る脚線の見事さが先ず麟一郎の目を射た。

馳せ寄って、彼は更に胆を奪われた。素晴らしい美人なのだ。年の頃は二十五六歳か。背はクララより高く一七五程近からう。紫色に光る不思議な毛皮のケープを羽織っていたらしいが、仰向けに倒れているので、ケープは肌を覆わず、ワンピースの海水着のような乳房から腿の付根までを包むだけの簡単着しか身に附けていない。玉貝のように透き通った下に血色良い薄桃色の肌や、隆起した胸と締った腰と豊かな臀とを連ねる成熟した女体の曲線やが、じかに麟一郎の眼を挑発する。房々した金髪を床の上に乱して双眼は閉じたまま、細く濃い眉の気品、皓い歯の覗く口許の薄い唇の淫蕩、恰好のよい鼻と耳、……その衣裳に感じられる異国風な味にもかかわらず彼女は北欧系金髪女の最高級の標本に間違いない。一見外傷はなく、呼吸もすっかり止ってはいない。墜落の時の衝撃による気絶であろう。麟一郎は女の頭の脇に両膝ついて坐り、両手で上半身を抱き起した。

「ややッ」「まアッ」

抱き上げた途端、二人は思わず叫んだ。ケープの下になっただけで今迄見えなかったのだが、女の身体の下に丁度緩衝布団のように横わっていたものが現れて来たのである。

人間だった——こんな畸形侏儒でも人間と云えるならばである。

身長は九〇程。素裸。切断……。胴体は短い肉付きは良い。

両脚共足首から先が無く、端が摺古木のようになっている。そして奇妙なことに長椅子の下から一見電機具コードを思わせる肉質の紐が出て床を這い、肛門の中に挿入されている。頭部が極端な逆三角形で、頭蓋も子供並だが、顔の下半分が更に細く、まるで左右から締木で圧縮したようだ。耳殻がなく耳の穴があるだけ、鼻も削いだように欠けて穴が二つあるだけ、目は開いているが瞳が濁って視力の乏しいことが分る。頭髪はもとより、睫毛、眉毛、髭の一本すらもない。やはり気絶して口をだらしなく開いているが、歯が全部抜けている。奥に見える舌は大きく、それに普通人のように平らでなく筒状で、……を連想させる……見れば見るほど醜怪な畸形だ。肌は黄色く、女の下半身の眩しい純白に比べると汚れている。対照が極端すぎるので、応急手当をどちらに施すかについては、麟一郎は何の迷いも感じなかった。侏儒よりも女の方を先に回復させるべきであった。

「ブラ、ンデーか何かあるといいのね」

クララが云った。その時隣室から、又獣の唸り声が聞えて来た。犬であろう。壁に身体をぶつけてる音もする。

「いや、早いとこ、治療をやるよ」

麟一郎は左手で女を抱えたまま、指を揃えた右手の裏表で女の左右の頬を平手連打した。クララは立ったまま覗き込んでいる。

頬に赤味が戻って来て、女はパツパツと目を開け、蒼穹のように碧い瞳が麟一郎とクララの顔を交互に見た。

二

頬に痛みを覚えると共に、ボーリーンは正気づいた。上から二つの顔が見守っている。白い人間の顔と黄色いヤブーの顔だ。若い令

嬢風の美人が若い雄ヤブーを連れてくるのだ。

彼女はとんでもない錯覚に陥って、出発面たる三九六〇号球面に即ち地球紀元三九六〇年の空間に帰着し、その球面上のどこかに墜落したところを、その辺の別荘の令嬢に救われたのだと思い込んでしまった。……遊んでいて時間を忘れていた為もあるが、主な理由はクララの服装と麟一郎の裸体にあった。

前史時代即ち人類がまだ宇宙を知らず地球表面丈に文明を営んでいた時代には、女が男に隷属し、その象徴としてスカートを穿いていたのだと、ポーリンは歴史の課程で学んだことがあった。本式に古代風俗を研究したわけでない彼女が、その説明を例外のないことと受け取り、自分達の穿く乗馬ズボンや長靴は前史時代の女には全く無関係なものと考えていたのも無理はなかった。だから乗馬服装で手に鞭を握ったクララを見て、同時代人だと錯覚したのだ。

勿論その服地がひどく粗末なことは多少不審に思えたが、本国星にいたのでなく、シリウス圏から見て随分田舎の地球別荘に來ているという意識が、深くは怪しませなかった。それにヤブーを連れてくるではないか！

前史時代に旧ヤブーが人類と並んで——いや、人類を僭称して、ヤブン諸島において国家を形成し、人間並の衣食住生活を営んでいたばかりか、人間国家と戦争を試みるほど発達していたこと、テラ・ノヴァ女王国による地球再占領後も、生ヤブーの供給源として、人間意識を具えた土着ヤブーの繁殖をはかる為に、そのヤブー達の国家がヤブン島において形式的に存続を許され、公式には「土着畜人飼育地域」として畜人省の土着畜人課の保護育成に付託せられていること……、これらを理科の課業で「人間以外にも社会生活を営む動物がある」という例として学んだのをポーリンは憶えていた。服を着たヤブーなんてどうしても想像できず、教材の立体映画で土着ヤブーの生活ぶりを見てやって納得したのだった。……今眼の

前にある黄色い顔の持主は裸なのだ。それは前史時代には存在しなかった筈のヤブー風俗である。彼女が原球面に帰着したと思ひ込んだのも無理はなかった。尤もこのヤブーは、未加工の生ヤブーであるのに首輪をしていなかった。「畜人飼養令」の規定があるので、本国星ではそんなことは決して許されない筈だが、かつて人類の発祥地であり、現にヤブー・飼育地のある地球では特別なのかも知れないという反省がこの時も仿いて、氣にならなかった。

ともあれ、この錯覚に陥ったポーリンは、実は地球紀元一九五六年の空間に自分が居るなどとは、夢にも考えなかった。上から心配そうに覗き込んでいるクララの顔に、にっこり笑いかけながら、礼を述べた。

「お助け戴いて、どうも有難う」

三

言葉は英語である。何か妙な訛りがあるのだが英語である。人類の宇宙征服はアングロ・サクソン族によって達成されたから、英語が宇宙帝国イースの共通語になった。長期広範囲の使用で変遷はしていたが、貴族階級はできるだけ昔の発音と表現を重んじ、維持して来た。だから、クララと麟一郎が聞いたのも、訛りがあるという程度で充分理解できる英語だった。若い女性らしい爽やかな声である。思わず二人で顔を見合せたが、

「いかが、御気分は？」クララが流暢な英語で訊いた。麟一郎は、英語は聞く方は分るが、話す方はサッパリなのだ。

「ええ、もうすっかり好いわ」

ポーリンは、麟一郎の腕から、スルリと身を振って抜け出し、立ち上りながら、答えた。麟一郎はその敏捷な挙動に啞然としながら、今更のように自分の素裸を自覚して赤面した。円盤の中でまで美人に会うとは！ あゝ、服を着てくれれば良かった……。

「でも吃驚したわ、今日は。四世紀まで遊歩したんだけど、帰りはぐっすり寝込んでいて……」……に耽っていたとは云えず、取り繕って喋ったが、舌人形を見つけた以上、相手は推測しているかも知れないと思うと、ポーリーンは恥かしさに赤くなって、早口に云い続けた。「……自動装置が故障したらしいの、落ちる感じがして、アッと思った瞬間、ドシーンと来て、後は覚えがないわ」

舌人形の奴、技巧家過ぎる、御蔭でとんだ醜態を演じたわ、ジャッセン侯爵若夫人が航時遊歩中……に現つて抜かして墜落したなんて評判されないか知ら……、思わずいらしたポーリーンは、内心の憤懣をそのまゝ足の動きに現わして、仰向けに氣絶したまゝの肉足台の補助頭をサンダルを穿いた足で、強く蹴りつけた。麟一郎は、女の動作の活潑さと蹴り方の邪慳さに驚いた。

四

リングは蹴られて意識が回復した。読心神経中枢に主人の激しい怒りをピンピン感じた彼は、腹這になり四肢を縮めて恐縮した。露出した背中に大きな凹みが二つ見える。

ここで読心家具のことを少し説明しておくことにしよう。何しろ三十世紀になってからの発明なのだから、いきなり持ち出しても読者に分らないだろうから。

読心家具は生体家具と呼ばれるものの一種である。生体家具というのはヤブーの肉体をそのまゝ材料にして家具にしたものであるがこれを可能にしたのは、栄養循環装置の発明であった。人体の栄養は小腸皺壁からの吸収によって賄われる。そこで体外から管を入れて小腸の先端に継ぎ、即時吸収可能な栄養液を注ぐ、そして吸収済みの廃液が小腸末端まで来たところの別の管を継いで外に出す。更に膀胱からの輸尿管も、手術によって後者中に開孔させる。これに

よってその人体は摂食排泄の両作業から免れて健康を維持することができるようになり、又、口腔や舌や胃を別な用途に使用しうるに至る。この入管と出管とを一緒にまとめて電機具コードのような体裁にし、これを肛門から挿入して接続する。体内手術でこれによってのみ栄養が摂取しうる構造を変えてしまう必要があるから、ヤブーにしか装着が許されていない。これを装着されたヤブーはそのコードに繋がれてのみ生存しうる生体家具となり、家内に置かれて、衣食住の労なく主人の使役を待つ身と化する。

さて、この栄養液に脳波感応を増進させる薬物を混ぜると、IQ（知能指数）の高いヤブーだと非常に他人の脳波に感応し易い状態になる。この時特定人の脳脊髄液を脳のある部位に注射すると、その部位に特定人の思考を脳波として完全に受信しうる神経中枢を生じるのである。これと同時に自意識の主体性は消滅するので、個性が喪失し、その肉体は特定人の四肢の延長そのものに化することになるのだ。これが読心家具である。

読心家具は、IQ一五〇以上の天才的頭脳でないと仕掛けられない旧ヤブーの教授や学者の血統を支配してIQの高い生ヤブーが繁殖生産せられ、読心家具用として血統書附で高価に販売されている。然し誰でも読心家具を使えるわけではない。貴族だけだ。法律上も平民には使えないが、生理的にもそうになっている。いくら鋭敏な読心家具も、OQ（命令波指数）一〇〇以下の命令脳波では動かさない。遺伝的にこの指数の高い貴族だけが読心家具を使用できる。たまに、指数の低い貴族の子弟があれば平民に貶されるし、逆に、殆んどないことだが、もし指数が高ければ、平民も新貴族になれる筈だった。つまり強い命令脳波を出せることが貴族の資格なのである。それは直ちに有魂機械（この説明は後章に譲る）を使用しうる能力をも意味した。生きた器物に囲まれて、自身は手を動かさず心に思っただけで一切の用事が片附いてゆく快適な生活こそ、イース

貴族の特権的に享樂するところだった。

さて、リングはこういう読心家具の一つだが、ポーリーンが特に家具工場に注文して造らせた足台だった。注文したのは、地球別荘行きが決った頃だから、一月程前である。

- (一) 普通の半分の大きさの足台にして欲しい。
- (二) 足型を妾の足に合わせて背中につけて欲しい。
- (三) 全身(特に頭部)に毛が一本もないように。
- (四) 顔の下半分はできる丈幅狭く。
- (五) 舌は伸張時二十糎以上になるように。

これがその時の彼女の注文だった。読心家具ということとは云うまでもない。工場主には直ぐに旅行用舌人形を兼ねた足台が欲しいのだと分ったが、困ったのは、期限の点だった。染色体手術の技巧が発達した現在、人工受精前の精子と卵に手術加工して、こういう注文通りの肉体で生れてくるように按配することは別に難かしくはなかったが、それでは引渡までに最低二年は必要なのだ。ところがポーリーンは、別荘行きに携行したいから二週間後に受取りたいと云うのだ。ジャンセン家若夫人の注文だから工場も困って、技師に相談し、生ヤブーを整形外科を的に加工して注文通りの品に作り変えることになった。

ポーリーンが工場主の持つて来た八〇匹余りの生ヤブーの立体型録の中から、この一匹を選び出した時までは、今足許にうづくまるこの畸形侏儒は立派な肉体とIQ一五四という頭脳を持った優秀な生ヤブーだったのだ。

「これにするわ、丈夫そうだし、血統も良いから」
「畏りました。一週間お待ち下さいませ」

これで彼の運命が決ったのだ。工場の技師は直ちに縮小室に彼を入れて二分の一の身長に変え、次いで全身の毛を薬品で落し、歯を全部抜いて顎の骨を削った。若夫人が無理せずに丈に幅狭くせねば

ならぬ。口腔は舌の容器であれば良いのだ。その舌は造肉刺戟剤を加えて發育させ、海綿体を移植した。足台が立つ必要はないから足首を切断する。読心家具に聴覚は不要だから鼓膜は除去し、視力も二米前が見える位に減じた。コードに繋がれた範囲内で主人の下半身が見えれば足るのだ。頭部脱毛のついでに耳や鼻を削いだのは、頭部全体を凸起のない肌当りの良いものにして、注文主たる若夫人の使用の際無用な不快感を与えないようにという技師の心遣いからである。最後に栄養循環装置を取付け、感応増進薬を作用させ、準備完了して、注文主を迎えに遣る。受取に出掛けて行ったポーリーンの脳脊髄液がその場で採取され、彼の脳に注射された。最後にポーリーンが彼の背中に両足を載せると、その足型に応じて、豊かな背中の肉が剥ぎ取られた。——こうして一週間前には生ヤブーとして生理的に人間と同じ身体だった雄ヤブーの一匹が、ジャンセン侯爵若夫人専用の足台舌人形として誕生し、高い料金と引換に、彼女に渡されたのであった。

それが三週間程前だ。以来、旅のポーリーンに足台として仕えながら、夫を離れて来ている彼女のに度々使用されて来た。今日のようには彼女の怒りを感じたのは初めてだ。彼は訳も分らずただオドオドするばかりである。

五

オドオドと縮こまるリングの気持はクララや麟一郎には分らないやリングが何者であるかも知らない二人である。侏儒の背中の凹みは一体何だろう？ いやそもそのこの女は何者なのだ？ 空飛ぶ円盤はどこで作られたのだ？ 英国か米国か、それにしても女が操縦するのでは秘密兵器らしくないが……疑問は次々に湧くが、今更のようには自分の裸を気にした麟一郎は、立ち上って下半身を女の目に曝す勇氣がなく、坐ったまま女を振り仰いだ。女の視線は彼の後の

「でも吃驚したわ、今日は。四世紀まで遊歩したんだけど、帰りはぐっすり寝込んでいて……」……に耽っていたとは云えず、取り繕って喋ったが、舌人形を見つけた以上、相手は推測しているかも知れないと思うと、ポーリーンは恥かしさに赤くなって、早口に云い続けた。「……自動装置が故障したらしいの、落ちる感じがして、アッと思った瞬間、ドシーンと来て、後は覚えがないわ」

舌人形の奴、技巧家過ぎる、御蔭でとんだ醜態を演じたわ、ジャソン侯爵若夫人が航時遊歩中……に現つて抜かして墜落したなんて評判されないか知ら……、思わずいらしたポーリーンは、内心の憤懣をそのまゝ足の動きに現わして、仰向けに氣絶したまゝの肉足台の補助頭をサンダルを穿いた足で、強く蹴りつけた。麟一郎は、女の動作の活潑さと蹴り方の邪慳さに驚いた。

四

リングは蹴られて意識が回復した。読心神経中枢に主人の激しい怒りをピンピン感じた彼は、腹這になり四肢を縮めて恐縮した。露出した背中に大きな凹みが二つ見える。

ここで読心家具のことを少し説明しておくことにしよう。何しろ三十世紀になってからの発明なのだから、いきなり持ち出しても読者に分らないだろうから。

読心家具は生体家具と呼ばれるものの一種である。生体家具というのはヤブーの肉体をそのまゝ材料にして家具にしたものであるがこれを可能にしたのは、栄養循環装置の発明であった。人体の栄養は小腸皺壁からの吸収によって賄われる。そこで体外から管を入れて小腸の先端に継ぎ、即時吸収可能な栄養液を注ぐ、そして吸収済みの廃液が小腸末端まで来たところの別の管を継いで外に出す。更に膀胱からの輸尿管も、手術によって後者中に開孔させる。これに

よってその人体は摂食排泄の両作業から免れて健康を維持することができるようになり、又、口腔や舌や胃を別な用途に使用しうるに至る。この入管と出管とを一緒にまとめて電機具コードのような体裁にし、これを肛門から挿入して接続する。体内手術でこれによってのみ栄養が摂取しうる構造を変えてしまう必要があるから、ヤブーにしか装着が許されていない。これを装着されたヤブーはそのコードに繋がれてのみ生存しうる生体家具となり、家内に置かれて、衣食住の労なく主人の使役を待つ身と化する。

さて、この栄養液に脳波感応を増進させる薬物を混ぜると、IQ（知能指数）の高いヤブーだと非常に他人の脳波に感応し易い状態になる。この時特定人の脳脊髄液を脳のある部位に注射すると、その部位に特定人の思考を脳波として完全に受信しうる神経中枢を生じるのである。これと同時に自意識の主体性は消滅するので、個性が喪失し、その肉体は特定人の四肢の延長そのものに化することになるのだ。これが読心家具である。

読心家具は、IQ一五〇以上の天才的頭脳でないと仕掛けられない旧ヤブーの教授や学者の血統を支配してIQの高い生ヤブーが繁殖生産せられ、読心家具用として血統書附で高価に販売されている。然し誰でも読心家具を使えるわけではない。貴族だけだ。法律上も平民には使えないが、生理的にもそうになっている。いくら鋭敏な読心家具も、OQ（命令波指数）一〇〇以下の命令脳波では動かさない。遺伝的にこの指数の高い貴族だけが読心家具を使用できる。たまに、指数の低い貴族の子弟があれば平民に貶されるし、逆に、殆んどないことだが、もし指数が高ければ、平民も新貴族になれる筈だった。つまり強い命令脳波を出せることが貴族の資格なのである。それは直ちに有魂機械（この説明は後章に譲る）を使用しうる能力をも意味した。生きた器物に囲まれて、自身は手を動かさず心に思っただけで一切の用事が片附いてゆく快適な生活こそ、イース

貴族の特権的に享樂するところだった。

さて、リングはこういう読心家具の一つだが、ポーリーンが特に家具工場に注文して造らせた足台だった。注文したのは、地球別荘行きが決った頃だから、一月程前である。

- (一) 普通の半分の大きさの足台にして欲しい。
- (二) 足型を妾の足に合わせて背中刳って欲しい。
- (三) 全身(特に頭部)に毛が一本もないように。
- (四) 顔の下半分はできる丈幅狭く。
- (五) 舌は伸張時二十糎以上になるように。

これがその時の彼女の注文だった。読心家具ということでは云うまでもない。工場主には直ぐに旅行用舌人形を兼ねた足台が欲しいのだと分ったが、困ったのは、期限の点だった。染色体手術の技巧が発達した現在、人工受精前の精子と卵に手術加工して、こういう注文通りの肉体で生れてくるように按配することは別に難かしくはなかったが、それでは引渡までに最低二年は必要なのだ。ところがポーリーンは、別荘行きに携行したいから二週間後に受取りたいと云うのだ。ジャンセン家若夫人の注文だから工場も困って、技師に相談し、生ヤブーを整形外科を的に加工して注文通りの品に作り変えることになった。

ポーリーンが工場主の持って来た八〇匹余りの生ヤブーの立体型録の中から、この一匹を選び出した時までは、今足許にうづくまるこの畸形侏儒は立派な肉体とIQ一五四という頭脳を持った優秀な生ヤブーだったのだ。

「これにするわ、丈夫そうだし、血統も良いから」
「畏りました。一週間お待ち下さいませ」

これで彼の運命が決ったのだ。工場の技師は直ちに縮小室に彼を入れて二分の一の身長に変え、次いで全身の毛を薬品で落し、歯を全部抜いて顎の骨を削った。若夫人が無理せず丈に幅狭くせねば

ならぬ。口腔は舌の容器であれば良いのだ。その舌は造肉刺戟剤を加えて發育させ、海綿体を移植した。足台が立つ必要はないから足首を切断する。読心家具に聴覚は不要だから鼓膜は除去し、視力も二米前が見える位に減じた。コードに繋がれた範囲内で主人の下半身が見えれば足るのだ。頭部脱毛のついでに耳や鼻を削いだのは、頭部全体を凸起のない肌当りの良いものにして、注文主たる若夫人の使用の際無用な不快感を与えないようにという技師の心遣いからである。最後に栄養循環装置を取付け、感応増進薬を作用させ、準備完了して、注文主を迎えに遣る。受取に出掛けて行ったポーリーンの脳脊髄液がその場で採取され、彼の脳に注射された。最後にポーリーンが彼の背中に両足を載せると、その足型に応じて、豊かな背中の肉が刳ぎ取られた。——こうして一週間前には生ヤブーとして生理的に人間と同じ身体だった雄ヤブーの一匹が、ジャンセン侯爵若夫人専用の足台舌人形として誕生し、高い料金と引換に、彼女に渡されたのであった。

それが三週間程前だ。以来、旅のポーリーンに足台として仕えながら、夫を離れて来ている彼女のに度々使用されて来た。今日のようには彼女の怒りを感じたのは初めてだ。彼は訳も分らずただオドオドするばかりである。

五

オドオドと縮こまるリングの気持はクララや麟一郎には分らないいやリングが何者であるかも知らない二人である。侏儒の背中の凹みは一体何だろう？ いやそもそのこの女は何者なのだ？ 空飛ぶ円盤はどこで作られたのだ？ 英国か米国か、それにしても女が操縦するのでは秘密兵器らしくないが……疑問は次々に湧くが、今更のようには自分の裸を気にした麟一郎は、立ち上って下半身を女の目に曝す勇氣がなく、坐ったまゝ女を振り仰いだ。女の視線は彼の後の

クララに向けられている。

先刻は夢中で気づかなかったが、女の服は驚くべきものだった。ケープを背中に纏っているが、彼と向い合った身体の正面は、上半身を海水着のようなもので覆っただけ。編物のように裁断の跡なしに身体に密着しているがしかも編物でなく織物だ、身体に合せて織る技術を知らぬ二十世紀人には文字通り無縫の天衣と見えよう。地の色は淡青だが、眼の角度によって異なる隠微な七彩の幻光を示し、内部から輝きながら眼には休らぎを与える。

が、その人工の美にいささかもひけを取らぬのが、麟一郎の坐った目の高さから下一杯に二本ニヨッキリ並び立った白色の脚線美で両足を一尺位に踏み開いた双脚はそのまゝ二本の象牙だった。麟一郎は脳神経の惑乱するのを覚えた。その時、また犬の唸り声が聞えて来た。

「まだ少し痛いわ。ボンボン叩いたのね」

片手で頬をそっと擦りながら、ポーリーンは乗馬服装の令嬢にほゝえみかけた。「でも平手打とは当意即妙ね。貴女に敬意を表するわ」

「いえ、あれは妾でなく、麟——瀬部氏が考えて……」

自分の手柄にされて、クララは慌てて答えた。

畜人に氏など附ける筈がなく、名と姓と両方ある訳もない。後から考えれば不思議な位だが、瀬部氏など云う変な呼び方を耳にしても、ポーリーンはまだ錯覚に氣附かなかった。

「ま、このヤブーが考えたの」と下目使いに麟一郎の方を見て、「そりや、仲々の尤物ね、妾に譲って戴けない？仕込んで来年の畜人品評展に出して見たいわ、妾、シリウス大賞を狙ってるの」

「アノ、何か誤解なさっていらうしやるように……」

たまり兼ねて、クララが云い出したが、駈引での断り文句を聞かされると取ったポーリーンは、皆まで云わせず、

「おや、妾としたことが、まだお名前も伺わない先から余計な口をきいちゃって。御免なさい。御氣持悪くなさらないで……」

「いえ、妾の申したいのは、麟——瀬部氏が……」

「立話も何だわ、掛けましょうよ」

第三章 古石器時代人狩獵犬

一

麟一郎の存在を全く無視して、ポーリーンはクララにばかり話しかける。ヤブーという変な言葉をきかされても、まだ自分が下等な畜生と思われていると悟らぬ麟一郎は、その原因を自分の裸にあると考えた。淑女だから裸の男に話し掛けられないだろう。クララも執り成し様に困っているらしい。何とかせねばならぬ。第一、若い女二人向い合って話している足許に裸で坐っているなんて賞めた図ではない。仕方ない。下手な英語でも、危急の際、裸でとび込まねばならなかった経緯を、自分の口から説明して、非礼を詫び、脱いで来た乗馬服を着に戻ろう。

そう思案して、麟一郎が立ち上ろうと尻を浮かし、膝を立てた時後方に何か破れる物音がして、獣がとび出した氣配、「キヤーツ」と魂消るようなクララの悲鳴と、前に立つ美女の「お止め！」という激しい命令とを同時に耳にした瞬間、彼は何物かに背中にとびかかられた。突嗟に上半身を捻って投業に決めようとした時、右肩に咬みつかれ、その瞬間高圧線に触れたような電撃を感じて全身が痙攣した。次の瞬間、目の前に聳え立っていた二基の象牙塔の一基が彼の顔面すれすれに躍って、右肩から其奴を蹴り退けたが、同時に彼は右の耳に激痛を感じた。其奴の顔を正面から蹴りつけた女のサングルの縁で皮膚が切れたのだ。

「麟！」真蒼になってクララが叫んだ。

「大丈夫よ、貴女」ポーリンは、相手が犬嫌いなのだと思って、安心させるように云った。「人間は決して咬まないから」

「これは何です？——麟、何ともなくて？」

前半を英語で、後半は思わず独乙語で、クララは別々の間を早口に喋った。犬(?)の姿が不気味で、咬まれそうで、麟一郎の傍に近寄りたくも寄れないのだ。

麟一郎はクララを安心させようとして振り向うとしたが、全身が痺れ切って身動きできない。驚いて口を開こうとしたが駄目だ。目の玉さえ自由に動かせなくなっている。怪しむべし、メズサの首を、眺めた者のように、尻を浮し上半身を捻った不安定な一瞬の姿勢のまま、化石してしまったのだ。耳から血が滴って床を染めた。

二

犬はノソリと這い出てポーリンの方へ歩み寄る。彼女は犬の頭を撫でながら、先程のクララの間に

「まあ、今流行の古石器代人狩獵犬を御存じないの？」

と、いささか呆れたように答えた。その口調には都会の尖端女性が百姓娘の非常識を軽蔑するような気味があった。

俯向いた頭部の位置からは視界が限られて輝くようなポーリンの双脚だけが見えていたのだが、今し、犬の姿が目に見ると、麟一郎は思わず目を疑い、既に麻痺した全身の更に凍るような恐怖を覚えた。クララが恐がったのも無理はない。その犬——これが犬と云えるならである——は、人間——これが人間と云えるならである——だった。

四肢と軀幹と頭部との比例的な釣合からは、一見犬を連想させることは確かである。頸に金屬製の首輪を光らせ、後肢を踏んばって頭をもたげた姿態は、大型種の犬を思わせた。然し、そういう印象も各部分を見ると裏切られる。後肢は前肢とそれほど違わぬほど細く短くなっている。直立歩行に適しなくなっているが、明らかに人間の両脚の退化したものだ。前肢にも未発達な五指を備えた掌がある。両脚が短くなって這った時掌と足趾を地につけながら背中を水平にできるため四足獣らしい安定感と四足姿勢での敏捷さが得られているが、もともとは人間の四肢なのだ。軀幹は筋張ってほっそりしているが、贅肉がなく、腹部など極端に細く引緊って、グレイハウンドの軽快さがある。頭部の外には殆んど被毛のない浅黒く日焼けした黄色の肌、その広い背中のあちこちに獣の爪にむしられた傷痕や、鞭の条痕が残っていて、激しい使役と調教とを雄弁に物語る。丸刈の黒い頭髪、ジャンセン家の紋章を刺青した広い額、黒い瞳、低い鼻、いずれも麟一郎と同じ人種の顔だ。鼻下にピンと左右に張ったカイゼル髭が妙に滑稽だし、その下の恐ろしく突出した口吻と口唇からはみ出した金屬製の犬牙とが、人間の顔としての調和を破っているが、ひよっとこ面が人間の顔である以上、この顔も人間の顔には違いない。

これがポーリン・ジャンセンの愛犬タロだった。前史時代に人類に愛玩された旧犬は今では動物園で見られるだけとなり、犬と云えば当然畜人犬を意味する様になってからもう何世紀にもなる。短脚ヤブーを生後直ちに天井の低い檻に入れ、天井に電流を通じて条件反射を与え、満二年——縮小形態では二ヶ月迄短縮し得たが——を経過すると一生這う癖がついてしまう。こうやって短脚ヤブーから畜人犬が作られ、更に体軀の大小、被毛、有尾、等ヤブー育種学の進歩が幾十種の変種を生んで、昔の犬同様の多様性を獲得して来ると、その優秀な能力は昔の犬の比ではなく、忽ち愛玩動物界の王者となり、旧犬を動物園に駆逐し、人類の最も忠実な伴侶たる「犬」の名称のお株を奪うに至ったのである。

古石器代人狩獵犬は、比較的新らしく作出された新犬種で、当初剣闘士として使うために五万年前の地球からネオアデルタール人を

生捕狩猟するのに使用された為この名があつたが、護身犬としても喜ばれ、イースの貴族社会では目下大流行である。被毛も尾もなく体格も標準型ですべての点でヤブーの原型を止めているのも素朴な味があり、訓練次第では非常な快速で疾走することができ、素晴らしい攻撃力も持っている衝撃牙という人工の犬牙で、先ず電気衝撃を以て直手の防禦力を奪つておいて牙から毒を注射する。毒は神経の運動中枢を選択して冒すので、咬まれると全身麻痺を起し、しかも他から力を加えられると柔軟にどんな姿勢でも取らされる癖に、自分からは指一本動かすこともできないという無抵抗な状態に陥つてしまい、緩解薬を注射されるまで、その姿勢を続けさせられる。生捕った奴を狭い艇内に積み帰る時にはこれが仲々便利なのである。

三

タロは品評会^{ショウ}で全犬最優勝牌を、三度も取ったボーリオン自慢のネアンデルタール・ハウンドだった。今日は墜落の時から状況の急変に昂奮していたのが、墜落の衝撃で緩んだ仕切扉をやつと壊し、主人の方に馳せ寄ろうとした時、麟一郎を見て、突嗟に跳び掛り、昂奮の余り主人の制止も聞かず咬みついたのである。それというのも麟一郎が裸だったからだ。

畜犬場の天井の低い檻の中で物心ついた時、先ず彼の憶えたのは彼の飼育を担当している犬飼黒奴^{ダング、ニガー}だった。彼は四道の自分の同族と直立して歩く種族との違いを学んだ。然し檻を出て訓練が始まった時、彼は黒奴の上に人間^{ウマン}（マンでなくウマンと仮名を振つたのは、女権制から女性が人間を代表するとされてるからである。詳細は後章を見よ。）と呼ばれる白い肌の種族があるのを知った。同じ直立種族のようでも人間と黒奴とは黒奴と犬とが違ふほど違ふらしくかった。毎日彼を調教する黒奴は、彼の本当の所有者であり時々視察に来る人間の前に犬である彼と同じように這って挨拶していた。「白

い肌を咬むな」これが彼の教えられた第一の禁令であり、至高の命題であつた。

然し黒奴も人間に奉仕する有用な存在で、その限りこれを咬んではいけなかったのであつた。それを彼は「服を着た者を咬むな」という第二の禁令として教えられた。

もうその頃には、彼は自分と同じヤブーの種族に属しながら、人間や黒奴と同じような直立種族の形態を備えた生ヤブーと呼ばれる仲間が沢山存在していることを知っていた。彼等は服を着ていない然し、それを咬むと叱られた。生ヤブーはそれぞれ所有者たる人間に飼われている財産なので勝手に咬んではならない。飼われている証拠は首輪である。「首輪をしてる者を咬むな」これが第三の禁令だった。

こうして三禁令を憶えた彼は更に土着ヤブーを使って攻撃訓練を受けたのだ。一般にネアンデルタール・ハウンドの訓練には土着ヤブーを使う。畜人省土着畜人課の許可を得てから、ヤブン諸島に行き何匹か捕獲して来る。彼等は人間意識を持って人間的衣食住生活を営んでいる連中だから、勿論首輪はしていない。これの服を剥いで裸にして獵場に放し、獵犬に追跡させるのである。こうして三禁令とは反対の「裸で首輪のない有色人」に対する攻撃本能の集中が完成して始めて、本当のネアンデルタール人狩猟にすぐ役立つ獵犬になったといえるのだ。タロもこうした裸の土着ヤブーによる訓練を散々受けて来た犬である。それが先刻は主人の足許に例の通りの奴が坐つてると見たから、何でうたまるべき、即座に攻撃を加えたというわけなのである。

ボーリオンもそれを知ってるから、他人のヤブーを咬んだことでその時には蹴とばしたものの、深くは叱る気になれない。首輪もさせずに生ヤブーを連れ歩くのがいけないのよ……と、内心では思っている。

四

クララは、そんなこととは露知らない。怪しい人犬ひきいぬに咬まれた愛人が、中途半端な姿勢のまま身じろぎもしくなってきたばかりか、訊いても返事一つしない。心細くなって、

「麟、どうしたの？大丈夫？」ともう一度訊いた。「血が出てるわ麟、麟……」

「ヤープなら、心配いらないわよ」衝撃牙で咬まれたらどうなるということさえ知らぬらしい非常識さに、内心呆れながら、ポーリーンが代って答えた。「緩解薬注射一本ですぐ元通りになるから……それ迄は仕方ないわよ。……可愛がってらっしゃる愛玩動物ペットをうちの咬んじやってお気の毒でしたわね。首輪はしてなかった様ですけど」

皮肉を含めたつもりで云ったが、クララには通ずるわけもない。愛玩動物だの、首輪だの、直変らず珍妙な思い違いしているなど分っても、それを問い明す余裕がない。事情は呑み込めぬまゝ、愛人の為に必要らしい薬を要求した。

「早くその緩解薬とやらを……」

「心配しなくても大丈夫よ。時間が経っても緩解効果は同じだから……騒ぎで、まだお名前を伺わないまゝだわ。さあ、どうぞお掛けなさい」クララに椅子を勧めながら、麟一郎の方に足早に歩み寄ると、「さ、お前も楽な姿勢にしてやろうね」

ポーリーンは、サンダル先の爪先立てていた麟一郎の両足先の下に突込んで指先を伸ばさせ、彼の両肩に両手をかけて前屈みにさせながら、先刻までのようにベタリと足を揃えて坐らせた。投業をしようと振っていた両腕を膝頭と足先を使って前に蹴り出し、床に両手をつかせて、上半身を前に支えさせる。麟一郎が自分では少しも動かさぬ肢体が彼女に掛ると柔軟自在で、忽ち否応なしに裏蛙うしひき

見たいな姿勢を取らされてしまった。耳朶の出血は止ったようだ。クララは、内心の恐怖を隠して、長椅子の右に席を占めた。愛人をこんな目に合して後悔しているが、今逃げ帰ることはできない。麟一郎に緩解薬を注射して貰わねば、ここを出るわけに行かないのだ。

ポーリーンがその左に腰掛けた麟一郎の土下座した方向が丁度その方なので、まるで彼女にお辞儀をしている様に見える。彼の視野には彼女の純白な下半身と、その脇に、四肢の先を床に着けたまゝ尻を落し、両前肢を揃えて、旧犬カニスと同じ様な恰好で坐っているタロの姿とが写るばかりだ。

と、離れてうずくまっていた肉足台リンガがポーリーンの足許に這い寄り、四肢を縮めて畏まった。彼女の命令脳波を受けて動いたのである。無雑作にサンダンを脱ぐと、ポーリーンは彼の背中の上に長々と伸した両脚の足先を休めた。肉を剥いた凹みにすっぽりと足趾が収まった、タロが後肢を伸して身を起し、首をその足台の上に曲げると、真白な彼女の足の甲を舐め始めた。その舌は人間に より旧犬に近い。麟一郎は、ふと女の足先に小さい貝殻のように並ぶ足趾が四本しかないことに気附いた。よく見ると小趾は退化して痕跡ばかりになっている。——この不思議な女は一人人間なのだろうか？人間を足台にし、犬にして平然としているのは、人間以上の存在であるのか？俺は一体どうされるのだ？クララはどうする気だろう？円盤艇の奇怪な一室で、日本人瀬部麟一郎の胸中は思い乱れるばかりだった。

(以下次号)

△編集部より▽

本稿は締切後に送稿を受けましたので、挿絵が間に合いませんでした。悪しからず御諒承下さい。

僕と、いわずにわたしということをお許し下さい。わたしはどうして男なんかに生れてきたのでしょうか。汗の匂い、靴下のむれた匂い、男臭い呼吸などは、わたしにとって堪えられないものです。それにくらべて、すべすべした白いむっちりとした柔い肌、香ぐわしい呼吸、ほのかな体臭、それらを自分のものに出来たらと、親をのろい、神をにくみ、運命を変えろ事が出来たらと、どれ位考えたことでしょうか。わたしは女性の趣味にあこがれ女性の嗜好をさぐり、女性にしか許されていない様々のことを狂気のように追求し、わがものにせんとしました。女性下着に対する狂崇も



女性化願望と女性ホルモンの

使用実験記

古 井 真 哉

皆ここから発したものです。男の仮面からどうしてものがれることの出来ないわたしは、せめて背広の下にシユミーズをつけパンティをはき、ストッキングを脚にまつわらせました。わたしの焦燥はブラジャーをつけても、ブラジャーがその本来の役目を果たさない胸乳を思いきりつかみ上げてはもみほぐし、あの女性ならば誰でも持つことのできる二つの白桃にしようとして、どれ位骨折ったことでしょうか。恋愛の源も、スリッパやズロースに対するフエティズムも、結局は僕をわたしにすることにあつたのです。手記や告白では、たやすく女性ホルモンをうって女性化するということが

が書かれてあります。又、本誌にも二、三そのような記事が出ているのを見ましたが、文明の利器は、果してそういう奇蹟を行うことが出来るものか、わたしは半信半疑でした。しかし昭和二十八年のはじめ頃に、ジョーシ・ジョーゲンセンが、男性から手術によって女性になったという記事が出て以来、女性化ということが話題になり、ホルモン注射ということが結びつけられて記事になったりしました。殊に女性に改造するために女性ホルモンを何百本も注射をしたという記事は、想像するだけでも有頂天にしました。ニールス・ホイエルの「変えられた性」を読んだのは

そのすぐあとだったとおぼえています。この本の中では、アンドレアス・ユパレというデスマークの画家が、偶然の機会に女装したところ、その女装があまりにも似合っていて驚いたとあり、彼の友人が、女装したスバレにリリという名をつけたというところからはじまります。彼は次第に自分の身体の中のリリが成長していくのに気づき、月々、鼻やその他からの定期的な出血があらわれるなどの現象について「彼の男性が、リリに席をゆづらなければ生きていけない苦痛を感じるようになった」のです。彼はそこで女性化を決心し、最初の手術で睪丸を摘出し、数ヶ月後に開腹し、その中へ健康な二十六才になる若い女性の卵巣組織を移植しました。しかしその手術後、まもなく肺の病いで死んだといひます。死んだリリに、とめどもない同情の涙を流しました。ニールス・ホイエルの本を読み終った朝、その最後の頁を涙でべとべとに汚しているのを知りました。スバレがリリになるために、始めて市営婦人診療所をおとずれた場面は印象的です。婦人のみしかおとずれる権利のない病院へ、男の身でおとずれるということ、想像するだけでも身体がふるつてくるような場面でした。

わたしはリリになりたいと思いました。が現実には余りにもわたしの男を強く印象しています。リリのまねごとしか出来ない自分をい

とほしみました。けれども出来るだけリリに近づくこととしたのです。女性ホルモンを使ってみようと思ったのです。男の機能を残したままではエストロ・ジエンの作用ははつきりあらわれないかも知れませんが、一般にいう女性ホルモンの工場につとめている工員は、お乳がよくなるということだけでも自分のものにしようと思ったのです。どうして女性ホルモンを手に入れたかは省略しましょう。ただ市販の女性ホルモンには次のような種類があります。何かの御参考までに抜書きしてみよう。

女性ホルモン剤

(A) 発情ホルモン

(一) 尿性発情ホルモン剤 オバホルモン、オバストロン、ギナンドール、ペラニン、ウマルモン、マレオール、メノホルン、アネホルモン、ヘミストロン、ポントニンF、オバリジン、フェミノン、フォリケルモン、プロフォリオールB、オバホルモンペンツアート結晶浮遊液、ペラニン、サスペンション、エストラジンB結晶浮遊液。

(二) 臓器性発情ホルモン ジエチルスチルベステロール剤、エスチモン、オイベスチン、ヘクセストロール剤、スロン。

(B) 合成発情ホルモン

(一) ジエチルスチルベステロール剤 エスチモン、オイベスチン。

チモン、オイベスチン。
(二) ヘクセストロール剤、スロン。

(C) 黄体ホルモン

オホホルミナルテウム、ニッサンプロゲトン。リボルチン、ルトシリル、ルトルモン、ナルトロン、プロゲステロール、プロゲスチン、プロゲユトン、プロルトン、プロゲニン、プラノン。

この中のどれかに、はいるのでしようが、市販されているものには種々雑多の商品がついています。名前をきいただけでも使ってみたいと思うのもあります。帝国臓器のオバホルモンは名前が売っていますが、ロカメンヂンとかネオメンス、ギナンカプセルなどというのは如何がですか。メンスがホルモンに係のあることはわかってはいますが、もし、男の身で自由にこれ等を身体の中に入れて、月々のものをあらわすことが出来るようになったら、どんなに素晴らしいことでしょう。

一寸横道にそれましたが、黄体ホルモンと卵胞ホルモン(発情ホルモン)との作用をついでにあげておきましょう。卵胞ホルモンは(一)去勢雌動物の子宮を肥大させ、休止期の腔垢を発情期の状態にする。(二)幼若雌動物の性器の発育を生理以上にする。(三)幼若雌動物の性器の発育をおくらせる。四老衰動物の性機能の再現をはかる(五)悪性腫瘍の発生のおそれがあったり、更年期障害、月経障害等に応用

されます。面白いことは女性ホルモンが男性に應用されることがあるのは、前立腺癌のときに應用されることです。おそらく前立腺癌患者で堂々と(?)女性ホルモンを注入された方もあると思いますが、こうしてむりやりに女性化される人々のことを想っても、それが若い男性であればある程興味があります。黄体ホルモンは卵胞ホルモンに結合する働きがあり(一)子宮内膜の分泌変化、脱落(二)排卵、脱落膜胞の形成抑制(三)乳線の肥大、乳汁分泌の促進(四)流産防止等の作用があり、原発性無月経、習慣性流産、不正子宮出血、月経痛に應用されます。ですから女性ホルモンを男の体の中に注入しても、どんな作用があらわれるかは大体想像するより外はないのです。いうまでもなく女性ホルモンは女体にのみ應用されるもので、特殊例以外は男性の禁忌なのです。けれども女性化の願望を最少限度みたすには、この女性にしか使用を許されていない女性エッセンスを吸いとる以外にありません。おそらくは性的分泌物の増えることと、乳房に何かの作用があることが推察されるだけですね。

わたしは先ず「ネオ、メニス」をためしてみました。ネオメニス! 何という刺激的な名前でしょう。一日一錠からはじめました。思いなしか身体がカーッとほてり、女性のエッセンスをとり入れたのだと思う気持ちがそうさせたのでしよう。しばらくは甘いやるせない気持ちにひたっていました。二、三日反応はありません。何もないのです。一日四錠まで増してみました。まだ何ともありません。そして飲みはじめてから十日目の夜、会社からの帰りの電車の中で猛烈な悪感がやってきました。その悪感が、女性ホルモンと因果関係のあることを直感しました。すうっと血が頭から引いて、ふうっと気が遠くなり、立っていることが出来なくなり、へとへとと坐り込んでしまいました。と今度は体中がカーッと熱くなり、胸の中をかきむしられるような感じ、嘔吐しそうになりました。夢中で電車を降り駅の片隅に頭をかかえてうずくまっていた。猛烈な吐気がするのですが、一向吐きそうにありません。頭の中の血が空っぽになるのがわかりますが、妙に頭がさえています。ただその間を、胸の中をえぐる電撃が次々と起るのです。が三十分も立つと、けろりと何事もなかったように気分がおさまりました。

わたしはこの事に驚いて、ホルモンの服用をやめました。しかし、女性化の誘惑はおさえ切れぬ位つりました。そして又服用をはじめました。ホルモンを使いはじめてから三ヶ月余りも立った頃でしようか、別の不安が頭をもたげてきました。やっと乳房に肉の固りはじめたのですが、乳首下にぐりぐりの固い平な丸い層が出来、手でさわると動くのに気がつきました。押さえても痛くないのです。癌! ホルモンと癌の関係は常にいわれていますので、恐怖で恐ろしくなりました。グリグリが出来て痛くない固りは、だんだん身体を犯して、二年とはたたない中に死に至る。わたしは折角女性になっても、癌で死ぬのは堪えられないと思いました。しかし乳癌のよく出来る場所は乳首の上というし、乳首の上は乳腺の発達と考えた方がいいのではなにか? 色々の本を読みますが、みんな乳癌の恐しさを強調しているばかりです。その頃雑誌で、男の乳癌という記事を見て、益々恐怖にとらえられました。そして医者に通う様になりました。あからさまに女性ホルモンを飲んだということはいえませんが、口から血が出るとか、身体がだるいとか、まわりくどいことをいって、色々精密検診をして貰いました。医者は別に何ともないといって問題にしません。医者がつけた病名は急性へんとう腺炎でした。

その中わたしは、乳首の下のぐりぐりは、乳房発生の原因となる乳腺の小盤であることの確信を抱く資料を沢山読みました。それにマドリン、グレイの『更年期』が、わたしの問題にいろいろ示唆することが多かったのです。その本はマドリン、グレイが、自分が味った更年期の障害を安泰にのり越えようと、

色々な本を読み、医者にきき、自分の体験を加えて一冊の本にしたのです。女性ホルモンといっても、男の体にも女性ホルモンがあり、その釣合い関係が一つの男体一つの女体を決定するので。更年期が、女性ホルモン分泌の変化によっておこるとするならば、健康な男体に外部から加えられた女性ホルモンは、やはり更年期と同じようにホルモンの釣合いがとれるまで、同様な変化をもたらす筈であるということ。マドリンによると。更年期の婦人におとずれる症状は、ある不快と苦痛、ほてり、もしくはほせ、脳の痛みのような偏頭痛、首のうしろのいたみ、心臓が痛むような胸部の痛み、ため息、関節炎かと思われるような節々の痛み、ピン針でさすような皮膚の痛み、手足のしびれ、不眠症、些細な物忘れ、多尿症、いらだたしさ、緊張及び抑うつ、疲労等です。わたしは、これ等の二分の一はすでに味っているのを見出しました。そして癌の不安は遠ざかりました。乳房は益々ふくらんできたのです。ぐりぐりは相

「東寮の節子さんが、お腹が痛くて出れないって。」

「あら、私の室の朝子さんもよ、どうしたんですしよう。皆お腹なんかこわしてさ。」

終業後の紡績会社のバレー部の脱衣所は、こんな会話でにぎわって居りました。私達は、

変らず変化しませんでした。それは乳房のあたりを、ぶっくり小娘のようによくふくらませていました。

こうして六ヶ月目のある日、わたしはとうとう注射をはじめたのです。最初は一萬単位でしたが、今では十萬単位を使っています。ある本によると、エストロゲン（女性ホルモン）はその90%が無駄になるとのことです。注射をはじめると、その部位にもいろいろ変化をつけることを知りました。腕には一本もなかったことはありませんが、最初は太股でした。注射をするには、適当なところとそうではないところがあるようです。内股に針をつきさしますと、しばらくしてその部分の肉が盛り上ってくるのに気づきました。腿を合わせると今迄すき間のあったのが、女性のようにびったりくっつくのに気づきました。女性ホルモンB液は、黄体ホルモンも含まれているので、乳房にはことによいようです。外のホルモンなら、そして又高い単位のものなら総合ホルモンはありませんので、別々に使う必

新制中学卒業と同時にこの会社に入り、いわゆる系姫となって大勢のお友達と寮に寄宿していたのです。その日は出て来ない人も多いままに、バレーの練習は早目に終り寮にかえって見ると、寮にいる五分の一位の人が身体の調子が悪いなどという話を聞きました。

要があります。乳房は目にみえて大きくなり異様な感覚をもつようになりました。今では、風呂に入る時、人にみられないようにしなければならなくなりました。けれども、もっと大きくしたいのです。メジャーの結果は八八センチありますから、六センチ分だけ盛り上ったことになりました。同時に、胸をしめあげられるような鋭い痛みはありましたが、マドリンの本のおかげで不安はもちませんでした。これ等の痛みは乳房を盛り上げると一緒に、背中の肩甲骨の下にも肉をつくってくれたのです。こうしてわたしの背中から胸にかけて、くりくりと肉がのり、肩の線が柔くなってきました。いつしか胸で呼吸をするようになっていたのにも気づきました。ブラジャーはやつと形のある乳房を見出したようです。シユミーズやメリヤスの女性着では、突き出した乳首が気になる位になりました。こうして一年間に約七千円程のホルモン剤を使用しました。

（おわり）

翌日、お昼休みで機械が止まると同時に、拡声器が

「寮に寄宿している人は、午後は消毒と健康診断がありますから、東寮は今すぐ、西寮は三時から帰寮して下さい」と伝えました。私達は西寮でしたので三時まで仕事をして、

それから寮へ戻る道すがら、お友達と「何の消毒かしらねえ……」などと話ながら帰室しますと、『赤痢発生の疑いがありますから検便と消毒をします。第一室から順々に娯楽室で検便をうけ、終った人から消毒に協力して下さい』と廊下のスピーカーが伝えて居ります。

「検便なんてどうするの、これからトイレへ行って持ってくるのかしら」などと話合っているうちに、となりの五室の利子さんが入って来て、「この紙切れに、姓名と生年月日を書き込めって」と言って、私達の六室の五人分のカードを渡しました。

「利子さん、検便受けた？　どんなことをするの？」と同室の愛子さんが心配そうにたずねると「知らない！　あんな検査、もうまっぴらよ！　なるべく、スカートを、はいて来なさいってさ！」と言いつてで行ってしまいました。スカートをはいて来いなんて——、あゝお尻から便をとるのでは、ないかしら——と不安に思つて皆の顔を見ると、皆もやはり同じ事を考えたと見えて、ゆううつそうな顔を見合せ、「いやあね——」と異口同音に

糸 姫 の 体 験

高 橋 よ し え

もらしました。

それでも淡々スカートにはきかえていると戸の外から「六室の方いらっしやうて。」と舎監さんの呼ぶ声が聞えました。娯楽室へ行つて見ると廊下の側の窓は幕を引かれて居り、室の中から検便を終え、顔をほてらせたお友達が出て来ます。

「六室から十室の方、集りましたね、各室毎に一人ずつカードを持って内に入り、カードを渡して検便をうけて下さい。便が旧いと赤痢菌は検出しにくいので、直接お尻から便をとります。内へ入ったらズロースを下げて足を開いてなるべくお尻を突出す様にして足首をにぎる様に前かがみになって下さい。終わったらあちらの出口から出て下さい。」と保健婦さんらしい白衣の人が申しました。

「やっぱりそうだった。お尻からとるなんてひどいわ。」などと小声で言っている人もあれ

ば、赤くなつて泣き出

しそうな顔をしている人もあります。愛子さ

んの次が私——。ドキ

ドキする胸をおさえて入って行くと、中には

保健婦さんが三名と係

員らしい男の人が一名

居り、その男の人にカ

ードを渡しながらチラ

ツと見れば愛子さんが窓の方に、お尻を向け

て前かがみになって居り、保健婦さんが、一

人はお尻をおさえ、一人はガラス棒を抜いた

所でした。ズロースを引き上げながら愛子さ

んは、おこった様にさっさと出て行き、保健

婦さんが「次の方。」と呼びました。いくら同

性でも他人にお尻を見られるなんて、殊にま

だ二十才にもなっていない私達にとつては、

それこそ居たたまれない程、恥しい事でした。

ズロースをずり下して前かがみになりスカ

ートを捲り上げます。「もっと足を開いて、

お尻を突出す様にして、お腹から力を抜いて

——」懸命に指示に従うと一人の保健婦さん

が私の側へ寄つてしました。なにかヒヤリと

冷い感じがして、ガラスの棒が挿入されたこ

とがわかりました。次の瞬間「はい、よし。」

と言われスカートが下されましたので、ほっ

としてズロースを引き上げました。検便のガ

ラス棒はエンピツ位の太さと長さで、先の方に凹みがついて居りました。室へかえって来ると、弥生さんが、「私、困っちゃったわ、メンスなんでバンドしてたでしょう？ あんなことされたの始めてよ。皆一緒にやなかったら、私きつと逃げ出したわ。」と言うと愛子さんがポツリと「流腸されるより嫌ね。」と相づちをうちました。

私も中学に通って居ります時に便秘してお医者さんでイルリガートルで（私はこの名を姉が鼻を洗滌していた機械の名としてすでに知って居りました）流腸されたことがありましたが、その時は、姿勢も横向きでした——恥しいよりも多量の液を流腸されて苦しい方が先でした。今度はベッドの設備もなくフロリングの床だったので、あの様な姿勢をとらせたのでしようが、とても恥しい感じがありました。

それから次の日、『六室の悦子さんとよしえさん（私）は保菌の疑いがありますので、一応入院して下さい。あの方方は、もう一遍検便してたしかめます』と通知があり、入院させられました。原因は炊事婦の一人が保菌者だったのが、もとだったそうで、寮の三分の一位の人がウツツていたそうです。入院と言っても人数が多いために健康な人を全部西寮にあつめ、病人や保菌者を東寮にあつめて

臨時隔離病舎にした訳です。

東寮に入院させられると、すぐ体重を計られ、今度は持込まれたベッドの上で横向きで、ひざをお腹につける様にした姿勢で、もう一遍検便されました。保菌者と言っても病人ではないので注射と、薬を飲まされる外は、本を読んだりいろいろ話をしたりで休養している様なものでしたが、検便だけは一日おき位にありました。又この外に直腸検査がありました。入院して次の日の朝、『これから直腸検査をしますから、その前に流腸します』と看護婦さんが二人で入って来て言いました。同室の四人のお友達とつい顔を見合せましたが、指示に従って皆、布団の上に横になりました。布団の敷き方の都合でとなりのお布団の美子さんとたがいちがいの様になって寝て居りますので、美子さんが流腸される様子がよく見えました。私は、本当に流腸はどのようなにしているのか、この時はじめて目のあたりに見ることが出来たのです。横になった美子さんの足を、ぐっとお腹につけさせる様にすると、ゆかたのすそをはぐりズロースをひざのあたりまで引き下げ、ビニール布をお尻の下にしき込みました。花模様のゆかたの色とすき通る様に白いお尻、そして黒いズロース、冷く光るガラス製の流腸器。この対照が何だか奇妙に美しく感じられました。

次は私の番です。ツーと注入されるとすぐトイレへ行きたくなり、少しがまんしてからトイレへ行きすぐ排泄してしまいました。クレゾールの香をプンプンさせて治療室になっている娛樂室へ行くと、私が最初らしくすぐベッドに上る様指示されベッドに上ると仰臥けに寝せられてズロースを脱がされ、足を組み合わせる様にして股を開かされ看護婦さんにしっかりおさえられてしまいました。あまりの恥しさに私は、顔を覆ってしまいました。しかし肛門部だけ出る様な穴のあいた布がかぶせられたので、幾分気が楽になりました。「お腹に力を入れないで……」と言われるとグツと肛門が開かれそして段々大きく開かれて行く様に思われました。「力を入れると痛いから力を抜いて下さい。」と指示されそれから数分間、色々の器具のふれ合う音がして、「さあ終わりました。」と解放されましたが、室へかえってから、しばらくお尻の穴がはれぼったい様な変な感じがしました。

皆もやはり同じ様に感じたかと思えて、「赤痢なんて嫌だね。お尻の穴ばかり毎日いじめられてさ。本当に可愛想なのはお尻で御座い、だわ」など冗談を云ったりして、話合って居りました。この赤痢騒ぎも手当てが早かったため大事に至らず間もなく皆工場に出る様になりました。

（終）



塵^{ちり}籠^{かご}日^{にっ}記^き

久 留 木 栄

(一)

あんな女！
そう思っただけでベツと唾きしたいような嫌悪感にとらわれる。だが、それが不思議にあの女にふさわしいようなイメイジとなるのだ。

厭な奴。たしかに厭な、一見して心にも、顔にも、肉体にもちつとも魅力がない。塵か芥のような女なのだ。嫌らしい豆腐のカスミみたいな女だ。また娼婦などというものは所詮そういう素性の女の集りなのだ。だがあの女たちの頹廢的な雰囲気、みえも恥らいもない底抜けの明るさ、不思議な誘惑と透徹した哲理にみちた言葉、それと全く裏腹な常識をと

びこえた行動——そういうものがまざまざと耕介の脳裡に浮んできた。

三年前、妻に死別するまでT市の固定評価委員として恵まれた環境にあり、一妻一子をもち、その傍ら同人雑誌の発刊に精出していた耕介である。それが妻、光枝の死後、ブツツリ筆を断ち、職をすてて転々と流浪する身になりさがっていた。女狂いもその一つ。

耕介は暗い、彩光の良くない階段下の塹に寝ころんだまゝ、まんじりともせず夜をあかした。

さて、今日は何をたよりに生きようか。

耕介はふつと淋しい気持ちに駆られた。すると性格が荒々しくなる。勝っても負けても一六勝負所詮墮落者の行く道は決まっている。

耕介は、くらやみの中でギシギシとはぎしりをした。

俺ももう駄目か！
それは此の世の物でない女に恋する悲惨な述懐であつたのか。

耕介は、女と逢い、女を叩き廻して帰ってくるごとに二度と、あの女の事は考えたくない。誰が喜美子なんか愛情を！ と思うのだが、そう思えば思うほど心が沈み、現実の生きた女の肌が恋しくなり、亡妻の陰影が黒く、深く、鮮かに思い出され、浮きぼりにされる。朝のさわやかさ。その爽快な秋の白い空気の中に離れた矢が、真すぐにとんでいくように、ひたすら思慕がつのる、どうにもならぬ憂愁であつた。

重い、低い、溜息がトツ、オイツ口から流れ出る。

それは、低迷する人生への憎悪なのだろうか。

耕介は溜息をつくたびに心の端で良心がすえりつつ、時とともにとける淡雪のように、じりじりとくずれて行くのを凝視せぬわけにはいかなかった。

そこにひそむものは、生きて行くわずらわしさに対抗する死への誘惑——生きるための哀歎なのか。

耕介はまだまだ、かかる哀歎を覚える年でもあるまいに、何がなしに、物狂おしい秋の自虐的な雰囲気の中に、悲しみつゝも身を没し去らずにはいらぬ程の寂しさがあった。

妻をなくした男のマゾヒズム的な哀歎というか——自虐的ニヒリズムの涯で、毎日、毎日、死を凝視して暮しているのだ。

これが生きる寂寥さというもののなのか。これが生きる寂寥さというもののなのか。

(二)

惑溺の心理というのがある。どうにもならぬ、悪いとわかっていてやめられぬものをいう。例えば妻も子もある夫が或る別の女にひかれる。してはいけない、してはいけないと思いつつながら深味にはまって行く人の良さ、あわれさ。

あんな奴、二度とくるものか。

そういつて別れるのだが、別れる時の女の哀歎、相会う時の女の喜び、それが目について、心にもない逢引きを重ねて行く。一度だけ、此の一回、もう一度、二度、三度と。そしてその逢瀬が重なれば重なるだけ女が厭になりつづきならぬものを感じ、吐息が重く低く流れるのだが——

耕介は今その心理に似通うものを、みとめないわけにはいかなかった。

その昔、親友のKがそういった昏い恋路の涯に、当然やってくる精神分裂的な発作のために病みはてて寂しく散って行ったことを知っている。思えばKという男は幸福な男であった。自分なぞ、死のうと思っても死にきれず、かといって病みはてるには、あまりに頑健な肉体の持主だった。

耕介は救いのない目で天井を眺めた。

もつとも、この考えに救いがないわけではない。というのは、兎に角、よかれ悪しかれ耕介は独身なのだ。かつて妻を娶ったことはあるが——今は孤独を楽しむ身なのだ。だから自分の場合はKとちがって明らかに妻への叛逆でもなければ、冒瀆でもない。

耕介は一応そういう理窟をつけたのだ。だがどう理窟をつけても事実は事実、耕介は撫然と胸を組んだ。耕介は遂に沈黙した。そのニヒルな吐息が胸もとからながれ、その激しさは、一つずつ隣室から一つずつ数えられる

くらいのカン高さになった。

たしかこの春。いや、もっと前だったか、耕介は一人の女を知った。それは亡妻に顔の似た女だったが、喜美子というところある料亭のマダムだった。その経営する店の名が『三絵』という妻の名と同じ発言をもつのも、何かの因縁のようであった。一見して肉付きのよい小肥りの体格の割に暗い陰のある女だったがこの女への思慕がますますつれ、耕介の女狂いは逆に激しくなっていた。戦争が社会的、民族的サジズムを誘発するように、耕介の女への戦い、薄幸な女性観のために誘発される身をけずるような煩悶は、狂暴なサジズムとなつて娼婦達の前にさらけ出された。縄目の恥辱をうけながら自分の意志に反して喜悅する女たち、耕介はそんな女の肉体の魔性を凝視して、顔癩の中に最愛の女を失った寂しさをまぎらわそうとしたのだ。

彼が女狂いを始める当初、耕介はむしろ亡妻の、このおそろしくも執拗な愛から解放されたようなホッとした安堵感をいだき、その中にデカダンの傾向のめばえるとも知らず娼婦たちを商品化し、奴隷とみることによつてのみ、その愛情を断ち切れると考えていた。そこに誤算があった。それだけに逆に自ら求めて行ったような結果となつたこの地獄の涯は、いつくるともわからぬほどの苛酷さとなつた。たとえば娼婦の体から病気の臭いがす

る。俺を病気にするのだなどのしり、抵抗すれば縛りあげた。しかもこの悪口は彼女たちが抵抗を止めるまでやめないのだ。しかも縛るにあたってはできるだけ痛いように細い、細い綿ロープを使い、そのひもとひもの間に肉をくいこませ、しやにむに両腕を肩胛骨の近くまでひきあげて首につるしたのだ。それだけならよい。口の中に布につつんだスポンジのピン玉大のゴム球を押込んで、その上で細い布を歯と歯の間に割込ませて猿轡をかませ、さらにもう一枚、絹の巾広いきれで、きつちりと口を密閉した挙句、鼻をつまんで、この女たちが身をうねりくねらすのを見てたのしんだ。またこのような女の鼻に、ピーピー鳴るおもちゃの草笛をとりつけ、うつつを抜かしたのもこの頃だ。妻から離れ九二年たって始めて女に相接した耕介、耕介は堰を切った男の奔流が、悦唐の底に沈む夜の女たちの上にナイヤガラの滝となってふりそそいで行くのに自らも目を瞠ったのである。

ところが、こうして女の酸いも甘いも噛み

わけようになつてみれば、それだけ又新たな亡き妻への哀感がわいてきた。それは男と生れつつ妻に女らしい喜びの一つも満足にあつたえず死なしてしまったことへの悔恨であつた。そういう男の不甲斐なさがのびきならぬ重圧となつて耕介をとらえたのだ。はや女狂いも限界にきたことが明白となつた。だが

そうとは知りつつ耕介はその墮落に拍車をかけ、サジズムスを通してひしひしと耕介の心を取りまく自虐的倒錯感、肉体の内部に渦まぐ火のようなパッションに耐えねばならなかった。愛情とは人を苦しませ、自分も苦しむことだろうか。

(三)

それはたしか三年前の同じ秋の日のことであつた。長男の晃が疫痢で死に、その死を契機に、まるでもののけにつかれたように、妻の光枝が自ら生を絶つて死んで行ったのは、優しい家庭にあつて良く夫の世話をやき、戦前、戦後を通じ、夫の杖とも柱ともなつてくれた光枝は、またそのような終末が予想されるような弱々しきをもった、気質の優しい内気な少女だつた。気質の優しいということは今からみれば罪惡にみちたものだったかもしれない。いやそういうことより、この世の男女の關係に乏しい二人の良識が仮面の生活を送っているところにこの悲劇はあつたのかもしれない。

思えば、あまりに良識すぎ、人間的良さを理解せず永の訣別となつたのだ――

何たる運命の皮肉さよ！

妻は臨終のほのかな夕ぐれが自分の胸に次第に翳を濃くして行くのをじっと眺めながら『貴方、もうお別れですわ、そのまゝ、私を

じつと抱いていて下さい。これからの旅路がとめどなく寂しいのですから』いきもたえだえな妻の吐息、かすかでやがてその意識も消えさらんとする妻の声は、まるで宵闇をかける螢の火のような覚束ない手ざわりであつた。細り行く線香の煙にもまして絶え入りそうなその声は、今でも耕介の胸に青白い、乳房のくずれて行くような幻想ともなつてよみがえってくる。

(四)

話はかわる。耕介が亡妻に似た感じの女として新発見した喜美子は、やはり耕介の想像したような不幸な女であつた。

最初、結婚した夫は医大生で、結婚わずか半年で死亡、次いで結婚した夫は上海で貿易商を営んでいたが日支事変のドサクサに軍と協力、悪銭をもうけたことが身にたゞつて、特高の名のもとに、戦後、戦犯として処刑された人であつた。しかも喜美子は、この夫から責められる喜びを満喫させられたのだ。思っただけでも身の毛がよだつような、幾多の思い出。

だがそういう夫でも喜美子の胸の中によみがえることはある。勿論、それは優しい、慕わしい夫としてのイメージではなく、激しい自己嫌惡の形をとっていたが――或る肉体的暴風雨の前にもろくもくずれおち姿を消す喜

美子の抵抗ではあった。

勿論耕介はそんなこととは知らなかった。もし知っていたら、とても平静な交友を続けることもできなかったであろうし、今更、墮落しきっている男に、そんな資格はないと悲嘆してそこを去らねばならなかっただろう。幸か不幸かわからないが、兎に角かかる秘密を抱いたままの関係で日増しに二人の仲は深まって行った。

昏い、暗い視線で餓狼のように町を彷徨い、鈍い弱い視線で女を眺め亡妻に贈るレクイエムとしての生涯をマゾヒスティックな色彩でその女の上に描き、逆にサジステイックな暴虐をあえてしてかえる耕介だった。そういう耕介にとって『三絵』はいっしょに砂漠のオアシスに比すべき存在となった。

ほとんど毎日、紺のノレンに『三絵』とかいた下をかくくって、奥の部屋に通ると唯一人静かに酒をのみ、詩や絵や小説を書いては、これを発送し、出版社から入る金を楽しみにしては瞑想にふけた。

背後にかかっている歌麿風のかげ軸、派手な着物の裾がみだれ、燃えるような下着がのぞく、そのあでやかさに目をみはり、時には憂愁にかられた社会小説を、時にはサジステイックな小説を書き、これをたっきの術とし、そのアブノーマルな雰囲気の中で、ひたすら心の平安を祈る耕介であった。

そもそも、耕介のこうした内気は天才的なその才能と相俟って奇妙なコントラストをなしていた。内攻的性格は決して賞さるべきではない。むしろ軽蔑すべきものである。だがその内攻性が耕介の天稟を支持する大きな役割をもっているとしたら、あながちそのみせめるわけにはいかなかった。瞑想の途次、問題がこのことにふれると耕介はいつもぶるぶると身ぶるいを禁じ得なかった。

耕介は『三絵』の奥座敷でむつつりと腕を組んでいた。

さて一方喜美子の心境はどうか。だんだんなじみが重なるにつけ、恰幅のよい紳士がただ一人黙念としている姿が、奇妙に印象的だったのが、次第に同情的になって行くのを禁じ得なかった。どこかその男の四囲から発散する強度のサジステイックな雰囲気、素晴しく明敏な頭脳、やわらかな物腰、微に入り細にわたる女性へのコウテシイ、喜美子はこれ程の男が家を捨てるからには余程のわけがあると——次第に耕介の胸に傾斜して行く心を押えきれぬのであった。ところがふとした機会に、その悲しみが、自殺した妻に、わけてもそれが原因となった女への不信にあると悟った時の驚き——。

マダム的心には秘かな悪魔がめばえはじめていた。

花の盛りは短くて

苦しき事のみ多かりき

マダムは人に悟られぬように秘かに計画し親炙する林芙美子の名句を口誦んで悲しみに耐えた。

(五)

或る秋の静かな夕ぐれであった。つるべ落しの太陽の血の一滴に比すべき余光の中で、喜美子はふとわびしい思いに駆られていた。

戦後の激しい変遷、喜美子は上海時代、苦しめ、痛めつけられた男への復讐心を、遠い海の彼方の出来事として忘れ、それからもうあがるフアイトだけをたよりに、激しい島国の生存競争に伍し、のしあがってきただけにこの落日の余光を眺めるのが好きであった。

それは余りに劇的な幕切れだった日本の末路——敗戦と、それに連なる彼女の家庭生活の幕切れを象徴しているようで、切ない、物悲しい思い出を植付けようように思えた。

社会的に成功するとともに、夫とかわした肉体的暴風雨が支配者となった威厳をとまなつて、若い仲居の上に振りかかっていた。彼女の細い、白魚のような指の間でくすぐられ、目を細め、涙を流しつつのたうつ、この若い仲居の姿は、かつて責められた自分を眼のあたりにみるようで心地よかった。それが耕介をみるに及んで何となく嫌になり、責めること自身に悲しみをみいだすようになって

た彼女だった。

女同志の責というものは畢竟、社会的必然性、心理必然性、人間的必然性の遊戯みたいなものではなかったか。

今日もひそかに月の間に呼んで、あの妓を責めてみたのであるが、そこから湧きおこってくる、雰囲気は以前と全く変わったものになつてしまった。

「もう駄目だ、私はもうすたれたのかしら」
若い仲居の腕にくいこんだ縄をときながら喜美子はつぶやくともなくつぶやいた。そんな女心の哀れさ、悲しさ、喜美子はそういう哀感を抱いている底に、耕介の姿を浮べるところを意識し、ハッと驚くのであった。

「口説いてみようかしら、もしそれがあの人のためになるものなら」
喜美子はそう思うと夜もねられなかった。

(六)

それから二、三日たった。その日は不思議と耕介はホロ酔い加減であった。

喜美子も酔っていた。それでなくとも、目が充血するほどに、体が疲れきっている二人である。

たゞだまって盃をかわすうちに、押しも押されぬ、沈黙が二人の間に横たわってしまった。

こうなつては酔もさめてしまう。

耕介は窓によりかかつて寂しく夕暮の町を眺め、喜美子は食卓の前にすわっていた。それに棲揚子をまさぐった。それを手にとってテンドにちぎるが、そのとがったさきで血がでるほどに小指に突きさすのである。

その時、男がふつと喜美子の方をふりむいた。それにはゾツとするほどの寂しさ、妖しさがこもっていた。喜美子はひかれるもののように立上った。

「さ！ いけませんわ、そんなにお考えにばかりなつては」

「いや何でもなんだ」

「それじゃ——」

と間を置いて喜美子は、わざと快活な調子で

「ねえ、耕介さん、こういう言葉もあるのですよ。ひとつどうでしょう。打つても縛つても結構、貴方の気持次第ではどうにでもなるという女を御紹介しましょうか」

と、さそいかけた。喜美子はつとめて平静に言った積りでは、あったがそれでも、かすかに語尾にふるえが残った。

「え？ 何ですって」

耕介は一応驚いて問いかえしたが、その意味がわかって、心持頬が赤くなったようだ。言葉のやりとりが極めて鋭角的で喜美子が卓子にかえった拍子に、卓子がゆれたのか、酒びんがコトリと横に倒れ、酒があふれ出てな

みなみと食台を濡らした。喜美子は思わず前かけをはずす。にもかかわらず耕介は外をむいたまゝだ。

「一体そんな女がいるのかね、喜美ちゃん」

耕介は振りむいた。

「ううん——そうねえ、耕介さん、そういう女もいるにはいますよ。ヂヤの道ちやへびだつていいですからねえ」

喜美子は一応とほけてみせる。水商売には水商売の良さがあるというのか。マダムは、ある程度の誇りを言外にふくめて、艶然とはえんだ。

耕介はその顔をまぶしい面持でみた。

「ここでは具合が悪いのよ。別室に行きましよう。」

喜美子の応接は、さすがは長年の経験が、男心を読むように水際だっていた。彼女は耕介の先頭に立って案内した。

廊下を抜け飛石伝いに中庭に出る。小さな枝折戸をくぐり、松の繁みに建てられた離れをみて喜美子はふりかえり

「あれよ、月の間というの」

と指さした。そしてちよつと、男の気をひくような素振りをして、ニッコとほほえみ、そそくさと這入って行った。その後じつと残る脂粉の移り香、耕介はそこに女を感じた。そして目に見えぬ糸に、引きずられる操り人形のように喜美子に従った。

「さ、早くいらつしやい、耕介さん、ここがそれにふさわしい部屋ですの。昔、大名が狂乱の奥方を入れたという座敷牢の跡ですわ。そういうことを先代から聞きました。月が美しいから『月の間』というのです。奥方はその月を眺め胸の中でさぞかし立派な月見の宴をお張りになったことでしょう。」

耕介さん。私達も宴を張りましょうか。男は物に応じては一世一代のバクチを打つそうですわ。どうですひとつかけませんか。例のさきほどの話です。雨戸にはちやんと鍵がかかる仕組みになっております。それに貴方が女をお責めになりたければ、その道具もちやんとその押入れや机の引出しにしまっておりますわ。私が女を案内する役をひきうけましょう。女を口説くのは、こういう部屋がもってこいなんです。」

喜美子はそういいつつ、そそくさと座敷にあがり縁に座蒲団を出して耕介にすすめるのだった。耕介とさしむかいになり手を鳴らした。すると、小婢がさきほどの飛石伝いにとんできて酒や肴を運んできた。

強烈なここか得体の知れぬ楽しみ！

そんな楽しみが目の前に横たわっているようでもあり、また遠くの方に逃げ出して笑っているようでもあり、まだどっちつかずの感動しか覚えぬ耕介ではあったが――。

マダムが口を開いた。

「どうです。お氣に召しましたか。今から女を呼びに行つて参ります。女は誰かわかりません。そうそうせっかくのお楽しみですから女にすっぽり頭巾をかぶせて連れてまいりましょう。それとも、どうでしょう貴方の方がお風呂に行つて参られますか。その間に、その女奴隷を裸にしてその柱にくくりつけておきましょうか。とにかく貴方はお風呂に行つて、おめかししておかねばいけませんわ。」

耕介は屢らく沈黙を守っていた。あまりにめまぐるしい変化が信ぜられぬ程の感動となつて去来したのだ。

「そうですね――女を責めるなんて、僕にはとても自信がありません」

耕介は柄にもない返事と思いつつ、弱々しく言葉をかえした。喜美子はそれを真にうけた。

「まあ――御冗談を、それじやこうしましやう。貴方が御風呂にお入りになつてゐる間、貴方の女奴隷を、この柱につないでおきましよう。どうなさろうと勝手ですが、ただ頭巾は貴方が本当に、その奴隷を愛し、その女を本気で責めることが出来るようになるまで、おとりにならぬことを御約束できますね」

喜美子の顔はいつしか真剣になつていた。

耕介は、それにけおされるもののように、うなずき、これは大変なことになったと驚いた。だが背筋にゾクゾクと押しよせる好感、

期待そういうものに抗しかねた。二人はそれから屢く酒を交し、やがて喜美子は耕介を母屋の浴室に案内した。

(七)

そはやるせなの絶頂なり

そは恋痴れし疲れなり

そは微風に抱かれて

おののく森の姿なり

そは朧めく梢なる

小さき声の唱歌なり

――風は曠野のうちに

そが呼吸の音を忍ぶ――

耕介が喜美子との對話に疲れた軀を湯舟にひたし、すがすがしい氣持になつて、そこを出た時、空は降るような星月夜だった。松の梢の間から六角形の星が舞い降り、耕介と手に手をとつて語りあうような美しさだった。

耕介はそれにみとれ屢く我をわすれた。それからふと思いつくと、これから直面する冒険に心はずませながら、母屋の塀をくぐり離れ――月の間の方にすすんだのだが、月の間が近づくにつれ一つの不安が胸に残った。

それはどこかいつもとつてつけたように彼の胸の中に残る彼の頑固きわまる厄介なエゴであった。妻を失つても、子を失つても、自らニヒルの世界に踏み込んでいっても、いつ

も彼からついてはなれぬ。強烈なその個性だった。その個性が果して、その部屋の空気になじむかどうか。彼が今要求しているのは自虐的ニヒリズムであつて、サジズムではないのではないか、彼はそう考えたのだ、だが近付いて離れをみるにおよび、その危惧も幾分定着し、おさまってきた。というのはあくまでも用意周到な喜美子の心づくしがうれしかったのだ。喜美子はちゃんと雨戸をしめ、その一枚に鍵をさしこんでいてくれたのだ。恐らく耕介が恥かしくないようにとの心使いだろう。だがそれにもましてこの女心の憎たらしさよ。耕介は意を決して戸を開け中におどり込んだ。中は真暗だった。ただ廊下に月の薄明りがさしこみ、電気のスウィッチの位置をぼんやり示していた。耕介は思わずそこに吸い寄せられる。そしてスウィッチを入れようと手を挙げハッと呼吸をのんだ。

というのは、あたりの静けさを破って、縛られているだろの女の、誰かとも知れぬ女の、荒々しい息使い、冒険を待ちわびているだろその女の心臓の高い動悸、そういったものが、或はその女の男を待ちのぞむ呻きとどうか、或は喜美子の縛り方の強さからくる業に耐えかねた女のうめきか——とにかくそんな気配が暗をとおり、唐紙をとおしてやってきたのだ。それはビリビリと電気で刺戟するように鋭敏な彼の感官に針のように突きさ

さる。彼は思わず唐紙に耳をすりよせ、かすかな女の動きをも聞きのがすまいと耳をすました。

思わず口をつく溜息！ それすら押殺さねばならぬ、耕介がそう思った時、どこからともなく流れてくる薫香の甘さ、豊かさ、彼は思わず胸に手をあてて、自分の心臓の鼓動をたしかめねばいられなかった。

一つ、二つ、三つ、彼は静かに自分の鼓動音を数えた。そして十まで算え終った時、意を決してスウィッチを入れた。

明るい、白色光の電気、その電気がともる瞬間、黒い影がパッと真白い廊下の障子になった。耕介は思わず目をみはる。それは縛られた女のトルソーであつた。巨大な乳房、ぶあつい胸、うねる山脈のような腹、それが障子一杯にたちはだかつて、縛られた女のシルエットを形成している。

耕介は思わず嘆息をもらした。

喜美子の好意で女中からきせてもらった浴衣がふしぎと心暖まる印象を与えてくれたのも、この時であつた。耕介は至れり尽せりの喜美子の心に何と感謝していいか——。そして女嫌いの彼の心が三十度ほどの傾斜を保って喜美子の方に近づいて行くのを意識しないわけにはいかなかった。

耕介はそこで唐紙をさらりとあけてあつと驚いた。というのは当然のように眼に飛びこ

む女の裸像よりも、畳一面にひろげられた花やかな着物の図柄が生きもののような新鮮さで目にとびこんできたからである。先き程酒をのんだ卓子は部屋の隅に片付けられ、八畳の間の奥には友禅の夜具が敷いてあり、その手前耕介のすぐ前に牡丹に獅子の図柄を淡い色彩で浮ぼりにしたお座敷着が無造作にぬぎすてられ、その向うに目もさめるような緋の長繻絆が長々と横たわっていた。女はその向うの床柱に高手小手に縛られ括りつけられてあつたが、腰から下は薄桃色の布に覆われ、頭は喜美子と約束のとおり、深い紫の頭巾ですっぽりとかくされあたかも一種異様な一ケの物質のようにみえた。

耕介はそういう女に嫌悪を覚えた。彼が今夜あえて冒険して求めたかったのは、生きた女の燃えあがる瞬間の秘密。いわば女らしさの秘密であつたのだ。それが柱に縛られた女の姿から完全に裏切られ、それとは逆にむしろかかる装置までも耕介の心を叶えてやりたかった喜美子の情愛の激しさが、深さが奥ゆかしさがしみじみと耕介の胸によみがえってきたのだ。耕介は黙って部屋に這入るとその長繻絆を手にとり、それを抱いて夜具の上に横になった。

彼はその長繻絆にしみこんだ女の汗と脂の体臭の中で、かかる不幸な——目的の食い違つた心情を慰め、彼の胸底にひそむ男を濡ら

そうとしたのだ。

彼はその思いが、そこに縛られている女より遠く母屋で仕事にいそしんでいるだろう喜美子の方に流れていくのを禁じ得なかった。

彼はのめもしない煙草に火をともし、その辛い、胸をしめつけるような煙にむせようとした。

『はつかなれども花そうび』

花のさかりはひとときか

すぎ去りぬれば尋ねとも

花散りうせて茨あり』

ふと古代ギリシヤ人の詩に歌いこんだ憂愁が彼の身をよぎった。それは紀元前七世紀の末に小アジアの海岸レスボス島にあるエレソスの邑に生れたサツボオの詩、追われて行く貴族の哀愁であった。土地の名だたる家に生れながら商売小市民との紛争にまきこまれ一族同類とともに国を離れねばならなかったこの詩人の心境が耕介にはわかるような気がした。

耕介もまた、彼の妻を失った拳句、いわゆる官僚の跋扈に胸ふさがれて懐しの故郷をあとにしたのだった。

彼は静かに低いこえで、その歌をとなえて行った。

すると途端に、部屋の中から低い、奥歯に

もののつまったようなすすり泣きが聞えてきた。ふとみると床の間に縛られた女が身をふるわし泣いているのだった。

何故の悲しみか！

彼は目を挙げて女を凝視した。その途端、女の腰を覆っていた布がふわっと落ちた。耕介は思わず顔をそむけた。だが次の瞬間、はじかれたようにして立上り女のもとにかけよった。

彼はその女の嗚咽の中に親しい、最も親しい女の声を発見したのだ。

「どうしたというのです！ 喜美子、お前はこんな馬鹿の真似をして」

彼はその女に近付くと矢庭にその女の頭巾をはねのけた。

みよ、その下から彼の予感どおり、喜美子の泣きぬれた顔があらわれたではないか。しかも、その顔には真白なサラシ手拭で猿くつわまでキツチリとしてあったのだ。

その念の入れよう。

耕介は呆然として喜美子をみた。

喜美子の目からひっきりなしに大粒の涙があふれ出、それが胸や腕や足に流れ、体にきつくくいこんだ麻縄にしみこんで行った。

みよ！

そこから、えもいえない香氣がただよってくるではないか。

それは彼女が愛好した伽羅の香に似た古風

な一種の薫香であったのだ。

耕介は思わず、その香りを胸一杯すいこんだ。そしてこれ程にせねばならなかった女心のいじらしさが、大きな海のような愛情として耕介の胸に滲みこんでいった。

「俺なぞ人に愛される資格のない男だった。それがこの女に——」

耕介は、胸中にうつつぼつたる愛情の焰を感じた。『喜美子、わかったよ、有難う』

耕介は、心の中で叫んで、外面では矢庭に喜美子の髪をつかむとその顔をあおむけ

「さあ覚悟はいいな！」

と言った。

これから始る恋責の狂態——。

耕介は、それを思うと、ニヤリとほくそえんだ。そして合図のように喜美子の額に一つ接吻すると

「何をいつまでもメソメソ泣いてる」

といいざま、柱にぶらさがっていた麻縄の縄尻をとり、びしりびしりとその太腿を打ちすえはじめた。

妻が亡くなってから丸三年間、思えば何度も女を責めたものだった。しかしそれは所詮愛情のともなわれないものだった。

耕介は今宵はじめて、その縄に愛情の通うのを感じた。耕介は、それで火の魂のようにもえ、自ら体ごと喜美子にぶつかっていったのであった。

(終り)

(予告篇)

怪異宇都宮釣天井(新東宝) 藤木の実

大工の娘に扮し、悪家老から妾にと狙われている。

その手下の為再度凌われ駕籠で運ばれる。

なお、この映画で前田通子が全裸姿で

天井から吊り下

げられる予定で

あったが急に取

止めとなった。

(週刊東京九月

二十九日号)

不知火奉行(大映)

浦路洋子、三田登

喜子

悪事の証拠の品を奪い返そうと必死の

悪人一味の為誘拐されようとする。

地下鉄三四郎(東映) 三条美紀

スリの姐御に扮するが人質として誘拐

される。

緑眼童子(東映) 三笠博子

お家騒動の渦中に巻き込まれ人質とし

て連れ去られ樹の枝から吊される。

夕日と拳銃(東映) 香叔子

中国人の妻として銃殺される。

肉体の密輸(日活) 美多川光子ほか

若い日本娘を密輸出する船へ、ボスの

家から猿轡をはめられたまま連れ込ま

れる。

ラスト近く手錠をはめられる。

巴里野郎(フランス) D・ロバン

不良少女として手錠をかけ連行される

王様と私(フォックス) R・モレノ

「アンナとシャム王」の再映画化、前

作ではL・ターネルが好演した。R・

モレノは貢物として差出された王宮よ

り逃げるが捕えら

れ答刊に処せられ

ようとする。

女と奇蹟(フランス)

M・モルガン

有名なジャンヌ・

ダーク物語の映画

化、前作のI・パ

ーグマンの演技に

迫り得るかどうか?

酔いどれ囃子(松竹) 浅茅しのぶ

縛り映画の傑作「素浪人日和」に素晴

らしいシーン(柱に縛りつけられあき

らめ切った顔を持ち上げられる)その

まま再現される。この外、雪代敬子も

縛られる模様である。

(女優緊縛映画速報版)

最近の映画から

白石

穂

ふり袖太平記(東映) 美空ひばり

曾我兄弟富士の夜襲(東映) 高千穂ひづる

曾我十郎と別れを惜んでいる所を連

れ去られる。

妖蛇の魔殿(東映) 長谷川裕見子

ラスヴェガスで逢いましょう(MGM) C

・チャリツシ

〔映画・雑誌〕通信

美とワイセツの限界

—お中元に利用されたヌード写真—

(週刊新潮、九月十日号)

柳 沢 吉 保 提供

東京、東調布署では、八月二十五日、大田区今泉町の写真屋さん沢田正夫(三三)「仮名」を「ワイセツ文書、図画その他のものを配布、もしくは販売し、または公然これを陳列した」疑いで逮捕した。

事件が発覚したのは、夫婦ゲンカによる。——一月ほどまえの、ある朝、田園調布の、ある商店で。

奥さんが、前夜、酒によっておそく帰宅したご主人のズボンを始末していると「御中元」と書いた小さな紙包みが、ポケットから出て来た。「お金かしら」と、開けてみると、なんとこれがエロ・ヌード写真である。

「こんなものを持ち歩いて、それじゃ、毎晩帰るのがおそいのも、きつと……」

と、大ゲンカになった。

商店街の役員をしている山本六郎さん(六〇)が仲に入って、やっとのことで、おさまったが、山本さんは「家庭の平和をみだすも

の」として、この写真を警察に提出し、調査をたのんだ。かくして、沢田は逮捕され、ワイセツ図書、写真など五百枚(原板三百五十枚)が家宅搜索の結果、押収された。

沢田は、はじめ「芸術的」ヌード写真を、写そうと思っただけであつた。また、武蔵新田特飲街の女給さんに頼まれもしたのだともいう。

沢田も、だんだん病みつきになりだしたがそのうち店のお客に、これをお中元サービスとして、贈ることを思いついた。モデルになった女給さんの側からいっても、これは、宣伝になる。いわば、一挙兩得の、新宣伝というべきであつた。

ところで彼のアルバムの中に、ただ一人、どこから見ても特飲街の女ではないモデルのおさまっていた。しかも、この写真が一番ものすごい。

一つは「苦モンの表情」と題して、柱に、

右足と右腕を荒ナワでしばりつけられ、目をして、のけぞろうとしつつあるところのもの。もう一つは「死刑囚の女」と題する、男のまたがるイスの下にのたうちつつ、死んでゆこうとするポーズ。

念の入ったことに、いずれも連続、組写真であつた。

警察では、もちろん、もっと大がかりな一味徒党がひそんでいると見込みをつけ、取調べは厳重になった。

ところが、出て来た結果は、意外だった。二つとも、沢田が、依頼されてやった仕事だが、依頼したのは、同じく田園調布に住む芸術大学四年生芹沢幸夫君(二四)「仮名」であつた。

モデルを雇うと、一日五百円はかかる。一枚の絵を仕上げるには一月以上はかかる。これではとても、学生には、やってゆけない。しかし、芹沢君には恋人があつた。彼女は愛する彼のために、どんなポーズでも、いとわなないといってくれた。だが、そうはいって、くれても、残念ながら家の都合もあるので、毎日毎日彼のところに通うわけにはゆかない。そして、彼のところには満足なアトリエもなかった。

「そこでねえ、写真にとつてもらおうと思うんだ。もちろん、あらゆる角度からね。こうすると、わざわざ通わせることはないわけな

んだよ」

と、芹沢君は沢田に語った。

ネガは沢田がもらおうということで、この話はまとまった。

モデルになってヌードのポーズをとった芹沢君の愛人とは、台東区車坂にある某有名料理屋のことしまだ十九才のれっきとした娘さ

んだった。

沢田は、書類送検になった。

しかし、芹沢君は別になんのことでもなかった。彼のいう通り、これは「芸術」の「美」を目的としたものだったから。「芸術」と「ワイセツ」の限界は、なかなか微妙なものであるようではある。――。

万才！責め写真は一応、此の場合も、「芸術」と「美」を認められた。立派な芸術品を立証された訳であるし、なんとしても嬉しく又芹沢君が羨ましくなる。ここでも、「女を縛る為には惚られる」ことだという『奇クサロン』の格言が思い出される。（柳沢記）

ローカル・レポート

女義大夫の花

（傑作クラブ、昭和30年5月号「玉子九蔵作」より）

――前略――

第三期の重症患者になりますとエと、大夫の乗った人力車の後を押し寄席から寄席へとついて廻ります。最後の席がすんで大夫を家に送り届けてから、下宿へ帰ると途端に一番雞が鳴くという念のいったフアンでございまして、これを称して後押し連。娘義大夫が秘結して、うんこが出ないで苦しんでいたのをカンザシでホジクリ出してやったなんてのは、特筆大書すべきドースル連中のナンバーワンでございます。

――中略――

呂昇は明治六年八月四日、名古屋市西区堀川端町の生れで本名は永田仲、父の為吉

は備州藩士で塩物問屋を営み、母の勇子は名の通り、まことに男まさりの女大夫でございまして。仲は幼いころからの利かん坊で、或る日新しい帯をズタズタに切って帰ってきましてので、母親が

母「これ、お仲や、そのザマはなんですか。きよう新しくしめたばかりの帯が、どうして切れたんですか」

仲「でも、しょうがないワ」

母「女の子が何という口のききようですか

ここへ来てくわしく話してごらん」

仲「男の子と忠臣蔵の判官さまのお芝居をして遊んでいたら、みんな腹切りの真似するばかりで、誰もほんまに切るもんがないので、しやくにさわって、うちが小刀で腹を切ってやったんや」

母「エッ」

仲「そしたら、この通り帯だけ切れて、お腹は切れませなんだ」

母「まあ！」

と言ったきり、さすが氣丈ものの母親もあいた口がふさがらず、いきなり小刀を取り上げただけで、オキヤアセとも、シヨウガナイナモとも、言わなかったそうでございます。

――後略――

（柳沢吉保提供）

緊縛映画速報欄

千葉栄市

新東宝「怪異宇都宮釣天井」

悪商鍵屋は釣天井造築にかこつけ、大工左官達を城へ召し出した留守を狙って、頭梁の一人娘お藤（藤木の実）を白昼公然とかどわ

かす。（鮎川浩）扮する子分が家へ押入り、いやがるお藤を白い腰紐で後手に縛り上げ、悲鳴をあげるのを猿轡もはめず、外に待たしてある駕籠に押し込み担ぎだし、とある橋の上迄来ると行手に立ち塞がる深編笠の浪人（小笠原竜三郎）「邪魔をするな」と斬りかかる用心棒（丹波哲郎）の殺人剣をかわしざま駕籠の傍へ駆け寄りたれをまくると、何時はめられたのか今度は鼻がつぶれる程きつく手拭で猿轡をさしている哀れなお藤の姿、一カット。但しこの一カットは小笠原と丹波の斬り合いの間五十秒、駕籠の中から後手猿轡の可憐な姿を見せてくれるアップは一回だけで残念、それに駕籠に押し込む時はめてなかつ

た猿轡が川を渡る間に何時のまにかはめてあるとは矛盾もはなはだしい。

東映「獨體銭」

土蔵内に軟禁された神奈三四郎（市川右太衛門）を救い出さんと鍵を盗み出したお小夜

（長谷川裕見子）は他の腰元達に発見され、庭へ引きずりおろされ、後手の無抵抗な姿で三四郎にはのかな恋情を燃やす姫君檜（高千穂ひづる）に弓の折れで嫉妬の折檻をされる約二分間。

東映「鳴門の妖鬼」

悪家老に殿を誘惑してくれと頼まれた遊女夕霧（八汐路佳子）はこれを拒絶した為、城中の古井戸に太い鳴子縄で後手に吊され、水責めの憂目にあわされ、どうしても首をたてにふらぬのでなぶり殺しにされてしまう。

東映「緑眼童子」

主家横領をたくらむ悪人達は、長兄松太郎を毒吹矢で殺害し、次兄梅太郎をも殺害せんと（三笠博子）を囿に誘拐し、毒蛇ヶ嶺の大木に太縄の後手で吊り下げ火あぶりにしようとする二カット。同映画で、助（本松一成）も悪人達の密談を立聞きした為、後手に縛ら

れ、白布の猿轡、子役なので割合手荒く扱かれ、そのままの姿で引廻されたりけとばされたり相当長い間縛られている。

男性の縛りならば次の映画もそうである。

日活「甲武信岳伝奇」

辺境、甲武信岳に迷い込んだ三人の島破りは武田信玄の埋蔵金の謎を秘めた地図を手に入れ、それを三等分に切り、各自の背中へ刺青し、地図は燃やしてしまう。そして幾星霜……舞台は江戸にうつり毎夜その三人の刺青を求めて跳梁する武田菱と名乗る怪人物。そして彼に殺された父、文七の背中への刺青を守らんとした伊太郎（名和宏）は多勢に無勢押さえつけられ、後手豆しぼりの猿轡。シーンが変ると猿轡だけはとりのぞかれるが後手のまま古井戸に投げ込まれてしまう。

同映画で伊太郎の弟分半次（中川晴彦）も悪旗本の屋敷へ忍び込み発見され、後手に縛られ、物置へ閉じこめられ、あとで捕方に助けられる時は後手のまま戸にぶつかり、外へ転げ出す。（以上）

九月は実に緊縛映画の少い月で、充分な速報が出来ず申し訳ありませんが、十月は松竹「酔いどれ牡丹」日活「疾風あばれ街道」日活「肉体の密輸」等数多くの作品が封切られますので御期待下さい。

〔ローカル・レポート〕

防声具使用による窒息死

(十月五日附毎日新聞朝刊及び夕刊)

近 藤 一 提供

今月五日附『毎日新聞』朝刊十三版と夕刊四版です。一入、古川裕子さんが想起されてなりません。この記事からだけでは、詳細は不明ですが、新生一個所持を因に後手に手錠をかけ、更に捕縄で縛り防声具をかけて独房に入れ死に至らしめたことは一見暴虐のようですが、過般の法廷に於ける証人傷害事件等に鑑みる時、恐らく業務上過失致死程度の軽微な処分で済まされるものと憶測されます。

防声マスクで窒息

拘置所の被疑者が死亡

【岩見沢】四日午前十一時ごろ北海道岩見沢市岩見沢拘置支所(支所長菊地金助氏)に収容中の傷害被疑者、無職岩井久(二一)が公判を終え帰ってきたので、身体検査をしたところ、ポケットに新生一個が入っていた。取上げて独房に入れようとしたが、いままでどおり雑居房に入れてくれと暴れたので、手錠をかけたうえ、防声用のマスクをかけ、独房に入れたが、二十分ぐらいたって看守が見回

拘置所等における処遇に種々刑政上の問題を含むようですが、今日の状況では或は責任看守の退職で起訴猶予となるかもしれません。警察学校の教場には、防声具というようなものがあったように思いますが、或は拘留中の被疑者にも使用しているとも思われますので、春日氏やその他の方々の御経験を知りたいと思います。

△提供者記▽

ったところ岩井は死んでいた。同市立病院で死体を解剖した結果、死因は窒息死とわかった。顔に打撲傷があったが、これもなぐられたものか転んだ傷かわからず、今後なお十分調査する必要がある。またこの事件で拘置所に入所中の被疑者五、六十人が監房の中であれば、壁などをこわしたことについては、暴力行為あるいは器物キ棄などの疑いがあるので今後取調べを行う。

同支所に収容されている百十人の被疑者は代表五、六人を立て菊地支所長に面会を求め「岩井の死因をはっきりさせる」とつめ寄り

同所では警官三十人の出動を求め警戒に当たった。

札幌地検岩見沢支部では防声マスクの取扱いに手違いがあったとみて取調べに乗出した

関係者取調べ

防声マスク事件

【岩見沢】既報、去る四日朝北海道岩見沢市岩見沢拘置所に収容中の傷害被疑者岩井久(二一)が防声マスクで窒息死した事件につき五日朝札幌地検藤井検事正、道警本部志村捜査課長らの一行が来沢、取調べを始めた。

防声マスクを取扱う場合の看守の不注意による業務上過失致死の疑いもあり、また被疑者が後手に手錠をかけられ、さらにその上を捕縄でしぼり上げてあったところから特別公務員暴行凌虐(りようぎやく)致死の疑いも浮ぶとして拘置所内の関係者を任意出頭のかたちで調べている。

(注)防声用マスクは旧軍隊の防毒面に似たもので、口の部分は声が外部に出ないようになつており鼻のところは呼吸ができるよう穴があいている。

これは監獄法で定められ六時間以内までは許されるが、場合によっては三時間ごとに更新できることになっている。手錠がないときでもはずせないように頭からかぶせるようにできている。

私の主張——私は訴える

マゾヒスト・クラブの 結成を望む

山 田 正 男

無理解な偏見と、絶えざる迫害の嵐に抗して、我々恵まれざる同好の士のために、唯一無二の希望の灯を与えつつづけていて下さる奇クの存在は本当に感謝にたえません。

しかし我々にとって悲しく残念なことは、多くの同好の方々がいられるにも拘らずそれが組織化されていず、連絡も交際も殆ど不可能な事です。サドの男性の方々は、男尊女卑的な日本の社会に於ては現実には相手の女性を求めることは比較的容易であります、私共の様なマゾの男性にとっては、現実に女王様を見出すという事は極めて困難であります。だからマゾヒストの人々にとっては、組織的な会をもつという事は絶対に必要であり、そういう会を作ることによって、始めて見果てぬ夢を現実のものとする事が出来ると思います。ここに私は真剣にマゾヒストクラブの結成を唱え、同好の士の御賛同を得たいと思います。私の構想するクラブの内容は次の

様なものです。

一、所在地 東京、大阪、名古屋、福岡、等の大都市。必要あれば中小都市にも結成される。

二、厳重な秘密保持を条件とする会員組織とし、会員相互の親睦、種々なプレイの場所として、直属の建物を所有する。建物は会員の出費で建ててもよく、亦既存建物の地下室などを賃借してもよい。但しこの場合、秘密保持を条件とする。

三、会員はマゾの男、サドの女を以て構成する。出来得る限り、男女二人一組で入会することを希望するが、男、女、それぞれ単独にても可。

四、会費は種々のプレイのための器具や設備の維持、会の機関誌の発行、建物の維持もしくは借料等を充すに充分な額。

五、会員の会合は原則として週に一回、土曜の夜とする。その他、必要あらば随時に開

かれる。それ以外は自由に一般会員に解放しいつでもプレイを楽しむことが出来る。

六、単独の男、又は女の会員のために、それぞれパートナーとなる事が出来る男奴隷及び女主人をクラブの専属として準備する。

七、新しく会員となる場合は、会員の前で種々なプレイを行い、承認を得ることが必要である。

八、クラブの建物の中には、プレイのための種々な器具、施設が用意されている。亦そこでいろいろなプレイが行われる。その主なものは次の如くである。

(イ)室内馬場——人馬競走場、障害施設がある。男馬の口に嵌めるくつわ、手綱、鞍、女王様のための鞭、拍車つき半長靴、亦、ハンドル付車輪も男馬のために用意される。週に一回、人間競馬が開かれる。

(ロ)奴隷の部屋——女王様の玉座、鞭、寝台浴室、便器、この部屋では足なめ、人間椅子足蹴、奴隷の接吻、鞭打等が行われる。

(ハ)処刑の部屋——鞭、鎖、吊輪、その他の責道具。鞭打、平手打(ビンタ)、火責(タバコの火、その他)、水責(水槽の中に女王人が足で男を沈めて苦しめる)、その他の拷問。

九、会員の服装は、クラブの規定のものを着用する。男性は薄いタイツにキヤルマタ。上半身は裸体。女性は海水着。

十、会員は、年に二回のリクレーションの旅やハイキングをする。ピクニックなどの際も、山間などの僻地で、戸外の集団的プレイを楽しむ。乗馬の遠乗も行われる。勿論、馬

は男で女主人は男の肩の上に跨って馬を乗り廻すのである。

以上が私のマゾヒスト・クラブの大体の構想ですが、こんなクラブを作って同好の男女

が楽しみ合うことの出来る日の、早く到来するよう切に望んで居ります。亦、そのために奇巧の編集部の方々の御助力を御願ひする次第です。

〔ローカル・レポート〕

バスガールに硫酸

―昭島市で、同性愛のもつれ―

(内外タイムス三十一年十月三日付)

東 一 郎 記

二日午後十一時半ごろ昭島市福島町八二七
関東バス車掌北川義乃さん(二〇)は自宅前
で元の同僚の住所不定無職、深谷レイ子(二
一)に約一合の硫酸をかけられ右顔面に全治
一カ月の火傷を負わされた。昭島署に届出た
レイ子は三日午前六時半ごろ同市中神町二

川さんと一緒に働いているところ同性愛だった
が、盗癖があり、二十九年十二月同社をクビ
になっており、去月初旬ごろにも窃盗容疑で
武蔵野署に検挙されたことがある。このため
義乃さんが最近冷くなったのを恨んでの凶行
らしい。

六六二失多摩川土堤付近で睡眠薬を飲み苦し
んでいるのを通行人が発見、昭島署に急報し
た。連絡により同署員が太田病院に収容。一
命はとりとめる。
原因は昭島署で調べているが、レイ子は北

なお、レイ子はさる二十五年錦城学園高校
を卒業、郵政省地方貯金局に勤めたのち二十
六年三月Aワンポマードに入社、企画部宣伝
課に籍を置き女子野球選手となったが、肩を
痛めたためまもなく退社している。

〔ローカル・レポート〕

集めた手拭七百本

昭和三十一年十月三日付河北新報夕刊

(仙台市東二番町一四一)

東北だより(福島)

△七 村 貞 二 提供▽

日本手ぬぐいを集めて十年間という変わった
コレクシオンマニアが常磐市にいる。その人
は、同市関船の開業医折内平八さんの妻広子
さん(四三)で、あつめた手ぬぐいはすでに
七百本を突破、大型ヤナギ行李いっぱいとい
う熱心ぶり。木綿といえは手ぬぐい一本でさ
えも貴重な存在だった、戦後の品不足時代に
「日本固有の郷愁」ともいえる木綿の肌ざわ
りに愛着を覚えたのが、コレクシヨンの動機
で北は北海道から南は九州まで各地のものが
集められている。

「木綿の肌ざわりに愛着を覚えたのがコレク
シヨンの始まりというのですから、つまりフ
エチシストの一例でしょう。添布写真には、
広子さんとコレクシヨンの手拭が載っていま
した。」



越野義夫

〔告白〕

『責めと
フェチ
の自画像』

昭和二十八年九月号に掲載しました私の『責め自画像』全編読んで頂ければわかります如く、私は幼い頃より「女の責め」につ

いて強い憧れを持ち、少年時代、既にあの惨たらしい迄の責苦を、この自分自身の肉体に実際に直接受けて、未だにその記念の

傷跡を残している私です。あの身の気もよだつ八寒地獄の責苦の仕置を、鎮守の森で村の人達に依って「責めの一部」として、強引に行われた事が忘れられず、其の後も母と責苦の遍歴の末、私はその因果のためか、現在孤独の日々を送って居ります。

元来、私は女の責め、それも和装へと申しまして盛装でなく、長襦袢か湯文字姿に限りませんが、の姿で責められる美女の画や写真が一番好きで、主体的にこの趣味から出発しました。分類からいえば旧式のサディズムを強力に包蔵している筈なのですが、それ許りではなく、之に加えてフェチシズム的な要素とマゾヒズム的な要素も多分に包蔵しているので、精神医学から申せば、どういう人間なのでしょう？私は赤や桃色のお腰を物干場等に見かけますと、胸は高鳴り血潮は逆流して、我身を包んでみたい衝動を押える事が出来ないのです。

私は常に、お腰一枚で寝るのですが、昼間でも必ず股引や猿又ははしません。お腰が肌身に着いていないと心が安まらないのです。お腰は、絹物、縮緬、モスリン、ネルスフ等で赤や桃色に限られますが、何十枚集めたか数え切れません。ネルのお腰は一番容易すく手に入れる事が出来ました。尤もこれだけ集めるのには随分危い目に何度

か遇いました。

遊女屋で遊女の好奇と侮蔑の目や言葉を浴せられたこともありました。或る時のことです。其の家の二階からは、以前から二三回失敬したことがあったので、目の前に絹物らしい赤いお腰を昼間、二階の窓に見てからというものは、矢も盾もたまらず、其の晩明け方近く、首尾よく一枚を取ることに出来ましたのですが、もう一枚は取込んでしまっておりません。折角苦心して来たのにと口惜しくて、そのため隣の二階の窓に干してあるネルのお腰二枚の内一枚を盗り、次の一枚を盗ろうとした時、先程の絹物のお腰の干してあった家の窓より、女が二人顔を出して、危く見つかりそうになりましたが、あの時は全くよく虎口を脱することが出来たものと今以て空恐ろしくさえなります。

又、白昼、待合の手摺りに干してあった桃色モスのお腰を盗ろうとして、通りがかりの人にみつかったことがあります。すぐさまその待合に大声で告げられ、私はあわてて袋小路に逃げ込んでしまつて、どうする事も出来ずにまごまごしている処へ、其の知らせに飛んで来た待合の女中や遊びに来ていた芸者など二三人に取囲まれ、「アンタ、妾のお腰なんか、なんで盗って

行くの。アンタ、随分変な人ネ。」

等と、さんざん詰問され、

「どうもすみませんでした。二度とこんな心得違いは、いたしませんから勘弁して下さい。」

と地面に手をついて謝りましたが、そのお腰を取り上げられただけでは、許してくれず、

「ちよいと来てよ、来なさいったら……来たらいいでしよう。」

と其の待合に引張り込まれ、後に近所の人達の腰巻泥棒だと嘲笑する高笑いの声を背中に浴びながら、丁度昼間の無聊を託っていた女達に依つて奥座敷に引きずる様に押込まれました。

「サア、まだアンタ、お腰をどこかに隠してあるのじゃない？」

と、もじもじしている私を、三人して帯とり裸にしてしまい、腰巻一つにしてしまいました。

「マア、呆れた人ネ。ネエ、そのお腰どこで盗つて来たの？アンタ、お腰がそんなに好きなの。」

「黙っていたら判らないじゃないの。許してあげないわよ。」

「ソウソウ、お女将さん呼んで来て、皆んなで見せしめのため黷つてやりましょうよ。」

「それがいいわ。」

それから私は、お腰一枚で、四十五、六の女将を加えた四人に散々な目に会い、それでもやつと公にされずに許して貰った事もあります。私は洋装が嫌いな様に、同じ女の人がした物でもズロースやシユミーズには全然興味を感じないのでそこから徹底したお腰狂なのです。さてそのお腰も、幾十枚手に入れました。又新しい獲物を目にすれば、新しい血が逆流して立騒ぐのが防ぎきれないのです。真赤なお腰一枚で責められる女、衆人環視の中に晒責めにされる女等を心に画きながら、私自身、自虐的な姿を若い女の人の前に晒して罵り者にされ嘲笑や侮蔑の言葉の数々を浴せられて責められる楽しさを覚えて仕舞つたのです。この楽しさも一度味うと仲々やめられせん。

初めの頃は、座敷の敷居際に障子を開けて、近所の家で二階の物干場に洗濯物を干しに来る朝や、取り込みに来る夕方の時刻を見計って、夏冬問わず赤いお腰一枚の姿になって待つのです。そして若い人妻や娘さんの好奇と侮蔑の視線を注がれて、満足したのですが、段々それでは物足りなくな

物干場の人だけではなく、洋裁店の二階でミシンを踏んでいる娘さん達にまでも、自分の晒姿を見付けられ、嘲笑って見て貰います。又二階を間借りしている二号さんは昼間の手持無沙汰の時間を満たすかの様に二階の手摺に頬杖ついて見ながら、散々私が嬉しくなる様な侮蔑の言葉を数限りなく浴せて呉れます。ですから私自身には聞えませんが、近所の人々は誰一人として、私を侮蔑の目で見ていない者はありません。しかし、私はまだこれでも物足りなく、夜中の一時、二時になるのを待って、お腰一枚になって自分の姿を青白く照し出している街灯の下に晒すのです。そして御座敷帰りの酔った芸者さん達に翻って貰うのです。二、三人連れの時などは、侮蔑の言葉の外に紅唇から痰唾を吐きかけて行きます。此頃では場所を変えて、田舎の方に自転車を出かけ、十一時頃まで田舎の活動小屋で時を過し、目星をつけて置いた土堤に自転車をとめて、衣服を脱いでお腰一枚になり、素足に土堤の草を踏みながら、夜露に濡れた草むらの上に引き据えられた様に座ります。そして帰途の人々に侮蔑の悪戯を、嘲笑をこめて加えて貰います。ある時には、荒縄にてぎりぎりに縛って貰い、竹切れ等で打ち叩いて虐めて貰った事もあります。

又、真冬の川の中へ蹴り込んで水漬けにされた事もあります。又この様な事もありました。

其の晩は、月のない夜空は墨を流した様に真暗で、土橋の袂の街灯が一層青白く私の姿を浮き上らせ、射す様な西風が吹き荒れて、待てど暮せど人は通りません。時計は十二時を過ぎ様とします。今夜は駄目かと半ば諦めますと、今迄の緊張がとけて寒さがこたえます。今草の上から立上ろうとした時でした。橋を渡って来る足音を微かに感じました。そして耳をすますと、何か話合い、笑声さえします。私はサッと緊張して草むらに座り直しました。すると足音が橋の中程まで来た時、その中より甲高い声で、

「アラ、ネエ、アンタ、あすこ見て御覧よ
又居るわよ」

「アラ本当ネ」

「アラ、いやだ」

「いいわよ、構わないから、今夜は皆んなで、うんと虐めてやりましょうよ」

「それがいいわ」

等、ガヤガヤ云いながら私を取り囲んで現われたのは、顔馴染？の三人グループを混えた五人連れの女です。

「ネエ、アンタ、妾達の来るのを待ってい

たのでしよう。今夜はうんと面白い目に遇せて虐めてあげるから、スミちゃん、縄見付けてよ」

「アイヨ、皆んなも探してよ」

「エエ探しましょう」

「アア、あったわ、これなら丁度いいわ」

「サア、皆んなでこの人を押えつけてよ」と私の体に両方より土足の足をかけ力一杯締め上げ、骨もくだけるばかりに荒縄でグルグル巻きに縛り上げて仕舞いました。そして、手に手に棒切れを持って、私を打ち叩き侮蔑と嘲笑の嬌声の内に、私を虐め馴っていました。一休みすると何やら相談をこそこそしていました。

「そうね、それがいいわ、面白いわ。」

「でも、それは一寸可愛想ね」

「何が可愛想なもんですか。分相応よ。」

「サア、立つんだよ。」

と私の縄尻をグツと引張り、周りから棒切れで小突き廻わされながら、暗い田舎道を引き立てられて、自分では一時間近くも歩かせられた様に思いましたが、十五分位だったのでしょうか。とある畠の隅にあるコンクリートの下肥溜めの処に連れて行かれ其処へ引据えられ、女たちは私の縄尻を小突いて、

「サア、アンタには適当なお風呂よ。早く

お入りよ。」

と命令するのです。私が躊躇していると「何をぐずぐずしてんのよ。」

と嘲笑い乍ら棒切で小突いたり叩いたりして責めるのです。私は縄尻を取られたまま力なく立上ると爪先より下肥溜へ浸してやがて全身が中へ入り、胸のあたりまで漬って仕舞いました。彼女達は「キヤア！」と叫び乍ら、口々に侮蔑の言葉の限りを浴せ嘲笑い、手を叩いて転げ廻り散々私を罵った上高笑いに笑って去って行きました。さて、この時ばかりは縛られて自由の利かぬ身体故、一時は自虐遊びの終末がきたかと、恐怖と悔恨の念に襲われましたが、やつの事で縄を解いて這い上り、そのままの姿で小川の土堤までたどり着き、冷たい

のも忘れて小川の中へ飛び込みました。そして家へ帰ったのが三時半を過ぎて居りました。よくまあ途中で見とがめられずに帰ったものと今でも思います。でもこの時は四日寝込んで仕舞いました。晒責の話はこれで終わります。

次に雪責めの事について少しお話しして置きたいと思います。私は自分から雪責めや水責めの実験をする時は、晒責めの様に女性から虐められる男というマゾヒズムではなくて、私のは自分が責苦にかけられる女になった心にて実行しますので、勿論、前に述べました様に女に侮蔑され嘲笑われ罵れる自虐の精神状態も、体中に包蔵はして居りますけれども。この時の私の心は、かつらや化粧こそ致しませんけれど、マゾ

ヒズム派の男性の皆様とは又違った女装マニアの心理にも通じるものがあるのでしようか。雪責めは最近では、一昨年の一月末の大雪が最後ですけれど、身体中が興奮して居れば、決して風邪など引く事は私自身はありませんでした。又雪は新しい雪の方が心持も良いし冷たさが違います。終わった後はよく乾布摩擦をして着衣することです。全くお恥しい内輪話をおくめんもなく、さらけ出してしまいました。まだまだ、いろんなお話があるのですが、余りにも荒唐無けいで作り話のように思われても、いけませんので、今日のところは、これくらいにしておきます。(おわり)

☆営業部だより☆

○都合により十一月号は休刊とし
本月号は十二月号としました。従
って十一月号として御予約下さっ
た方々へ十二月号をお送りいたし
ますから御諒承願います。

○前月号(十月号)は、九月十六
日に発送しました。九月号誌上に
九月下旬発売としてありましたの

で、発行の有無につき沢山の御照
会を一々頂きましたが、毎月の案
内は以前と違って出さないことに
しておりますので、左様御承知お
き願います。

○代理部の分譲品は従前通り取扱
っておりますが、誌上には広告を
出しておりませんので、御手数乍
ら八円切手封入の上、目録をお求
め願います。

○本誌のバックナンバーは残部が
大変少なくなっておりますが、只今
30年3月号以降の分なれば若干在
庫しております。復刊号は本号の
目次裏に最近号総目次を掲載して
あります通り各月号共在庫してお
ります。

○代理部で分譲しておりました「
美人乱舞」「アリスの人生学校」
は共に売切れになりました。「時

代物責絵巻」も売切れとなりました
たが、未製本の分が若干残ってい
ますので、説明付は、一揃百五十円
(送料八円)にてお分けします。
○アルバム「美しき縛しめ」第一
集、第二集(未製本のみ)は、僅
か宛残っております。売切後の再
版は絶対に不可能ですから、御入
用の方は此の際御申込下さい。

☆編集だより☆

○宝塚二三夫氏から、「天は知っている」の続稿を速達で送って来られたが、締切後であった為、本月号には間に合わなかった。次号では挿絵入りで御紹介する故、御期待を乞う。宝塚氏へ、挿画を描く都合で御送稿は早ければ早い程幸甚。

○本田由郎氏から、時代物の責めについての小品を送って来られたので、これも次号でのお楽しみとして挿絵入りで御紹介する。

○本誌編集記者の手になる「緊縛モデルのプロフィール、萩千恵子」は、沢山の責フォトリで、次号には発表出来る筈。

○沼正三氏の「家畜人ヤブー」と真木不二夫氏の「黄色オラミ」の二連載小説も、すでに到着し、目下挿絵の描画中、第二回目に入つて、いずれも愈々佳境、御期待を

乞う。

○鷹野めぐみ氏へ、読者通信を頂いたが、すでに締切後にて本号に間に合わず残念、短くても結構、次号へ間に合うよう御送稿をお待ちする。

○羽村京子氏へ、其の後の原稿につき予告を頂いていたが、事情が許せば御送稿相成りたし。当方よりの返信は、すでに責着の筈。

○本誌編集部は協力して下されるモデル嬢の方を急募。御希望の方は、身長、略歴、御記入の上、編集部宛お送り下されたし。報酬其の他委細、書面にて返。

○荒浪の狂う北洋を舞台とした雄渾な海洋小説到着、異常なる生活と活劇の連続、スリルはいふまでもエロチシズムに富み過ぎているので、うまく訂正出来れば、次号の誌上を飾れるかもしれない。○玉稿落穂集にて紹介するに適した候補作品、続々と原稿倉庫の奥

四馬孝・傑作集

「美しき女体家畜飼育室」

△潰滅の前夜より▽

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円 (送共)

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案 北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付 八枚一組 千円 (送共)

から登場、一方の傾向に随するこ
となく、公平に御紹介してゆくつ
もり、御期待を乞うや切。

○或る病院に勤務する白衣の天使
である一看護婦の物した長篇の手
記、その鋭い観察は、或は現在の
風俗を深く抉り出して、余りにも
程度を越しているかに思われるが
これも、前稿と同じく、是非掲載
したき中の雄篇たるを失わぬ。

○敗戦後の満野に流浪する日本娘
の運命を描いた告白「流浪八年」
沖野恵美子さんの告白は、過去、
29年1月号の「流浪八年」29年2
月号の「人身御供」29年4月号の
「収容所脱出」30年11月号の「被
虐より嗜虐へ」と四回に亘り発表
されたが、今回、更に続篇二回を
送稿された。サディズムとマゾヒ
ズムの織りなす、まことに数奇な
運命の翻弄というべきである。

北原純子 責画傑作選

△ハートの的▽△女体洗滌室▽

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

△緊縛ヌード十六ポーズ▽

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

(以上、二組にて、五百円)

△女学生の羞恥責め▽

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

外国文献 一分譲

本誌九月号並に十月号、又は
代理部分譲品総目録(八月切手
封入の上御申込下されればお送り
します)に発表してあります。

「血紅」「凄惨」

女体切腹フォト

代理部分譲品総目録に発表し
てあります。

現代マゾヒズム芸術時評 (復ノ四)

原 忠 正

復刊第十二項 「イリイナ・ブルグリ・モーヴァ」

(Ilina Burgrimova)

復刊第一回目の時評にロシア映画「サーカスの女王」として、私は崇拜の念をさえ混えてモスクワ市国立サーカスの女猛獣使いイリイナ・ブルグリ・モーヴァについて書いた。そうして、結尾に私が女史に交通依頼をした事を付け加えて、交通の困難な検閲の未だ厳しい国である。併し若し女史からの返信でもあれば、として、被虐性愛者の大宗たるザッヘル・マゾッホ博士の著作に言及して憧憬の念を伝えておいた。

私の危惧の念にも拘らず、私の不十分な英文にも拘らず、女史の代弁者たる、モスクワ市ゴルゴ街十八番地の「ノヴォステイ」誌(英文版名 NEWS)のエス・ダトリン氏から七枚のモスクワ国立サーカスの写真と共に返信が到着したのである。(

八月十五日) 右のヴォステイ社を經由して到着した書状が、責任者たるリュトミラ・ゴロコウスカヤ女史のモスクワ不在の為に甚だ遅滞した事を謝し、後便に詳細は譲るも、新しい女猛獣使い二名マルガリイタ・ナザローヴァ及びタマラ・ブスライエーヴァの写真を送付する事、若し興味の余りにソビエット連邦来訪の志あるならば、イントウリスト旅行社の代理店及ソビエット連邦と外交関係の存在する如何なる国の領事館、大公使館を通じて入国査証を入手するに付いて便宜を供与する由の意を認めた甚だ好意的な書状である。日ソ交渉に於いてソビエット連邦の赤い星は必らずしも我が国に対して笑顔を示している訳でない事は勿論であるが、私は国籍を離れて一個人の資格を以って考えるとき、マゾヒステイツ

クな精神の持主にとって、赤い星は豊かな魅力を湛えて微笑み始めたと感じるのを如何とも為し難いのである。オルガ大公妃によって、チェコスロバキアの女猛獣使いによって、ザッヘル・マゾッホが絢爛たる夢の舞台に憧れた帝政ロシアの高貴なサディステインの血統が、未だ断ち難く残っている事、そうして、女猛獣使いという職業

(Women Lion Tamer) の撰撰がサディ

ステイ・クナ心の持主によって採択せられる事の稀少さを考えるとき、吾々のマゾヒズムは此の極東の一角の甚だしく女マゾヒストの多い国、サディステインの数少ない国に在って、妖しく昂奮するのである。

此処に七枚の中、未だ本邦で未発表のものの内二枚を掲げて、御参考に供しようと思ふ。

(一) はマルガリイタ・ナザローヴァ

(Margaria Nazarova)

(二) はタマラ・ブスライエーヴァ (Tamara Buslayeva)

— [本号の口絵参照] —

〔註〕本稿は、十月号の一五九頁、「編集だより」にて御紹介した分です。



【読者通信】

十月号にはフンドシについての記事が出ていたので寂しく思いましたが、読者通信に福岡の池田さんからの呼びかけがありました。いつも、うれしくございます。いつも奇抜な着想と興味深い御報告を拜見致しまして、フンドシマニアの一人として非常に心強く感じております。私が日常着用しているフンドシは、男子の水泳フンドシを基本にして自製したフンドシで、私たち数人の女子のフンドシグループの間で三角フンドシとか、乙女フンドシなどと名付けています。水泳フンドシでは、ヒップの割目から上へ出ている部分がよくねじれたり、シワになって細くなってしまうので、ヒップから上も、前側と同じように三角形になるよ

うにカットしたわけです。お臍の下は大体三角形で、ヒップの上は平たい横に長い三角形ができるので三角フンドシと呼んでいるわけです。私がフンドシに魅せられたのは、高校卒業してはじめて会社勤めに出た去年の夏の出来事です。退社時間もとつくに過ぎた午後六時頃、余り暑いので私一人だけの気安さから、会社の洗面所に特設されたシャワー室に飛び込み、裸になってザアザアと汗を流していました。裸といつても、その時は短いパンティだけは脱げませんでした。フト、人の気配がしたのでシャワーの滝の中から、やっと細い目をあけて振り向くと、真赤な六尺フンドシをキリッとした人が目の前に立っているのです。私は、そのまゝ顔もあげられなくなつてしまいました。男子用シャワーと間違つて入ったのか、向うが間違つて女子用の方へ入つて来たのか、驚きと不安で、私は滝の中で動けなくなつてしまいました。しかし、向うの人もそのまゝこっちを向いたきり立ち去ろうとしません。しばらくそうしてシャワーに打たれているうちに、やがて私は再び激しい驚きに襲われました。こゝに立っている真赤な六尺フン

ドシの人は？私は顔こそ上げる事はできませんが、こちらを向いたまゝ六尺フンドシの人をみつめているうちに気がついたのです。固く締めた赤フンドシは、単純な三角形を見せているだけです。女でもフンドシが締められる、私も赤フンドシを締めてみたら——会社の先輩のF子さんからシャワー室で、その赤いフンドシをしめてもらうことになったのです。F子さんは今でも毎日六尺フンドシです
(岐阜、若柳キヨコ)

大分涼しくなつて参りました。其の後大変御無沙汰してしまいました。丁度もう一年半ばかりにもなりますが、昨年の春、読者通信に出しておられました某氏に編集部を経由してお手紙を出しましたところ、早速転送下さり、一週間ばかりでお返事を頂きました。その方は京都と書いておられたので地理的に親しみをもってお便りしました。その後大阪の下宿へ変更されましたので直接お逢いは余り出来ませんでした。文通だけは欠かさず致しております。私は年令は二十三歳ですが、すでに三歳になる女の子の母親です。二年程前から縛られるということに強い関

心を持ちはじめ、一度そういうことを体験してみたいと思うと、矢もたてもたまらなくなり、せめて御本や文通などでなくさめるように心掛けております。私は身体は小柄で五尺そこそこ決して魅力的な者ではございませんが、私のような者でも責めてやろうと云われる方がございますでしょうか。以前と違って、今では文通のあつせんもして下さらないそうですので私の住所を発表して頂いたらいいのですが、今のところそれもありません。故、編集部の方へお願いする次第です。若し、そういう方がございましたら、文通だけでもいいと思います。よろしくお願いします。
(京都 益田愛子)

赤字にめげず毎月継続発行感謝に堪えません。定価を倍にしたらいかがでしょうか。七月号に「奴隷募集——市ヶ谷生」と出して以来八、九月号の通信欄を喰い入る様に見ましたが、とうとう協力者が現われずいささがっかりしております。どうして女性への奴隷ばかりで、男性への奴隷はいないのでしょうか？ きっとマゾの女性は消極的すぎるのだと思います。

マゾの女性、又は男性、元気を出して下さい。八月号の一マニア生様、どうか私を仲間に入れて下さい。私のサジは、ほんの初歩です。から、よりよく指導していただきとうございます。ではお元気で。

(東京 市ヶ谷生)

○ サド趣味の御婦人の方で僕の女主人様となつて命令して下さる方は、年令を問わず御文通下さい。当方二十八歳の独身青年。(都内世田谷太子堂吉田屋方飯島洋一)

○ 佐賀の淀川君、通信拝読致しました。各県各地に同好の友が居られるのは大変心強い限りです。小生はサジイストで女性は好みませんが男性を縛るのは大好きです。最近では、読者通信のお蔭にて、十指に余る友を得る事が出来ました。貴君の身近にも同好の人は居られるのですか、皆同性を愛する事は特殊異常者の様に思い、心では熱望しながら表面ではすました顔をして居る引込思案の人が多いのです、同性愛は遠い昔より幾多伝えられて居り、男女間の婚約時の様に清いものと信じます、幸いKKが復刊したのですから東西相呼応しようではありませんか。そ

して良い友が見つかる様東京より応援致します。紅蓮、青葉氏作を讀まれた事と思いますが、あの中尉の様な頑強な裸体を思切り撲つて見たいと思つて居りましたので、空想の世界で思う様満喫しました。現実では不可能でしょう。貴君の体を借用出来れば別ですがね。では亦(東京、荒川猛雄)

○ 復刊おめでとう。大分以前から一愛読者ですが、昨年末まで寂しく思い居りました処、フトした機会から六月号を手に入れ、御誌の復刊を知った次第です。然しながら旧刊と比較して、一段内容が貧しくなつて居る事にいささか失望して居ります事を、ありのまゝの読後感として蛇足ですが附記させて頂きます。と申しますのも、かつての御誌が小説的要素を充分に含み、その真価を發揮していたのにも拘らず、現在では何か研究資料の集録の如き感深きものがあります。此れは単なる小生自身ののみの感じる処でしょうか。さあ、現在の複雑な社会状況下に於て復刊なされた御苦勞の前には現在以上の要求をする事は読者のせいだと云えましょう。就きましては、今後あらゆる障害を踏破

して続刊下さる様祈つてやみません。小生にもいささか変つた体験談があり(諸兄姉の足下にも及びませんでしようが)何時か機会をみて何かの御参考のために、ペンを執り度く思いますが、目下多忙のため未だ果し得ぬ事を残念に思つています。然し何れの日にか、識者諸兄姉の御高評を仰ぎ度く、其の節には何卒宜しく御願ひ申し上げます。ところで九月号、読者通信に一文を寄せられました三木恵子さまのアドレスお知せ戴けますまいか(小生、甚だ勝手乍ら現在の環境下で、茲に住所氏名を明白に致し兼ねますので、出来ますれば御誌上にて三木恵子さまの御住所を掲載下されば幸甚です。尙勝手乍ら其の節は美樹若くはMIKの記号を以て同様の略称として下さらん事を御願ひ致します)以上勝手乍ら何卒宜しく御願ひ致します。日毎に深みゆく秋と共に読書慾も日増に旺盛になります。では御誌の今後よりよき御発展を祈りつゝ拙ないペンを止めます。

(Z生)

○ 僕は今まで猿股からパンツ、それからブリーフ(キャルマタ)を穿いていましたが、この夏から一

べんにフンドシ覚になりました。どうして今までこんな素敵なものを着用しなかつたのだらうと思つて居ります。もうフンドシを離す事が出来なくなり、入浴時以外は四六時中しめています。はじめフンドシといえば、六尺フンドシでも越中フンドシでも、あの巾の広さ、姉がお盆で帰つて来たとき「男のくせに女のパンティみたいなのを穿いていないで、フンドシでもしめてキリッとしなさいよ」とすすめられ「たるんではみつともないからね」と姉が、巾も細く長さもうんと短いモッコフンドシを手際よく縫つてくれました。こんな小さなものでもよいかしらと思いましたが、僕はあんまり具合がよいので姉の帰るまでに、白と赤とで十本位縫つて貰いました。巾が細いので、普通のモッコフンドシや越中フンドシの様に、お尻を包んでしまふ様にはならないでそのまゝ喰い込みます。そして姉の云う通り男らしくなります。この頃は、松原三千代さまや池田ふみ子さまはじめ女の方々の、フンドシ愛用が盛んになつて居ります。が、矢張フンドシは誰でも感じがよいのです。僕等男もフンドシ復

興の声を高めましょう。松原さま
貴女のフンドシ姿を是非みせて下
さい。フンドシの写真を必ず毎月
掲載して下さい。六尺フンドシの
正しいしめ方の順序を写真か図解
で教えて下さい。(岐阜、田中)

○ 私は女装マニアの一人です、本
誌でも是非グラビアに女装した男
性の責めの写真をほしいと思いま
す。今まで一度も載せられた事が
ないのが残念です。和装、洋装の
責めどちらでも結構です。厚化粧
でのブラジャー、コルセット、ス
トッキング、スカート、ズボース
シユミーズを着け高いハイヒール
をはいて色々の責められ方をして
いるのがよいと思います。又、同
好者の方がありましたらプレーし
たいと思います。(大阪、住田勝
美)

○ 私が奇クの復刊を知ったのは、
五月下旬ある貸本屋で(五月号バ
ージンと見受けました)だったの
ですが、主人にきいた処、入手先
はまあね、とのこと、強いてきき
返す必要もないのでそのまゝ帰宅
したわけですが、他に従前の愛読
者が再刊を存知なく、満たされぬ
日々をかこつて居られるかと思ひ

ます。我々が現在の内容に就いて
不満を訴えた処で、無意味なもの
になるかと思ひます。奇クの存在
をなにか適切な方法で知らせする
こと。ではどんな方法で——と云
うことになるかと困るが、広告とし
ては新聞、雑誌等いろいろ方法は
あると思ひます。かりに暫時公刊
誌に切替える、というようなこと
は費用は別として、現在のわれわ
れとして歓迎出来ない気持です。
大阪M・Y氏によれば、大阪駅に
て購入——となつていますが、大
部分は古本屋などで発見され復刊
を知られたことと思ひます。編集
後記にて、戦争物へでも等弱音を
はかれて居るのを拝見して、つい
差出がましいことを申しましたが
同時に内容の充実は必ずしも紙頁
の増大とは思ひません。体験告白
レポート等はわれわれにとって貴
重なる文献であり、本誌の面目も
文章のちせつ等ではない筈です。
文章がまずいので……と云う私
共フアンと言葉を誤り流す訳には
いきません。玉穂落穂集も当該個
所を伏線にして掲載願えれば幸い
です。東一郎氏の自決する従軍護
婦たち感銘を受けました。おそい
目覚めの足立夏夫氏、その後の様
子お知らせ願ひ致します。

(東京、白井生)

○ 九月号読者通信で、若柳キミコ
様(岐阜)の御話、非常に興味を
持ちました。私は屋は黒ズロース
の腿を締めつけるゴムを抜いて改
造したパンツを穿き、夜はフンド
シをして寝ます。六尺フンドシや
水泳フンドシを用いた事もありま
すが、最も愛用して居りますのは
ビニールの風呂敷と赤い細紐とを
組合せて作ったものでキニツと締
めた時の快感は何とも申せません
私は結婚したら妻にはフンドシ
を常用させ、寒い時以外はズロ
ースパンティ等は一切穿かせないよ
うにしたいと考えています。若柳
様何か新しいデザインのフンドシ
が出来ましたら御通知願ひ致し
ます。適当な値段で戴ければ幸甚
に存じます。なお、都内在住の奇
ク愛読女性にして、実写写真を私
と作製致したい方、御協力を御願
ひ致します。私も吊責、ククリザ
ル、大の字縛り等にて写して頂き
たく思つて居ります。因みに私は
二十二歳、中肉中背、色白、性格
温良。(東京 S・S生)

○ 台風一過、急に秋めいてまいり
ました。遅まきながら奇クの復刊

を心より御喜び申し上げます。小生
は四年程前より奇クを愛読致して
居りますが、昨年休刊されてより
非常に残念に思つて居りました。
小生は元来、東京の者なのですが
会社勤めの悲しさ、七月に転勤を
命ぜられ当地へまいりました。当
地には知人もなく、まして同好の
士など知らず悶々の日々を送つて
居りました。先日何の気なく古本
屋に入り奇クの文字を見た時の驚
きと喜び、そこにあつた五、六、
七、八、九月号を一度に購入、急
いで下宿に帰り自分の望みに合つ
た読物を見た時のうれしさ、夜の
明けののも忘れた程でした。小生
は子供の頃より、祭の時や何かに
六尺褌をキリツと締めた町の青年
を見ると、云い知れぬ興奮を感じ
ました。段々と年をとるにしたが
つて、あの様な青年を自分の思ふ
様にしてみたいと……。しかし、
なかなか其の様な事の出来る訳も
なく、奇クを読んではなぐさめて
居りました。今迄も同好の士との
文通、交際を望んでは居りました
が、家に居りそんな連絡もとりに
くかつたのですが、現在は下宿住
いの気安さ、同好の士との文通を
望んで居ります。佐賀の淀川様、
池田正治様、六尺ふんどし愛好生

(福岡、T・O生)

O

銀座の真中で、輸入品投売の店で、ひやかしに二、三点買物したら石けんやなにかをサービスと称してくれた。その中にこれも輸入のパンツと云った大変な代物もあった。ゴムで締る非常に股下の短いパンツで、然かも男用であつて

角の布がなく、真中に縫目のあるものだった。風呂から上つて早速着用了した。私は旧号の何月号であつたか忘れたが、編集こぼれ話（赤い紙に印刷）に確か名古屋の婦人からの投書で、義父が幼少の頃より腹を責めてそれが忘れられず云々の一駒があつたと記憶している。これも忘れられない一駒である。復刊の五、六月号の門田奈子氏。只男性と女性の違いで、蒲団の中でのプレイ等全く同じで、私の様な傾向の方が今度始めて有る事を知り、大いに意を強くした訳です。御批判を得たいと思います。私はこう云つた傾向で、然かもサジ、マゾどちら側とも立てます。実際に経験のある方なら一方に全く偏する事なく、同じ傾向の人に自分がうくべき種々のプレイを、必ず実行すると思います。こうされたいと云う望が即ち相手を自分のまぼろしとして、そう門田氏でないけれどもう一人の人を責め抜く事でしよう。投書欄に拝見致しますと、私は紳士だからとわざわざ但し書きをして居られる方がある様ですが、相手を充分楽しませる事が目的であるのだから、たとえ男であろうとも女であろうともプレイ以上に決して進まない事が

本来であるべきです。私が相手を買める立場になりますと、男でも女の方でも肥えた瘡せたは問題外です。お相手に何時でもなりま
す。但し勝手ですが東京都内の方
がよろしい。熊谷氏のボディビ
ルマシンに依る少年姿体美増進法
の中で、検査室での方法、全身の
撮影、白タイル張りの理由、渾の締
り具合、マツサージの折の色々の
体位、ベットのエナメル塗りにし
た理由、全く私が責められて見た
いと日頃考えている種々な方法に
合致しています。然し乍ら考えを
実行に移す段になると、なかなか
相手を得られませんか。連絡がつけ
ば貴兄の考えを実行に移すモデル
として、私を提致致します。但し
最早中年で瘡せ形ですので、相手
として余りに頭の中に浮んだ美少
年とかけはなれてはいますが。熊
谷氏も都内に或は近県に居られる
とよいと思います。なかなか話に
くい事です。安全な適当なプレイ
をする部屋も知っていますから御
連絡下さい。良い年をして全くだ
うかと思いますが、相手のない儘
敢て訴える次第です。(台東区下
谷五条町、京成上野駅構内、上野
京成堂書店気付野崎純)

始めてお便りをさし上げます。貴社のKKは常に多大の興味と、自分一人の胸の中に秘めておかねばならぬ切ないまでの興奮を以て愛読させていただいて居ります。貴社のKKはまことに私のために作られたと思えるほど、びつたりと私の要求をすべて満たしてくれます。私が始めてKKを手にした時の喜びを御想像下さい。しかしその愛するKKの休刊になったことを悲しんで居りました処、たまたま復刊された事を知り有頂点になりました。さて、その復刊されましたKKの四月号に、山口幸一氏によって「山口式ボディビルの御紹介」という記事が載せられてゐるのを見て、私の胸は人知れずどうきを打ち始めました。私の最大の楽しみは、白い揮をキリリと締めることなのです。あの記事を讀んで、白い揮をキリリと締めた少年が鉄の輪の中で回転すること想像した時の氣持をお察し下さい。その想像の中の鉄輪の中で廻っている少年が自分だったらと思ひました。僕は今年東大に入つたばかりです、それに人一倍運動しなかつた僕の中から色白でやせています。幸いに僕の家は東京に近いです。僕はもう何としても山

口先生におあいして、僕にボディビルをやって貰いたいのです。そして体が丈夫になるとともに、禪を締めたいという僕の望みを満たしたいのです。少年の禪姿を写真に撮りたいとか、少年を実験に使いたい場合は、東京近郊に居りますので、出来るだけのお役に立たせていただければ幸いです。又御希望なら僕の経験談をお書きいたしますしよ。

(谷津生)

池田文子さんは禪が婦人用として市販されるまで云々としてありましたが、前後が狭い三角型で横紐に調節用らしいび錠のついた婦人用（ピンクでヒダなど全くないから）下穿を物干竿に時折見かけます。婦人用として市販されているものと思います。御存知の女性雑誌の門田奈子さん。遊びの制服をもっと詳しく、アイデアも含めて発表して下さい。ふんどし女性の皆さんに私のアイデアの御批判を仰ぐと共に皆様の御意見をもっともつと出して戴きたいと思えます。出来得れば直接お手紙を差上げたいものです。特に福岡の池田文子さんには、或いは街頭などで逢っているかもしれないと思う

と、特別に近親感をもつのです。が、今ここでは名前を公に出来ません。差支えぬ程度に簡単に自己紹介して置きます。二十六歳半で独身、郊外の自宅から福岡の某社に務めています。趣味は音楽（勿論器楽）他はヌード写真のコレクションス少々と云々（まだある意味）皆様の投稿をお待ちします。

(長門陸)

十月号御送り下さいまして有難うございました、今月号は総体的に云って素晴らしく充実して居りました。読みごたえのあるものばかりで、ゆつくり楽しめました。口絵に春日、伊吹嬢の登場もなつかしいものです。藤木氏の自作自画による「サジズム・シーン詳察」も貴重なものでありました。岩瀬氏の久し振りの「お灸の女王コンクール」も興味深いもので、氏の独得の書き方もたまりません。壬生さんの「寄生虫」も猟奇的で面白かったです。鷹野さんの「サジズムの半生記」今後に期待します。沼氏の「黒女皇」此の種のもものは余り好きではありませんが、一応興味深く読ませていただきました。むしろ藤山氏の「続乗馬ズボンの女腹切」の方が面白か

ったです。然し見出しの絵は平凡で、簡単過ぎました。兎に角八月に延刊しただけあって、全く十月号は素晴らしい出来栄でした。

(東一郎)

十月号を読んで一寸感想文を、別稿「和服女の縛り責め展覧会」開催を提唱いたします。余白がありますれば掲載の光栄に浴したいと存じます。なお誌上で読者の責めの絵画、写真類の展覧会を催されては如何ですか、そしてその展示後、特集版を発行されては如何ですか。この点について貴意を得たいと存じます。（岸本青柳）

拝啓、先日は時代物責絵巻を送り下され早速拝見感心いたしました。極めて良心的な作品で今更ながら驚きました。殊に「静御前」など誠に素晴らしく、第一の傑作と長く珍藏いたします。一ヶ月の休暇で、甚だ淋しさに耐えませんでした。サジズム特集の中止は痛恨の至りですが、一日も早く発行されん事を祈ります。最近、滝れい子氏や都築峯子氏、三条氏ら昔からの人々の絵が載りませんが、淋しい思いがします。北原氏が殆んどで物足りぬ気がします。色々

の人の絵も載せて下さい。又貴重な口絵の頁は、一頁一つの絵でなくともよいですから、多くの絵写真も載せて下さい。一頁に二、三枚でも結構です。近時、女学生姿や少女を思わせる姿の縛りが増えて、喜んでおりますが、まだまだ絵が足りないように思われます。私も何度もお願ひし、他の方も同じ希望のようですが、分譲品の縮小オンパレード写真、映画や小説の責め場面など載せて下さる様お願い致します。（宮津光男）

○ 禪愛用の女性の皆様お元気ですか。私は今度はじめてお友達のA子さんと二人で、すき透るような薄い白のナイロンの三角褌を作ってみました。（私は今まで水泳褌といていました。松原三千代さんの使っていたらっしやる三角褌という言葉の方が、この褌の特長を良く現わしていると思えますので、今後こう呼ぶことにします）私達の三角褌は松原さんのものに比して、前の逆三角形の部分に極めて小さく、殆んど最少限を蔽うだけです。そして今後作ったものは、布地がナイロンで素晴らしく薄いので、下がすき通って見えます。そこがこの褌のミソです。この

三角褌をA子さんと二人で着用して、二、三人お友達が残っていた学校の脱衣室で褌一本になって見せたら、みんなコウフンしちゃって、早速褌愛用者になってしまいました。みんなもうズロースやパソティはやめてしまつて、思い思いの色で小さな三角褌を作つて着用しています。こんな快いものとは知らなかったと、くちぐちに云い合っています。私たちの間では、三角褌のことをいつも「三角三角」と呼んでいます。そして私たちのグループ(今五人ですが)のものは、褌愛用者のしるしとして、ダンスの時間にはかならず、極端に短いお尻がはみ出すようなブリーフ式の体操パンツを、着用することを申し合せて居ります。A子さんという同好の友達を得て、私も非常に大胆になりました。来夏の夏は小さなブラジャーと三角褌だけの裸で、海岸に出て泳ごうかなどと話し合っています。私は女が褌を着用することを、もう恥しいこととも何とも思っていない。どしどし同好の友達を増やしてゆきたいと思っています。三角褌一つになつて野や山を自由に野性的に駆け廻りたいという欲望は、此頃とやかく云われている太

陽族や逆光線族などと違つて、余程健全であると思います。とにかく三角褌は女性用の褌として絶好のものであります。私たちの学校でも、今後益々女生徒の褌愛用がさかになることでしょう。奇々愛読の女性の皆様、どうか一人残らず三角褌を着用して見て、その快い触感にひたつて下さいませ。そうして着用の感想をどしどし本誌に発表して下さいませ。

(福岡 池田ふみ子)

私も一読者として、此の欄を拝借いたします。奇々とお馴染になつてから大分になりますので、色々な方のお名前を覚えしました。私の好きな画家は四馬氏で、読物では青葉慎一さん。青葉さんのものは「被虐」から「捨犬」に至るまで、非常に興味深く読みました。同性愛というのは、何だか悲惨で陰性だと思ふのですが、まるで透明なガラスの向うで、白い二匹の小犬がじゃれ合っているような、清潔な想像も湧くのです。奇々の頁を繰ると、きまつて編集室の青いスリッパと、白いテラスにこぼれていた落葉を思い出します。私は病身なので何時も臥つていて滅多に出歩く事がありませんので、

世の中を広く知りませんが、夢を見る事は大好きです。私は今も奇々に活躍する沢山の記事から、色々な夢を描いて居ります。尚、何時も私のさしえに好意のお言葉を賜わる東一郎様に、心からお礼を申し上げます。今月は苦言を頂戴してしまつてイケネエ! と思ひました。東様とは、どんな方なのかア……と、私の夢は果しなく広がって行くのです。

(京都 北原純子)

九月号に於て拝見致しましたが確かに編集後記で述べておられる様に「復刊」の域を脱して来たと思ひます。グラヴィアページでは最終ページを除いて、すっかりしたスタイルで統一されています。須川嬢のフォトが漸く美しさを感ぜさせてくれましたし、四馬氏の画は「潰滅の前夜」を想起させてくれました。過日、苦言を呈しました北原さんの麗筆が、巻頭を飾つて光彩を放っていました。就中右端の着衣の女の見事さは、凝視して尙飽きさせません。苦悶に美しさを増す猿轡の顔、なだらかな肩、宙に伸びた形のよい脚、そして何にもまして素晴らしい着衣、背中の深く割れた編上げのコンビネ

ーションの中央の盛り上りは絶妙です。記事にはいりますと、第一の壬生すみ子さんの「寄生虫」ですが、懐しい筆者の冷徹な筆致がサディスティックな雰囲気の中に浣腸を抜つて、次回への期待を大きくさせます。松井さんの「恋の脱殻」、松井さんの作品としては小生に最も強い印象を与え、本号の最高のものと思わされました。しかもそれは最後の一節と、それに対応する二枚目の挿画です。「私の肩までの深さの穴が掘れたら、私は首だけ出してその穴へ埋められます。そして何日か庭のすみで晒し者のように身動き出来ず、じっとしてなければなりません。もしかしたら乳から土の上へ出して、動けない体を月岡はいたずらするかもしれません。何をされても、私は彫刻のように動けないでしよう」といいたがら悲惨な処が少しも無いのです。それは「恵津子」が自分で課した罰とも云えるからです。最後の一行は、次のように終っています。即ち「私は私のお仕置きのための穴を掘っているのです」と。その「生埋め」が少しの描写もないだけに却って無限の描写を思わせます。恐らく大勢の読者は、その想像の

世界の中で「生埋め」の恵津子から、同好の長岡変一郎氏を思い出されるでしょう。氏は如何にお暮しのことか。更に、鎖で繋がれた裸足で、重いスコップを手にした恵津子の絵からは毛利綾子。大川由紀子、両嬢の「お仕置」が浮ぶでしょう。両嬢はどうなさったか。或は既に嬢と呼ぶべきでないかも知れません。小生がこの作品のこの箇処に何故にこうまで惹かれるか、それは今更申し上げるまでもないでしょう。只管、去つてしまつた同好の人を惜しむばかりです。「編集余滴」によれば、萩千恵子さんもフォトには現在活躍していらつしやらないように思われますが、どうなさつたのですか、御結婚の結果でしたら残念ですね。沼氏の「潰滅の前夜」頌は氏の観察、分拆に感心致しました。小生は沼氏と性向を異にする者と自任しており、氏の著述をなかなか理解し得ないのですが、しかし小生なりの立場において、あの種の家畜化小説の出現は期して待ちましよう。「はつかねずみ」「紅蓮」「被虐哀歎其の後」「奈子の恋愛について」の四篇は興味深く拝読しました。映画速報は、一週間興行のものの結果を、月刊誌で扱う

のですから無理がありますが、嵯峨美也子さんのもののほかは、評も適当でなく粗雑の感が強いのです。本田氏の「紅皿欠皿」を拝読して、小生も是非見たかつたと思います。ところで懸賞原稿ですが応募十七篇とは全くの驚きでした。小生は応募のための雑文を御送りしたあとで、非常に悔やんでいた次第です。そこで目下、四年越しの原稿にまたまた手を加え、せめて罪滅しにと思つてゐる矢先のことで、いかに愛読者諸兄姉が御多忙かは存じませんが、これでは自らの広場を放棄することではないかと、分に過ぎた憤りを感じたという訳です。小生の友人たちも休刊前に比して、内容的な不満があると常に訴えていますが、この苦境に努力を傾注される編集者諸氏に対しては勿論ながら、自らの問題として真剣に考え手を携えて行けないものでしょうか。「お前は賞金を欲しかつたのだらう」というお叱りがあるかも知れません。確かに賞金は欲しい、しかし賞金を獲られるとは思ひも及びません。小生は次のように提案したいと思ひます。懸賞は全部KKと、分譲品のフォトやフエティシスト向の肌膚等にして、現金はできる限り

KKの隆盛続刊に向けて戴きたい。今回はお流れになつた懸賞ですが今後増頁をなしうる状態が到来し懸賞が復活する時は、お考え戴きたいと思ひます。懸賞金の節約がどれ程の役に立つかは判りませんが、小生は、そのような気持を抱かせられたのです。所詮、KKが一般書店に出ないことが致命的な原因ですが、全く策が無いものでしょうか。かつて小生が初めて購入したKKは、麻布六本木の某書店古書部に新刊割引で出ていたのですが、あのような手で販売網の再建はできないものでしょうか。古本屋ではかなり永い間KKの旧号を扱つていました。最近殆んど秘蔵されたようですが、それでも神田神保町の某書店には休刊前のものも数多く、時には休刊後のものも出ることがあります。現に渋谷では数部ではありますが、店頭を飾るとすぐ売れてしまうとのこと。編集者もおつしやるとおり、太陽族の影響は、取締りの面で軽々しく見られませんか。従つて新刊を扱う店を対象の販売網は、まず再建できないでしょうが、所謂特価本屋には売れるKKは絶対でしょう。このプランは何とかして実現させて戴きたいと思ひま

す、特集号は一応の経済上の目算が立ち次第に実現して戴きたいと思ひます。各位の御健康とKKの隆昌を祈ります。

(東京 近藤一)

三十歳の男子、幼時よりマゾヒスティックの性格があり、美しい女性に虐められたい欲望は未だに変わりません。数々の体験はいずれ御報告致したいと思ひますが例えば女の人の口から、またがる馬のりになる、という言葉を聞くだけでも興奮してしまいます。自分では勿論恥しくて口にできません。美しい女の方に馬のりにまたがられ、いじめて頂くのが最大の望みです。九月号で三木恵子様の御便りを感じて読みました。座ぶとんを重ねた上に馬乗りになって快感を味われた御姿、それを実行に移して、相手の女性の首の上に跨り、その顔を太ももの間にさみこんで絞めつける貴女様の得意の御顔が目につきます。男にも実行してみたいとの御望みがある様ですが、是非私を使つて下さいませ。軍隊できたえました十六貫の肉体は必ず御希望にそえると思ひます。こんな順序では如何でしょう。か、先ず、乗馬のけい

こゝで疲れさせて置く。私は半裸身で四つ這いになり、ロバにつける小型の鞍をつけ、口には手綱をくわえて恵子様の足許に平伏します。恵子様はパンティにブラジャー程度の軽装で、長靴に拍車をつけ手には鞭を御持ちになって、人間馬の背に悠々と御乗りになる。そして本当の馬に対する様に、鞭うち拍車を当て手綱をしめつけながら、つぶれる迄乗り廻す。(二)馬が動けなくなったら、首しめの形の恵子様は哀れな馬の、私の首の上に跨り直されて、ぐっと全身の重心をかけて奴隷の誓をさせるのです。やい奴隷いめ参ったか何でもない事を聞くか。私はやがて恵子様の豊かな御尻の下で、崩れ折れてしまうでしょう。(三)つぶれた私の首から立ち上った恵子様は、倒れた私を鞭で打ちつゝひざまずかせます。そして、仰向けになれと命令されても私は抵抗します。そこで恵子様はとびかゝつて下さい。馬にされ乗り廻わされた疲れで私は組みしかれます。貴方様は私の両手を万歳の形に押えつけるでしょう。私の必死の抵抗にも拘わらず、遂に御尻が顔の上にもびつたりと乗る事でしょう。この刑罰が終つてからも、御命令な

らば馬としていつまでも御奉仕致します。室内の移動は私の背に跨つてなさって下さい。恵子様、どうぞ憐れな私をいじめて下さい。

(東京 N生)

○ 小生は少年時代からの切腹マニアで、最初は男性の切腹を映画や雑誌で見えてストレンジセンセイションを感じて居ったが、性に目覚めてからは、女体への憧憬から女性の切腹に強い執着を覚える様になった。然しこうしたアブノーマルなものは、世間では求めるだけ無駄だった。ところが何十年かの後にやつと奇クと云う専門誌？が出現して、自分の渴望を癒して呉れた。毎月僅かではあるが、女性切腹の記事と写真又は挿画が発表されて、嬉しい一時を過すことが出来た。それが残念なことに、世の移り変りと共に(ストリップショウ等は相変わらず上演されているが)発禁の憂目に逢つてしまった。発禁の理由は決して女性の切腹に依るものではなく、何か他の種類のアブノーマリティが当局の忌避に触れたためだろうと思う。曲線美に富んだ女体に、女性自身が刃を加えて、白い体に鮮血をねたくって苦悶する表情と姿態こそ

悲壮美の極致である。最近、私は奇クの復刊を古本屋の店頭で知った。正にフェニックス蘇るである。然し乍ら白い表紙だ。元来は「白への憧憬」によつて切腹する女性の死装束、白無垢は大好きなのだ。が、雑誌の表紙等は困りものだ。無論、印刷費の節約のためである。その証拠に口絵の写真が少くなっている。元来、奇クは「緊縛専門」と云つて良い程の編集振りで、こんなに口絵の頁が少なくて、とても切腹の割込みようが無いのが残念だ。(兵頭庫一)

○ 読者通信、毎日うれしく拝見して居ります。佐賀の淀川様、文通致したく思います。貴君の気持、全く同感、お便りはどこに出せば良いのでしょうか。小生、当地には転勤して来たばかりで友人もなく、毎日寂しい日を送っている独身者です。出来ましたら、西日本新聞の案内欄に貴君の住所をお出し下されば、小生がお便り差上げます。北九州在住の同好の方とも文通致したいと思ひます。同様な方法で、住所をお知らせ下さればお便りを書きます。(下関 久野)

○ 最近、森山美歌女王様始め女王

様方の御消息が途絶えておりますが、如何なされたのでしょうか。私共にとつて女王様方の玉音に接しられないことほど悲しいことはありません。何卒、各女王様方の御元氣な御便りを切に御待ち致して居ります。さて、今日は私の考えているアイデアを発表して、皆様御賛同を得たいと思ひます。それは、東京、大阪、北九州、名古屋等にそれぞれ奇クの支部をつくり、グループ別に、サド、マゾ、ホモ等に分れて、各々楽しんで如何でしよう。それには、奇クの本社の方のお力で会員を結集し、嚴重な秘密厳守によつて、相互にプレイを楽しみたいものです。マゾの立場から申すと、東京では森山女王様、大阪では春日ルミ女王様、原美智子女王様、北陸では戸破貞子女王様、北九州では荒井貞子女王様を中心とし、それ以外にも支部会員の女王様をおさがしして、男性は、これ等の女王様にお仕えして、奴隷としての御奉仕を申上げることが出来れば、本当に幸せな日々を送ることが出来るわけですね。何卒、奇クの役員の方々の御尽力を、誌上を拝借して切に御願ひ致す次第です。

(愛知 山田生)

○ 前略、御免下さい、小生は貴社発行の「奇ク」の熱烈なファンです。二十八年以降で昨年休刊までの本を大半は読みました。しかるに、その後の「奇ク」の消息はわからないまま、で過ぎて来ました。が、今夏、大阪へ行きました折、古本屋で復刊号が陳列されて居り全くびつくりしました。小生は奇クに発表されている狩井麗作氏、羽村京子さん、及び花村恵美子さんの如くヒップマニアであり尻腹マニアです。したがって他の切腹やソドミー、マゾ礼讃的な記事は好みません。ヒップに対する憧憬礼讃、恥しめ、被虐等の記事でしたら何時でも大歓迎です。その点何時もヒップをぐつとあらわに解剖して描写してくれる狩野氏、羽村さんとは全くビツタリと趣味が一致して、両氏の記事をみるたびに妖しく胸騒ぎがしてきます。今後共、両氏及び花村恵美子さんの誌上での御活躍を期待すると共に貴誌にも世の多数のヒップ及び尻腹ファンのために、この様な記事を出来るだけ多く掲載されることを希望し且つ御願います次第です

(T・T生)

私は、実は休刊以前から御誌を読んで、中康先生や田谷先生の切腹記事に深く心をひかれたのでございませうが、つい恥しさに自分の体験をお知らせすることもできず、復刊以後は直接筆者へのお便りもできなくなり、やつと決心をして本誌にお知らせするようにしました。私は終戦の折、丁度姉夫婦と共に満洲某地に居りましたが、姉の主人は現地で召集され、姉は当時重い肺結核で全く病床に臥っていました、日毎に不安な生活を送っていたのでございます。忘れも致しません、昭和二十年八月〇日ソ連参戦の報に、皆はつとしたのですけれども、私はまだやつと十六になつたばかり、姉は床にあるという状態で、全くどうにもなりませんでした。いよいよソ連軍が街に進駐した日、私も戸をしめてかくれていたのですが、丁度夕方、貧しい食事を終つた頃、いきなり裏手の入口をどかどかと突き破るようなソ連兵が入つてきて、雲つくようなソ連兵が入つてきていきなり銃をつきつけました。とつさのことで、あまりの恐しさに声も出ずにすくんでいますと、二人はどかどかと奥に入り、矢庭に私の手をとると台所の床へ引倒し

ました。私は泣きながら、許して許してとあらん限りの声で叫びましたが、勿論、誰も来てくれませんでした。二人は銃をつきつけながら、まるで犬でもからかうように、私の洋服をビリビリと引裂き、またたく間に裸にしてしまいました。私はもう心臓が止りそうな恐怖で涙も出ません。その中、一人の兵隊が私の胸を抑えつけ、もう一人が私がおそつてきました。私はほとんど気が遠くなるような感じで急に目まいがするとムカムカとして激しく嘔吐してしまいました。二人はそれを見て、気持が悪くなつたか何かしやべりなら私を離して立上ると、奥の方へ行きました。が、やがて四人が笑いながら出てくると、銃で私の身体を二、三度叩きながら、ぞろぞろと立去つていきました。私は、やつとの思いで起上りましたが、下肢がしびれて立てません。そして再び目まいを感じましたが奥が心配で辛うじて半裸のまま四つばいになって奥へ入りました。見ると、どうでしょう。寝ている姉も、寝衣も下着もはぎとられて胸を朱にそめています。思わず苦しさも忘れて、姉さん！ ととびつきますと、薄すらと眼をあけました。あーっ！

千枝ちゃん二人は思わず抱合つたまゝ声も出ません。胸の血は喀血したもののようでした。姉は突然よるよると立上つて、くやしい！ と叫びながらフラフラとダンスの方へ歩みよると、いきなり中から短刀をとり出し（姉が結婚した時もつてきたもの）パツと鞘をはらいダンスにもたれかゝるやうにして、ウゝム！ とうめきながら一刀でブツツリ左下腹へ突入れました。姉はしばらく出すやうにあたり！ ウムーウムーとうめきつゝ右へ引廻します。パサツと私の顔にも血ががゝることが、はつきり感じました。こんな時は奇妙にも恐しさに気も動転しながら、目をはなすこともできないのです。前かがみになりつゝムグツと刀を抜く間もなく、臍の下あたりからダラダラと後から後から腹わたが垂れ下ります。短刀をバタリと落して呻きながら押えてこらえていました。が、立木を倒すやうにドンと私のそばへ倒れてきました。血みどろの手で私の方へにじりよりつゝ苦しい、あーっ、お願い、早く殺して、と転ります。私は夢のやうにそれでも起き直つて短刀をとる、姉の胸の上に馬のりになると許してーと叫んで、夢中でのどへ

突き通しました。姉はウンと大きくうなづいて私をはねかえすほどびりんと体をこわばらせると、手を取りと倒れました。畳は一面の血の海です。私は勿論何を考える余裕もなく同じ様に後を追うつもりでした。が、裸です。部屋へ戻るとダンスから姉の腰巻をとり出し巻き、ダンスにもたれて坐り、姉の様に短刀を左下腹へ力一杯グサツと突き立てました。引廻わそうとした時、やはりはげしいショックのためでしょう。すーっと引入れるように失神してしまつたのです。私はしばらくして隣の方に助けられました。刀は六、七分入つていましたが、全然引廻していません。なかつたそうです。姉は臍の下二寸位のところを六寸位一気に引廻し、はらわたが殆んど出ていたそうです。私がうかがつただけでも他に二人（一人は四三歳他の一人は二六歳）の御婦人が切腹なさつたそうです。

（新潟 芦田千枝子）

○ 本年二十四歳になる男子同性愛者です。古くから奇クを愛読し、特に三根耕二氏、山口幸一氏、森太一氏の文を愛読して居ります。

ソドミストで渾美に興味を持つて居られる方、是非共お便りを下さい。私は自分と同年配、若くは年下で美男子の方より、思う存分責められたいと常々考えて居ります。そして貴方のためにどの様な恥しめを受け様とも嬉んで貴方の下僕として奉仕致します。どなたでも結構ですが、私を思う存分責めてやろうと云う男性の方、是非共お便り下さい。鶴首の思いでお待ち致して居ります。（兵庫県美方郡 浜坂町久保明宏）

○ 始めてお便りを差し上げます。私は貴誌を愛読する一男子同性愛者です。私は今日始めて復刊された事を知り、復刊第三号入手する事が出来ました。貴誌の再刊は九分通り迄あきらめて居ましたが復刊を知りその嬉しさに矢も楯もたまたずペンを探りました。限定出版のため色々制約されるので、内容の物足らなさは致し方がないと思います。然し男性の緊縛写真の無いのが、何とも云えないさびしさでした。女性のその如く男性の渾姿による股間縛り、思いついた丈でも身体中がぞくぞくとして来ます。美少年が身動きも出来ない程げんじゆうに縛られせめら

れる。第三号の読者通信にも神奈川の白井様が書いて居られる如く口絵の写真の女性を、僅か一部でも男性のそれに書きかえて頂きたい。これは読者中の全ソドミニストの望む所でしょう。私の心の慰めは奇ク一つです。昨年奇クが休刊になった時、私は無二の親友を失つた以上の打撃を受けました。再びこの苦しみなめたくありません。奇クの復刊を知らず、来る日来る日を苦しみつつ暮して居る方にも、一日も早く奇クの復刊を知らせてあげたいと思います。御誌に於いて折角の御努力をお祈り致します。尚第三号には森太一さんや三根耕二さんのお書きになつた物がありません、山口幸一さんと同様毎日掲載して下さいお願い致します。その内私も少年時代の体験記を綴ってみました。思いますが、何分にも文章が不味いのでちゆうちよされます。男子緊縛写真のモデルがない様でしたら、及ばずながら私も御協力させて頂きます。では貴誌の御発展を心から祈りつつ。（T市・AK生）

○ 九月号は男性マゾの記事が殆んどなくて少なからず失望しました。各種傾向の記事をのせる必要のあ

ることはよく判るが、読者通信から見ても男性マゾは相当いると思われるのに、それにしても少な過ぎる。誌面の公平なる分配を要望します。我々は他の記事は殆んど読まないで、こんなことなら寧ろ読者通信や読者交歓室欄をウソト多くして、同好者相互間や連絡に充てて頂いた方が、どんなに本誌の利用価値が上がるかと思ひます。尚一歩進んで文通斡旋（但し相手方が特に希望せぬ場合は除く）迄やつて頂いたら、本誌の存在価値がウソト高まると思ひます。最近一般に太陽族、その他愚連隊取締りの風潮に気がねして、編集方針が消極退嬰に墮し、嘗ての精彩を欠いているように思われるのは迷惑であります。我田引水ではないが、その点男性マゾは一番気兼ねなくてよいのではないでしようか。というのには、肉体的には弱い女性が優位に立つて、強い男性を苛めるのであるから、之は双方の合意がなくてはやれない筈です。行過ぎて問題を起す虞れは殆んど考えられないので遠慮する必要はないと思ひます。強い男性が弱い男性を苛めるのは最もやりがちなことで、真似をするにもやり易いが、この逆の場合はそうはい

◎次号の本誌は十一月下旬発売です

今後毎月下旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々へは出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、中旬頃までに誌代のお送りを願います。

かない。又男性が女性を苛めるのは本誌に限らず映画その他でいくらかでも見られるが、その逆の場合は従来、本誌の独壇場であったのだから、こうした他に見られぬ特色を生かすように切望致します。九月号の中で唯一つの読物は敬愛する沼正三氏の「手帖」で、文藝誌としての本誌に光彩と重要さを加えるものとして喜びに堪えない。同氏の今後の健筆に絶大の期待をもつものであります。それにしても沼氏程の仁が最近迄本誌の復刊を知られなかつたようであるが何としたことか、又毎月の読者通信でも初めて復刊を知った者の通信が多いのを見ても、本誌の広告宣伝が如何に不十分であるかが証明されます。編集部は常に部数が増えぬことを嘆いて居られるが、もつともっと広告宣伝に力を致すべきであります。現に小生も偶々たつた一回の新聞広告を見て辛うじて知った位であります。東

京方面で云えば、毎夕、内外、日本観光、大和等のその道の新聞に少くとも毎週一回位の広告を根気よくやるべきでしょう。それから十月号を遅刊したことも（八月下旬発行予定のもの）（本誌発展上決してプラスではないと思います。毎月定日に発行されることが、どんなにか読者に安心感と信頼感を与えらるか、月極読者をふやすことに役立つか。たとえKK通信のようなものでも結構だから、今後は毎月定日に発行して頂きたいものです。（東京 敬愛生）

○ 別府の荒井貞子様、奇巧三十年四月号にて貴女の短いがよく貴女の性情を表わした文を拝読しました。僕は相当のマゾヒストですが従来より自分より劣つた弱い女の人を美しいという理由で尊敬する気になれない男です。自分より本当に精力、体力、そして意志の力の全てに汎って自分に勝つたサド

の人を探し求めて居りましたところ、貴女の文で貴女のどこらかどこ迄僕のイメージ以上の強烈な雄婦である事を拝見して、息がつまる程感激しました。貴女の意志の強さを表わすきつい御顔立ちと精力に充ち溢れた逞ましい女体と男性をして苦悶の限りを尽させる肉豊かな太股と、そして征服の喜びを求める貴女の大きなお尻に限りない讃歌をお送りします。出来ない事なら貴女の逞ましい体に征服されてみたいと願います。勿論僕も唯の云いなりにはなりません。僕の五尺五寸、十四貫、二十六歳の身体に勝てるなら征服して下さい。その上でなら貴女に忠誠を誓いましょう。編集部へ、小生貴誌を購読し初めてより、はや足掛四年になります。今後共マゾの僕を満足させて呉れる雑誌は貴誌をおいてないと存じます。益々女性サドの記事を御記載下さい、楽しみにして居ります。尚小生目下商用にて在米中です。荒井貞子様の文は短い文でしたが、この人こそ僕が探し求めて居た人と確信して帰国まで待ちきれず御手紙差上げる次第です。尚、誌上発表の時、細井吉男の名前をお使い下さい。（ロサンゼルスにて 細井吉男）

○ 一月毎に斯界に唯一と云つて良新企画をもつて躍進を続ける御誌に絶大なる拍手を送つておるものであります。早速ながら、つれづれなるまゝに、いたずらしました「責められる少年達」の絵、若干お送りしました。昭和十九年頃小生は室蘭の某航空部隊に服務しておりましたが、ある日、公用で赴いた市の憲兵隊で十七、八歳の少年が全裸にされて拷問されてゐるのを垣間見、息も止まる程驚いた経験があります。キャシャな色白の整つた顔立の少年でしたが、一糸も纏わず大の字なりに柱にくりつけられ、係の下士官に肩や、腹や、腿、尻、××などに巻煙草の火を点けられ、悲鳴をあげながら苦しみをだえるその可憐な少年を見た時、同情や驚愕とは別に、云いしれぬ興奮と喜びを覚えたことを告白します。以来、責めの絵や写真に興味を覚え、自分で絵を書いたり、蒐集したりしておりますが、この絵もその時の感激であります。絵をリアルにする為に責められる少年には、猿又も禪も着用させないかとも思いました。が、それでは、あまりどぎつく生

々しく、却ってファンタジックなイメージを思い浮かべさせる余地がなくなると存じ、下部だけはおおいに楽しめました。

こう書くとは小生、ソドミアの様であります、結構、女性の責めにも心をひかれております。ソドもサジも、マゾも、フェチも、な

◎売切品について◎

本誌で取扱っておりますした分譲品や本誌の旧号の中、売切になりましたものについて、自分だけなんとか探して送ってくれという御注文が多数参ります。売切品は、いくら代金を沢山頂きますしても、どうも都合がつかねます故、どうかお許し願います。

◎御照会について◎

回答を求められる御照会は必ず返信料の御封入をお願いします。雑誌の中へ返事を入れてくれとの御要求は、郵便法によつて出来かねます故、御承知下さい。

◎文通雑誌について◎

只今本誌では、文通の雑誌はいたしておりません。但し連絡場所を明記の通信は読者交歓室欄へ掲載いたします。

べて、そうした変態趣味は混然として誰でもが持つてゐるものだと思います。ただ、その中のどの好みが一等強いかと云う事で、その趣味傾向はきまるのではないでしょう。ただ、小生の場合、その対象が若くて美しい少年少女であつて欲しいと云う事です。幸にして、貴誌画壇のお仲間入りが叶いましたら、これから、いろいろなアブ絵画を完成してお送りしたいと存じております。只今、画想を練つてゐるものに、こんなのがあります。戦時中、反戦グループに参加してゐたために憲兵隊に連行されて来た少年少女が、いよいよ処刑されることとなり、脱衣場で服を脱ぎ、下着を取り、猿股やグロースをははき、身体検査を受けます。身長、体重の測定、内診、……、肛門の精密検査を受けたあとで、首に番号札をかけられ、真ッ裸の儘拷問を受けます。無論それは、あまりにも苛酷な淫らな拷問である事は云うまでもありません。やがて拷問で息もたえだえとなつた彼等が、あるいは放免され、あるいは死刑される迄を間に、裸でしぼられたまゝ父兄と涙の対面のシーンや、少年や少女が、好色な将校にいたずらされる

シーンなどをとりまぜ、大判の用紙何枚続きかで、全景として書いてゆくつもりです。これは別に公けにするものでないし、またリアルな感じがする程良いのですから裸体シーンにはパンツもグロースも褌もつけさせず、……なども、はつきり描くつもりです。出来上り次第、一部お送りしたいと存じます。が如何でしょうか。批評でも頂ければ幸甚です。なお、三田岩隆は、小生のペンネームですが、当分これを使いたいと思ひます。最後に、編集部の皆様の御健闘を祈ります。(小樽 三田岩隆)

今から数えて何年位前のことでしょうか、記憶は大分うすらいでしまつたのですが、たしか、講談社発行の少年講談全十二巻の全集物の中に、前田曙山作『女腹切』という講談がありました。文金高島田の美しい乙女が、白装束の振袖を朱に染めて、美事腹一文字に掻き切つてゐるのです。白布は腹部の切口から流れ出た血汐で真赤になり、苦悶のためか、膝を少し

盤責め、にあつてゐるところ、少年のまだ大人になりきらない全裸体が、よくその特長を擲んで描かれていますが、袴で両刀をたばさんだ武士が、只立つてゐるだけでいさゝか物足りません。他の一枚やくざのリンチらしく、サイコロやツボがころがり、刺青を入れた肌脱ぎの男が出てきます。ローソク責め、脇腹へ突き立てたドス、これも少し凄惨すぎるようです。しかし、どれも、責めの感じを出すことに努められてゐるのは、やはり関心を持った人の手になるものだけに、その点の違いはあると思ひました。貴下の御住所宛、お便りしましたが、返送されてきましたので、誌上を以て、簡単に批評を述べました。

代理部分譲品総目録

新作発表！

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

くずして、白い股が見え、足にはいた白足袋が半分ほど血に染まり、今まさに、打ち伏す寸前という凄じかりの有様を絵にしてあらわしました。その時、私はまだ十二三才位だったでしょうか、私はその女性の切腹と白足袋に魂を奪われ、深い関心を示すと共に、自分でも不思議な位の興奮に我を忘れ、そして、それが私の女性切腹への憧れの最初のあらわれだったのです。それからというものは、切腹への憧れは年と共に強まり広がってゆきました。自分の姿を鏡に写しては、それをモデルにさまざまなポーズをした女腹切の絵を描いては、一人秘かな喜びの世界をさまったものです。その中、家人の留守を見はからって、自分の腹を一文字に切ってみることを試みました。最初は小刀ですく赤いミミズ腹れが出来る位に切って満足していたのですが、次第にそれ位では満足しなくなり、自分の寝室で夜半、西洋剃刀で切腹したのです。その事については

いずれ又告白として書いてお送りしたいと思ひます。(桜恵之介)

一カ月間の休刊は僕にとって奇クがなくはならぬ存在だということ痛切に再認識させてくれました。今十月号を手にして編集者の皆様の御努力に感謝し、奇クの存続発展を心から願うものです。九月号では、私の拙文を読者通信欄でとりあげて下さり、早速次号で兵庫のZ・Y様、大分の東様らの御名を知ることが出来たことは誠に有難うございました。さて私は遅ましい男性に使役されることを望むマゾ生です。九月号ではT・S生として読者通信欄に初めて仲間入りをさせて頂きましたが、この度連絡先がきまりましたのでお知らせいたします。神戸市生田区下山手通四ノ三六、山口君江方錦薫 (S・T生)

私は奇クの初刊以来の愛読者の一人です。裸体、ふんどし等に興味を持たれる方々と御交際をお願

いしたいと思ひます。お便りをお待ちして居ります。近頃の方ならそんな研究会やら写真会をやってみたいと思ひますが、どうでしょう。(大阪市東住吉区加美末次七藤川方、太田典夫)

九月二十日朝、待望の新刊十月号を拝受しました。下旬発行というので、いつ頃手元に来るかと思つていましたのに意外に早く入手出来て大変嬉しく思ひました。昭和二十九年末より三十年の春にかけて出された特大号には比すべくもありませんが、白い表紙になつてからは、それはそれなりに落着いたまとまりを見せ、好ましい雑誌になつてきてゐるのは同好者として同慶至極に存じます。さて、十月号ですが、総体的にみて、この号ではマゾに關した記事が多くなつてゐることです。これは、私のような縛りマニアで女性を対象としている者にとっては、決して喜ばしい現象ではありませんが、然し、口絵には殆ど女体の縛りを主体としてゐられる編集ぶりからして、やはり、依然としてサドに主導権を握つたやり方のように見受けられ、今後の各号に大いに期待が持たれます。そういつたわけ

で私自身としては、今月号には、これといつて感動を伴う作品には接し得られなかつたわけですが、毎月を通じて御誌に接しておりますと、自分自身にびつたりとした作品のない月に於てさえ、なんとなく手放し難い愛著といったものを感じずにはゐられません。それにつけても、沼正三氏がマゾの手帖を毎号続けていられますが、どなたかサド關係の隨筆でも連載して下さる方はいないでしょうか。そういう記事が毎号載るようになったなら、本誌の価値もうんと重くなるのではないかと思います。これはサドに限らず、切腹についても中康氏のものなんかも、その傾向にあるものといつてもよいでしょう。

十月号ではサディズムシーン詳察が、単なる緊縛映画の羅列の域より一步脱しているのがよく、宝塚二三夫氏の「天は知つてゐる」は余りにも短いのが残念、今後の発展に期待するところ大。壬生すみ子氏の「寄生虫」は内容の奇抜さが買われるが、その割に深刻さを感じなかつたのは私だけであるうか。とにかく、本月号は試みの号として、今後の号に期待して筆をおく。(京都、末森忠)

○ 本日は奇ク九月号を御恵与頂きまして誠に有難う存じました。色々な意味合いで一ヶ月休刊される事は、私は読者側なのですが賛成で御座居ます。私共が一番心配し関心を持つ事は、奇クの今後の在り方、方針、内容をどのように定めるかと云う事でありまして。文献誌としてのみで行けるかどうか、単なる読物誌で徹底するには中ば公刊誌として制約が多過ぎるし、又、あれだけのものを固定読者だけで普及面がなければ経営が成立たない……等六ヶ敷しい要素が横たわっておりまして、御苦心もさぞかしと推察致しております。私共、素人の者が御経験の豊富な当事者の方々に申上げるのはどうかと存じます。

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込みのため、或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず右は固くお断り申し上げます。必ず郵便にて御申込下さるようお願い致します。

かと存じますが、試みに奇クの程度を読者側に割いて、自由討論の解決（売春紹介じみたものは採らないようにして）、同好のマニアの集い、奇ク地域的誌友会の設立等を提案し、健全な社会面に活動する各人様々の裏面での悪いのオアシスを、奇クが指導すると云うような具合——危険であり冒險性はあるでしょうが如何なものでしょうか？ 仮りにこのような場面を切り開くとすれば、読者数も少しは増すでしょうし、毎月号が楽しみになりはしないでしょうか、拙劣な提案ですが一つ御考え下さい。いずれにせよ、復刊以来、毎月号を拝見して行詰った感が御座いますので、寄稿者側から何んとか新分野を開拓しなければ、奇クの意義がなかりと、原稿紙を前にして何回も構想を交し破棄しておる現状で御座います。その意味で夏休は大変結構で、涼風到来と共に筆を新らたに採りたいと考えております。甚だ愚見を申し上げて失礼申し上げます。

（東京 白金紅次）

○ 奇譚クラブ再刊されているのを或る書店店頭で拝見、大いに感服しました。斯道の為愈々御発展を

祈り永続を希望します。九月号中婦人のふんどしに関する告白記二つを見ましたが興味津々。此処に御参考までにフランスの第一級流行服飾誌 VOTRE BEAUTE 誌一九五六年六月号にある Shopping (買物)欄の新製品紹介に出てくるものの切り抜きを送ります。これは月経帯ではなく、新形式のパンティであります。此れと似たものは大阪の或る若い女の下着デザイナーが Scantie (スカンティ) の名で作し、売り出しているのと少しは似ていると思います。サイズは大、中、小、色は白、黒、空色、サーモンピンクの四種、ナイロン製であります。HYGIAC が商品名。(東京、A Fun of your magazine)

○ 本誌昭和二十九年一月号より八月号に渉って一部御掲載の巻頭口絵の「刑事博物館図録」上巻を小生も戦前より秘蔵しておりますが、その書中に「捕縄結様」が三葉に亘り掲載されております。それを貴誌モデル嬢を煩し、且つは辻村隆氏構成に依る「縄の四十八手」及び「縛り終るまで」等の如く詳細に過程を写真にて毎月一態記にても結構ですから御掲載願えませ

んでしようか。その節、モデル嬢はパンティ一つだけで、うつむき加減にポーズをとって頂きたいと存じます。「縛り」本来の意義からしても当然、被縛者の自由を拘束するのが目的である以上、先般購入しましたアルバム「美しき縛め」の中の一部の如く、縛りそのものより、ポーズ自体に焦点が合わされ却って不自然な姿態をひきおこしているのはいさゝか頂きかねます。その点、七月号、八月号の土路草一氏の「潰滅の前夜」の如く完全奴隷は小生の魂を打ちます。とはいえ、「美しき縛め」の中でも、「磔」「たてしぱり」「吊エビ」「吊あげ」等の優秀さには全く感激しました。余談になりますが、「縛り」自体を研究している小生ですが、適当なモデルもない事とて御誌にお頼りする次第です。尚、「刑事博物館図録」下巻は発行されて居るでしょうか、御存じなればお教示下さい。上巻は奥州書房版、昭和八年九月発行（非売品）明治大学刑事博物館編纂に係るものです。

（ひだ・いさお）

○ 奇クを古本屋で何の気なしに見た所、電氣にでもふれたようにビ

リビリと胸に感じました。家へ帰ってこわごわページを開けた時も同じようにビリビリとしてフーと溜息をしました。それから内容を見て驚きました。作り話ではなく本当に僕が望んでいたようなものばかりです。何だか覗いてはいけないうような所を覗いてしまったような感じですが、それから二日ぐらいは夢中になって読んでしまいました。今までであった中途半端な気持ちを心ゆくまで味わいました。以前種の期待で色々な大衆小説の雑誌(傑作読物、探偵実話等)を古本屋を漁って買いました。中を見ると僕の予想に反してくだらない作り話ばかりです。こういう本のため僕は随分むだ使いをしました。これからは奇巧一本に限りたいたいと思いますが、お終りに貴社が前の様に隆盛になられることを心から祈ります。(函館、下里次郎)

○九月二十日の朝、十月号を頂きました。待ちに待っていたこととて一気に読了してしまいました。いつもに変わらぬ読みごたえのある読物には感じ入りました。週刊雑誌なんかは一度読んだら、あとは御義理にも二度と読む気になれません。が、奇巧だけは保存しておいて何

回繰り返えして読んでも読み倦まないで、私自身自分ながら不思議に思っている次第です。キワ物を扱った雑誌であればある程、丁度毎日の新聞を弁当の包み紙にするように読みすてしまおうのです。が、その点奇巧の内容にはコクがあるというのでしようか。汽車の中などで週刊雑誌がまるめて沢山捨てられてありますが、如何にも、あの浅薄な内容を象徴しているようです。さて、小生、年令的には三十歳台という働き盛りで仕事の方も滅法忙しいのですが、又それだけ有り余るエネルギーを適当に発散し生活をエンジエいしようという気分が持主です。いうまでもなくサディストという系列に属する人間ですが、さりとて、その語感よりくるような粗野な感じの者ではありません。今まで、そういう女友達もあり、又経験も少なからずありますが、今のところ筆にする程、時間的に恵まれていません。若し同好の士があれば文通なり御交際なり賜れば幸甚に存じます。場合によっては小生のプライベートのルームへ御案内してもよろしい。奇巧を読むのが今の大きな慰安です。

(大阪、津森一男)

〔編集後記〕

○本号から沼正三氏の「家畜人ヤブー」を連載することになった。これは未来幻想マゾ小説と銘うたれているが、必ずしもマゾ派に限らず雄大なスケールの空想小説として広く愛読者の間で味読して頂きたいものだと思ふ。

○尚、期せずして真木不二夫氏の「黄色オラミ」が本号を第一回として連載されることとなり競作の恰好となつたが、勿論両氏共、事前に何らの連絡もないことなので読者諸氏に於ては、一人興味深く読まれることと思ふ。

○季節風社の「百万人のよる」という雑誌がワイセツ文書の容疑で検査されたと数日前の夕刊に出ていたが、大分以前から、この程度の内容のものが見逃がされているのかと一応不審に思っていた矢先なので、果して、という感が強かつた。

○書店をのぞいて見ても、所謂カストリ雑誌的なものは全く影をひそめているようだ。中に一、二、微温的なものが出てくるが、それも従前の読者に見放されて青息吐息の有様、廃刊になるのも時の問題だろうと思われる。

○読者の嗜好と取締の板挟みにあえば、資本的に貧弱なこの種雑誌が潰れ去るのは、卵をコンクリートの上へ投げつけるように当然でもある。

○読者の一部の方から強い要望があつたが、本誌はその期待に反して極めて地味な行き方で終始してきた。墨一色の表紙もそのあらわれの一つである。何んとかセン情的な興味本位の読者を諦にかけ、文献を中心とした趣味に結集した読者層を獲得したいものだと思ふ。

○本誌がそういった読者を以て固められた時は、本文三百頁、口絵十六頁ぐらゐの雑誌として全国の書店に毎月姿をあらわす日も、そう遠くないと思われる。その時は、本誌のマニア連絡誌として果す役目も大きいものだと考えられる。本号では代理部の広告を削つたスペースで、読者通信を二頁に亘つて増員した。

○時勢は大きく変転している。好むと好まずに拘らず、私達はこの波に翻弄される笹小舟であつてみれば、本誌の新しいあり方についても、徒らに昔の夢ばかり追うのも当を得ないことと云わねばならない。次の機会の躍進を期待して、屈伸の屈に卑屈にならぬようにしたい。

○終りに、本誌の内容をバラエティに富ますため、従来掲載している話題から一段と飛躍した原稿の寄稿をお待ちする。従つて次号から原稿募集も改訂の上、掲載の分も異色篇を盛り上げたい。口絵や挿絵についても、目下研究中であるが、漸次、質量共に豊富なものにするのを御約束する。

(三一、十、十三)